# 能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
FAX（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

## NHK放送予定（平成19年1月～2月）

◆NHK－FMラジオ能楽鑑賞（毎週日曜日7時15分～8時）

| | | |
|---|---|---|
| 1月21日 | 「草子洗」（金剛流） | 金剛永謹ほか |
| 1月28日 | 「自然居士」（再）（観世流） | 観世銕之丞ほか |
| 2月4日 | 「求塚」（観世流） | 角寛次郎ほか |
| 2月11日 | 「海人」（喜多流） | 塩津哲生ほか |
| 2月18日 | 「芦刈」（観世流） | 遠藤六郎ほか |
| 2月25日 | 「船橋」（観世流） | 浦田保則ほか |

◆NHK教育テレビ

1月27日（午後3時～5時）
能　「葛城」（宝生流）　三川泉　宝生閑ほか

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

（能・狂言演能関係）
（TEL 052－231－0088）

［平成19年1月］
21日(日)　万作を観る会　（有料）
28日(日)　名古屋宝生会定式能　（番組②面）（有料）
［2月］
11日(日・祝)　冨耀会　（無料）
12日(月・休)　名古屋観世会定例公演　（番組②面）（有料）
17日(土)　椙山女学園大学能楽部創立45周年記念の会　（無料）
24日(土)　青陽会定式能　（番組③面）

## 名古屋能楽堂 開館10周年の演能 年末に「乱能」を開催

能楽協会名古屋支部による平成19年度の演能予定は次のとおりである。

◎名古屋能楽堂定例公演
6月1日(金)　午後6時半開演
7月14日(土)　午後2時開演
9月2日(日)　2部制
第1部10時半開演
第2部午後2時半開演
10月26日(金)　午後6時半開演
12月2日(日)　午前10時半開演
1月3日(木)　午後2時開演
3月8日(土)　午後2時開演

◎名古屋能楽堂開館10周年記念能
●10周年記念能（玄人会）4月13日（金）・4月14日（土）
●10周年記念能楽大会（素人会）12月14日（金）・12月15日（土）
●10周年記念乱能
12月24日（祝・月）

◎中学生能楽鑑賞会
●名古屋能楽堂　7月4日（水）7月5日（木）午前9時30分・午後1時30分
12月6日（木）・12月7日（金）・午前9時30分・午後1時30分
●豊田市能楽堂
8月1日（水）観世流
8月2日（木）・8月3日（金）喜多流
8月7日（火）観世流
8月8日（水）・8月9日（木）宝生流

◎若鯱会（能楽後継者育成会および能楽協会の若手の研究会）
6月9日（土）　午前・午後の2部制

◎小牧市薪能（第3回）
9月22日（土）

◎親子能楽教室
8月8日（水）・9日（木）
主な予定は以上のようであるが詳細は順次決定。

これらの事業にともない、これまで毎年6月に行われてきた「熱田神宮大祭奉納能」および、毎年8月熱田神宮境内で行われ四十回を数えた「名古屋薪能」は新年度から中止となる。

なお「奉納能」の中止にともない、後継者育成・若手研究会として新たに「若鯱会（わかしゃちかい）」が新たに発足する。2部制で開催予定。

## 新年謡初式

### 能楽協会名古屋支部

能楽協会名古屋支部（梅田邦久支部長）は一月三日午前十時半から恒例の新年謡初式を名古屋能楽堂で開催、梅田支部長の発声につづいて「四海波」を同吟し、平成19年の門出を祝した。

ひきつづいて、同能楽堂会議室で臨時総会を開き、任期満了に伴う役員改選では、梅田支部長の再選を常議員会の方針どおり満場一致で決定された。

臨時総会は井上菊次郎副支部長を議長として、平成18年度事業報告、会計報告、平成19年度事業計画が審議され、提案どおり決定した。（名古屋能楽堂10周年記念行事など別項記事参照）

## 八十世金春宗家 継承披露能

### 4月9日　国立能楽堂

金春流・金春安明氏は昨年第八十世宗家を継承したが、この宗家継承披露能がきたる四月九日（月）国立能楽堂で行われる。

能組は次のとおりで一月八日より一般発売開始

能「翁」シテ金春安明、三番三・大蔵千太郎、千才・山本泰太郎

能「高砂」舞序破急ノ伝
前シテ高橋汎、後シテ本田光洋、ツレ金春憲和、ワキ宝生閑、間・山本東次郎

狂言「末広」果報者・大蔵彌太郎、太郎冠者・大蔵吉次郎、傘屋・善竹十郎

仕舞「野守」辻井八郎、「放下僧」小歌・守屋泰利

独吟「鮎ノ段」吉場廣明

仕舞「小塩」キリ・島原春京、「角田川」富山禮子

能「羽衣」替ノ型　シテ金春欣三、ワキ森常好

仕舞「岩舟」桜門右陣、「花筐」クルイ・桜間金記、「養老」観世清和、「八島」宝生英照、「東北」クセ金剛永謹、「草紙洗小町」友枝昭世

半能「石橋」群勢　白・金春穂高、赤・高橋忍、山井綱雄、本田芳樹、ワキ村瀬純

入場料S席15000円、A席12000円、B席10000円、学生8000円

お問い合わせ／金春宗家継承披露能事務所　〒167－0052 東京都杉並区南荻窪3－17－16金春安明方、電話080・6569・6713または080・6569・6709

## 2006年度朝日賞 野村万作氏受賞

朝日新聞文化財団と朝日新聞社による「2006年度朝日賞」が六氏に贈呈。狂言方・野村万作氏が「長年にわたる狂言の優れた上演と幅広い舞台芸術への貢献」が顕彰されて受賞した。1月29日に東京・日比谷の帝国ホテルで受賞式が行われる。

朝日賞は野村万作氏とともに次の五氏が受賞した。（敬称略）

作家・田辺聖子、作家・村上春樹、国際電気通信基礎技術研究所脳情報研究所長・川人光男、名古屋大学教授・近藤孝男、前米ウッズホール海洋生物学研究所上席研究員・下村脩

### 野村万作氏略歴

一九三一年東京生まれ、早稲田大学文学部卒、父の六世野村万蔵に師事、三歳で初舞台、一九五〇年万作を襲名　一九七七年「釣狐」連続上演で芸術祭大賞、一九七九年木下順二作「子午線の祀り」の義経役で紀伊国屋演劇賞。中国、ソ連（現ロシア）で狂言を初公演。一九九五年紫綬褒章受章。

## 謹賀新年

名古屋観世会　観世清和
幽謳会　片山九郎右衛門　清司
銕仙会　観世栄夫　観世銕之丞
梅猶会　猶諷会　梅若吉之丞
大槻清韻会　大槻文蔵
〒540－0005 大阪市中央区上町A番七号 電話（〇六）六七六四－〇八九八番

山本勝一
大西智久
鳳鳴会　武田志房　武田友志
稽古場　名古屋市千種区今池四丁目15－3 浅井ビル 電話〇五二（七三二）三七三六
幽花会　片山慶次郎　伸吾
〒603－8123 京都市北区小山下花ノ木町二一
名古屋観世九皐会　観世喜之　観世喜正　高橋瞭一　外山圭一
井上嘉介　井上裕久
〒603－8175 京都市北区紫野下鳥田町六
壺泉会　泉嘉夫
名古屋市昭和区山手通3・8・2・306 電話（〇五二）八三二－三一八五
西宮市甲陽園目神山町二三－二五 電話（〇七九八）㉓二四五八

## 名古屋宝生会定式能（第151期 第1回）

平成十九年一月二十八日（日）午後一時始
名古屋能楽堂

**番組**

能 **加茂**
内藤 飛能
鬼頭 京子
衣斐 愛
間 杉江 椙元
橋本 正樹
鹿島 元 河村總一郎
俊裕 宰 後藤嘉津幸 加藤 洋輝
竹市 学
後見 衣斐 正宜
佐藤 耕司 地謡 平田 正文
竹内 良伯 稲川 壽一
竹内 淳一 水上 輝和
久野 幸三 石黒 孝
和久荘太郎

狂言 **素袍落**
伯父 佐藤 友彦
太郎冠者 佐藤 融
主人 大野 弘之
後見 井上菊次郎

仕舞 **難波**
**船橋**
**柏崎** 道行
竹内 澄子
玉井 博祐 地謡 石黒 孝
倉本 雅 衣斐 正宜
水上 輝和
辰巳大二郎

能 **葵上**
和久荘太郎
辰巳満次郎
梓之出 飯冨 雅介
間 橋本 宰
井上 靖浩 柳原冨司忠 覓 鉱一
鬼頭 義命
鹿取 希世
後見 倉本 雅
玉井 博祐 地謡 鈴木久仁七
鬼頭 京子 中島 暉夫
加賀山憲治 佐藤 耕司
織田 哲也 馬縅富四男
衣斐 正宜
辰巳大二郎

附祝言

主催 **名古屋宝生会**
（終了予定五時頃）

入場券 年4回5枚綴り19000円
（内同伴券1枚）
当日券5000円
学生券2000円

問い合わせ＝出演楽師又は
名古屋宝生会 佐藤耕司方
住所＝名古屋市天白区島田2－301
島田橋住宅2－1310
電話・FAX 052・803・7372

## 冨耀会

二月十一日（日）午前十時始
名古屋能楽堂

舞囃子「高砂」居囃子速調

主催 **冨耀会**
柳原 冨司恵
電話 〇五二・八三二・一〇三一

［無料］

## 名古屋観世会定例公演能

二月十二日（休）十二時半始
名古屋能楽堂

能 **翁**
面箱 今枝 邦雄
翁 片山九郎右衛門
三番叟 井上 靖浩
千歳 梅田 嘉宏

能 **養老**
武田 大志
片山 清司
高安 勝久 杉江 元
椙元 正樹 河村眞之助
大倉源次郎 加藤 洋樹
田辺 恭資 竹市 学
間 鹿島 俊宏
後見 久田 勘鬼
藤井 完治 地謡 八神 孝充
本田 勲 清沢 一政
須部 甫 武田 邦弘
松山 幸親 梅田 邦久
古橋 正邦
狂言後見 今枝 靖雄
佐藤 友彦

狂言 **張蛸**
果報者 井上菊次郎
太郎冠者 佐藤 融
すっぱ 大野 弘之
後見 佐藤 友彦

仕舞 **吉野天人** 観世三郎太
地謡 林 宗一郎
観世 芳伸
観世 芳宏
坂口 貴信

**老松** 梅田 邦久
**屋島** 藤井 完治
**東北** 観世 芳宏
**春日龍神** 観世 芳伸
地謡 武田 大志
古橋 正邦
武田 邦弘
梅田 嘉宏

能 **熊野**
久田 勘鬼
観世 清和
読次の伝 福王茂十郎
村雨 留 山本 順三
河村総一郎
福井四郎兵衛 藤田六郎兵衛
後見 武田 邦弘
片山九郎右衛門 地謡 松山 幸親
加賀 敏彦 祖父江修一
高橋 暸一 観世 芳宏
梅田 嘉宏 藤井 完治
観世 芳伸
（終演五時半頃）

附祝言

主催 **名古屋観世会**
事務所 名古屋市昭和区台町2－16－5
TEL FAX 052・841・4632

［有料］
指定席券（年六回分）四三、〇〇〇円
自由席券（年六回分）二五、〇〇〇円
当日券 八、〇〇〇円（枚数限定）

## 椙山女学園大学能楽部 創立四十五周年記念の会

二月一七日（土）午前十一時半始
名古屋能楽堂

能「清経」
能「右近」
舞囃子「羽衣」ほか

［無料］

## 謹賀新年

観世芳宏門人会
観世芳宏
観芳会
観世芳伸

藤井徳三

邦謡会
梅田邦久
清沢一政
須部甫
本田勲
今沢美和
梅田嘉宏
〒466－0033 名古屋市昭和区台町二丁目十六－五
電話〈〇五二〉八四一－四六三三番

大垣浦声会
稽古場 大垣市伝馬町大垣別院
電話〈〇五八四〉七三－三三六二
浦田保利
浦田保浩
浦田保親
〒606－0814 京都市左京区下鴨芝本町五八
電話〈〇七五〉七八一－七〇三〇

名古屋修諷会
梅若修一

久田観正会
大倉流小鼓 松月会 久田勘鬼
郁諷会 前野舜一郎
松諷会 松山幸親
星野路子
〒465－0093 名古屋市名東区一社3－162
電話〈〇五二〉七〇五－一五八五

松音会
泉泰孝
〒168－0081 東京都杉並区宮前四－一九－四
電話〈〇三〉三三三一－八二八〇番

泉雅一郎
〒201－0002 東京都狛江市東野川四－六－八
電話〈〇三〉三四八八－二四八五番

下田雄三
豊中市曽根東町四－一－一二

雄諷会中部地区連合会
名古屋和諷会
一宮竹石会
岐阜花諷会

春鶯会
梅若善高
〒560－0084 豊中市新千里南町三丁目18－12
電話〈〇六〉六八三一－七八五四
〒166－0003 東京都杉並区高円寺南4－27－7－903
電話〈〇三〉三三一一－〇五七〇

武田謡楽会
武田欣司
武田邦弘
武田大志

名古屋正花会
山本博通

名古屋淡交会
橋岡慈観
三交会
久田三津子
〒465－0083 名古屋市名東区一社3－162
電話〈〇五二〉七〇五－一五八五

上田観正会能楽堂
社団法人 観正会 TEL〇七八－六九一－五四四九
上田観正会
上田貴弘
拓司
公威
大介

初陽会
武田宗和
稽古場 名古屋市千種区今池四丁目15－3 浅井ビル
電話〇五二（七三二）三七三六

橋岡会
舞謡会
橋岡久太郎
＊＊＊＊
荒木亮
小出年彦
島田友三郎
坪内芘路之
増田宗雄
宮下功
山岸要吉
吉田重雄
松原章
半澤健
宮内美樹
山岸登

㈱大阪能楽会館
〒530－0015 大阪市北区中崎西2－3－17

# 青陽会定式能（第151期）

二月二十四日（土）十一時開演
名古屋能楽堂

**能　田村組**

仕舞　鵜　田村キリ　三村　徑布　久田三津子　地謡　星野　路子　前野　郁子　近藤　幸江　今沢　美和

能　**忠度**　祖父江修一　間　飯冨　雅介　佐藤　融　河村総一郎　船戸　昭弘　鹿取　希世　後見　三村　徑布　久田　勘鵬　地謡　今沢　美和　黒田　武田　博　加賀　敏彦　大志　八神　孝充　須部　甫　高橋　瞭一　松山　幸親

仕舞　采女キリ　加賀　敏彦　笹之段　松山　幸親　地謡　黒田　梅田　嘉宏　武田　邦弘　大志　歌　占クセ　梅田　邦久

能　**葛城**　清沢一政　高安　勝久　間　椙元　正樹　井上菊次郎　筧　鉱一　福井四郎兵衛　鹿取　希世　加藤　洋輝　後見　近藤　幸江　梅田　邦久　地謡　三村　徑布　久田三津子　須部　甫　高橋　瞭一　梅田　嘉宏　武田　大志　古橋　正邦　加賀　敏彦

狂言　**清水**　鹿島　俊裕　佐藤　友彦　後見　今枝　靖雄

能　**善界**　梅田　嘉宏　久田　勘鵬　橋本　宰　間　飯冨　雅介　椙元　正樹　井上　靖浩　河村総一郎　柳原冨司忠　加藤　洋輝　竹市　学　後見　久田三津子　古橋　正邦　地謡　星野　路子　前野　郁子　八神　孝充　松山　幸親　清沢　武田　邦久　祖父江　修一

附祝言

主催　青陽会

▽予　告△

**平成十九年　第五十一期予定**

第二回　六月二十三日（土）　頼政　楊貴妃　海士　梅田　邦久　今沢　美和　子方　寺澤　拓海　久田三津子

第三回　八月四日（土）　須部　甫　八神　孝充　養老　井筒　松山　幸親　殺生石　武田　大志

第四回　十月二十日（土）　田村　星野　路子　松風　三村　徑市　野守　前野　郁子　加賀　敏彦

○前売券　二、五〇〇円、当日券　三、〇〇〇円、学生一、〇〇〇円
○入場券はチケットぴあ　電話〇五七〇―〇二―九九九九（Pコード七八四―七四六）及び各出演者宅
○お問合せ
名古屋市名東区一社三の一六二
久田勘鵬方
電話〇五二―七〇五―一五八五

# 戦後名古屋能楽史 ㊸

## 〔第十八章〕　竹尾　邦太郎

## 昭和三十九年（一九六四）

―承前―

二月九日、梅猶会は梅若猶義(53)雪月花独演能。番組は素謡「善知鳥」・岡田朗詠、独吟三番「田村」増田一雄「草子洗小町」高野瀬透「葵上」鬼頭五朗、能「鉢木」梅若猶義・宝生弥一、仕舞五番「雲雀山」加藤丈太郎「網之段」杉村竹翠「笹之段」佐藤太俊「籠」河村鉦二「嵐山」殿島修二、舞囃子「邯鄲」梅若盛義、能「羽衣・和合之舞」梅若猶義・宝生弥一、狂言「縄綯」茂山七五三、仕舞四番「花筐」井戸良造「藤戸」大槻秀夫「猩々」梅若丈孝「竹生島」梅若猶彦、能「安達原・長糸之伝・白頭・急進之出」梅若猶義・宝生弥一、三役に宝生閑、藤田大五郎、北村一郎、安福春雄、金春惣右衛門、木村正雄の来演がある。なお梅若猶義は当時大阪在住、この年、『能楽タイムズ』二月号、丸岡明との「能楽対談」中に次の発言がある。

**丸岡**　あなたが関西に行かれるようになったのは、戦後になってからですか。

**梅若**　いえいえ。兵役が終って、二十五の時（昭和十年）から毎月関西の方へは稽古に行ってました。

**丸岡**　ああそうですか。

**梅若**　そう、那須に疎開していた時分も、ずっと行ってましたよ。あちらには酒屋をしているお弟子さんがいましてね。御存知のように父は酒が好きだったので、私が稽古に行く度に、一升ビンをさげて那須まで帰ったもんです。父はそれをとても楽しみにしてましたが、持って帰るこっちの身にしてみれば、汽車の中でジロジロ見られて、ラクじゃあなかったですよ。(笑)

**丸岡**　ああそういう話だったら、僕の家でも親戚に酒屋があってね、万三郎先生のところへおとどけしたことありましたよ。

**梅若**　そうでしたか。そりゃあどうも。(笑)そんな訳で、戦後焼け出されてしまって、別に落ち着く所もなかったので、皆さんの勧めもあって、京都から大阪へ住みつくようになったんです。

**丸岡**　しかし、今では月の半分ぐらいは東京でしょう。

**梅若**　いえ、だいたい一週間か十日ぐらいですよ。でもやはり、名古屋とか四国の今治へも行きますから、半月は大阪を留守にしますね。

**丸岡**　しかし大変なことですね、行ったり来たりで。

**梅若**　ええ。それに私は特急は駄目なんです。だから他の人より往復するのに余計時間を取られてしまって……

**丸岡**　と云うと？

**梅若**　一種の乗物恐怖症なんですね。汽車などの中で、もし気分が悪くなったらどうしようと思い

（④面へつづく）


謹賀新年

笠月会　中川雅章　〒526―0036　長浜市地福寺町八ノ二九　電話〈二九〉㊷〇六三〇番

梅春会　井戸和男　良祐　〒545―0004　大阪市阿倍野区文の里3―16―17　電話〇六―六六二一―二二一九

賀水会　桑名賀水会　名鉄百貨店友の会　加賀敏彦　〒463―0035　名古屋市守山区森孝二丁目七〇九　電話〈〇五二〉七七一―八九四五番

松盛会　小松勝憲　松舞台　〒511―0851　三重県桑名市西別所一〇六一の五　TEL・FAX〈〇五九四〉二三―四五八二

洗心会　奥村富久子　〒606―8433　京都市左京区永観堂西町二〇　電話〇七五（七七一）〇七六七番

観修会　祖父江修一　〒507―0848　多治見市日ノ出町2の2　電話〈〇五七二〉二二―三六五六

猶恵会　熊沢恵美子　〒465―0097　名古屋市名東区平和ヶ丘3―76

幸謡会　近藤幸江　〒444―2122　岡崎市鴨田本町十一番地ノ三　電話（〇五六四）㉑二五二九

千早会　八神孝充　〒464―0822　名古屋市千種区穂波町3―60―1―201　電話（〇五二）七六二―二一〇一

恵謡会　三村徑布　〒445―0851　西尾市住吉町三―一二　電話〇五六三（五七）二五九四番

桜月会　加藤春枝　〒509―0236　可児市皐ヶ丘3―113　電話（〇五七四）六四―二三〇六

宝生英照

近藤乾之助　〒170―0002　東京都豊島区巣鴨五―二三―八　電話〇三（三九一五）一三七六番

佐野由於　〒150―0011　東京都渋谷区東2―14―21　〒921―8034　金沢市泉野町4―15―18―301

倉本雅　〒658―0081　神戸市東灘区田中町1―13―22―809　電話（〇七八）四四一―五四六五番

宝生流　嘉宝会　鬼頭嘉男　〒466―0855　名古屋市昭和区川名本町二ノ五一

恵美寿会　衣斐正宜　〒466―0051　名古屋市昭和区御器所3―23―19　御器所パークマンション802号　電話（〇五二）八八二―五六〇〇番

衣斐正宜後援会

司宝会　佐藤耕司　〒468―0056　名古屋市天白区島田二丁目三〇一　島田橋住宅一三〇　電話（八〇二）七三七二

金剛永謹

廣田鑑賞会　廣田陛一　廣田幸稔

菊之会　菊扇会　廣田泰三　廣田泰能

豊嶋能の会　豊春会　豊嶋三千春

松野恭憲能の会　松野恭憲

宇高通成　竜成　徳成　〒606―8313　京都市左京区吉田中大路町19―1　〒791―8013　松山市山越4丁目11―38　松山景雲会

金剛流　名古屋周星会　岐阜周星会　吉川周子　〒464―0825　名古屋市千種区西崎町三―六　電話〈〇五二〉七六一―二二五七

（③面よりつづき）

ますでしょう。それでとても嫌になるんですよ。

**丸岡**　ああ、それはよくありますね。僕など以前そういう風でした。どうしようという気持が先に来てしまうというような……

**梅若**　急行なら、まだ停車しますからどうにか乗れるんですが、夢の超特急とか飛行機だとか、私には、まあ関係ないですね。（笑）ああいうのは乗る前から気分が悪くなりますよ。（笑）

**丸岡**　それでは他の人より何倍も御苦労なことですね。

――中略――

**丸岡**　僕はいつも思ってるんだが、あなたの能というのは、何と云うのか、実にイキな能ですね。非常にイナセで。そういった芸格はあなた唯一人だと日頃から思ってるんですが……

**梅若**　いやいや、どうも。大体舞台ではそんなにイキでは本当はいけないんですがね。（笑）

丸岡　しかし、そういう僕の意見に共鳴してくれた人もあるし、世間では「うちにこもる能」なんて云う人もあるらしいが、御自分ではどうですか。

**梅若**　いやいや、何ともいえませんよ。まだまだ勉強の段階ですし、それに若いですからね。（笑）唯、私にしてみれば、その場その場の真剣勝負だというつもりですから、中途半端なことはしたくないと思ってはいますが。

**丸岡**　一曲の能をやる場合ですね、その曲にノルとかノラぬとかいうことは非常に大切だと思いますが、この頃の舞台では、曲にノラない、云いかえればその曲にとけこまないで、単に型通りにやってる人がとても多いように思うんですよ。観ていて少しも面白くない。全般的に云って、一番気を使うと云うか、難しいと考えられる個所はどこですか。

**梅若**　幕離れと、能が終ってひっこむ時ですね、一番難しいと思うのは。特に終りの留拍子を踏んでしまうと、気持が一度に散ってしまって、自分に帰ってしまったりして、ここは難しい所だといつも思いますね。

**丸岡**　あの最後の幕に入ってゆく所は、観ている方にしても、とても大切ですね。あそこで、これまでの舞台の展開というようなものが、ふっと生き返って、始めからもう一度ずーっと思い起されて来るような気持にさせられます。

**梅若**　なる程。又自分の芸を人に見せようとか、聞かせようという気持を出しては絶対にいけないと思いますよ。ウチの連中にも度々云うことですが、いつも真面目でおれと云ってるんです。その点だけは買って頂きたいですね。

**丸岡**　能舞台というのは、三方があいてしまってるから、演者にスキがあればすぐに見える訳ですからね。芸とか、根性とかが、まるでガラスばりになってるような舞台の構造だから。

――後略――

この対談では三月の東京での梅猶会別会には触れているが、二月の名古屋での自身の独演三番能については触れていないのが残念である。

二月十六日、名古屋観世会の初回。舞囃子「高砂」柴田初太郎、能「屋島」木原康次、仕舞四番「難波」山本博之「籠」大槻秀夫「巻絹」武田太加志「野守」杉浦元三郎、能「羽衣・和合之舞」観世元正、狂言「入間川」河村丘造、能「鞍馬天狗・白頭」観世喜之、森茂好、谷口喜代三が来演。

三月一日は名古屋観世九皐会の春季大会で番外に連吟「竹生島」観世武雄、仕舞「難波」観世喜之、がある。

三月八日、青陽会第七期第三回。素謡「高砂」竹内六郎、能「敦盛」佐藤太俊、仕舞二番「笠之段」柴田収武「天鼓」河村鉦二、能「胡蝶」加藤丈太郎、狂言「昆布売」佐藤卯三郎、仕舞「遊行柳」柴田初太郎、能「葵上」久田秀雄。

――以下次号――

## ◆秋の舞台から（その三）◆

## 「第19回・久田勘鷗の会」「第43回・鳳の会」「名古屋茂山狂言会」と「第27回・名古屋金春会」

竹尾邦太郎

**「経正」**　少年期、琵琶に親しんだ経正シテ勘吉郎、追善の管絃講を喜び現われる幽霊の姿、僧都行慶ワキ勝久の勧めに所縁の銘・青山の琵琶を弾じ、興ずる夜遊のうち、修羅道の闘争・苦患が襲う刻限、人目を憚る羞恥に灯火を吹き消し再び闇に消える。

正に経正の少年期にある勘吉郎は小学生高学年、子方を数多く経験してきたとは言え舞台度胸満点。直面・黒垂・梨子打烏帽子・赤鉢巻・襟赤・紅入厚板着付・白大口・檜垣唐花文萌黄長絹・太刀の姿は如何にも凛々しい。「亡者も立ち寄り」と立つと正先へ、「燈火の影に人には見えぬものながら」と琵琶に擬した扇を構える型も堂に入る。〽月に雙の岡の松の、と舞台を廻る運ビも確りした腰、〽小絃は切々として、踏む足拍子に型が崩れることなく、舞グセはクセ切、スミから大きく左へ廻り〽衣笠山も近かりき、と袖を返ス辺りも美しい。カケリは昂揚感にリズムのよさ、修羅の闘争もきび〳〵と、〽（火を消さんと）飛び入りて、と跳ぶ躍動感、めりはりの利いた達者な舞台。（33分）

**「魚説法」**　住持不在、代りに御堂供養の説法ひき受けるも「お布施は欲しし経陀羅尼は知らず」の新発意シテ菊次郎、予て知る魚の名を地口に洒落て誤魔化そうの魂胆。「先づかうお通りなさいませ」と施主アド靖浩に促されれば、徐にでなく、いやに足速に橋懸から脇座へ通るのも場慣れていない俄坊主の証拠。正中、床几に掛かっても何となく落着かない雰囲気だが「先づ説法をスルメなり」などとスミに居るアドにアシラヒ、魚尽しの説法すすめるうち、扇で膝を叩き調子付いてくる辺りは盲蛇に怖じずである。「なう〳〵御坊」と気付いたアドに、「何で御座る」とシテ、「甲斐の無いことイワシますな」と咎めるアドの表情からは其方が其方なら此方も、の様子は皆無、「酢薑」の様な掛合の和合には向かわない緊張、互いに洒落と気付かぬ所が面白い。開き直ったシテに挑発されると感じるアドだが、シテにしてみれば揶揄い半分の気持ち、このギャップが益々アドを苛立たせる。（20分）

**「恋重荷」**　恋に上下の隔てなしとは言い条、白河院の女御ツレ三津子を見初めた賤しい菊造りの老人・山科荘司シテ勘鷗、噂を仄聞してその事実を質し、重荷を持ち庭を廻る間は女御の姿を拝ませようと約す臣下ワキ隆之亮。持ち上げられもしないと分っていながら難題を課する上つ方の心根の卑しさは、当今も喧しい苛めの一典型、身につまされる。

ツレは面小面・天冠・白摺箔着

（⑤面へつづく）

## 平成19年度 名古屋観世会 定例公演

名古屋観世会の平成19年度定例公演の日程、演目は次のとおり。

**◆4月8日(日)**　12時半始

能　二人静　立出之一声　片山慶次郎

能　鞍馬天狗　白頭　梅若六郎

**◆6月10日(日)**　12時半始

能　藤戸　観世喜之

能　国栖　白頭　梅若吉之丞

**◆7月15日(日)**　12時半始　普及公演

能　田村　替装束　古橋正邦

能　百萬　法楽之舞　武田邦弘

**◆9月17日(祝)**　12時半始

能　野宮　合掌留　野村四郎

能　善界　関根祥人

**◆11月11日(日)**　12時半始

能　三井寺　観世芳伸

能　融　舞返　観世銕之丞

毎回、狂言、仕舞上演

**[問い合わせ]**

名古屋観世会事務所（梅田邦久方）〒466―0033

名古屋市昭和区台町2―16―5、TEL/FAX（052）841―4632

## 古演出による能「自然居士」

**2月12日　大槻能楽堂**

大槻能楽堂では、2月12日(祝)研究公演として、古演出による能「自然居士」が上演される。午後2時開演。

番組は次のとおり。

お話「古い自然居士について」

能「自然居士」シテ大槻文蔵、子方・赤松裕一、ワキ宝生閑、ワキツレ宝生欣哉、間・網谷正美

笛・杉市和、小鼓・曽和正博、大鼓・辻芳昭

後見・赤松禎英、武富康之

入場料（自由席・税込）

一般当日四三〇〇円（前売三八〇〇円）学生当日二八〇〇円（前売二三〇〇円）

入場券取扱所＝電子チケットぴあ・ローソンチケット、大槻能楽堂（TEL06・6761・8055。FAX06・6761・3399、大阪市中央区上町A番7号）


# 謹賀新年

金春信高
金春安明
〒167―0041 東京都杉並区善福寺2―27―27 電話〇三（六七六五）六一四四番

本田光洋
〒164―0002 東京都中野区上高田二ノ二五ノ二 電話〇三（三三八六）二六四一番

春敲会
名古屋春栄会
金春穂高
廣瀬瑞弘
廣瀬雅弘

伊勢金春会
宇仁田吉邦
〒516―0076 伊勢市八日市場町5―16 電話〇五九六（25）五二九八

長田驍後援会
〒514―2221 津市高野尾町三三五一―四六 電話（〇五九二）30〇六九七番

喜多流
和楽会
和谷衡市
〒516―0067 伊勢市中島二丁目26―12 電話（〇五九六）25〇一五九番

喜多流
二井会
二井英世
〒515―0073 松阪市殿町一四一二―三 電話（〇五九六）26三五〇二番

福王茂十郎

高安勝久

西村同門会
飯冨雅介
杉江元
椙元正樹
橋本宰

宝生閑
欣哉
〒176―0004 東京都練馬区小竹町一―五〇―五 電話 〇三（三九七二）七二三〇 電話 〇三（三九五五）四七九五

植田和光会
植田隆之亮
〒673―0862 明石市松ケ丘4の3 A6―301 電話・FAX〇七八―九一一―二三七四

清水利宣
〒569―0817 高槻市桜ケ丘北町11―25 電話〇七二六（九四）五〇一七

（④面よりつづき）

付・緋大口・金地菊文唐織壷折の豪奢がいかにも驕慢。シテは面阿古父尉・襟浅黄・小格子着付・焦茶水衣。初同（徳三・貴弘ら）へ重荷なりとも逢う迄の、と指込ミ開キは手ぐすねひく感じの一種ウォーミングアップを思わせる静かなる闘志。返シ句に後見座で肩取ルと常座から重荷を見込み、へ名も理や恋の重荷、とつつつと近寄り縄に両手掛け、腰を落としぐっと背筋を伸ばし持ち上げんとするも、微動もしない重荷にシテは無力を嘆きシヲル。さればとへ石にだに立つ矢のあるぞかし、の気迫は、見据える重荷をへいかにも軽く持たうよ、の自己暗示に己れを鼓舞、いよ〳〵意を決しへ肩替へて、屹と立つとずか〴〵と重荷へ。再び縄に両手を掛け、この度は立って後ろへ反り返る様に引き上げんとするがへ持たれぬ、絶望に安座双シヲリのシテ。へ束ね緒も絶え果てぬ、と恨めしげに重荷を見遣ると憤然、腰を振り立つやへ乱れ恋になして思ひ知らせ申さん、と沸騰する怒り爪先に凝るかの荒々しい中入の運ビ、二ノ松過ぎ歩を速める。秘めた恋心を明かされ、嘲弄される痛憤は運ビに如実。

後場、呪縛のツレを責め苛む後シテ荘司ノ亡霊は面重荷悪尉・白頭・襟紺・白地厚板着付・紫地金檜垣唐花文半切・白地唐花亀甲文袷法被・鹿背杖。舞台に入り、ツレに向きへ厳の重荷（持たるるものか）、と鹿背杖強く突き、へあら恨めしや、と胸杖に右足引いてぐっと睨め付ける凄味は更に立廻の威嚇、鹿背杖の両端持ってツレに迫ると右肩を小突くか、が恐ろしい。立廻あと吐露するはつらみ、へ（重荷といふも）思ひなり、でシヲリへ衆合地獄の、とシヲリ解くとへ重き苦しみ、は鹿背杖に縋り右膝つくとへさて懲り給へや、とツレを睨む威圧。ここに呪縛が解け、ツレは立つと床几へ、シテも立ちキリになる。

跡を弔い給わば恨みは忘れよう、といささか安直な結末に思えるが、へこれまでぞ、と両手に頂く様に持つ鹿背杖打ち捨てるところには万感の思いのシテ、勘鷗骨太に演じきり力量発揮。（1時間10分・10月8日・第19回久田勘鷗の会）

**「入間川」**　「深い」は「浅い」ということ。なまじっか入間の在の逆言葉を仄聞していたばかりに川を渡りそこね、濡れ鼠になる大名シテ菊次郎に渡り瀬を教えた何某アド融は、成敗すると聞かされると「あら心安や、ざっと済んだ」と安堵の表情。怪訝な面持のシテは、己れが言い出して逆言葉を使うと誓言した手前、成敗するはしないこと、と合点するや俄然興に乗り、入間様問答が旨くいく度に喜々として衣服や持物を与える天真爛漫だが、太郎冠者アド郁雄にはその模様を見て瞠目して貰いたかった（写真）。キリは与えた物が惜しくなり「入間様を除けて」と取り戻す算段のシテ、しかし弾みがついた問答は早々に軌道修正もならず、有耶無耶のうちにアド何某は詐術に弄された思いだったろう。（24分）

**「名取川」**　戒を受け、希代坊の外に健忘症とて不祥坊と二つの法号を授かり、更にそれを両袖に記して貰い、それでも不安で節を付けて唱えながら国元へ戻る僧シテ友彦。それが面白いか様々に節を替え唱えるうち却って注意力が散漫に、徒渉中、深みに落ちたはずみに覚えた法号さらりと忘れ、剰え記した袖の字も流してしまう。騒々しい狼狽ぶりは川尽しの小舞（これが細かく達者）を舞いつつ流した名を掬い上げようの素っ頓狂、若手の地謡が上々である（写真）。所が川は殺生禁断、密漁と間違い咎める何某アド弘之に、川の名と何某の名を問うシテは、名取川で名取ノ何某、の返事に俄然色めき立ち名を返せと責める。困却するアドは「奇態な事を」と呆れ、「不祥な処へ来かかった」と悔いるが、そのアドの呟きに喜色を取り戻すシテ、表情豊かに演じて友彦、途方もない筋を忘れさせる。（31分）

**「六地蔵」**　六地蔵を求める田舎者アド靖浩を誑り、まんまと契約を取り付けた都のすっぱシテ菊次郎、同類二人（俊裕・靖雄）を誘い自身を含め地蔵三体に成り済まし、二度に拝ませようの魂胆。一味を差配すべきシテが地蔵も兼ねるので勢い場所の移動も忙しなく、就中、アドとの応対も粗くなる嫌いは否めない。（35分・10月21日・第43回凰の会）

**「政頼」**　地獄が不景気で眷族鬼（立頭あきら、立衆千三郎・正邦・洋海・竜也・茂）を引き連れ、自身六道の辻に亡者を待ち受ける閻魔王アド千五郎。たま〳〵網に掛かったのは政頼を名乗る鷹匠シテ七五三、眷族鬼に責められるも頑強に無罪を主張すれば、眷族鬼共では埒が明かず、閻魔王直々の調べ。殺生の罪は「鷹にこそ」と申し立てれば、あっさり納得してしまう閻魔王の大様が可笑しい。

鷹に興を催した閻魔王は鷹狩の何たるかを質し、自身も眷族鬼共を動員して巻狩へ参加するに及べば、へいで〳〵鷹を使わんとてと政頼、一ノ松から鷹（小道具）を舞台へさっと放てば、「捕ったか捕ったか」と閻魔王。一同、円陣を組むと、政頼から獲物を受け取る立頭あきら、それを閻魔王に差し出すと、「ガリ〴〵」旨そうに貪り食い、お下がりが順に眷族鬼達へ渡る。「ペロ〳〵」「ヌチャ〳〵」「パリ〳〵」「アム〳〵」「ショボ〳〵」など、食べっ振りの擬声語が妙。キリは褒美を取らすと言われ政頼、厚かましくも婆婆へ「何万年が間戻して下されい」と望むが流石に許されず、指折数えて「三年が間」に落着、その間、精々鷹に鳥を捕らせ届けろの仰せへ承りて帰り、で政頼は一ノ松に。名残りを惜しみ閻魔王はへ招き返し（招キ扇は無く）、冠を脱ぐのももどかしく政頼に与えると、政頼はへ帰りける、とトメ。

人材豊富な千五郎家ならこその良く統率の取れた大勢物の快演。四十五年振りの上演で稀曲なのは地謡にも人を得る要があり、また能がかりで囃子方も、という事もあろうか。因に当地和泉流では平成四年、名古屋和泉会別会でシテ元秀、アド元弥、以下での上演があるが、幕末からこちら記録に無い程の超稀曲で、この時は眷族鬼の外に巻狩の場で犬が出た。（40分）

**「左近三郎」**　殺生を事とする漁師・左近三郎シテ茂、見たくもない出家アド千作と出会い言い掛かりをつけて強いて同道、禅宗坊主と分かりねち〳〵となぶりに掛かる。坊主は生臭を食わぬが建前と知って魚を喰ったか、と弓矢に物を言わせて迫り、妻帯はしないも

（⑥面へつづく）

凰の会「入間川」左より今枝郁雄、井上菊次郎、佐藤融
（いずれも杉浦賢次氏撮影）

凰の会「名取川」左より佐藤友彦（今枝靖雄、井上靖浩、鹿島俊裕、今枝郁雄）、大野弘之

凰の会「六地蔵」
左より鹿島俊裕、井上菊次郎、今枝靖雄、井上靖浩


# 謹賀新年

谷田宗一朗
原　大
小林　努

〒603-8372 京都市北区衣笠街道町31-7
電話〇七五（四六三）四八七五番

藤田　舞台
藤田六郎兵衛

〒451-0041 名古屋市西区幅下2-10-9 ロクサンヨイ
TEL&FAX 〇五二-五七一-六三四一

幸友会
涛華能
福井四郎兵衛（啓次郎改め）
福井良治

桂会
後藤孝一郎
嘉津幸

冨耀会
柳原冨司忠
船戸昭弘

〒466-0826 名古屋市昭和区滝川町47-147 サザンヒル八事2-703
電話〈八三二〉一〇三一番
小鼓教室　名古屋市中区栄　朝日神社内（丸善前）

飯島六之佐

〒920-0961 金沢市香林坊2-8-17
電話（〇七六）二六一-四三四〇

大倉源次郎

叶石会　河村総一郎
河村眞之介

〒466-0821 名古屋市昭和区前山町一丁目二三
電話〈〇五二〉七六一-四八八二

河村　大

〒603-8313 京都市北区紫野下柏野町五九-一
電話〈〇七五〉四六二-四一一五

亀井俊一
忠雄
保雄
実

呉竹会
筧鉱一

谷口正喜

〒602-0915 京都市上京区中立売通室町西入室町スカイハイツ610号

谷口有辞

〒520-0221 大津市緑町二四-二〇

前川光長

〒616-8095 京都市右京区御室芝橋町一の六
名古屋稽古場　名古屋市東区葵二-13-3 ツインクルガーデン801前野舞台
電話九三二-八八〇六番

葵心庵舞台

尾張旭市東大道町原田二四九三ノ二 若杉ビル（旭市役所南）
電話　〇五六-一五③二三四六番
能舞台　電話〇五六-一五④〇六九八

（⑤面よりつづき）

のと決めてかかり「お内儀（ないぎ）があるか」と衝いてくる。「何、鰻（うなぎ）があるか」とひたすら話題を逸らしたい出家、典型的な苛めに今昔はない思いにさせられる。更に厭がらせはエスカレートし、檀家になろうと持ち掛ける左近三郎に、素姓を知って「穢らわしやな」と拒む出家。殺生が生業の左近三郎は待ってましたとばかり禅問答を展開、花は無いが鼻は有る、の頓智が優って出家が意気投合すれば、「おりゃれ〳〵」と左近三郎、「心得た〳〵」と出家が従い大団円。

若さで突っかかる孫の茂をふわり受け止め包み込む祖父千作の滋味、見事。（16分）

**「水掛鼻」**　智・宗彦、舅・千之丞、女・正邦、深刻な水争いが骨肉の争いに進展、父親に味方するか夫にか、悩んだ末に女は喜々として愛しの人に付いてゆく。

互いに自分の田だけに水を引く舅と聟。堰り兼ねて番を仕出した舅の許へ、これも見回りに来た聟、「ウヘ、お出やったか」と狼狽する舅の顔にさっと走る微妙な表情、「やいやーい、己れら両人来年には祭に呼ばぬぞよ」のキリに漂う哀愁、千之丞の妙味に舞台が締まる。（22分・10月31日・名古屋茂山狂言会）

**「三井寺」**　行方知らぬ我が子・千満（子方・林霑）を尋ね、駿河から都へ上り清水寺に参籠の母シテ光洋、面曲見・襟浅黄・露芝文白摺箔着付・無紅唐織の姿は装束が綺麗に着き、そこはかとなき寂しみに品位をみせ、悪夢を授かり三井寺へ赴く短い前場、一縷の望みを托す心持を中入の運ビにみるようである。

後場、折柄仲秋十五夜、観月の庭に立つ三井寺の住僧ワキ勝久、紫衣に重みをみせ、今は恃んで弟子となって居る千満と従僧ワキツレ正樹・宰を侍らす。月が上がると、余興を命じられて小舞「風車」を舞う能力アヒ友彦、舞上げて外が喧しいと野次馬根性は一ノ松へ走ると、後シテが縫箔腰巻・浅黄縷水衣の姿になり、狂ヒ笹を持ち現われる。舞台へ入ると、我が子の行方に乱れる心はカケリの狂燥、故郷に我が子さえ居れば田舎住まいに如くはない、の感懐は〽いざ故郷に帰らん、の返シ句に一ノ松へ、更に〽帰れば楽浪や、と二ノ松に往くところ、胸中の思い、心持がよくでる。

舞台へ戻り三井寺へ着けば、月下の鳰の海の風趣に足拍子も繁く（〽鳰の海、〽森見えて、で各二ツ、〽海越しの、で三ツ、〽月の誘はば自ずから、では笹を戴き四ツ拍子）、気持ちは昂揚気味、〽舟人も焦がれ出づらん、と一ノ松へ、アヒが鐘を撞くのを見つめる。三ツ目を撞くところへ舞台へ入ってくるシテ、笹でアヒの肩を打つと「ホイ、蜂が刺いた」とアヒは退き、シテは〽わらはも鐘を、と鐘を見上げる。月影は霜が下りた様に白く、〽月にや鐘は冴えぬらん、の三度返シにシテは笹を扇に替え、アヒは切戸へ退く。

鐘之段は〽月も数添ひて、と紐を取り、抜き上げ紐の下を潜り、〽はや撞きたりや、と鐘を見込むと（写真）紐を手放して右へ廻り大小前へ、〽それ長楽の（鐘の声は）、と下居する。このクリからサシ・クセは鐘尽し、名所多き鐘の音を聞く態に面を伏せ、〽（尽きぬや）法の声ならん、とワキへアシラフと直ってクセ。情況に因る鐘の音の種々相を聴き分ける面のクモリ加減も細かく、〽月落ち鳥啼いて、と上ゲ端で立つ。クセ留あと金春流は地（汎・廣明ら）を受け「かやうに狂ひ廻れども、我が子に似たる人だにもなし、あら我が子恋しや候」のシテ詞があり、シヲル。それを見咎めた子方、ワキとの問答からシテの素姓が明らかになってゆくところ、またシテとの掛合から再会を果たしてゆくところ、詞と謡に更に強さが欲しいと思うが無難。鐘の取り持つ親子の出会いは、〽常の契りには、と子方へ招いて出たシテが、子方を抱きかかえる様に左肩に手を掛け、両人して鐘を見上げるのが沁み〴〵嬉しく印象的だった。囃子は希世・四郎兵衛・鉱一。（1時間41分）

**「栗焼」**　太郎冠者シテ友彦、主・融から到来の栗四十個を焼栗にと命じられて焼きに掛かる。栗を擬人化して語りかけ、栗の扱い様を手捌き刻明に見せて口八丁手八丁の仕方話、少々脂ものりすぎてたゞの饒舌に聞こえ兼ねない憾みも。（30分）

**「望月」**　小沢刑部シテ穂高の営む宿に偶々旧主の妻子ツレ哲也・子方飛翔が投宿、再会を喜ぶところへ、旧主を討った仇敵・望月秋長ワキ雅介が下人アヒ靖浩を伴い、これも偶然に泊り合わせる。シテは深慮遠謀、ワキに酒を勧め、座興にはツレを盲御前に扮装させて謡わせ、子方には羯鼓を打たせて舞わせ、自身は獅子舞を見せてワキの油断を誘い、子方と共にワキを討つ、という準備を整える。悠揚迫らぬ態度のシテは如何にも冷静沈着、はき〳〵した問答にてきぱき事を運び、ツレ・子方もよく応えて引き締まった舞台。クセ中、曽我兄弟の故事をいうところ、〽走りかゝりて御首を、に大鼓の激しい急調があり、雰囲気が盛り上がると、クセあと「いざ討たう」の子方の思い余った叫び、ワキの動揺、すわやのシテの機転、瞬時、劇的興奮一気に高まる。〽獅子団乱旋は時を知る、を子方が謡い、〽雨叢雲や騒ぐらん、と地（安明・忍ら）が受けると子方の羯鼓、精悍な面構えは父の仇を討つ覇気、活発な舞が立派。舞上げ、笛前に下居すると、半幕に姿を見せるシテ。乱序の囃子（六郎兵衛・嘉津幸・総一郎・洋輝）の中、獅子頭に厚板を被キ一ノ松、勾欄に右足を掛けワキを見込むと三鼓の流シで舞台へ入り、厚板に手を通し颯爽と獅子を舞う。舞の中、膝行してワキの様子窺うなどあり再び一ノ松、厚板被キ跽ると〽さる程に、で居立ち、未だ酔臥のワキの様子を見定め、獅子頭と厚板脱ぎ捨てると舞台へ。子方に目配せしてワキに迫る。〽敵を手籠めに、とワキの後ろへ廻る子方、前後から押さえられ「そも是は何者ぞ」と驚愕のワキ（写真）、笠を代りに置く観世流と異なり、刺されるところまでワキが残る演出は迫力満点、シテ・ワキ共に力の入った重厚な演技が素晴らしく、子方も好演。（1時間22分・11月5日・第27回名古屋金春会）

金春会「三井寺」本田光洋　（辻井清一郎氏撮影）

金春会「望月」左より金春穂高、飯冨雅介、金春飛翔（辻井清一郎氏撮影）

謹賀新年

金春流太鼓
青耀会
上田悟
〒594-1153 和泉市青葉台2-17-25
電話〇七二五(56)八五二一
名古屋稽古場 名古屋市千種区今池4-15-3 浅井能舞台
電話〇五二(七三二)三七三六

長生会
鬼頭義命
〒490-1323 愛知県稲沢市城西
電話(〇五六七)46一九六〇番

大蔵会
大蔵狂言会
大蔵彌太郎
千太郎
基誠
〒215-0027 神奈川県川崎市麻生区岡上438-1
TEL〇四四-九八七-一一八七

茂山千作
千五郎
七五三
千三郎
正邦
茂宗彦
逸平

茂山忠三郎
茂山良暢
〒606-8265 京都市左京区北白川東小倉町28
電話〇七五(七〇一)二〇一一番
FAX〇七五(七〇一)二二三一

狂言共同社
井上菊次郎
佐藤友彦
大野弘之
佐藤融
井上靖浩
今枝靖雄
今枝郁雄
鹿島俊裕
鷲見政行
〒466-0826 名古屋市昭和区滝川町54 サンハウス滝川3D 井上方
電話FAX〇五二・八三四・八六〇七

狂言やるまい会
野村又三郎
野村小三郎
松田高義
野口隆行
奥津健太郎
〒460-0021 名古屋市中区平和一-二〇-四 野村事務所 気付
電話 〇五二(三五〇)七九七一
FAX〇五二(三五〇)七九七二

鳳の会
林和利
井上菊次郎
佐藤友彦

朝日カルチャーセンター
囃子教室
小鼓 後藤孝一郎
丸栄スカイル10階

ウシマド写真工房
牛窓正勝
雅之
〒602-8381 京都市上京区北野上七軒
TEL(〇七五)四六一-一三四一
FAX(〇七五)四六一-五七七二

栄能楽舞台
名古屋市中区栄五-六-四
電話(二六二)一一八三番

彰諷閣
名古屋市天白区植田西二-八〇一-二
電話(〇五二)八〇五-三三〇一
連絡先 名古屋市緑区鳴海町有松裏40-9
電話(〇五二)六二一-四二三八

能楽の友社

〔おことわり〕　年賀広告の掲載にあたりましては、紙面の都合により順不同とさせて頂きましたので何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。また1月号の発行が遅れましたことをお詫び致します。

**喪中につき年賀欠礼いたします**

財団法人 鎌倉能舞台
中森晶三
中森貫太

# 能楽の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種２丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　　話（052）731－7984
ＦＡＸ（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　１年　1100円
郵送の場合　１年　1800円
一　　部　　100円

## ＮＨＫ放送予定（平成19年２月～３月）

◆ＮＨＫ－ＦＭラジオ能楽鑑賞（毎週日曜日７時15分～８時）

２月25日　「雲林院」（観世流）　林喜右衛門ほか
３月４日　「桜川」（観世流）　木月孚行ほか
３月11日　「隅田川」（宝生流）　近藤乾之助ほか
３月18日　「田村」（観世流）　片山九郎右衛門ほか
３月25日　「養老」（再）（宝生流）　三川　泉ほか

◆ＮＨＫ教育テレビ

３月17日（14時50分～16時50分）
能　「隅田川」　シテ：友枝昭世、ワキ：宝生　閑
狂言　「舟渡聟」　船頭：野村　萬
一調　「玉之段」　謡：梅若六郎　小鼓：横山晴明

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

（能・狂言演能関係）
（TEL 052－231－0088）

［２月］
24日㈯　青陽会定式能

［３月］
３日㈯　恵美寿会　（無料）（番組①面）
４日㈰　恵美寿会　（無料）（番組①面）
９日㈮　名古屋能楽堂定例公演　（有料）（番組②面）
11日㈰　名雅会35周年記念会　（無料）（番組②面）
17日㈯　さわってみよう能の世界　（要整理券）
18日㈰　名古屋宝生会定式能　（有料）（番組②面）
21日㈬　梅若六郎の21世紀現代能「安倍晴明」　（有料）（記事②面）

## 名古屋市芸術特賞
### 狂言方　井上菊次郎氏　受賞

名古屋市では、平成十八年度名古屋市芸術賞の受賞者を一月十三日発表、能楽関係では伝統芸能部門として、狂言和泉流の井上菊次郎氏が芸術特賞を受賞した。

芸術特賞は、長年にわたり優れた芸術創造活動を行い、かつ近年における活動が顕著で、名古屋市の芸術文化の振興に大きな功績のあった方に贈られる賞で、本年は井上菊次郎氏とともに音楽部門（音楽研究・評論）で藤井友昭氏が受賞した。

［受賞者概要］

故井上松次郎（３世菊次郎）の長男として、幼時より父の指導を受ける。現在、山脇派狂言の伝統を継承する「狂言共同社」の代表として名古屋を中心に、県下、東京で活発な舞台活動を行っている。

また、主宰する「御洒落名匠狂言会」狂言「鳳の会」を中心に、上演の稀な曲の復活（「酒講式」「三人夫」「右流左止」「人を馬」等）や新作狂言の演出（「無限魚箱」「矢作川の主」等）を手掛ける。

後進の指導にも熱心に取り組み、若手狂言師の育成に成果をあげているほか、名古屋市内を中心に県下各地で「中学生鑑賞会」「初心者のための狂言セミナー」等、狂言の普及啓蒙活動に尽力。近年は「愛・地球博」名古屋市ウイークでの新作狂言の上演、アメリカ（平成17年６月）フィリピン（平成18年７月）での能楽公演に参加、海外への日本文化の紹介にも貢献を果たし、名実ともに名古屋狂言界の中心として幅広い活動をくりひろげている。

## 名古屋市芸術祭審査員特別賞
### 観世九皐会　記念65周年　別会

名古屋市では、総合的な芸術の祭典として毎年十月、十一月に名古屋市民芸術祭を開催、参加事業について、優秀な公演を表彰しているが、平成十八年度の「名古屋市芸術祭審査員特別賞」（伝統芸能部門）として、「名古屋観世九皐会六十五周年記念別会」が表彰された。

［授賞理由］　能舞台として総合的にまとまりがあり、評価できる公演であった。特に「卒都婆小町」では、囃子方や地謡が確かな技術を見せ、努力の成果がみえた。長年にわたって演能活動を継続し、名古屋における能楽の普及・発展に尽くしてきた名古屋観世九皐会の伝統の厚みを感じさせた。

## 京都　春季　菊之会
### 3月11日　金剛能楽堂

金剛流「菊之会」は、春季公演を３月11日、金剛能楽堂（上京区烏丸通一条下ル）で開催、能「杜若」を上演する。指導・金剛永謹金剛流宗家、愛知県知立市八橋の杜若名勝・無量寿寺が協賛している。入場料（全自由席）七千円、学生券五千円、午後２時開演。

能組は次のとおり、

仕舞「西行桜」広田泰三
能「杜若」シテ広田泰能、ワキ原大、笛・森田保美、小鼓・林光寿、大鼓・谷口有辞、太鼓・前川光範、後見広田泰三ほか、地謡宇高通成、種田道一ほか。
狂言「千鳥」茂山正邦・柳本勝海・松本薫。

お問合せ、申込み、広田泰三方（TEL・FAX075・781・3421）、広田泰能方（TEL・FAX075・213・1727）

## 「能」の実技体験と鑑賞
### 能楽協会名古屋支部

能楽協会名古屋支部（梅田邦久支部長）、能楽協会、日本能楽会は、「平成18年度文化庁芸術団体人材育成支援事業」として、小学校３・４・５・６年および中学生とその同伴者（大人）を対象に、「さわってみよう〝能〟の世界」のタイトルで、能楽鑑賞、囃子、能・仕舞の実技体験ができるイベントをきたる３月17日（土）名古屋能楽堂で開催する。開演午後１時半、終演午後３時半の予定。

申込みは往復はがきで、住所、名前、同伴者（大人）名前、小・中学の学年を記入。名古屋市昭和区滝川町47－147（２－703）柳原方「さわってみよう能の世界」宛。（〒466・0826）

## 能「蝉丸」上演
### 豊田市能楽堂３月能

豊田市能楽堂では３月能として３月24日（土）能「蝉丸」（粟谷能夫）を上演する。午後２時開演。入場料正面席六千円、中正面席四千円（全席指定）、豊田市能楽堂電話0565・35・8200

仕舞「実盛」（友枝昭世）、狂言「花折」（野村万蔵、野村萬ほか）、能「蝉丸」（シテ粟谷能夫、ツレ粟谷明生、ワキ宝生欣哉ほか）

### 第15回　恵美寿会

第一日　三月三日（土）
第二日　三月四日（日）
ところ　名古屋能楽堂

**一日目**（三月三日〔土〕午前十時始）

仕舞　鞍馬天狗　衣斐　正宜　実盛　クセ　金児　晶子
素謡　葵上　ツレ　平岡一子　シテ　神村美智子　ワキ　青山博子　ワキツレ　長尾幸子　竹口富士雄　河合佐紀子　前畑正子　野村澄子　江口しげ子　弓削静子　早川照子　山本洋子　塚本照子　金児晶子　寺山澄子　小山皓司
紘上　ツレ　鈴木稔　シテ　岡本篤彦　飾長　村上茂久　ワキ　真野
羅生門　立衆　成瀬敏明　立衆　八木富子　保昌　熊沢滋夫　ワキ　今井貞輝　頼光　森俊一郎　瀬辺てる子　今井和可子　加藤百合子　田中洋子　竹内孝成　久野幸三　柴田賢治　宇於崎千尋
仕舞　難波　中村武史　殺生石　竹内繁
舞囃子　高砂　五段　大島田鶴江　羽衣　バンシキ　小坂絢子　高野物狂　森峯子
仕舞　黒塚　野村澄子　小督　江口しげ子　小歌　前畑正子
能　通小町　竹内　中村泰美　淳一　高安勝久　後藤嘉津幸　筧鐵一　鹿取希世　後見　近藤乾之助　衣斐正宜　内藤飛能　地謡　中村武史　寺部良樹　酒井文夫　北原寿久　佐野登　寺井良雄　竹内良伯　柴山富子　毛受暁美　東松ソノエ　大鹿暢子　佐藤洋子　山田あき子　内田芳子　竹内澄子　土川喜枝
素謡　安宅　立衆　吉田範子　立衆　川口寛子　シテ　川出琴子　ワキ　岸和子　子方　岩田基子
仕舞　葵上　河合佐紀　芭蕉　キリ　寺田澄子　三山　久野幸三　歌占　キリ　宇於崎千尋　鵜ノ段　山本洋子
舞囃子　高野物狂　竹内孝成　融　中島暉夫
能　富士太鼓　佐野　鈴木マチコ　幹　杉江元　河村総一郎　福井四郎兵衛　藤田六郎兵衛　間　井上靖浩　後見　衣斐正宜　佐野登　和久荘太郎　地謡　中村計一郎　徳勢常盤　平田正文　東川光夫　正昭　近藤乾之助　水上輝和　優
附祝言

（終演十六時三十分頃）

**二日目**（三月四日〔日〕午前十時　始）

仕舞　大江山　衣斐　愛　山姥　キリ　内藤飛能
素謡　鳥追　子方　中村計一郎　シテ　常盤昭雄　ワキ　酒井文夫　ワキツレ　徳勢正昭　寺部良樹　真野久　岡本篤彦　鈴木稔　宇於崎千尋　前田育宏　中島暉夫　沢村雅利　竹内良伯　星野猛　竹内達祐
車僧　シテ　松村晋也　ワキ　竹内良伯
仕舞　三山　吉房瞳　春日龍神　天野元成
素謡　唐船　唐子　シテ　星野育宏　シテ　前田猛　日子　平田正文　ワキ　沢村雅利　中島暉夫　竹内淳一　竹内良伯　門脇達祐
舞囃子　鶴亀　関上喜代枝　三輪　松村七雅子　花月　山田あき子
素謡　鸚鵡小町　シテ　藤陵厳達　ワキ　吉田忠良　竹内淳一　竹内茂　竹内孝成　竹内賢治　竹内良伯　村上久　柴田寺井　和久荘太郎　平田正文　東川光夫　久野幸三
仕舞　高砂　石村善悟　葵上　中村幸子
素謡　小督　ツレ　千田美和子　シテ　浅野浩子　ツレ　原みつ子　シテ　中村しぶ　ワキ　関上喜代枝　吉房瞳　中村泰　松村七雅子　径子　鈴木マチコ　小坂絢子　大島田鶴江　山田あき子
舞囃子　放生川　小林福子　天鼓　梶川陽子
素謡　橋弁慶　子方　松本ハルミ　シテ　石村善彰　ツレ　内山健三　増山良栄　竹内銑治　松原彰雄　渡辺興作　関山径子　渡来弘南　森林幸子　中村計一郎　徳勢正昭　常盤昭雄　寺部良樹　酒井文夫　北原寿久　中島暉夫　平田正文　星野猛　中村武史　原小田展生　塚原佐智子　池田宗次　衣斐善愛　石村善悟　田住喜久雄
舞囃子　巻絹　門脇達祐　江口　土川喜枝
素謡　咸陽宮　ツレ　関山径子　シテ　竹内銑治　ケイシン　増山良栄　大臣　松原彰雄　渡辺興作　中村計一郎　徳勢正昭　常盤昭雄　寺部良樹　酒井文夫　北原寿久　中島暉夫　平田正文　星野猛　中村武史
能　船弁慶　坂口　山本あけみ　侑　飯冨雅介　橋本宰　井上靖浩　河村眞之介　後藤孝一郎　加藤洋輝　藤田六郎兵衛　間　後見　近藤乾之助　衣斐正宜　和久荘太郎　地謡　岡本篤彦　鈴木稔　真野久　村上茂久　柴田賢治　水上輝和　寺井良雄　東川光夫　久野幸三
附祝言

（終演十七時頃）

［入場無料］

主催　恵美寿会　衣斐正宜

〒466－0051　名古屋市昭和区御器所三－二三－十九　御器所パークマンション八〇二
TEL　〇五二－八八二－五六〇〇
FAX

## 名古屋城本丸御殿復元PR事業
### 梅若六郎の21世紀現代能「安倍晴明」
### 3月21日 名古屋能楽堂

名古屋市は、2010年に開府400年を迎え、1610年の名古屋城築城開始を記念して名古屋城本丸御殿復元プロジェクトがすすめられている。

名古屋城本丸御殿PRイベント実行委員会（名古屋市、名古屋城振興協会）では、名古屋城本丸御殿復元PR事業として、梅若六郎師による21世紀現代能「安倍晴明」をきたる三月二十一日（水・祝）名古屋能楽堂で上演する。

この現代能「安倍晴明」は、観世流シテ方・梅若六郎師が舞台生活五十周年を記念して創作、一昨年東京・赤坂のサントリーホールでコンサート能として初演された。名古屋では初の上演である。

開演・午後六時。全席自由・五千円。

**能「安倍晴明」**

シテ梅若六郎、ワキ殿田謙吉、狂言山本則重、山本則秀

笛・藤田六郎兵衛、小鼓観世新九郎、大鼓河村眞之介、太鼓助川治

出演梅若晋矢、赤瀬雅則、山崎正道、味方玄ほか。

チケットは、チケットぴあ、ファミリーマート、サークルKなど。

名古屋城本丸御殿PRイベント実行委員会（電話052・972・2426）

## 一色能
### 3月11日 一色神社奉納能

伊勢市無形民俗文化財に指定されている「一色能」は、三月十一日（日）に、第十二回みえ県民文化祭協賛事業「一色神社例祭奉納能」を開催する。

午前十一時開演、ところ一色町公民館仮設能舞台。共催一色町能楽保存会、一色町自治会。

本年の一色能は、国の選択無形民俗の文化財に指定されている翁をはじめ、九十三年ぶりに大曲、能「隅田川」と「猩々」を、狂言は「那須語」と「口真似」ほか舞囃子など三十二番が上演される。

さらに今回は、子供たちが多勢仕舞に出演、保育園児も三十数名が謡の稽古をしているので特別参加、連吟「老松」を謡う。事務局＝伊勢市一色町1677、電話0596・22・1720

翁、隅田川、猩々の出演は次のとおり。

翁　石原　進　面箱　喜多　敬　神楽　吉川　寛治　石原　隆明　三番叟　喜多　芳夫　吉川　広美　竹市　学

能　隅田川　子方　吉川　享良　シテ　菊川　淑子　ワキ　石原　慎一　ワキツレ　吉川　貞夫　河村眞之介　後藤嘉津幸　竹市　学

語　那須語　藤波　徹

狂言　口真似　喜多　芳夫　喜多　敬　藤波　徹

能　猩々　シテ　石原　慎一　ワキ　久谷　憲之　石原　隆明　村瀬　恒史　大形いく子　菊川　満子

ほか　舞囃子、仕舞、連吟など。

## 名古屋能楽堂定例公演
### 三月九日（金）午後六時半開演
### 名古屋能楽堂

狂言　花折　新発意　野村又三郎　住持　井上菊次郎　立頭　松田高義　立衆　奥津健太郎　立衆　野口隆行　立衆　真下智行　立衆　野村小三郎

（観世流）能　海士　懐中之舞　子方　分林道隆　片山清司　高安勝久　杉江元　相元正樹　野村小三郎　河村総一郎　福井四郎兵衛　加藤洋樹　藤田六郎兵衛

間　後見　久田勘鬼　泉喜夫　地謡　本田勲　須部甫　武田清一　武田邦弘　梅田邦久　大志正邦　嘉宏　古橋

（午後八時三十分頃終了予定）

主催　名古屋市文化振興事業団（名古屋能楽堂）　能楽協会名古屋支部

［入場料］
前売三500円（当日400円）
学生前売200円（当日250円）
前売券取扱＝名古屋能楽堂（052・231・0088）
市内各プレイガイド、チケットぴあ
ナディアパーク8階プレイガイド

## 戦後名古屋能楽史 ㊹
### 〔第十八章〕
### 昭和三十九年（一九六四）

竹尾　邦太郎

―承前―

三月十四日、昭和三十八年度・第十四回芸術選奨文部大臣賞に葛野流大鼓方・吉見嘉樹（71）、東京国立文化財研究所の横道萬里雄（48）が受賞。吉見嘉樹（一八九三―一九六九）の初来名は大正二年九月十四日、名古屋能楽会第四期初回の能二番「実盛」と「鉢木」、当地最後の舞台は昭和四十年三月二十八日の第十回記念の中日五流能、第一部で能「千手・郢曲之舞」観世元正・元昭、第二部で「杜若・沢辺之舞」近藤乾三、おおよそ半世紀の歳月の間、大正期は二・三度、昭和期も大戦を挟み十二・三度しか来名はないが、晩年は専ら中日五流能への出演で当時の宗家や巧者相手の舞台、元正・英雄・巌・六郎・万三郎・銕之丞・喜之・秀男など多士済々、馴染みは深い。

三月十五日、第四十六回名匠鑑賞能は春恒例の宝生大会。能三番「田村」野口禄久（前）、辰巳孝（後）、「羽衣・盤渉」宝生九郎、「望月」宝生英雄、狂言「末広」野村又三郎、仕舞三番「竹生島」馬繰富四夫、「網之段」倉本雅、「黒塚」衣斐正宜、大鼓に金沢から飯島佐六が来演。

三月二十日、武田太加志門、正楽会・加藤丈太郎夫人一周忌追善の社中会、番外に仕舞三番「阿漕」中川清「隅田川」柴田初太郎「鵜飼」古橋正士。

三月二十二日、所謂プロの能楽師が主宰して弟子をとる社中会と異なり、現在各所で行われているカルチャー・センター教室の先駆であろう名古屋謡曲仕舞教室の第一期生終了謡曲仕舞の会。素謡25・連吟10・仕舞86番の盛会で、後にプロになった人材も輩出、主催した梅田邦久の仕舞「藤戸」がある。

三月二十七日、善竹弥五郎（71）が狂言方としては初の重要無形文化財各個指定保持者（いわゆる人間国宝）に指定される。

三月二十九日、大槻門の泉嘉夫が主宰する名古屋壷泉会十周年記念大会、主催者の舞囃子「歌占」、狂言「太刀奪」野村又三郎、仕舞「祝言・江野島」大槻秀夫がある。同日、愛知文化講堂特設舞台では第九回・中日五流能。

二部制で午前十時開演の第一部は能「鉢木・黒頭・替装束」宝生九郎・松本謙三、新作狂言「へんじゃく（扁鵲）」茂山七五三・千之丞、能「井筒・物着」観世喜之、仕舞三番「田村クセ」山田仁三郎「角田川」金春信高「野守」観世

（③面へつづく）

## 名雅会35周年記念会
### 三月十一日（日）午前九時半始
### 名古屋能楽堂

素謡　神歌　田口功　千才水谷克巳

素謡　花筐　奈良坂ひろ子　畑野典子　楠木幅　喬敏明

連吟　源氏供養　森澤村千代子　深尾祐子　大島照視　猪野間たづゑ　酒井たま子　新田茂恵　古家利男　末永忠　成瀬清　伊藤金夫

仕舞　嵐山　正キリ　松崎勝　水谷克巳　長尾明夫　田口功

経　網之段　猩々　生田咲子　井口賀恵　安藤勝義

素謡　砧

連吟　大原御幸　柏瀬尊彦　両國喜美子　大石原彦　山崎哲生　飯沼定男　梶道信　駒月正覚

仕舞　難波　櫻川　野守　纐纈道彦　大森修太郎　松尾裕

素謡　卒都婆小町　内藤ヤス　纐纈道彦　鶴森昭雄

連吟　富士太鼓　吉田秀吉　二村誠治　奥田藤夫　小林秀男　黒木利夫　奥田昭吾

舞囃子　敦盛　内田清志　河村総一郎　柳原冨司忠　鹿取希世

羽衣　和合之舞　生田咲子　河村総一郎　柳原冨司忠　鬼頭義命　鹿取希世

素謡　恋重荷　井口賀恵　高木守　福田朋悟

仕舞　吉野天人　合浦　のむらまいこ　みやがわたくや

連吟　駒之段　清水幸平　北原康央　池田敢　森田松右ェ門

鶴亀　放下僧　小歌　奈良坂ひろ子　廣島啓子

仕舞　笹之段　松虫キリ　加藤貴美子　吉田信子

素謡　鸚鵡小町　阿部毅　藤井昭道

舞囃子　田村　今井肇　河村総一郎　柳原冨司忠　鹿取希世

葛城　大和舞　飯沼加遠利　河村総一郎　柳原冨司忠　鬼頭義命　鹿取希世

素謡　木賊　子方　宮川卓也　ツレ　松崎勝　横井啓三　鶴森昭雄

仕舞　天鼓　島倉たか　當麻　伊藤キクエ　隅田川　舟口青江　葵上　山崎佐東子

舞囃子　遊行柳　幅敏明　河村総一郎　柳原冨司忠　鬼頭義命　鹿取希世

須磨源氏　五段　神谷節子　河村総一郎　柳原冨司忠　鬼頭義命　鹿取希世

素謡　木曽　ツレ　内田清志　池田長尾　義仲　今井明夫　肇　加藤哲也

番外仕舞　白楽天　中川雅章

（終了予定六時頃）

附祝言
（時間の都合により素謡の一部を省略）

主催　名雅会　中川雅章

［ご来場歓迎］

## 名古屋宝生会定式能
### 三月十八日（日）午後一時始
### 名古屋能楽堂

番組

舞囃子　高砂　宝生和英　河村総一郎　福井四郎兵衛　加藤洋輝　鹿取希世

地謡　和久荘太郎　衣斐正宜　辰巳満次郎　内藤飛能

能　右近　倉本雅　鬼頭京子　衣斐愛　飯冨橋本雅介　椙元宰　正樹　河村総一郎　福井四郎兵衛　加藤洋輝　鹿取希世

間　佐藤友彦　後見　竹内澄子　玉井博祐　内藤飛能　地謡　村上茂　石森智幸　大森尚人　辰巳満次郎　稲川壽一　石黒孝　衣斐正宜

狂言　貰聟　男　井上菊次郎　妻　佐藤靖浩　友彦　後見　今枝郁雄　衣斐愛　竹内澄子　玉井博祐　鬼頭京子

仕舞　花月クセ　佐藤耕司　采女キリ　衣斐正宜

能　熊坂　和久荘太郎　高安勝久　河村眞之介　後藤嘉津幸　鬼頭義命　竹市学

間　鹿島俊裕　後見　宝生和英　内藤飛能　地謡　平田正文　柴田勲　玉井道夫　久野幸三　佐藤耕司　馬繰富四夫　辰巳満次郎　辰巳大二郎

（終了予定五時頃）

［有料］

入場券　年4回5枚綴り19000円（内同伴券1枚）
当日券5000円
学生券2000円

問い合わせ＝出演楽師又は名古屋宝生会　佐藤耕司方
住所＝名古屋市天白区島田2―301
島田橋住宅2―1310
電話　052・803・7372
FAX

主催　名古屋宝生会

（②面よりつづき）

寿夫、能「黒塚・替装束」後藤得三。午後四時開演の第二部は能「景清・松門之応答・小返」観世銕之丞、一調「歌占」田鍋惣太郎、（小鼓）福岡周斎（謡）、仕舞二番「善知鳥」辰巳孝「殺生石」柴田初太郎、能「百萬・舞入」金剛巌、狂言「鈍太郎」茂山千五郎、半能「石橋・連獅子」本田秀男・桜間龍馬。

当催会の企画立案に当たる西田三好（一九〇一―一九八五）は小書の発掘に意を用い、小書能を標榜するが、今回も全て小書付、就中「鉢木」の小書「替装束」は脇方下懸宝生流のもので、今回が初めての上演という。また第五回公演以来、第一部では新作狂言を積極的に取入れているのも昭和三十年代の狂言ブームを反映していようか。今公演の「へんじゃく」については作者と演者の双方に一文があり、次にそれを紹介する。

**辻久一さんの新作狂言**

辻久一さんにも狂言を二本書いてもらいました。大映のプロデューサーで、依田義賢さんのシナリオ、溝口健二さんの演出で、「羅生門」や「雨月物語」など、いろいろ立派な映画を制作された方ですが、もともとはお芝居が好きで、若い頃から演劇青年で、演劇雑誌の編集などもずっとやっておられたのだときいております。山本修二さんのお弟子さん格で、武智さんや菅さんともお友達でしたので、おねがいしたのです。最初の「狐川」は、昭和三十七年九月八日に京都の観世会館で「狂言新作発表会」というタイトルの催しで初演しました（名古屋での上演は昨年度の第八回・中日五流能）。―中略―もう一本は「へんじゃく」でした。耆婆扁鵲というのは、中国古代の名医の名前だそうです。登場人物は大名とスッパの二人で、民主主義的な名君をよそおっていて実は独裁的な大名の奇病を、山伏に化けているスッパがインチキ療法で治してやるという話です。こんどの作品は内容的にはいろいろ時事諷刺的なセリフがありましたが、すっかり従来の狂言仕立てでした。これは初演が京都ではなく、昭和三十九年三月二十九日の中日五流能でした。大名がわたくし、スッパが千之丞でした。この時は、片山（博通）さんが亡くなっておられたので、辻さんと千之丞の共同演出でした。

（括弧内筆者、昭和五十八年三月一日・講談社刊・茂山千五郎著『千五郎狂言咄』）

**新作狂言「へんじゃく」　辻久一**

無事泰平なのやら不安殺伐なのやら、景気がいいのやら、生活が苦しいのやら、全くわけの分からぬ時世である。

常識のある人間には、目に耳にふれるもの、癇癪のタネでないものはない。新聞の社会面は、石が流れて木の葉が沈むような事件ばかりである。政治家から中学生にいたるまで、やたらにイライラし、空しくハッスルしているのが、共通点だ。

加えて、一億総批評家時代とでもいうが、事あるごとに、専門の大家先生の発言と、団地のマダムのテレビ会議とがいりまじって、カンカンガクガクの論議のにぎやかなこと。おおむね、石が流れ、木の葉が沈むことと、眉をひそめつつ、あこがれているらしい。言論の自由にして隆盛なること、空前と言うべきだろうが、そのカラマワリも又空前である。

私は、格別経世の志も厚くなく、又、旧弊固陋であるとも思わないが、こういう状態には、心のどこかが痛むのを感じるのである。余計なおせっかいかも知れぬが、おせっかいの必要なこと、今日に如くものはないと信じる。正論横行の世にこそ、斜論が生きて来る。

狂言の特色の一つは、アテコスリにある。アテコスリどころでどうとかなるような世相ではない。しょせん、トウロウの斧にすぎまいが、何か一言言っておかぬと気がすまぬ、夢にも、高級痛烈な諷刺だなどとは、思わない。下司のアテコスリにすぎまいが、幸いに、一かけらの存在理由を、首肯していただければ、幸いである。

「へんじゃく」は「扁鵲」と書き、「耆婆」とならび、古代中国の名医の名であり、名医の代名詞に使用されている。（劇作家）

月が替り四月五日、名古屋山本観衛会は山本博之古希祝賀大会能、番外に仕舞六番「難波」柴田初太郎「小袖曽我」八木康夫・春日照喜「枕慈童」山本真義「春栄」山本順之「梅」山本博之「岩船」山本勝一。

四月九日、観世流で重きをなした職分嶋沢啓次が死去する。享年六十六歳。当地来演は十指を数えないが初来演は昭和十三年（一九三八）四月十日、観世元正養嗣子披露能での「石橋・大獅子」のツレ（シテは大槻十三、他にツレ橋岡久太郎）で当時二十六歳。戦後は昭和二十六年十二月十六日の鳳鳴会が最初で以後四度の来演があるが何れも名古屋観世会への出勤で、当地最後の舞台は死の一年半程前の昭和三十七年九月十六日の観世会で素謡二番「頼政」のシテと「善知鳥」のワキ（シテ林喜右衛門）、及び仕舞「弱法師」を勤める。『観世』誌五月号は廿五世宗家観世元正の次の追悼文を掲載する。

当流職分、嶋沢啓次儀、四月九日午後八時十分、観世会夜能に、仕舞笹之段を舞った直後、楽屋に於て、心臓麻痺のため急逝いたしました。享年六十六歳であります。

故人は、幼時より先代左近に入門し、爾来六十年の星霜を斯の道一途に精励して、重厚且つ格調高き芸風を培い、今日の位置を築いた当流の重鎮であります。先頃、糖尿病のため入院加療し、漸く快癒、なお色褪せぬ舞台を勤め、一門愁眉を開いたところでございました。然るにこの度この悲報に接しまして、誠に哀惜の情に堪えません。就いては私葬儀委員長となり、四月十三日観世会館で観世会葬を以て葬儀を執り行いました。

茲に謹んで哀悼の意を表しますと共に、流友諸氏に御報告申し上げます。

四月十二日、名古屋巽会。社中会で番外に仕舞六番「頼政」戸田秀雄、「砧」吉田俊彦、「融」鈴木義久、「花月」内藤泰二、「葛城」倉本雅、「鵜」辰巳孝。

四月十九日、観世会定式能第二回。素謡「清経」飯田賢、仕舞五番「志賀」石谷初蔵、「羽衣」竹内六郎、「蝉丸」殿島修二、「雲雀山」杉村竹翠、「鞍馬天狗」久田秀雄、舞囃子「小塩」高橋静夫、能「頼政」柴田初太郎、狂言「蝸牛」佐藤卯三郎、能「桜川」大槻秀夫、能「殺生石」橋岡久共、大鼓に谷口喜代三が来演。

四月二十九日、幸友会・福井啓次郎職分十周年記念能は二部制の大能。第一部は素囃子「神舞」鬼頭季信・後藤孝一郎・吉田定男・助川龍夫、金剛流仕舞五番「老松」伊藤鉄之進、「田村クセ」片野東四郎、「草紙洗」山田仁三郎、「葵上」大塚一二、「小鍛冶キリ」片岡道子、金春流独吟「鮎之段」前田昌廣、宝生流仕舞二番「小歌」倉本雅、「岩船」内藤泰二、能「弱法師」宝生英雄、狂言「樋の酒」和泉保之、宝生流仕舞二番「八島」渡辺三郎、「笠之段」野口禄久、居囃子「藤栄」宝生英雄、一調「歌占」幸円次郎（小鼓）大坪十喜雄（謡）、「道成寺」辰巳孝（49）、ワキ高安滋郎（47）、アヒ井上礼之助（49）、井上祐一（23）・寺井政数（59）、福井啓次郎（34）、亀井俊雄（68）、金春惣右衛門（40）、地頭大坪十喜雄（56）、鐘後見宝生英雄（44）、後見柏原仁兵衛。

第二部は舞囃子「吉野天人」梅若盛義、仕舞五番「玄象」殿島修二、「芦刈」加藤丈太郎、「熊野」塚本秀雄、「網之段」柴田収武、「三笑」河村鉦二・久田秀雄・佐藤太俊、一調「小塩」鬼頭八郎（太鼓）、柴田初太郎（謡）、能「卒都婆小町・一度之次第」梅若六郎、連吟「雲雀山」有賀滋子・芥川秀子・加藤良久・飯田新子、一調一声「小督」田鍋惣太郎（小鼓）梅若猶義（謡）、素囃子「大和舞」筧三男・福井良久・河村総一郎・鬼頭喜太郎、狂言「若菜」佐藤秀雄、能「土蜘蛛・入違之伝」梅若猶義。当地以外から既出を除き、シテ方梅若泰之・梅若景英・山崎英太郎、ワキ方豊嶋十郎、囃子方幸義太郎、亀井忠雄の来演。

――以下次号――

**[訂正]** 前号（1月号）6面1段目、狂言の曲名「水掛鼻」とあるのは「水掛聟」の誤り、同じく「三井寺」の2段5行目「悪夢」とあるのは「霊夢」の誤りでした。お詫びして訂正します。

## ◆晩秋から冬の舞台◆

# 「名古屋観世会」「豊田市能楽堂特別公演」と「豊田市能楽堂・狂言づくし の会」「名古屋能楽堂定例公演」

竹尾邦太郎

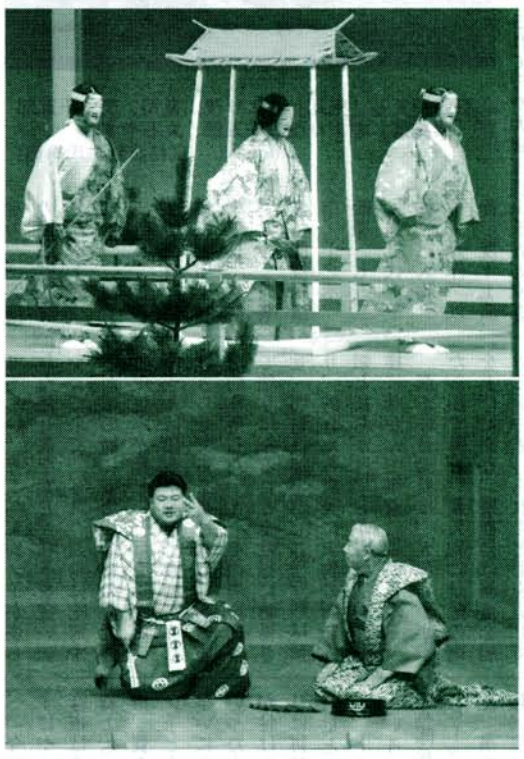
**「江口」** 梅田邦久。江口の遊里で宿を乞う西行法師が江口ノ君に断わられ、〽世の中を厭ふまでこそ難からめ仮の宿りを惜しむ君かな、と詠んだ歌を、その旧跡で口ずさむワキ旅僧・勝久、それを聞き咎め、詰問するかに呼掛で出る前シテ里女、西行の誤解を正す江口ノ君の返歌〽世を厭ふ人とし聞けば仮の宿に心留むなと思う許りそ、にも言及しなければ片手落ちと許り、問答・掛合の強い調子。江口ノ君の名誉回復に努め、地（貴弘・勘鷗ら）の〽心なる留め給ひそ、でワキを見込み詰メルところには念を押す気合。これ程に拘泥するシテを訝り、黄昏の川霧に〽影ろふ人は如何ならん、と誰何するワキに、〽江口の流れの君とや、と極く静かにワキへアシラフと、素姓知れてしまったかの心に、〽恥かしや、と顔背むける様に面を伏せ直ルところ、俄然、里女と旅僧が江口ノ君と西行にオーバーラップする趣、面白い。アヒ所ノ者は友彦、ワキに問われ、性空上人に纏わる伝承に江口ノ君は普賢菩薩の再誕の由、と語って退くと後場。

江口ノ君、川逍遙の屋形舟は一ノ松（写真）。〽謡へや謡へ、とツレ遊女を促し、舟を下りるとツレは切戸へ退き、シテは正中床几に掛かる。地との掛合は、クリ・サシに輪廻転生の理を言い、前世の報いは罪深き女の、別けても遊女と生まれたこと〽思ひやるこそ悲しけれ、と面曇ラセルが、シヨリより却って嘆きの深さを思わせる。床几を立つと、世の無常を言うクセの舞から序ノ舞、優美端麗に舞い上げる。小書「彩色」の記載はないが、〽波の立居も何故ぞ、とイロエで舞台を一巡、キリは、思えば此の世は〽仮の宿、と拍子一ツ踏み、地が受け〽思へば仮の宿に、と更に足拍子二ツには強意、〽心留むな、ワキを指ス気持ちに説得力をみる。〽諫めし我なり、と右へ廻るや〽これ迄なりや、と地のうちに一ノ松へ、〽即ち普賢菩薩と現れ、と餘情（ヨセイ）から詰メルと、〽舟は、と二・三足退り、〽白象となりつつ、と直り、〽光と共に、と二ノ松へ、ツマミ扇に〽白雲に、と乗込拍子、〽西の空に、と扇高く掲げて幕へ、ワキは常座へ出て膝をつき見送ると立ち、留。上品で美しい舞台だった。（1時間52分）

**「隠狸」** シテ太郎冠者・靖浩が狸を釣ると外から聞き込んだアド主・菊次郎、己れの沽券にも関わること、と真偽を質すも、否と白を切られゝば向きにならざるを得ない。客に狸汁を馳走すると約束した手前、市で求めてこいと命じる。内緒の所得を盗られては敵わんとシテ、先づ売り捌いてから、と「狸売らう」と呼ばわれば、先刻怪しいと睨んでいたアドは、何処であれ酔わせて本音を吐かそうと酒樽持参でシテを迎えに市へ。売り声を聞き咎めれば「売らうならば求めう」と呼ばわったまで、と亦も惚けるシテだが此の度はアドも腰を据え、所構わず路傍の酒宴。「さて〳〵これは迷惑なこと」とは言い条、固より左党のシテ、酌をされるまゝに盃を重ね、果ては肴の小舞謡、〽頭に二つふっぷっと、と舞う「兎」（写真）から更にはツレと相舞に〽唯今奏づる舞歌の曲、と『道明寺』のキリ、ついつい腰の後ろに括り付けた狸に注意も疎か。〽神楽の夢は醒めにけり、で漸く腰の辺りに気付くシテ。内緒の所得を守りたいばかりのお人好しのシテに、真偽を確めずば置かないアドの執念ともみえるが、アドにしてみれば悪戯を取っちめてやろう位の気持ではで。（24分）

**「安達原・黒頭・急進ノ出」** 武田宗和。行き暮れ、野中の一軒家に宿を乞うワキ山伏祐慶・雅介、ワキツレ供山伏・宰にアヒ能力・俊裕、荒屋とて一度は断るシテ老女も〽さすが思へば傷はしさに、で立つと、初同（祥人・邦弘ら）〽さらば留まり給へとて、と萩小屋を出ると、先づワキとワキツレを認めてから後ろを向き扉を丁寧に閉める。襟浅黄・紺無地熨斗目着付・無紅段唐織、面が霊女で立居に

（④面へつづく）



名古屋観世会定式能
㊤能「江口」左より清沢一政、梅田邦久、祖父江修一
㊦「隠狸」左より井上靖浩、井上菊次郎
（杉浦賢次氏撮影）

# 大槻能楽堂自主公演能

## 3、4月春公演

大阪

大槻能楽堂自主公演能、「能の魅力を探るシリーズ」は、3月、4月春公演を次の日程で開催する。

**●3月24日（土）午後2時始**

お話「崇徳院への鎮魂」大森亮尚氏

能「松山天狗」シテ上田拓司、ツレ浦田保親、長山耕三、斉藤信輔、ワキ福王茂十郎、アイ茂山良暢

**●4月28日（土）午後2時始**

お話「頼政の無念」中津文彦氏

能「頼政」シテ斉藤信隆、ワキ植田隆之亮、アイ善竹忠一郎

**◉「ナイトシアター」**

**4月13日（金）午後7時開演**

能「船弁慶」シテ赤松禎英、子方・赤松裕一、ワキ福王茂十郎

狂言「惣八」シテ茂山忠三郎、アド山口耕道、茂山良暢。

# 能面の美展

## 28日まで名古屋能楽堂

名古屋能楽堂では、特別企画展として、地元で活躍する能面作家の作品「能面の美展」を二月始めから二月二十八日まで開催している。出展は岩田刻雲、黒蕨孝子、原田ちよ子、前川瑞雲、保田紹雲氏ら能面作家五人による作品32点。入場無料　会場は能楽堂展示室。午前9時～午後5時（最終日は午後3時まで）

（③面よりつづき）

品を窺わせるだけ却って無気味。枠裃輪の前に座すシテ、〽月もさし入る、と軒端に射す月光を低く右へ眺め、糸を繰る間に去来する思いは身の不遇を託つ恨み節、深沈と夜の更ける気配は寂寥も一入。これを伏線にクセ、〽遂には老となるものを、と感傷に面を左に傾げ、〽恨みても甲斐なかりけれ、とシヲレば孤愁さらに深まる思い。気を取り直し、地との掛合にノリ良く糸尽しの糸之段は糸繰り唄の労働歌。詞章の終り、糸の長さに通じる〽長き命のつれなさを、思い、糸を繰る手を止め、じっと糸を凝視すると、急に枠裃輪の握りの手を狂った様に速め、激情は双シヲリも切ない。この糸之段、遠くは製紙工場の女工哀史、近くは当世の長命者に対するすげなさ、を思わせる。中入、「や」と陰気に沈んだ声音でワキへ振り向くひやりとした凄味は、一ノ松でふと足を留めるところにも。そして、どうしてもシテの闇を覗きたいアヒの天邪鬼ぶりが一つとき場を和ませる。

後場、シテ鬼女は早笛（学・嘉津幸・眞之介・洋輝）で幕を出、三ノ松で面切ルと一旦幕へ退って加速をつけ様に走り出る（写真）。眼目の祈はワキとの激しい立合い。初め追い立てられるが、負柴捨て身軽になると、逆に打杖振り翳し凄まじい勢いで圧倒するが、遂に祈りに屈し、〽漂ひ廻る安達原、とスミで飛返り、ワキの前では〽浅ましや、と左手で面を隠し、地のうちに三ノ松、拍子一ツ踏み幕へ入り、ワキ留。裏切られた憤りには一抹の嘆きも。（1時間7分・11月12日・観世会）

名古屋観世会「安達原・黒頭・急進ノ出」武田宗和　（杉浦賢次氏撮影）

**「空腕」** 憶病な癖に腕自慢をする太郎冠者シテ東次郎、アド主・則直から肝試しよろしく淀へ使いに遣らされる。夜道は物騒と太刀を借りはしたが、人里遠く漆黒の闇の怖さは影に怯え、相手も居ぬに太刀を差し出し命乞いの始末。心許ないと跡を付けた主、太郎冠者の案の定のていたらくに「がっき奴」と扇で打ち据え、太刀を取り戻すと引き返す。一方、昏倒から醒めた太郎冠者、「おおお、月が出る」と、今は斬られて冥途で月を眺める心。辺りも窺い、身体に異常は無さそうだが「立ちざま（身）二つになってはなるまい」と未だ慎重な構え、「さらば、そろり〳〵と立ってみよう」と立ち上がれば無事。生きている、と驚喜に太刀のことなど勝手に解釈して逃げ帰る。

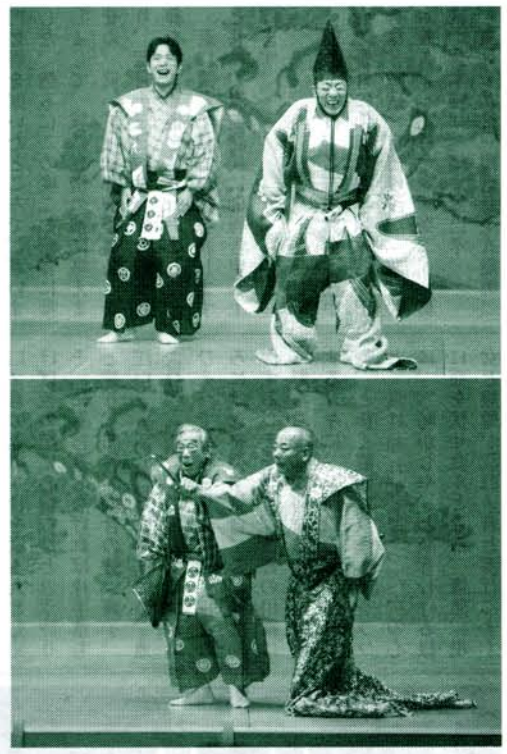
帰れば知らぬが佛で太郎冠者、ここぞとばかりに仕方を交えて得々と語る武勇譚。群がる敵に割って入ると、当るを幸い散々に斬り伏せ、矢を射かけられ、ば身を縮め、或いは飛び上って（写真）避けるが、遂に太刀も折れて戻った、の空言。太刀の事・遣いを果せなかった事、「先づこれでざっと済んだ」安堵も束の間、主は取り出した太刀を「篤と見よ」と太郎冠者の目の前に突き付ける。万事休すと思いきや、一呼吸置いて体勢を立て直すとなお繕おうとする強かな太郎冠者。骨っぽい主・則直に対抗して所要四十一分の長尺の独壇場を東次郎、柔軟な型に軽みをみせ大活躍。狂言のあと野村四郎「融・酌之舞」（11月18日・豊田市能楽堂特別公演）

豊田市能楽堂特別公演「空腕」山本東次郎　（杉浦賢次氏撮影）

**「鬼瓦」** 訴訟叶って信仰する因幡堂のお薬師へ詣る大名シテ千五郎、国許にも此のお薬師を分祀したい、と伴う太郎冠者アド童司と御堂を入念に見てゆくうち鬼瓦を認め、その面相が誰やらに似ている、と泣き出す。それが誰あろう国許に残した妻。世に痘痕も笑窪とは言うが、この場合は途方もない主観と客観の落差の大きさ、「あの目のくり〳〵した所、また鼻の怒った所などは、やう似たではないか」と言い放つ千五郎、その審美眼（?）の根底は揺ぎのない愛なのだが、押し付けがましいのが可笑しい。同意を求められ、一寸困惑気味に追従するが小っ恥ずかしさから早く逃れたい童司、御対面は直ぐ、と宥めれば機嫌を直し、ならば「どっと笑うて戻らう」と笑ヒ留（写真）、童司が初々しい。（16分）

**「素袍落」** 主やすし、明日伊勢参宮をするにつき伯父・千之丞を誘うため太郎冠者シテ千作を使いに出す。多分、今日の明日という火急なことでは、の太郎冠者の危惧通り「え行かれまい」の伯父に、予ての約束ゆえ形式的にも参宮のことをそう伝えよ、との主の口上そのまゝを伝える太郎冠者の無邪気。「ハハアすれば、お付け届け（形式的・義理）までに、か」と微苦笑の伯父に、「なか〳〵」と真っ正直に是認する太郎冠者。この純な性格を愛する伯父が太郎冠者に示す暖かい応待に、大盞で五杯も飲み干してゆく間に心を許し解放してゆく太郎冠者の甘えぶり、千作・千之丞、互いの活殺自在な境地が見事。

キリ、鹿島立ちの餞別は宮巡りに着て伯父様の名代を勤める素袍、有難く頂戴して謡気分の帰路、戻りの遅いを案じた主と出会すと上機嫌の太郎冠者、〽あの山見さい此の山見さい、と主の手を取り舞に引き込む（写真）大胆。〽頂きやつれた、と頭頂に載せるや落しても気付かず、やがて狼狽して探し回ることに。斯界最長老の絶妙な舞台。（38分）



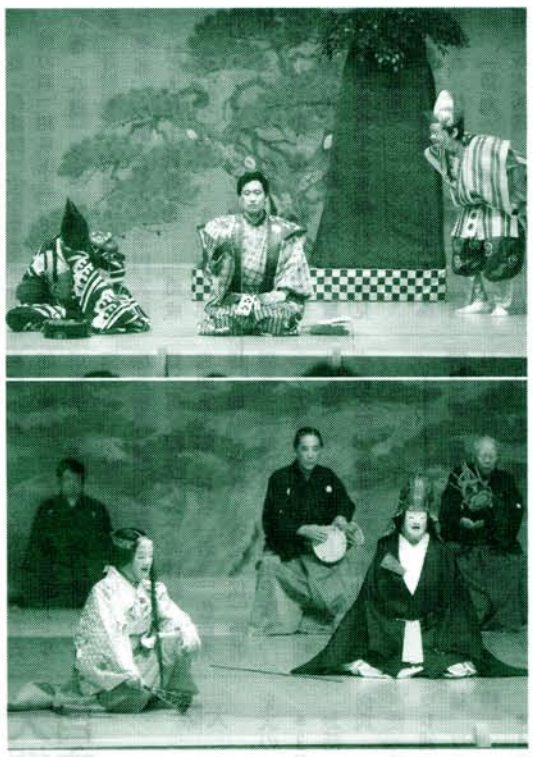
㊤狂言づくし「鬼瓦」左より茂山童司、茂山千五郎
㊦「素袍落」左より茂山千五郎、丸石やすし
（杉浦賢次氏撮影）

**「彦市ばなし」** 久しぶりに中京地区での上演。昭和二十年代後半から三十年代、当時、澎湃として起った狂言ブームの中での新作狂言の一。肥後の民話に取材した木下順二（一九一四―二〇〇六）の作で初演は昭和三十年十月十三日、京都・大江能楽堂。配役は彦市・千之丞、殿様・七五三（当代千作）、天狗ノ子・万作。以後、度々上演されて今や大蔵流茂山千五郎家専有曲の趣。今回は役順に正邦・千五郎・茂。

嘘つき名人の彦市、釣竿を遠眼鏡と偽り、予て狙う天狗ノ子の隠れ蓑をまんまと詐取するが、お父っちゃんに言いつける、と釣竿捨てて去った天狗ノ子の捨て科白が気掛り。親天狗の怖さ重々承知の彦市。釣糸垂れて思案するところへ殿様、お城の大掃除で見つかったという天狗の面を、これ幸いと着けて下情視察に出れば、仰天する彦市。が、殿様と分かれば持ち前の悪知恵、河童を釣ると嘘をついて殿様に気を持たせ、餌に鯨の肉が必要と殿様に難しい注文をつけ、その無理があっさり叶えば、釣りの間、殿様は口を利いても、眼を開けてもいけない、と釘をさす。言われて殿様は右袖をあおって尻に当て安座、「ハイ」と掛声をかけ左袖で面を隠す仕草が素直で可笑しい。そこへ天狗ノ子が盗られた隠れ蓑を案じ、様子を窺いにやって来て（写真）天狗に吃驚するが唯の面に安堵、彦市の手元の竹皮包みが怪しいと目を付ける。そうとは知らず彦市、殿様が痺れをきらせて声を掛ければ「あゝまた釣り落した」と、その場を繕って独りになることを殿様に納得させ、明日は確実、と鯨の肉は預り、釣れたら褒美に天狗の面を拝領と持ちかけ、しかも好人物の殿様にせがんで事前に貰い受ける。

彦市の目論見は、天狗ノ子が来たら面で嚇し、親天狗には鯨の肉を上げて謝り、殿様には河童を届ける途中逃げられたと面を返して謝れば手討にされず、隠れ蓑は自分の物に、という調子の良さ。

しかし、目論見は外れ、天狗ノ子に面は先刻承知とばかりに剥がされ、鯨の肉の竹皮包みは隠れ蓑と間違われて掠め取られ頓挫、お負けに肝腎の隠れ蓑は汚いと女房に燃されてしまう。が、こゝで真骨頂をみせるのが彦市、燃やして灰にはなっても神通力は残っていよう、と身体に塗りつければ果して。雨の時はまたその時、とこれまでの心労を癒やすために痛飲、酔臥してしまう。そこへやって来た天狗ノ子、斛はすれど姿の見えぬ彦市に気付き、罵声を浴びせると、彦市は狼狽して川に飛び込み、灰は流れて姿を現わす。「わあ、灰がみんな流れてしもた」と悲鳴を上げる彦市に、蓑が流れてしまったと勘違いした天狗ノ子は後を追い、へばった彦市は土手へ。今度は殿様、河童を待ち切れずにやって来ると、その顔を見て彦市はまた水の中、殿様が陣中見舞よろしく激励して去ると、彦市、蓑など無かったと戻った天狗ノ子と水中での追いつ追われつの争いになる。水府流とか観海流といった古式泳法を思わせる様な型が付けられていて実に面白い。キリは再び殿様の登場、天狗ノ子を河童と思い込み彦市に声援を送る。トメは笑ヒ留メに和解の留メというシャギリ留メの末尾、笛（六郎兵衛）が高い音で吹き切る「ヒーッ」を付けた珍しいものだった。当代千五郎と二人の息・正邦、茂の配役の妙もあり締った好舞台だったが、彦市がウマイ具合に天狗の面と鯨の肉を手に入れたところ、サービスもあろうが「ウミャー具合」で笑いをとることは無用。なお、本公演に先立つ一ヶ月前、十月三十日、奇しくも「彦市ばなし」の作者・木下順二が九十二歳で死去、立派な追悼公演になった。（55分・12月2日・豊田市能楽堂　狂言づくしの会）



㊤「彦市ばなし」左より茂山千五郎、正邦・茂
㊦名古屋能楽堂定例公演
「蝉丸・替之型」左より近藤幸江、泉嘉夫
（杉浦賢次氏撮影）

**「蝉丸・替之型」** 皇統とはいえ五体満足でなければ放逐の運命、従容として逢坂山に捨てられに行く盲目の皇子蝉丸・嘉夫に付き添うワキ清貫・雅介は勅諚とて如何ともし難く、慰めの言葉は帝の仕打ちを疑うばかりを、遂に蝉丸が「あら愚かの清貫が言ひ事やな」と窘める問答がしんみりさせれば、清貫から僧形に仕立てられる物着から掛合も、互いの心情がよく現われる。しかし、気丈に振舞っていた蝉丸も、いざワキとの別れとなると孤独、初同（邦久・邦弘ら）のキリ〽伏し転びてぞ、と笠を捨て、〽泣き給ふ、と杖もすてると返し句に安座双シヲリの愁嘆。ここで、左手が袖の中に入って寒さに凍えるように見えたのが気になる。

毛髪が逆立つ奇癖の物狂い皇女逆髪は幸江、面増・左二付髪・襟白赤・白地籠目地紋花ノ丸文縫箔着付・緋長袴の裳着胴姿、紅白装束の配色が品良く、可憐な感じもみえてカケリから道行へかけての慎ましやかな美しさ。逆さまの髪は〽手にも分けられず、と左手で付髪をしごき、少し左に身体を捻ってそれを見詰める仕草は、如何にも女流のシテらしい艶。〽花の都を立ち出でて、と道行、〽関の此方と思ひしに、と左手指シて二ノ松へ、〽名残惜しの都や、と勾欄に寄る風情は如何にも都恋しの心。琵琶の音を聞き咎めるところは、〽懐かしき心地して、と舞台へ入り、〽藁屋の雨の足音もせで、と佇むと、外に気配を察して蝉丸、逆髪との掛合のうちに藁屋を出ると姉弟束の間の涙の出会い。クセは上ゲ端あと〽音に類へて、と蝉丸は扇を取って琵琶を弾ずる型、それを聞く態に眺める逆髪はクセ切〽聞かぬ藁屋の起臥を、でシヲルと、蝉丸は琵琶（扇）を下げ、面を曇ラスが、迫る別れに一入の寂しみ。〽げに傷はしや、と立つ逆髪にキリは蝉丸との掛合の妙。〽別れ路止めよ、の蝉丸に橋懸へ往く逆髪は〽関の杉村過ぎ行けば、と二ノ松へ、蝉丸は〽佇みて、と立って遙かに逆髪と向き合うとキリ地、〽互にさらばよ、と蝉丸は杖ついて常座の方へ進み、逆髪は〽顧みおきて、とシヲリ幕へ、〽泣く〳〵、と蝉丸がシヲリ留メにした。共に大槻門の巧者、哀れ深い沁み〴〵とした舞台だった。（1時間36分・12月3日・名古屋能楽堂定例公演）

右の公演は昭和四十四年（一九六九）から昨年まで、能楽協会名古屋支部の主催で三十七回を数えた恒例の「歳末助け合い運動　協賛能」であったが、名古屋文化振興事業団が能楽堂の指定管理者になって名称が変り、文化振興事業団と共催となって名古屋能楽堂定例公演の一環となる。当日は他に能「百万」愛、狂言「棒縛」融、半能「石橋」正邦・太志、舞囃子「紅葉狩」眞知子、仕舞四番があった。

# 能楽の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種２丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－７９８４
ＦＡＸ（052）733－２８３７
振替口座　00800－6－36393

購読料　１年　１１００円
郵送の場合　１年　１８００円
一　部　　１００円

## ＮＨＫ放送予定（平成19年３月～４月）

◆ＮＨＫ－ＦＭラジオ能楽鑑賞（毎週日曜日７時15分～８時）

| | | |
|---|---|---|
| ３月25日 | 「養老」（再）（宝生流）・ | 三川　泉ほか |
| ４月１日 | 「安宅」①（観世流） | 梅若六郎ほか |
| ４月８日 | 「安宅」②（観世流） | 梅若六郎ほか |
| ４月15日 | 「夜討曽我」（宝生流） | 前田晴啓ほか |
| ４月22日 | 「西行桜」（金春流） | 高橋　汎ほか |
| ４月29日 | 「入間川」ほか（和泉流） | 野村万作ほか |

◆ＮＨＫ教育テレビ・能狂言番組
４月７日㈯　９時～　ハイビジョン放送
能「葛城」シテ・三川　泉、ワキ・宝生　閑、アイ・野村万作、笛・藤田大五郎、小鼓・幸清次郎、大鼓・亀井忠雄、太鼓・観世元伯

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

（能・狂言演能関係）
（TEL 052－231－0088）

［３月］
18日㈰　名古屋宝生会定式能
21日㈬　梅若六郎の21世紀現代能「安倍晴明」（有料）

［４月］
１日㈰　第２９回邦謡会能（有料）（番組①面）
８日㈰　名古屋観世会定例公演（有料）（番組①面）
13日㈮　名古屋能楽堂開館10周年記念能（有料）（番組①面）
14日㈯　名古屋能楽堂開館10周年記念能（有料）（番組②面）
15日㈰　春の幸謡会（無料）（番組②面）
22日㈰　久田観正会春の大会（無料）（番組②面）
29日㈰　中日能（有料）（番組②面）

## 名古屋能楽堂 開館10周年 記念能

### ４月13・14日２日間

名古屋能楽堂が開館して今年十周年を迎え、能楽協会名古屋支部、名古屋市文化振興事業団、名古屋市では、四月十三日（金）・十四日（土）の二日間、名古屋能楽堂で十周年記念能を開催する。

初日の四月十三日は、宝生流能「田村」（衣斐正宜）、喜多流能「班女」（長田驍）、狂言「酢薑」（佐藤友彦）、観世流能「鞍馬天狗」（久田勘鷗）、二日目の十四日は、観世流能「絵馬」（梅田邦久）、狂言「茶壷」（野村小三郎）、観世流能「隅田川」（近藤幸江）、金剛流能「葵上」（加藤かおる）の上演。

入場料は初日、二日目とも一般前売三千五百円、学生二千円（当日は五百円増）。

なお能楽協会名古屋支部では、今秋十二月に二日間にわたり、能楽愛好者による記念能楽大会を予定している。（番組①②面掲載）

## 大槻能楽堂自主公演能

大槻能楽堂自主公演能、能の魅力を探るシリーズの五月公演は次のとおり。

◎自主公演能　ナイトシアター
５月11日午後７時開演。
狂言「文相撲」　大名・茂山千五郎、太郎冠者・茂山童司、新参の者・茂山正邦
能「海士」（解脱之伝、二段返之應答）シテ大槻文蔵、子方・中田一葉、ワキ福王和幸

◎能の魅力を探るシリーズ
５月19日（土）午後２時開演。
能「通小町」（雨夜之伝）シテ泉泰孝、ツレ泉雅一郎、ワキ宝生閑
［入場料］（いずれか一日自由席）一般当日四三〇〇円、前売三八〇〇円、発売／大槻能楽堂（ＴＥＬ０６・６７６１・８０５５）

## 文部科学大臣賞 シテ方 塩津哲生氏

文化庁は、芸術の分野でこの一年間に優れた業績をあげた人に贈る二〇〇六年度芸術選奨の受賞者を発表、演劇部門で能シテ方喜多流・塩津哲生氏（六二）が文部科学大臣賞に選ばれた。授賞式は三月二十二日。

## 尾張の殿様物語

### 徳川美術館で特別展

徳川美術館では、四月十四日（土）から五月二十七日（日）まで、春季特別展「尾張徳川家初代義直襲封四〇〇年記念・尾張の殿様物語」を開催する。

名古屋の礎を築いた徳川義直が尾張の殿様になってから、今年で四百年、家康の九男として生まれ、要衝の支配を任された義直は御三家の筆頭大名となり、ときに迫る危機を乗り越え、連綿と「殿様」としての役割を果たし続けた。伝世の品と史料から殿様たちの人となりに迫る。

観覧料＝一般一二〇〇円、高大生七〇〇円、小中生五〇〇円。主催＝徳川美術館、徳川林政史研究所、名古屋市蓬左文庫、朝日新聞社。◎記念講演会＝「尾張の名君を語る－義直・宗春・慶勝を中心に－」徳川林政史研究所所長・江戸東京博物館館長・竹内誠氏
四月十四日（土）午後一時三十分～三時、徳川美術館講堂。

## 名古屋宝生会 定式能公演

名古屋宝生会平成十九年度定式能の六月、十一月の演能は次のとおり。

◎六月十七日（日）（五十一期第三回）午後一時開演
能「通小町」シテ佐野萌、ツレ和久荘太郎
能「雲雀山」シテ竹内澄子、ツレ佐藤健太朗
能「来殿」シテ衣斐正宜
狂言「腰祈」大野弘之ほか。

◎十一月十八日（日）（五十一期第四回）
能「生田敦盛」シテ佐藤耕司、子方・佐藤健太朗
能「衣浦」シテ玉井博祐
仕舞「枕慈童」和久荘太郎、「車僧」内藤飛能、「殺生石」宝生和英
狂言「成上り」野村又三郎ほか
正会員券五枚綴り／一万九千円（うち同伴券一枚）、当日券五千円、学生券二千円。
問い合わせ／名古屋能楽堂、出演能楽師又は名古屋市天白区島田２－３０１、島田２－３０１島田橋住宅２－１３１０、名古屋宝生会佐藤耕司方＝電話０５２・８０３・７３７２番

## 梅田邦久喜寿記念 第29回 邦謡会能

### －小町の一生－

四月一日（日）午前十時半始
名古屋能楽堂

舞囃子　東方朔　梅田嘉宏　片山慶次郎　笠　鉱一　後藤嘉津幸　加藤洋輝　大野誠
仕舞　知章　弓八幡　古橋正邦　青木道喜
藤　橋保向
須磨源氏　橋本礒道
地謡　松山幸親　河村博重　武田邦弘　高橋瞭一
能　草子洗小町　子方　冨田尚史　官女　前野郁子　忠岑　本田勲　官女　今沢美和　躬恒　須部甫　貫之　清沢一政　梅田邦久
間　飯冨雅介　河村眞之介　井上靖浩　柳原冨司忠　鹿取希世
後見　梅田嘉宏　小林慶三
地謡　松山幸親　高橋瞭一　武田大志　橋本忠樹　橋分林道治　橋保向　片山清司　味方玄
仕舞　雨月　武田欣司　通盛　武田邦弘　夕顔　小林慶三　車僧　片山伸吾
地謡　橋本忠樹　古橋正邦　橋保向　祖父江修一
狂言　舟ふな　太郎冠者　井上菊次郎　主人　野村小三郎
後見　野村又三郎
舞囃子　通小町　雨夜之伝　片山九郎右衛門　笠　鉱一　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
一調　巻絹　片山清司　太鼓　上田悟
能　卒都婆小町　一度之次第　梅田邦久　植田隆之亮　山本順三　河村総一郎　福井四郎兵衛　藤田六郎兵衛
後見　青木道喜　武田欣司
地謡　梅田嘉宏　清沢一政　祖父江修一　河村博重　古橋正邦　片山清司　片山九郎右衛門　武田邦弘
附祝言
［料金］正面指定席八千円、自由席五千円
主催　邦謡会
名古屋市昭和区台町２－16－５

## 名古屋観世会定例公演

四月八日（日）十二時半開演
名古屋能楽堂

能　二人静　ツレ　片山伸吾　前シテ　後シテ　片山慶次郎
間　高安勝久　野村小三郎
後見　笠　鉱一　小島一英　武田志房
地謡　福井四郎兵衛　本田　須部　武田　梅田　藤田六郎兵衛　古橋　甫　大志　梅田　久田　勲　武田　邦久　正邦　弘　勘鷗
狂言　昆布売　シテ　野村又三郎　アド　野村小三郎
後見　伴野俊彦
仕舞　西行桜　小島一英　武田志房
弱法師　地謡　八神孝充　祖父江修一　古橋正邦　武田大志
能　鞍馬天狗　子方　浦田親良　稚児　片山紫乃　〃　味方和　〃　河村凛太郎　稚児　富田尚史　梅若六郎　白頭　飯冨雅介
間　松田高義　野村又三郎
後見　梅田嘉宏　梅田邦久
地謡　八神孝充　松山幸親　加賀敏彦　高橋瞭一　清沢一政　小島一英　武田志房　祖父江修一　河村総一郎　柳原冨司忠　加藤洋輝　竹市学
附祝言
［有料］当日券八千円
主催　名古屋観世会
事務所＝名古屋市昭和区台町２－16－５
電話０５２・８４１・４６３２

## 名古屋能楽堂 開館十周年 記念能

四月十三日（金）午後一時開演
四月十四日（土）午後一時開演
名古屋能楽堂

四月十三日（金）午後一時開演

（宝生流）能　田村　前シテ　後シテ　衣斐正宜　相元正樹　鹿島俊裕　河村眞之介　後藤嘉津幸　竹市学
後見　竹内澄子　衣斐愛
地謡　竹内良伯　竹内淳一　久野幸三　和久荘太郎　稲川寿一　水上輝和　辰巳満次郎　佐藤耕司
（喜多流）能　班女　前シテ　後シテ　長田驍　高安勝久　相元正樹　笠　鉱一　後藤孝一郎　鹿取希世
後見　加藤誠子　平塚昭子
地謡　加藤領一　森健　伊藤英毅　福田勝　松井俊介　長田呻二郎　高林和谷　衡市
（和泉流）狂言　酢薑　シテ　佐藤友彦　アド　井上菊次郎
後見　井上靖浩
（観世流）能　鞍馬天狗　前シテ　後シテ　久田勘鷗　高安勝久　子方　久田勘吉郎　稚児　冨田尚史　〃　河村万葉　〃　尾崎令忠　〃　尾崎玄忠　稚児　寺田勝哉　米倉光希
間　能力　佐藤融　小天狗　鹿島俊裕　〃　今枝郁雄　井上靖浩　河村総一郎　船戸昭弘　加藤洋輝　藤田六郎兵衛

（②面へつづく）

（①面よりつづき）

附祝言　後見　久田三津子　泉　嘉夫　地謡　本田　勲　清沢　一政　須部　甫　古橋　正邦　高橋　暸一　梅田　邦久　梅田　嘉宏　祖父江　修一

（午後五時半終了予定）

## 四月十四日（土）午後一時開演

（観世流）半能　**絵馬**　古橋　正邦　梅田　嘉宏　梅田　邦久　高安　勝久　椙元　正樹　小林　努　今沢　美和　後見　武田　邦弘　地謡　前野　郁子　河村総一郎　柳原冨司忠　加藤　洋輝　竹市　学　本田　勲　須部　甫　武田　大志　松山　幸親　久田　勘鷗　高橋　暸一　清沢　一政

（和泉流）狂言　**茶壷**　シテ　野村小三郎　アド　松田　高義　目代　野村又三郎　後見　伴野　俊彦

（観世流）能　**隅田川**　近藤　幸江　小林　椙元　努　正樹　福井四郎兵衛　鉱一　藤田六郎兵衛　黒田　博　八神　孝充　梅田　嘉宏　久田　勘鷗　後見　加藤　春枝　梅田　邦久　地謡　松山　幸親　嘉夫　加賀　敏彦　古橋　正邦

（金剛流）能　**葵上**　竹市　学　加藤かおる　高安　勝久　椙元　正樹　河村眞之介　福井　良治　鬼頭　義命　大野　誠　間　藤波　徹

# 戦後名古屋能楽史 ㊺

## 〔第十八章〕昭和三十九年（一九六四）

竹尾　邦太郎

―承前―

四月二十九日、幸友会・福井啓次郎職分十周年記念能は二部制の大能で、第一部は宝生流がメーン、第二部は観世流でメーンは梅若系であったが、一調一声「小督」を梅若猶義の謡で勤めた田鍋惣太郎は自著『小鼓芸話』で次のように回顧する。

三十九年四月二十九日、梅若猶義氏と一調一声の小督を願いましたが、とても面白く勤めました。猶義氏には、先代万三郎氏が余程期待をかけて仕込まれたものとみえ、実に立派でうまいものですね。そういえば、いつでしたか景清を万三郎氏にお願いした時に、ツレを猶義にとおっしゃったので、いえ……もっと軽い方で……とご遠慮申しましたところ、いや、倅に景清を見せておきたいから……と、結局猶義氏にツレを願うことにしたことがありました。見ることなら鏡ノ間からでも地や後見でも見えるわけですが、共演させてジカに空気でわからせようとされたとお察しするのですが、芸を伝えようとする親心だなァと、つくづく思ったことでした。

前後するが、昭和三十八年五月五日より昭和三十九年三月十五日までワシントン大学に招聘されて滞米中の第一回野村狂言団の野村万蔵（六世）から『狂言』紙に届いたアメリカ便りが第70・71号（昭和三十九年四月・五月）に分載され、『狂言』紙の巻頭コラム「狂言人語」は「陽春とは言う条、肌寒い風に桜のつぼみも遠慮し勝ちの今日此頃となりました。去る三月号の締切の日、在米中の野村万蔵氏より玉稿を頂きましたので、おそまき乍ら本紙上にのせさせて頂きました」と紹介する。野村万蔵には発行順に『狂言の道』昭和30年、『狂言面　附装束と小道具』昭和31年、『狂言の道』増訂版昭和42年、『随筆集　夏に技冬に声』昭和49年、『狂言芸話』昭和56年、の著書があるが（新潮社刊の『随筆集』以外は全てわんや刊）、その何れにも『狂言』紙へ寄稿の次の一文は収録されていない。

### アメリカ便り

二月二十一日　シアトルにて

戦後名古屋市が、近代都市の建設に成功したことについて、思い出されるのは――関東大震災の時、後藤（新平・一八五七―一九二九）東京市長が企画された、都市計画案なるものが、大風呂敷と新聞紙上などでコキ下ろされて原案が骨抜きにされたことであります。終戦後の好機をも重ねて逸したわが東京都は現在非常な交通難にあえいでいるのです。

私は都当局の失政を詰じるよりはこの難事業をやり遂げた名古屋市の方々の決断力に対し絶賛と敬意を表したいのであります。

旅行好きであった私の父、萬斎（一八六二―一九三八）は夏の閑散

（③面へつづく）

附祝言　後見　豊嶋三千春　百々　康治　地謡　佃　陽子　大川　磨美　熊谷眞知子　田中　春奈　伊藤　雅子　鈴村　昌美　羽多野　良子　西脇　和子

（午後五時頃終了予定）

主催　能楽協会名古屋支部　名古屋市文化振興事業団（名古屋能楽堂）　名古屋市

［入場料］（各日）一般三千五百円、学生二千円（当日は五百円増）

取扱い＝チケットぴあ（TEL0570・02・9999）

名古屋能楽堂（TEL052・231・0088）

## 幸謡会

四月十五日（日）午前十時半開演

名古屋能楽堂

素謡　**采女**　湯朝美智子　小林　俊雄　高砂　柿木　園子　清経　瓜生　恭子　仕舞　草子洗小町　三浦美由紀　葛城　小野内喜春子

舞囃子　**須磨源氏**　芝崎　恭子　河村眞之介　後藤嘉津幸　加藤　洋輝　竹市　学　胡蝶　田代　妙子　福井四郎兵衛　覓　鉱一　加藤　洋輝　大野　誠　蝉丸　近藤　幸子　福井四郎兵衛　覓　鉱一　竹市　学

## 久田観正会春の大会

四月二十二日（日）午前十一時開演

名古屋能楽堂

番組

鶴亀　濱口　矩光　屋島　堤　賢太郎　邯鄲　舞アト　中里三紀子　大江山姥キリ　船橋　里美　伊藤　晏義　金井　美晴　野守

仕舞　蝉丸　須賀　玲子

素謡　**定家**　斎藤　利子　佐野　安男　遊行柳　前川千鶴子　前川　幸子

仕舞　草子洗小町　山田　和子　河村眞之介　柳原冨司忠　竹市　学　井筒　山内　ふさ　河村眞之介　柳原冨司忠　竹市　学

［入場料］（カッコ内は当日料金）S席一万五千円（一万六千円）A席一万三千円（一万四千円）B席一万円（一万二千円）

［前売券］中日新聞コンサートデスク（TEL052・320・9191）名古屋能楽堂、チケットぴあ

主催　中日新聞社、中部日本放送　名古屋市文化振興事業団（名古屋能楽堂）　名古屋市

素謡　**梅**　宇野　順子　青木　朋子　小野内喜春子

仕舞　松風　小林　俊雄　通小町　高取　良昌　花月クセ　百瀬永三子　野宮　田中　米子

能　**井筒**　高安　勝久　河村眞之介　後藤嘉津幸　竹市　学　間　野村小三郎　田代　妙子　後見　武富　康之　村井　邦子　三村　徑布　大槻　文蔵　地謡　田中　米子　塩谷　恵　加藤　春枝　進藤　幸江　前野　郁子

舞囃子　**融**　吉房　徳二　覓　福井四郎兵衛　鉱一　加藤　洋輝　大野　誠　富士太鼓　村井　邦子　河村眞之介　後藤嘉津幸　大野　誠

素謡　**求塚**　近藤　幸子　田中　米子　石川　晴子

舞囃子　**三輪**　鈴木寿太郎　河村眞之介　後藤嘉津幸　加藤　洋輝　大野　誠　百萬　石川　晴子　覓　福井四郎兵衛　鉱一　加藤　洋輝　大野　誠

番外仕舞　鶴亀　近藤　幸江　羽衣キリ　泉　嘉夫　三井寺　大槻　文蔵

（終了予定五時過）

［ご来場歓迎］

幸謡会　近藤　幸江

岡崎市鴨田本町十一―三　TEL（〇五六四）二一―二五二九

## 名古屋能楽堂開館10周年記念　中日能

四月二十九日（日・祝）午後一時三十分開演

名古屋能楽堂

素謡　**恋重荷**　佐藤　隆男　渡辺　清彦　久田　勘鷗

舞囃子　**楊貴妃**　大竹富三江　河村眞之介　柳原冨司忠　竹市　学

能　**巴**　大久保由美　杉江　元　河村総一郎　久田舜一郎　鹿取　希世　間　野村小三郎

番外舞囃子　**高砂**　久田勘吉郎　河村眞之介　久田舜一郎　加藤　洋輝　竹市　学

―終了予定　四時頃―

［入場無料］

［御来場歓迎］

主催　久田観正会　久田勘鷗

お問い合わせ　名古屋市名東区一社三―一六二　久田勘鷗事務所　TEL〇五二―七〇五―一五八四

狂言　**因幡堂**　男　野村又三郎　妻　野村小三郎

高砂　武田　宗和　仕舞　羽衣　武田　志房　地謡　木月　宣行　祖父江　修一　猩々　梅田　邦久　久田　勘鷗　清沢　一政

能　**山姥**　藤波　重彦　観世　清和　白頭　長杖之伝　福王茂十郎　河村総一郎　柳原冨司忠　小寺　佐七　藤田六郎兵衛　間　野村小三郎　後見　坂口　貴信　武田　宗和　地謡　松山　幸親　高橋　暸一　加賀　敏彦　梅田　嘉宏　清沢　一政　梅田　邦久　武田　志房　久田　勘鷗

能　**二人静**　里女　観世　芳伸　静御前　山階彌右衛門　立出之一色　福王茂十郎　河村眞之介　後藤嘉津幸　藤田六郎兵衛　間　松田　高義　後見　梅田　嘉宏　武田　志房　地謡　本田　勲　松山　幸親　木月　宣行　高橋　暸一　加賀　敏彦　久田　勘鷗　武田　宗和　祖父江　修一

（②面よりつづき）

期にわれわれを連れて北海道九州方面を各年に巡演しましたが、やがて、朝鮮、満州、南支、北支まで足を伸ばすようになり、ある年には実に二ヶ月に余る大旅行を記録したのでした。

このような私共の旅行に対し、「野村は旅役者だ」と非難する者もありましたが、父はそんな陰口には耳を貸さず、積極的に狂言の普及行脚をつづけていたのでした。

一方、新作狂言の上演、狂言稽古本の出版、劇場出勤、ラジオ放送等々に常に先駆者となっていたため、自然に風当りが強く、仲間からいつも集中指弾をうけていたようです。しかし父は「新しい仕事には必ず迫害者が現はれるものだ、今にみていろ…」と言って、少しの動揺の色も見せなかった、その度量は実に立派なものでした。

また父は「一度何を渡ってから死にたい」と口癖のように言っていました。何とは、太平洋を意味するもので、言うまでもなく、米国巡演を念願していたのですが、これだけは果すことが出来ず、太平洋より更に遠い、三途の川へ針路を変えてしまったのでした。

㈢私の今回の渡米は以上のように計画的であった父の場合とは違い、言わば偶発的な動機によるものですが、狂言の初渡米を私どもで記録したのも又、不思議な因縁と申されましょう。

私は戦後あらゆる日本芸能がアメリカに紹介されたにも拘わらず〝能〟の渡米問題がゆきなやんでいる現状を甚だ遺憾に思いますので、今回の渡米を機に、その線に沿って私なりの努力はしてきましたが、それには先づ以て狂言公演の成功が絶対必要であると考えた時、益々責任の重大性を感じたのでした。過去三十数回に亘る米国各地の公演に於て、望外の好評を得たことはその意味で若干稗益するところがあったものと、密かに自負している次第です。元来器用な性質の日本人は、外国の真似をすることも又極めて巧みであり戦後の日本は殊にアメリカ一辺倒になっているようです。

昔から「日本人の猿真似」と外人間に好ましくない定評があり、戦後も「フジヤマ・ゲイシャガール」程度が彼ら大部分の日本観であります。

私は今回の渡米によって、日本芸術の優越性につき、大きな誇りを感じたのでした。今後われわれは対外的に勇気と自信をもって、芸術国の実態を知らしめるための努力をする必要を痛感します。

（括弧内筆者）

五月三日、久田秀雄の主宰する名古屋観正会、社中の春季大会の番外に上田照也の舞囃子「唐船」がある。

五月十七日、名古屋観世会は会員物故者追善の別会能。番組は「神歌・法会之式」鬼頭五朗・林甲子夫、当地観世会々員による仕舞十二番、連吟三番のあと、能「道明寺」武田太加志、素謡「卒都婆小町」藤波順三郎、舞囃子「歌占」観世元昭、能「弱法師・盲目之舞」大槻秀夫、狂言「二千石」和泉保之、能「松風・見留」観世元正・橋岡久共、舞囃子「恋重荷」観世喜之、半能「融・窕」柴田初太郎。既出者以外にシテ方は藤井久雄・藤井徳三・岡久雄・浅見重弘、ワキに宝生弥一、囃子方に大倉六蔵、亀井俊雄が来演。

五月二十四日、汎五流の能楽愛好者で組織する名古屋能楽倶楽部（世話人代表・植村眞太郎・昭和三十一年三月十八日発会）の設立に功のあった金剛流・片岡信一の七回忌を追善する名古屋能楽倶楽部大会。番組冒頭の挨拶に「片岡君が亡くなられてから早今年が七周年になります。名古屋能楽倶楽部は同君を中心として、生れ、そして育って来た会ですので、七年忌の催しは、今春、道子さんに依って立派に営まれましたけれども、私共は私共なりに御供養させて頂き度いと思ふ次第です。何卒御知友御誘ひ合せ御来鑑下さい」とある。初めに番外として金剛流仕舞二番「誓願寺」谷口宗義「当麻」大塚一二、独吟「海人」伊藤鉄之進、終りに観世流能「鵜飼」柴田初太郎、を据え、その間に能（観一・剛一）、舞囃子（観八・剛五）、仕舞（観一七・剛八・春三）、独吟（観一）、連吟（春一）、独調（喜一）、狂言「竹生島参」佐藤友彦・秀雄、の計四八番がある。

五月三十一日、大槻清韻会が門下の殿島修二（64）に「翁」を披かせるについての別会能。「翁」殿島修二・山中義滋（千歳）、野村又三郎（三番叟）、井上祐一（面箱）、能「養老・水波之伝」泉嘉夫、狂言「張蛸」佐藤卯三郎、舞囃子「放下僧」加藤良久、連吟二番、独吟「鵜之段」小林二郎、仕舞八番、能「定家」大槻秀夫、一調「屋島」斉田喜兵衛・林喜右衛門、仕舞四番、舞囃子「玉鬘」大槻文藏、能「望月」観世喜之・福王茂十郎、笛の赤井藤男が来演。殿島修二は昭和三十年に流儀師範、三十二年、「石橋」披キ（白は大槻秀夫）、三十六年に「道成寺」を披ク（小鼓・田鍋惣一郎）。

六月五日、熱田神宮大祭奉納能。舞囃子五番「養老」内藤泰二「経政」山田仁三郎「杜若」柴田初太郎「阿漕」前田昌広・西村欽也「猩々」加藤良久、脇仕舞「蟻通」高安滋郎、独吟「鵜之段」二井栄逸、狂言小舞「貝尽し」井上松次郎、シテ方五流が揃う。

六月七日、青陽会第八期第一回。舞囃子「呉服」河村鉦二、能「忠度」久田秀雄、狂言「謀生種」井上松次郎、能「富士太鼓」佐藤太俊、能「船弁慶・前後之替」上田照也・高安滋郎・上田貴弘（子方）。

六月十日、名匠を聴く会は週日の水曜日、午後五時開演で終演予定は午後八時半、水無月の神宮の杜、帰路の闇はさぞ濃かったであろう。番組に「新緑の候各位益々御清栄御慶び申上げます　恒例名匠を聴く会も皆様の御後援によって年々盛会に成り厚く御礼申上げます　この番組の通り第四回を開催致します　何卒御同好御知友御誘ひ合せられ御来聴御声援下さいますやう御願致します」の挨拶があり、西田三好の講演「素謡の聴き方」のあと、素謡「景清」梅若六郎、仕舞四番「網之段」有賀滋子、「笠之段」梅若景英、「玉之段」観世武雄、「鵜之段」山本勝一、素謡「熊野」観世喜之、仕舞二番「通盛」観世寿夫、「三笑」梅若六郎・観世銕之丞・観世喜之、素謡「安宅・勧進帳」観世銕之丞・観世喜之、がある。

六月十四日、善竹弥五郎（81）が脇狂言の大勢物「松脂」を大阪善竹会で三十年ぶりに上演、と『能楽思潮』40・41合冊（一九六七）の特集「能楽戦後二十年史」、『京都観世会館御案内　能』（昭和四十六年一月号）に連載中の「近代能楽百年史・第53回」が取り上げる。

「松脂」は稀曲ではあるが大蔵流の名寄では平物の次で内神文（うちしんもん・内々神に誓って稽古を受ける段階の称）、位付の重いものではないが、この春、人間国宝に認定された善竹弥五郎がシテ松脂ノ精を勤めたことの珍らしさからだったろうか。

「松脂」の稀曲ぶりは当地の和泉流でも。明治四十一年（一九〇八）三月二十九日、那古野神社舞台は角淵翁還暦祝賀能で当の角淵新太郎（一八四七－一九三九、和泉流名古屋狂言共同社の創立者の一人）がシテを勤めて以来、七十八年ぶりに昭和六十一年（一九八六）十一月二十四日、熱田神宮能楽殿は名古屋和泉会別会でシテ和泉元秀、アド佐藤友彦、小アド大野弘之、立衆井上祐一ほかでの上演があった程である。

同日、当地では金春流・本田秀男の来名稽古四十年記念能が当人と名古屋金春会の主催で行われる。番組は舞囃子「実盛」金春信高、能「砧」本田秀男・本田光洋（ツレ）・西村弘敬（ワキ）、囃子は藤田六郎兵衛・田鍋惣太郎・吉見嘉樹・鬼頭八郎、仕舞三番「鵜之段」山田仁三郎（金剛）「江口キリ」柴田初太郎（観世）「山姥キリ」内藤泰二（宝生）、狂言「三人片輪」井上松次郎、仕舞「遊行柳」梅村平史朗、「舟弁慶」桜間龍馬・西村欽也・金春安明（子方）。

この日の「砧」を勤めた田鍋惣太郎は自著『小鼓芸話』で次のように言う。「本田秀男氏が、金春流で砧を復活上演されましたが、本田氏はもと大鼓になる筈だったこともあって、大にはやかましいご仁なので、吉見嘉樹氏をわざわざ招いての、力演でありました。お蔭で吉見氏とのお相手で私も気持よく面白く勤めさせていただけました」と。因みに金春宗家信高は日本芸術文化振興会の月刊『国立能楽堂』平成九年五月号に「復曲・新作のこと」と題する稿を寄せる（後に『花の翳』平成十四年七月・岩波書店刊に再録）が、その中に、昭和三十六年の「大原御幸」を皮切りに、「正尊」「恋重荷」「砧」「胡蝶」「長柄」「巻絹」「鷺」「木賊」「檜垣」「伯母捨」「実方」「雲林院」「求塚」の計十四曲を復曲いたしました、とある。

――以下次号――

## ◆歳晩から初春の舞台◆

## 「金剛定期能　平成十八年度　納会」と「名古屋能楽堂定例公演　正月特別公演」「第四十四回　鳳の会」

竹尾邦太郎

**「鳥追舟」**　曲名の義は「水田の害鳥を追うための舟。笛・太鼓の囃子物を仕立てて追う」と広辞苑にある。

主・日暮某（ワキ茂十郎）長の在京中、主家を差配する左近尉（ワキツレ和幸）、農繁期、群鳥を追う人手不足に主の妻子（シテ恭憲、子方花若・山口等悟）をも駆り出すが、十年余を経て帰国のワキ、妻子のこの有様を目の当たりに激怒、手討ちにと逸るを、斯くなるのも御自身長年の留守にも科が、と押し留め、ワキツレの助命嘆願をするシテに一件は落着、大団円。

前場、名宣から主家の内情を淡々と語るワキツレ、花若を鳥追に就かせよとシテに迫れば、主の嫡男に何たることを、と窘めるシテだが、理に詰まり、幼い花若が不憫と自ら鳥追を買って出れば、「上臈の御身に御出であるべきなどと仰せ候は」私に悪い評判を立てさせる為かとワキツレ、一方「花若一人は心許なく」とシテは母子共々にの決意。シテ・ワキツレ問答は感情が出過ぎることなく、互いによく抑制された静かな緊張感が漲る。就中、問答のキリ、ワキツレ「それはともかくも御計らひにて候べし」には、勝手にしろ、といった冷ややかな口吻、「（さらば明日）舟を浮かめて（待ち申さうずるにて候）」とスックと立つところに漸く苛立ちをみせる。ワキツレが立ち去ると、花若の逆運を嘆くシテは銷沈の心、地（三千春・道一ら）〽（稲葉の鳥を立てんとて、でシテ・花若ともにシヨリ、立って橋懸へ、一ノ松でシヨリ解き中入。

後場、従者（アヒ良暢）に太刀を持たせてワキの出、折柄聞こえる笛鼓の音に興を示す心に問答でアヒにその先を尋ねさせ、座着くと作物が脇正角カケテ出される。シテは唐織着流シを縫箔腰巻・水衣の仕事着に替え、花若と乗込む鳥追舟、艫には棹を持ちワキツレが入る。実りの秋の感慨に耽るワキツレに心安からぬ母子（シテと花若）、悲運を嘲ち共にシヨル一方で、ワキツレは鳥追を母子に任せ「それがしは」と舟を下りる態に後座へ行きクツロイデしまう。鬼の居ぬ間の何とやら、シテは笠を脱ぎ、花若ともに下居、夫の、父の、不在が齎す現状を掛合に共どもシヨリ嘆き合う所、クツロギから戻り笛前のワキツレ、それを見咎め「嘆く事あらば我が家に帰りて」と如何にも憎げに面責、シテは慌て、笠を着け、ワキツレが再び舟に乗り込めば、シテと花若、怠慢を咎められ共に立つが、当今、労使の間にもある事、面白い。

花若を励まし、夫恋いの乱れ心の侭にも己れを鼓舞して鳥を追う鳴子ノ段は、〽打つ鼓空に鳴子の群雀、と数拍子踏み、左から右へ指廻、〽何時も太鼓はとう〳〵と、打つ所（写真）、〽夜寒の砧擣つとかや、と面（曲見）クモラセ聴く心、〽哀れとだにも言ふ人の、のシヨリ、〽すは〳〵群鳥の、と左手を笠にやり、群鳥が飛び去るのを眺める所など、狭い舟中、型に情景を巧みにみせる。

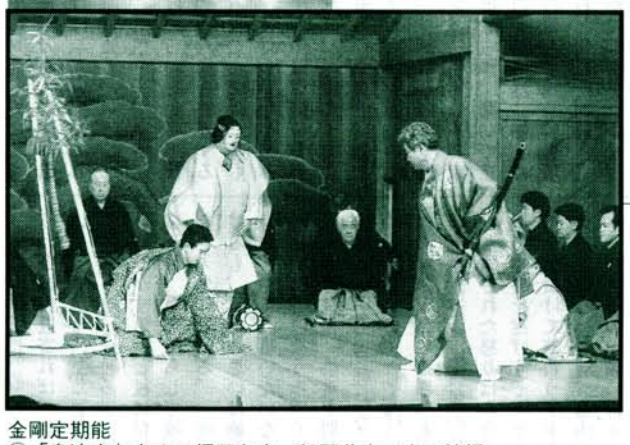
終盤、横柄な口ぶりで呼びとめられ不快感露のワキツレ、舟を寄せる態に棹をさし相手を見ればワキ、思わず棹を手放し舟を下りて平伏する。ワキツレ・ワキ問答に花若も加わり、事情察知するワキ、「何とて物をば言はぬぞ」と憤激するあたり、真に迫る。シテが綿々と説くクドキ、その執り成しを太刀の柄に手を掛けたまゝ聞くワキ（写真）、結句ワキツレは許され、太刀まで授かって地前へ退き、キリは花若を介添してシテは幕へ、ワキが常座でユウケンして留メル。現在物のいわゆる人情物にみられがちな粘っこい所がなく、気骨をみせたワキ、潔く非を認めたワキツレ、健気な子方、私情を出来るだけ抑えんとしたシテ、終ってみてすかっと爽やかだった。（1時間18分）

**「腹不立」**　堂が落成しても住持不在とあって施主二人（アド良暢・耕道）は街道へ出向き、好き僧来たらんか、と待ち伏せ、旅僧シテ忠三郎に出合う。惚けた問答の末に堂へ赴くシテ、俄坊主のこと、て不意を突かれ、名を問われても咄嗟には答えられない。怪しむ二人に出任せで腹不立ノ正直坊と答えれば、更にその長い名前の仔細を問われ、適当に取り繕えば、腹を立てぬ正直な者とは眉唾物とばかりに、二人は腹を立てさせようと言葉の暴力で執拗にいびっては面白がる惨さ。当今の苛めも斯くやを思わせる。ならぬ堪忍するが堪忍の心境のシテだが遂には堪忍袋の緒が切れる。

春風駘蕩、飄々としてこだわらない人物が身から出た錆とも言えない些事から苦渋を味わわねばならない理不尽。忠三郎、表情豊かにみせて巧妙。キリには売僧と罵られ逃げなければならない結末、後味はよろしくない。（22分）

**「綾鼓」**　恋に貴賤は無いとは言い条、賤しい庭掃の老人シテ永謹に絹を張った鼓を打たせ、鳴れば姿を拝ませるという女御ツレ幸

（④面へつづく）



金剛定期能
㊤「鳥追舟」左より福王和幸、松野恭憲、山口等悟
㊦「鳥追舟」左より福王和幸、松野恭憲、福王茂十郎
（いずれも原田七寛氏撮影）

（③面よりつづき）

稔、仄かな恋情を弄び揶揄しようという此れも苛めの構図。

前場はクセ、命の果敢なさを誰に問おうとどうにもならない、〽などされば此れ程に、人生の無常を分ってはいても迷うのか、と官人ワキ勝久へアシラフところ、老らくの恋の懊悩を訴えるかで切ない。上ゲ端あと、〽（打つや鼓の）数しげく、と立ち、鼓に寄って激しく打ち据え二打目、面伏せ聞き耳立てる態は聞こえぬ空しさ、〽聞けども聞けども、に焦燥の色をみせ、〽怪しの太鼓や、と指スところ（写真）には怒りの表情も。〽何とて音は出でぬぞ、と安座双シヲリの落胆は、地（清隆・通成ら）との掛合に〽鼓も鳴らず、と居立ち、〽人も見えず、と右へ眺めると、〽こは何と鳴神も、とがっくり腰を落とし打合るところ、絶望の極。中入は小刻みな運ビに一ノ松へ走り、入水する心に沈ムと〽憂き（浮き）身を、と立ち静かに入る。

後シテ老人ノ亡霊は打杖を腰に、手には鹿背杖。一ノ松、地との掛合は、恨みつらみは言うも愚か、と〽一念嗔恚の邪淫の恨み晴れまじや、と憤怒を数拍子に踏み、鹿背杖一ツとんと突き舞台へ入って来るところ、復讐の鬼と化した凄味をみせる。〽桂に掛けたる綾の鼓、を胸杖にキッと見込めば、繰られる様にシテと向き合ってしまうツレ。シテは〽鳴るものか鳴るものか打ちて見給へ、と鹿背杖捨て打杖右手にツレへ迫ると、右袖掴む様に鼓の前へ引っ立て、打杖振り上げ責める怖さ。〽悲しや、とシヲリ、退るツレは（写真）〽さて懲りや、と威喝され失神状態で床几に掛かるのみ。

因果応報を目のあたりにみせるキリは、〽歴然は目のあたり、と六ツ拍子強々と踏み、〽打ち弱り心尽きて、と打杖に縋るかに下居、〽波の藻屑と、静かに安座は死霊となってツレに祟る姿の無気味。一転、苔も波も〽打ち叩く池の氷、と激しく打合二度、〽身の毛もよだつ、とガッシするところに〽鯉魚が躍る悪蛇、となる姿を暗示、左袖巻キ〽あら恨めしや、と拍子二ツ強く踏むところには晴れやらぬ執心を。永謹、深刻な味を見事にみせる。（1時間6分・12月17日・金剛定期能平成十八年度納会）

**「翁」**　新春恒例の翁は久しぶりに下懸三流（金春・金剛・喜多）のうち喜多流が勤めシテ驍、下懸の千歳はシテ方に非ず面箱持を兼ね狂言方・融、三番叟を俊裕が勤める。囃子方（笛、嘉津幸・良治・昭弘、鑑一）、後見（白牛口二・郷、友彦・弘之）、地謡（定・大作ら）総員登場の前、鏡ノ間・揚幕のもと（まま切戸口でも）切火で清められるのが定だが此の度は火打石の音を聞かずだった。

先づ爽快にきびゞと狂言方らしい柔らかな躍動感漲る千歳、ゆったりした袖捌きも重々しく悠揚迫らぬ態度に品位をみせる翁、揉ノ段に力強さを鈴ノ段では飄逸な味の三番叟、三様の舞にはそれぞれの祝意、三様の冠物は順に侍・翁・剣先の烏帽子、舞の個性も現われようというものである。次いで脇狂言「三本柱」脇能「竹生島」と続くが、純正の式能に則った番組なら順序は逆になるところ、翁と脇能の流儀の違い、囃子方個々人の割付けの都合などで本格にならなかったのは少々物足りない。

**「三本柱」**　「めでとう三献戴きませう」などと「素袍落」の太郎冠者が言うように数の好い三、それに柱に象徴される普請も目出度く、しかも三本、三人アド靖浩・郁雄・靖雄で一人宛二本づつ山から下ろしてこい、と智恵試しの果報者シテ菊次郎。まんまと為果せて囃子物で戻る三人に、満面の笑みで迎え、自らも加わって興ずる（写真）ところ、四人の息の合った祝賀気分は理屈抜きに目出度い。（24分）

**「竹生島」**　朝臣ワキ勝久と従臣ワキツレ元・正樹、弁才天を祀る竹生島参詣に漁翁シテ喜正・海女ツレ暸一の釣舟を頼み湖上を渡る。初同（嘉夫・勘鷗ら）〽所は海の上、と馴れ親しむ穏やかな春の湖の景を愛でるシテ、同舟の誼（よしみ）は朝臣達と寛ぐ風情。舟が着き、ワキがシテとの問答でツレの上陸を不審すれば「女人こそ参るべけれ」とシテ。弁才天は女体で、女人禁制とは無知な人の言、と地が受け、ツレは中入地で〽我は人間に非ず、と弁才天の化現を仄めかし、〽社壇の扉を、扇で開く型から作物に入り、〽翁も水中に、とシテは立って常座へ、踏み止まるとワキに向き指込開キから〽また波に入らせ給ひけり、と一ノ松まで行って踏み止まり、そこからすら〳〵と幕に入る。

アヒは社人・友彦、能力頭巾・無地熨斗目着付・括袴・縷水衣、ワキとの問答から所蔵の珍宝は二股竹・馬ノ角・牛ノ珠などを得々と見せびらかし、岩飛を所望されゝば調子に乗り、飛び込んで〽水底にずっぷと、頭を突込む態に飛返ルなど大活躍。

後場は後ツレ弁才天の出現、赤長絹に黄大口、〽その時虚空に、と作物出ると、達拝掛中ノ舞三段さらりと舞上げ、〽時過ぎて、波風騒ぐところ、幕に向かい後シテ龍神の登場を促す様な雲ノ扇に、舞働になる。鮮烈な飛返り（写真）、合膝返シからキリは〽湖水に飛行、する態に三ノ松へ走り、飛返ッて立つと袖返し留拍子、脇能らしくきびゞして爽快、喜正スケールの大きな立派な舞台。（1時間13分・1月3日・名古屋能楽堂定例　正月特別公演）

**「釣狐」**　古狐シテ菊次郎、猟師アド靖浩に同族を狩り尽されかねない危機感を黙視するに忍びず、猟師の伯父・伯蔵主に化けて怖々猟師を訪ね、妖狐・玉藻前の故事を語り、狐の執念深い恐ろしさを悟らせ、狩りを思い止まらせようとする前場。水鏡に己れの姿を前後左右に映し、うまく化け果せた満足の自信も、道行の途次、犬の遠吠えに動顛、怯えて右往左往するところ、獣の本性をみせて旨い。いざ、アドに対面しては狐を釣ることの有無単刀直入に切り出し、無いと聞けば「真直ぐにおしゃれ」とつい語気強め、「一つ二つ釣りまして御座る」の返事には、面を背むけ穢らわしいの不快感をみせる。釣った狐を処理する段を聞かされるに及んでは、身も世もない風情、杖持つ手も小刻みに震える。説法の件は、先づシテが床几を求めれば、「畏まって御座る」と後見座へ行くアド、そこに少時クツログのもはや怪しいの推量、その間、シテは四辺の気配を窺う様子、それが突然「お床几」と大声を掛けられ、驚いて思わず立ち上るのも獣の性、如実にみせる。妖狐の執心が残って那須野の原の殺生石と化した物語は、語り口も滑らかに抑揚を利かせ、仕方も上々、アドに度々アシラフのも、説得せずば置かじ、の向こう意気の現われ、さすればアドに罠を捨てさせるのも、即時に、のこだわりである。「これで御座る」とアドが面前に激しく突き出す罠に、キッと面を背けるシテ（写真）、「はや捨ちゃ」の声も上擦り、「くす、くす、くす」と鼻を鳴らす匂いの誘惑。

不審の面持ちのアドを後に、罠を捨てさせた嬉しさは、〽しゃならしゃならと、小歌機嫌の帰るさ、罠に出くわせば驚愕と裏切られた怒り。戦き叫び一ノ松へ逃げると罠を望見し、怖いながらも「ついで乍ら罠の設いを見て置かう」と罠に近寄れば、弥増す憎悪は、「それがよいかこれがよいか」と狂った様に打ち据えると、「旨い匂ひがする」と杖に付いた餌の移り香、鼻を鳴らして嗅ぐところなど入念にみせる。一度は帰りかけるも、餌への思いは絶ち難く、身を捩って「喰いたいなあ」を連呼して罠の傍をうろつく姿は可笑しくも可哀相。慎重を期してシテは杖を捨て、身軽になって再挑戦、と長衣をたくし上げ、馬脚ならぬ狐脚を現わすと幕へ走り後場。

荒された罠に古狐の仕業を知り、騙された怒りは「今夜こそ今迄の本業を遂げうぞ」と注意深く罠を仕掛けて気負うアドが待ち構えるところへシテ、幕内で一声啼き、三ノ松の勾欄に寄りかゝって亦一声、舞台へ走り出るとでんぐり返って縄を飛越えたり（写真）、脇柱際の勾欄に凭れて一声、更には三ノ松でも凭れ「イチロ〳〵」の呟き。舞台で横臥してはアドを尻目に「ヤスヒロ〳〵」の呟き、「チョロコイチョロコイ」と聞える呟きもあり、目まぐるしく動き回った挙句捕まるが、うまく縄を外し三ノ松へ逃げ、また勾欄に寄り掛って嘲笑う様に一声啼き幕へ。「捕へてくれい」と追うアドも充分心持ちをみせ、親子共演の実、立派に果した。（1時間5分）

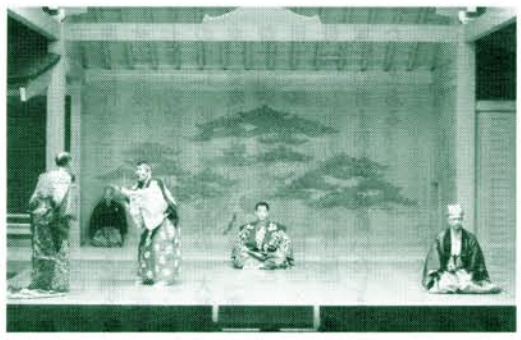
**「三人片輪」**　有徳人・弘之が障害者救済に求人募集の高札を立てたところ、盲・融、蹇・郁雄、唖シテ友彦、の三人、何れも障害を装い応募、難無く召抱えられる。有徳人が三人に留守を託し外出すると、三人はてんでに羽を伸ばし、蹇の預った酒蔵を開き、早速、酒宴になって肴に小舞を舞い出す。文字通り強者ばかりの交わりは〽頼みある仲の酒宴かな、「瓢箪」「兎」「景清」「ざざんざ」等々、小舞を堪能、そこへ戻って来た有徳人に周章狼狽の三人、てんでに役を取り違え、盲は唖に、唖は蹇に、蹇は盲に、なって化けの皮が剥がれ追い返される。唖になって有徳人の面接を受ける友彦（写真）が舞台を締める。（44分・1月13日・第44回鳳の会）

金剛定期能　㊤「綾鼓」金剛永謹、㊦「綾鼓」左より金剛永謹、廣田幸稔　（原田七寛氏撮影）

名古屋能楽堂正月特別公演
㊤喜多流「翁」長田驍、
㊦㊨「翁」三番叟　鹿島俊裕、㊧千歳　佐藤融　（杉浦賢次氏撮影）

名古屋能楽堂正月特別公演
㊤「竹生島」観世喜正、㊦「三本柱」左より今枝郁雄、井上菊次郎、今枝靖雄、井上靖浩　（杉浦賢次氏撮影）

第44回鳳の会
㊤「釣狐」（左より）井上菊次郎、井上靖浩
㊦（左より）井上菊次郎、井上靖浩　（杉浦賢次氏撮影）



第44回鳳の会「三人片輪」
佐藤友彦、佐藤融、大野弘之
（杉浦賢次氏撮影）

# 能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
FAX（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

## NHK放送予定（平成19年4月～5月）

◆NHK－FMラジオ能楽鑑賞（毎週日曜日7時15分～8時）

| | | |
|---|---|---|
| 4月22日 | 「西行桜」（金春流） | 高橋　汎ほか |
| 4月29日 | 「入間川」ほか（和泉流） | 野村万作ほか |
| 5月5日 | 「海士」（観世流） | 津村禮次郎ほか |
| 5月12日 | 「歌占」（宝生流） | 寺井良雄ほか |
| 5月19日 | 「善知鳥」（観世流） | 藤井徳三ほか |
| 5月26日 | 「杜若」（再）（宝生流） | 佐野　萌ほか |

◆NHK教育テレビ

5月19日㈯　15：00～17：00
能「柏崎古式」（観世流）　シテ山本順之
子方・小早川康充　ワキ・宝生　閑
地謡・観世銕之丞、浅井文義ほか

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

（能・狂言演能関係）
（TEL 052－231－0088）

［4月］

| | | |
|---|---|---|
| 22日㈰ | 久田観正会春の大会 | （無料） |
| 29日㈰ | 中　日　能 | （有料） |

［5月］

| | | |
|---|---|---|
| 3日㈭ | 豊水会春季大会 | （無料）（番組①面） |
| 9日㈬ | 東海高等学校芸術鑑賞会 | （関係者） |
| 13日㈰ | 第45回狂言「鳳の会」 | （有料）（番組①面） |
| 20日㈰ | 第50回狂言やるまい会記念公演 | （有料）（番組②面） |
| 26日㈯ | 梅猶会定期能名古屋公演 | （有料）（番組②面） |
| 27日㈰ | 名古屋観衛会 | （無料） |

## 名古屋城築城400年にちなむ
# “尾張の殿様が観た能”
## 名古屋能楽堂 定例公演番組

平成十九年度の名古屋能楽堂定例公演は、2010年が名古屋城築城四百年記念になるのに因み、また名古屋能楽堂開館十周年を記念して、「尾張の殿様が観た能」と題して、重要な場面で行われた能番組のなかから選曲された。

初回は6月1日(金)で、明年3月まで7回公演される。演目は次のとおり。

**【6月公演】（初代・義直）**

6月1日(金)　能「邯鄲」辰巳満次郎(宝生流)、狂言「引敷聟」野村小三郎(和泉流)

**【7月公演】（二代・光友）**

7月14日(土)　能「三井寺」泉嘉夫(観世流)、狂言「萩大名」佐藤友彦(和泉流)

**【9月公演】（三代・綱誠）**

9月2日(日)　［第一部］能「頼政」長田驍(喜多流)、能「紅葉狩」清沢一政(観世流)、狂言「千切木」佐藤融(和泉流)
［第二部］能「楊貴妃」竹内澄子(宝生流)、能「土蜘蛛」松山幸親(観世流)、狂言「飛越」野村又三郎(和泉流)

**【10月公演】（四代・吉通）**

10月26日(金)　能「松風」梅田邦久(観世流)、狂言「千鳥」井上靖浩(和泉流)

**【12月公演】（七代・宗春）**

12月2日(日)　能「八島」衣斐正宜(宝生流)、能「熊野」久田三津子(観世流)、能「猩々乱」古橋正邦・高橋瞭一(観世流)、狂言「入間川」松田高義(和泉流)

**【正月特別公演】（十代・斉朝）**

平成20年1月3日(木)　能「翁」片山慶次郎(観世流)、能「高砂」武田邦弘(観世流)、狂言「末広」野村又三郎(和泉流)

**【3月公演】（十四代・慶勝）**

3月8日(土)　能「融」久田勘鴎(観世流)、狂言「腰祈」井上菊次郎(和泉流)

## 廣田鑑賞会能
### 5月13日　金剛能楽堂

京都

第八回廣田鑑賞会能は五月十三日(日)金剛能楽堂で開催する。午後一時三十分始曲。

能組は、狂言「花争」(茂山千之丞、茂山あきら)
能「熊野」三段之舞・短冊留（シテ廣田幸稔、ツレ豊嶋晃嗣、ワキ福王和幸、地謡松野恭憲、今井清隆、広田泰能、掛川昭二ほか。なお詩人・村瀬和子氏のごあんないがある。

料金一般八千円、会員七千五百円、学生三千円。申込みは廣田鑑賞会（電話075・722・9123）、金剛能楽堂（電話075・441・7222）など。

## 紅韻会30周年記念大会開催
### 5月13日　尾西市民会館

観世流名誉師範・渡辺節子氏が主宰する紅韻会はことし三十周年を閲し、きたる五月十三日(日)一宮尾西市民会館で「紅韻会三十周年記念大会」を開催する。

後援一宮市、一宮市教育委員会、名古屋清韻会。

大会は午前十時開演、能「通小町・雨夜之伝」と「船弁慶・前後之替」の二番はじめ素謡「景清」はじめ三番、舞囃子、連吟、独吟、仕舞など三十数番。

記念大会に当たって谷一夫一宮市長は、地域の芸能文化の発展と生涯学習推進への貢献に謝意とお礼のことばを寄せている。（番組②面掲載）

**能楽史年表**　古代・中世編
能楽史研究には不可欠の初の年表！
鈴木正人編　序文表　章　「日本書紀」をはじめ種々の文献資料から猿楽・田楽・能楽に関する記録・記事を拾い、1600年までの約7000の記録・記事を初めて年表にまとめた。いつ、どこで、誰がどのような目的のために催したのか。普及や受容の推移や状況を読み解く事ができる初めての年表。研究者には必備の史料。A5判　416頁　定価5,750円（税込）
東京堂出版　〒101-0051　東京都千代田区神田神保町1－17　電話03-3233-3741　FAX 03-3233-3746　http://www.tokyodoshuppan.com

## 50回記念狂言やるまい会公演
### 5月20日　名古屋能楽堂

「狂言やるまい会名古屋公演」は和泉流野村派十二世・野村又三郎氏により昭和三十四年(1957年)に旗上げされ、本年五十回に当たり、その記念公演として、きたる五月二十日(日)名古屋能楽堂で和泉流の大狂言会が催される。

この公演には、東京から三宅派の野村萬氏(人間国宝)・万作氏兄弟、今年度の名古屋市芸術特賞を受賞した山脇派の井上菊次郎氏、そして会主の野村派・野村又三郎氏ら和泉流三派の当主・代表が一堂に会して「歌仙」「素袍落」「見物左衛門」「金津地蔵」の狂言組で、やるまい会公演記念大会を飾る。番組②面掲載。

## 豊水会春季大会
### 五月三日（祝日）午前十時始　名古屋能楽堂

仕舞　巻絹（キリ）　上井敏郎
花筐（狂）　吉野学

舞囃子　高砂　佐藤淑子　河村眞之介　柳原冨司忠　鹿取希世　助川治
経正　高橋邦充　河村眞之介　柳原冨司忠　鹿取希世
融　中川庄嗣　河村眞之介　柳原冨司忠　鹿取希世　助川治

素謡　野宮　青木美子　吉野学
楊貴妃　堀田喜子　白井正光

舞囃子　胡蝶　大江尚美　河村総一郎　福井四郎兵衛　鹿取希世　助川治
放下僧　佐々木千智　河村総一郎　福井四郎兵衛　鹿取希世
養老（五段）　清水久美子　河村眞之介　福井四郎兵衛　助川治
熊野（村雨留）　加藤洋子　河村総一郎　福井四郎兵衛　藤田六郎兵衛

能　敦盛　佐久間二郎　小島英明　早川寛　高安勝久　河村眞之介　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛　間井上靖浩　後見　高橋瞭一　観世喜之

素謡　玉鬘　楠木真理　上井敏郎
卒都婆小町　加藤洋子　観世喜正　服部紗季　坂真太郎
海士　佐藤淑子　高木源逸

独吟　弱法師　白井正光

舞囃子　安宅（五段替之形）　衣田清子　河村総一郎　福井四郎兵衛
清経　鈴木信　河村総一郎　福井四郎兵衛　藤田六郎兵衛　鹿取希世

船橋　秋山比登美　河村眞之介　福井四郎兵衛　藤田六郎兵衛
仕舞　梅枝　下尾和子

素謡　鞍馬天狗　佐々木千智　宮地俊彦　高橋邦充

附祝言

主催　豊水会
高橋瞭一

御来場歓迎
入場無料

## 鳳の会 第45回公演
### 五月十三日（日）午後一時三十分開演　名古屋能楽堂

解説　名古屋女子大学教授　林和利

狂言　二人大名　通行人　佐藤友彦
大名　鹿島俊裕
〃　今枝郁雄

素囃子　現の楽　笛　大野誠
小鼓　福井四郎兵衛
大鼓　筧鉱一

狂言　祐善　祐善　井上菊次郎
旅僧　井上靖浩
町の者　今枝靖雄

「引括」女の装束の着付実演

狂言　引括　男　佐藤友彦
妻　井上菊次郎
近所の女房　井上靖浩
〃　今枝靖雄
〃　今枝郁雄
〃　佐藤融

主催　鳳の会
後援　名古屋市・中日新聞社
名古屋市文化振興事業団

［入場料］
A席五〇〇〇円、B席三五〇〇円
学生二〇〇〇円
会員A席四〇〇〇円、B席二五〇〇円
チケット取扱＝チケットぴあ（TEL　052・320・9999）
（Pコード374・947）
名古屋能楽堂窓口（TEL052・231・0088）
井上菊次郎宅　（FAX　052・834・8607）

※終演後　会場で井上菊次郎、佐藤友彦を囲んで歓談します。

［演者と語ろう〝Q&A〟］（②面へつづく）

## 大聖寺藩の能楽

### 江沼神社の能面・能装束

金沢

金沢能楽美術館（金沢市広坂一丁目二―二五）は、三月から六月十七日まで「大聖寺藩の能楽～江沼神社に伝わる能面と能装束～」の特別展を開催している。開館午前10時～午後6時、休館日／毎週月曜日。

江沼神社（加賀市）は、旧大聖寺藩邸の敷地内にあり、前田家の遠祖菅原道真と大聖寺藩主・前田利治を祭神としている。かつては境内に能舞台があり、藩主が奉納した多数の能面・能装束が所蔵されている。

観覧料／一般・大学生三〇〇円。65歳以上二百円、高校生以下無料。

## 第50回記念 狂言 やるまい会名古屋公演

### ～和泉流三派が名古屋に集結～

五月二十日（日）十二時三十分始
名古屋能楽堂

番組

素囃子 邯鄲 夢中酔舞
大鼓 河村眞之介　太鼓 加藤 洋輝
小鼓 福井四郎兵衛　笛 藤田六郎兵衛
参詣人 井上菊次郎
在原業平 野村 万蔵
小野小町 野村小三郎
猿丸太夫 野村 祐丞
清原元輔 野村 扇丞

三派合同 歌仙
柿本人丸 野村 萬
僧正遍照 野村又三郎

山脇派 素袍落
太郎冠者 井上菊次郎　主 井上 靖浩
伯父 佐藤 友彦

## 戦後名古屋能楽史 ⑧⑥

〔第十八章〕

竹尾 邦太郎

### 昭和三十九年（一九六四）

―承前―

六月二十日、第六回やるまい会は午後、第二回・社中（也留舞会）発表会のあと、夕刻五時半から狂言三番「釣針」野村又三郎・佐藤卯三郎（アド主）・佐藤秀雄（乙）ら、「隠し狸」野村万作・野村又三郎（アド主）、「三人片輪」野村又三郎・井上祐一（アド主）・井上禮之助（小アド座頭）・井上松次郎（小アド蹇）、催主・野村又三郎は昨年に続き独演の趣。片岡みどり女史の司会がある。

六月二十一日、第三回・観世会定式能。素謡「百万」高野瀬透、仕舞三番「竹生嶋」加藤総兵衛、「杜若」太田重次郎、「通盛」佐藤太俊、能「賀茂・素働」梅若万三郎、仕舞二番「西行桜」柴田初太郎、「女郎花」山本真義、能「藤戸」山本博之、狂言「薩摩守」佐藤卯三郎、能「葵上・梓之出・空之祈」観世寿夫、「賀茂」のツレに梅若万紀夫・万佐晴、大鼓に斉田喜兵衛が来演。

六月二十八日は名古屋宝生会定式能・第八期第二回。素謡「半蔀」倉本雅、仕舞二番「花筐」内藤泰二、「天鼓」馬螺富四夫、能「実盛」宝生英雄、狂言「磁石」井上松次郎、能「自然居士」辰巳孝・西村欽也。

七月五日、朝日狂言会は第六回。素囃子「早舞」藤田六郎兵衛・田鍋惣太郎・吉田定男・鬼頭八郎、狂言三番「三本柱」井上松次郎、「文山立」茂山千之丞・七五三、「法師が母」佐藤卯三郎・河村丘造、小舞「海道下り」和泉保之、狂言二番「棒縛」茂山七五三・正義・千之丞、「小傘」和泉保之・佐藤秀雄（アド田舎人）野村又三郎（小アド新発意）河村丘造（尼）ほか。止狂言の「小傘」は明治期に溯るも当地に記録が見られない程の超稀曲であったが、その後、昭和四十三年の第九回やるまい会（シテ野村万之丞）五十六年の第二十四回やるまい会（シテ野村万之丞）、平成十三年・第四十四回やるまい会（野村小三郎）平成十八年・第四十二回鳳の会（佐藤友彦）と割に上演されるようになった。

七月十二日は名古屋淡交会の素謡会。番組冒頭の挨拶に「謹啓時下益々御清祥の段御慶び申上げます　扨て名古屋淡交会も御蔭をもちまして久共師を中心とし日毎に勉強の一路をたどって居ります

本年も観世寿夫、観世静夫、谷村一太郎三師及び橋岡一門を迎え左記の通り名曲をそろえ素謡会を催す事になりました　素謡ファンの皆様には必ずや御期待に添ふ事が出来得るものと存じます　何卒御来聴を賜ります様御願い致します」とある。

番組は順に素謡二番「竹生島」尾関健太郎、「盛久」橋岡久共、仕舞四番「放下僧・小歌」下田雄三、「班女」高橋静夫、「藤戸」観世寿夫、「野守」谷村一太郎、素謡二番「大原御幸」観世静夫・観世寿夫（法皇）、高橋静夫（ワキ）「正尊・起請文」観世寿夫・観世暁夫（子方）、観世静夫（ワキ）、仕舞四番「難波」橋岡久共「屋島」奥善助「隅田川」柴田初太郎「通小町」観世静夫、素謡「鵜飼」高

（③面へつづく）

## 梅猶会定期能楽公演

五月二十六日（土）午後一時開演
名古屋能楽堂
（電話052・231・0088）

能 巴
小松 勝憲
杉江 元　筧 鉱一
後藤孝一郎　鹿取 希世
間 松田 高義
小川 晴子　梅若 善久
立花香寿子　岡田 晃一
井戸 良祐　梅若 善高
梅若 雅一　梅若 基徳
後見 梅若 猶義
梅若 修一
地謡 小川 晴子　梅若 善久
立花香寿子　岡田 晃一
井戸 良祐　梅若 善高
梅若 雅一　梅若 基徳

狂言 薩摩守
船頭 野村又三郎
旅僧 野村小三郎
茶屋 真下 智行

三宅派 見物左衛門
花見 見物左衛門 野村 万作
田舎者 野村小三郎
在所の者 松田 高義
在所の者 野口 隆行
在所の者 奥津健太郎
金法師 野村 信朗

野村派 金津地蔵
親 野村又三郎

主催 十二世・野村又三郎

（入場料）A券八〇〇〇円（正面指定席）
B券六〇〇〇円（正面上手・脇正・中正面指定席）
学割四〇〇〇円
（取扱い）野村事務所（電話070・6581・0630）
電子チケットぴあ（電話0570・02・9999）

## 豊田市能楽堂 五月能

五月十二日（土）午後二時開演
豊田市能楽堂

解説 石淵 文栄（能楽コーディネーター）

狂言 因幡堂（大蔵流）
夫 善竹 十郎　妻 大蔵吉次郎
後見 善竹大二郎

能 巴（宝生流）
三川 泉
室生 閑
則久 英志
大日方 寛
善竹富太郎
間 国川 純
後藤孝一郎　竹市 学
後見 佐野 由於
小倉健太郎
地謡 澤田 宏司
高橋 憲正　大坪喜美雄
和久荘太郎　今井 泰男
水上 優　高橋 章
衣斐 正宜

主催 豊田市能楽堂

◆入場料／全席指定（税込）
正面席六、〇〇〇円、脇・中正面席四、〇〇〇円
※脇・中正面席は学生半額
◆チケットの販売場所／豊田市能楽堂（☎0565・35・8200）
チケットぴあ　Pコード三七三―五〇五
（☎0570・02・9999）

## 30周年記念 紅韻会大会

五月十三日（日）午前十時始
一宮尾西市民会館

素謡 羽衣
菊慈童（シテ）古田 昌久
（ワキ）加藤 金一
地謡 足立ツネ子　可知多可子
五十住富子　清水八重美
鵜飼 節子　林 十三子
大島たづ子　水谷 秋子

連吟 井筒
山本美代子
吉川喜美子
中田那美江

仕舞 熊野
鵜飼 良久

仕舞 班女
アト 梅若 修一
実盛（キリ）岡田 晃一
地謡 梅若 基徳
井戸 和男
池内光之助
梅若 善久

能 小鍛冶
前 梅若吉之丞
後 梅若 猶義
間 飯冨 雅介
椙元 正樹
野村小三郎
後見 岡田 晃一
梅若 善高
地謡 河村総一郎　加藤 洋輝
福井四郎兵衛　福井四郎兵衛
小川 晴子　梅若 雅一
小松 勝憲　井戸 和男
立花香寿子　梅若 修一
井上 良祐　池内光之助

主催 梅猶会

入場料 五〇〇〇円（前売・当日とも）
申込みは＝出演楽師、名古屋能楽堂
お問い合わせ＝桑名市西別所1061―5
（定期能連絡所）小松勝憲方
電話0594・23・4582

仕舞 高砂
嵐山
屋島
小川 利雄
江口 友章
山下 鉱一

仕舞（披キ）鶴亀
野宮
猩々
女郎花
渡辺 紗里
山本美代子
河野カズエ
春日井夕紀子

連吟 松風
西岡 隆子
川崎あきゑ

能 通小町
多久島法子
渡辺 節子
雨夜之伝 福王 知登
河村真之介
後藤孝一郎
藤田六郎兵衛

連吟 鵜飼
春日井夕紀子
名倉 菊子
河野カズエ

国栖
安井美智子
長瀬ミホ子
佐橋由美子

仕舞 阿漕
宮田 弘子

巻絹
山下貴美子
江口 砂絵

融

舞囃子 東北
馬場 英子
大倉慶乃助
後藤嘉津幸
藤田六郎兵衛

安宅（五段）
加藤美智子
大倉慶乃助
後藤嘉津幸
藤田六郎兵衛

素謡 景清
トモ 斉藤 信輔
ツレ 多久島法子
吉川喜美子　赤松 禎英

連吟 実盛
山本 淳子
馬場 英子

舞囃子 砧
前 鬼頭貴代子
河村真之介
後藤孝一郎　藤田六郎兵衛

山姥
立廻り 川崎あきゑ
河村真之介
後藤孝一郎　中田 弘美
藤田六郎兵衛

仕舞 笠之段
谷口 寛子
弱法師
加藤新一郎
鉄輪
伊藤健一郎
田村（キリ）
杉浦 寿康
松虫（クセ）
加藤 千一

独吟 勧進帳
川崎 信義
薪之段
加野昭二郎

仕舞 清経（クセ）
古井 佐季
高野物狂
御牧 紀代
山姥（クセ）
福間 克彦
実盛（キリ）
冨士道周明
白楽天
佐久間美親

能 船弁慶
子方 赤松 裕一
後 西岡 隆子
前 山本 淳子
前後之替 福玉 知登
是川 正彦
間 喜多 雅人
大倉慶乃助
後藤嘉津幸
中田 弘美
藤田六郎兵衛
善竹 隆平

番外仕舞（祝言）難波
大槻 文蔵

［お来場歓迎］

（終了予定午後五時頃）

主催 紅韻会
渡辺節子

（②面よりつづき）

橋静夫・奥善助（ワキ）

七月十八日、御園座八階ホールに宝生九郎宗家を迎え、名古屋宝生会主催による素謡三番「通小町」宝生九郎・野口禄久・辰巳孝、「羽衣」倉本雅・三上藤、「景清」宝生九郎・辰巳孝・内藤泰二・野口禄久、「羽衣」の地謡は全員女性。

七月十九日、邦謡会・梅田邦久が主宰する名古屋謡曲仕舞教室の社中発表会に続き名曲鑑賞の夕。素謡二番「小袖曽我」柴田収武、分林弘一・梅田邦久（ツレ）「俊寛」柴田初太郎、分林弘一・梅田邦久（ツレ）、柴田収武（ワキ）、仕舞四番「屋島」分林弘一「玉之段」梅田邦久「野宮」柴田初太郎「殺生石」柴田収武。

七月二十六日、第三回名古屋謡友会。多彩な囃子の種々相が聴けて好評な盛夏の名物催会である。番組は、舞囃子「加茂」内藤泰二、素囃子「神舞」小島鉄次郎・後藤孝一郎・筧鉱一・野崎太郎、舞囃子「頼政」観世武雄、連管「草之神楽」藤田六郎兵衛・昭彦、小舞二番「小原木」井上礼之助「海道下り」井上松次郎、舞囃子「三笑」柴田初太郎・久田秀雄・河村鉦二、一調「勧進帳」田鍋惣太郎・本田秀男、舞囃子「龍田」大塚一二、一調「遊行柳」鬼頭八郎・泉嘉夫、袴能「土蜘蛛」大槻秀夫・高安滋郎。当時、能楽殿は未だ空調設備が無く、能楽界は装束納あと夏期は素謡会が専らで、能を舞うとすれば袴能だった。

同日、狂言方・大蔵流の重鎮・山本東次郎則重が急逝、享年六十四歳。前年、十月十九日、東次郎は二部制の第一回・中日名人狂言会の第一部「二人袴」では聟シテ山本則寿の、実生活でも父親の役を微笑ましく演じ、「三人片輪」の主人役では不埒な三人（シテ茂山弥五郎・茂山千五郎・大蔵弥太郎）を相手に文字通りの謹厳さを以って舞台を引き締め、二部の「靱猿」では名人を謳われる弥五郎（この年、十月四日、既に金春流宗家信高より善竹姓を贈らるの猿曳を相手に剛直にして柔らかな、円熟の味わいをみせ、見事な舞台成果を上げ（太郎冠者・茂山千之丞、子猿・石原肇）強烈な印象を残したが、残念なことにこれが当地での最後の出演となった。

山本東次郎（一八九八年九月二十六日－一九六四年）は前名・河内晋、一九二九年に山本家に入り、一九三五年に東次郎を襲名（三十六歳）する。名古屋初来演は一九三七（昭十二）五月二十二・三の両日、霞会を主宰する田鍋惣太郎の先考常照院十三回忌追善能での「朝長・懺法」梅若万三郎のアヒ、「二千石」と「泣尼」次アド、二日目、「棒縛」、「望月」野口兼資のアヒ。以後、来名は昭和十六年五月八日、鶴亀会・昼の部「素袍落」、「夜討曽我・十番斬・大藤内」梅若猶義のアヒ、夜の部「泣尼」アド。昭和十六年九月二十三日、鶴亀会・昼の部「宗論」アド（シテ武藤達三）夜の部「右近左近」。昭和十七年五月二十四日、梅若万三郎主催・能楽鑑賞会・昼の部「伯母ヶ酒」。昭和三十一年十月六日、第二回・中日五流能・夜の部「半部・立花供養・替之型」金剛巌のアヒ、「八尾」、と戦前戦後を通じて僅かだが、その存在の大きさが窺える。山本東次郎はまた学究肌の研究熱心、『間狂言の研究』昭和十六年十月廿五日・わんや書店刊、の名著があるが、替間について巻末に次のようにある。

「朝長　懺法」「春日龍神　町積り　眞の門」「土車　打切」「石橋」「邯鄲　置鼓」の五番を、大蔵流では、一子相伝と称して居る。古い頃には此れに「鶴亀　置鼓」が加へられてあった。此れは弟子家として、道義的に、絶対に勤める事の出来ないのが建前である。然し其れでは、実際に用の足り無い事が往々ある。何故ならば、伝統を尊ぶ斯の道の掟として、故人、先人が申合せて無い流儀とは絶対に相手をしない。かうした不文律がある。座付きの必要も此處に在った。従って以上の内、朝長、石橋は、止むを得ず勤める場合もあるが、出来得る限り通常の間で勤める方針を取って居る。

扨私は色々の角度から、間狂言と言ふものを見て来たが、結局は、間も能に帰一されるものであると言ふ事が判明り言ひ度かったのである。間は何處までも能の一部である。決して水と油では無い。去れば、譬へ狂言方が演じても、狂言方が、狂言に於いて許される限度まで、誇張して演奏してもよい、と言ふ様な考へは、再考を要する。狂言方の領分である以上、狂言方の立場は、確守しなければならない。けれ共、其れは狂言の定義が定まった上の問題に属する。要するに能を知らなければ間は勤まらない。間も能である。此の語を最後に此の稿を終り度い。（完）

伝統を重んずる山本東次郎は、常々古格を守り、俗に流れることをきつく戒めてきたが、また、狂言の解釈についても見所の側に理解を積極的に求めている。『能楽全書』第七巻・昭和五十四年十二月五日・東京創元社刊の「狂言」の項は次の見解を収録。

**狂言のこと**　狂言とは狂った言葉と書く。だが、この「狂った」を、異常とか、奇想天外とかの意味に解しては当らない。「末広がり」の三人の登場人物は、いづれも「狂った人間」ではないし、また彼等によって奇抜な事件が演ぜられるのでもない。狂言に出て来るのは、ほとんど平凡な人間ばかりであり、演ぜられることも普通のありふれた出来事なのだ。では、なぜ狂言といふのであらうか。

狂言の「狂」は「この時計は狂ってゐる」といふ場合の「狂ってゐる」の意に解すべきなのではあるまいか。その時計は、機械が全然でたらめにできてゐるのではない。ただ、たまたま正確な時刻を指してゐないのである。狂言の登場人物も特殊な人間ではなく、またその演ずることも、世にありふれたことである。ただ、何かしら欠けたところのある人間であり、そのため、つい笑ふべき事件がおきてしまふのだ。

末広がりの太郎冠者は、末広がりが何であるかも知らずに都に買ひにゆく。大果報の者と名乗るシテも「地紙よう、骨にみがきをあて、……」と、事こまかに注文は述べるけれども、冠者が末広がりを知らないといふ、もっともかんじんなことを、うかつにも、考へてもみないのである。自分の買ふべき物を知らずに出かける者、召使に充分な注意を与へずに買物を命ずる者、いづれもどこか欠けてゐる。その結果、笠を売りつけられるといふ笑ふべき事件が起るのだ。

しかし、これをただ笑ってすますことができるだらうか。私はさうは思はない。これに似た過ちを、我々はとかくしがちなのである。これに類したことは、我々の身近によく起るのだ。狂言は決して人間性を離れてはゐない。人間の持つ弱点を取り上げて、その側面から人間を描いてゐるのである。

人はとかくあり得ないことをあるやうに思ってしまふものである。夜店で反物を買ひ、あとで計ってみたら、尺が足りなかったなどといふことはよくあることだが、その物の相場を知ってゐたなら、こんな間違ひをするはずはないのだ。それなのに人は、あり得ないはずのやすさについひかされて失敗をしてしまふのである。太郎冠者も笠を末広がりだといはれた時、ふしんに思はねばならなかったはずだ。それなのに、いいかげんな気持でこれを求めてしまったのである。

自己の確立してゐない人間は、いつの世にも多いが、狂言はそれを典型的に描いてゐる。

武悪（ぶあく）の太郎冠者は、主人と共にある時は、主人の意見に同意して武悪を討ちにゆく。ところが、武悪の話を聞くとそれに同情し、情にほだされて、彼の命を助けてしまふのである。このやうに、はなはだ個性のない人間は狂言にしばしば描かれる。

鎌腹（かまばら）の太郎、ばくちにふける縄なひの主人。彼等は、まじめに家業をつとめてゐたら、鎌で腹を切らうとしたり、「やがてお内儀をも打ち込ませられう」といはれたりしないですんだはずである。彼等に見られる良識の欠如。おのづから気がついてゐても、ずるずると安易につく人間の弱さ。狂言はかかるものを、ありのままに描いてゐる。そして、我々はそれをありのままに演じてゐるのである。観る人は単に観るのではなく、その表はすものに同化して、みづからを反省してもらひたいと思ふ。――以下略――

舞台写真は死の二週間前、矢来能楽堂での観世九皐会定式能の「右近左近」、私家版『先代　山本東次郎の世界』昭和六十一年十月十日・山本会刊より転載。

――以下次号――

㊤山本東次郎の「右近左近」
㊦著書「間狂言の研究」

## ◆早春の舞台から◆

# 「豊田市能楽堂 新春能」「第九回 万作を観る会」「名古屋宝生会定式能」と「第二回　千作と千之丞の会」「名古屋観世会定例公演能」

竹尾邦太郎

**「棒縛」**シテ太郎冠者・右近、肩衣は鯰文様。牽強付会の誇りを免れないが、鯰とくれば連想は瓢箪、俗に捕え処が無いを瓢箪鯰と云い、禅の難しい公案にもあるが、更に瓢箪は酒器と連想される。長年召し使うアド主・祐介にして一筋縄では行かない酒客・太郎冠者の人物、把握しきれなかった難しさを肩衣の鯰が暗示する一方で、太郎冠者・右近にしてみれば、背中にしょった倶梨伽羅紋紋ならぬ肩衣の鯰は、主に挑む意気、後ろ手縛られた次郎冠者・右矩との酒宴も意気軒昂。不自由な体で舞う小舞も活き〳〵と、キリの「松風」のパロディー、〽嬉しや此処に酒ありて、〽影は二人満つ汐の、と盃に映る主の顔に、驚きはしても内心は舌を出しているのでは、の横着な気分も窺わせ、右近・右矩の親子、息の合ったところをみせる。（24分）

**「二人静」**吉野・勝手明神の神主ワキ常好、七日正月に七草を供える神事に里女ツレ紀長を若菜摘みに遣る。吉野は静が義経と訣別せざるを得なかった地、静の亡霊シテ万三郎が里女姿でツレに呼掛で現われ三ノ松、問答となる処が面白い。シテは我が罪業哀しく、社家やそのほかの人々に頼み、一日経（一日の写経）で跡弔うようツレに言伝てれば、怪しみながらも応諾し、名を質すツレ。答えてシテは、先づは一日経での弔い、もし我を疑う人あればその時、汝に憑（と）り付き委しく名乗る、と問答をしながら三ノ松へ歩を運ビ、ツレにより近く来て圧力を掛ける無気味。舞台へは入らず、初同（嘉章・一郎ら）〽かき消すやうに、の返シ句に妖しい雰囲気を残し、三ノ松で小廻りから直り静かに中入、短い前場に後場への興味を惹く。

摘草帰りの遅いを咎められるツレの、ワキとの問答は不思議な女との出合のこと。本当と思えず話すつもりは、と言いも敢えず、「なに真しからずとや」と早くも憑（と）り付くシテの亡霊、紀長、的確にみせる。今や菜摘女に非ず、その変貌に驚くワキは静と判ると舞を所望、跡弔うを約せば、我が納めた装束は勝手明神にとツレ、着類の色・織・文様の悉くを詳しく述べれば、「これは不思議のこと」とワキ。紛う方なき原物を与えると、ツレは恭しく双手に捧げ、立って後見座。物着アシラヒのうちにワキは正中辺へ、下居に物着を見守る態から立つとワキ座、静が舞を見よと触れる。

金静烏帽子・紫長絹のツレの艶麗は正に静その人、〽今三吉野の川の名の、と謡うと、〽菜摘の女と思ふなよ、と後シテ万三郎がツレに呼応するかに出る。固よりワキに

（④面へつづく）

豊田市能楽堂新春能
㊤「棒縛」（左より）三宅右矩、三宅右近、祐介
㊦「二人静」（左より）梅若万三郎、梅若紀長
（杉浦賢次氏撮影）

（③面よりつづき）

姿は見えず、自在にシテに操られるツレを眺めるのみ。シテ・ツレ連吟に義経の悲運を言うサシから舞クセは吉野逃避行の模様。〽山風に散る花までも、とシテは一ノ松、ツレは大小前と追手を逃れる趣に、吉野山の奥深く〽急ぐ山路かな、で互いに遠く離れて向き合う処は、ツレは付いて来ているかをシテが案じる姿とも。逃避行の暗鬱もさりながら、頼朝の招喚で舞を急かされる心のうちも切ない。〽昔恋しき時の和歌、とシテとツレ互いに拍子一ツ踏み向き合うと、ツレは大小前から常座へ、シテはそのまゝ一ノ松で床几に掛かるとツレに合掌、ワキには見えないシテがツレに旨くやるように祈る心か、ツレは序ノ舞を舞い始める。途中、シテもその場に立ち、ツレとの相舞は二段目に舞台へ入る。向き合うとき、ツレやゝ遅れると見えたが大過無く、相舞のよく合う素晴らしさは序ノ舞三段美しく舞上げ、〽思ひ返せば古へも、でシテがツレの肩へ手を掛ける姿は、ツレへの慰労とも思われた。

キリは〽憂き世の習ひなればと、でシテは一ノ松へ抜け、ツレは正中、〽雪に吹きなす、と共に翳シて廻り、〽静が跡を弔ひ給へ、とシテが促すようにツレを指スと、ツレは下居にワキへ合掌、シテはそれを見て安堵した様に、返シ句に左袖返シ右ウケて留メた。形影相伴うなかでのシテとツレの在り様が万三郎と紀長の親子によって的確に描かれ好舞台だった。（1時間16分・1月14日・豊田市能楽堂　新春能）

**「腰祈」**　修行の帰途、祖父宅に寄る山伏アド小三郎、すっかり腰の曲った祖父シテ又三郎を見、祖父孝行とばかりに行法を以て背筋のばしに掛かるが、効き過ぎて二進も三進も行かなくなり「お許されませ」と逃げ出す。

腰を屈め、杖をつき、三ノ松、二ノ松、その都度右へキット面切り、きょろきょろしながら出るあたり、シテの戯画化された誇張は自然な老体以上、就中、アドの法力に硬直した腰を屈伸させられるところは、チャップリンを思わせ秀逸。又三郎、老練さに磨きがかゝる。（18分）

**「貰聟」**　聟アド幸雄と舅シテ万之介、及びその娘アド和憲の、当世にもよくある三者を繞る家庭騒動。

大酒をしては度々嫁をいびり出す聟も今回は別、嫁に手切れの印・小刀を与えれば、一時の迷いで無く本気と知って否応も無く里帰りする嫁。亦か、とシテは世慣れた年長者の分別、娘に戻るよう翻意を促すが、娘の覚悟のほど確かめると、やって来るに違い無い聟を断乎排斥の構え。一方、聟は、酔いが醒めれば後悔頻り、「余り度々の事によって外聞も悪い」とは言い条、目をつむる思いで舅宅の敷居を跨ぎ、おべっかたら〳〵。素っ気無く応対する舅。聞き耳たてる娘は、我が子の様子を知ると居ても立っても居られず顔を出す。「やい其所人で無し奴」と娘に手を出す舅に俄然手向う聟、擦った揉んだの挙句は御定まりの結末。子供可愛さに聟と連れ立って行く娘、残された舅の悲痛な叫びは男親の底知れぬ哀感。万之介、機微細やかにみせ好演。DV（ドメスティック・バイオレンス、家庭内暴力）が云々される当世だが、果して子は鎹（かすがい）足り得るのだろうか、をも思わせ幸雄・和憲も力演。（34分）

**「牛盗人」**　シテ藤吾三郎（万作）、牛車の牛を盗んだ廉で太郎・次郎両冠者（博治・晴夫）に拘引されアド牛奉行（萬斎）の前へ。罪状否認するも訴人が伴（子方・裕基）とあっては観念せざるを得ない。伴を咎め、詰り、泣くシテを筋違い、と一蹴して盗んだ牛の消息を糺すアド。身上不如意ゆえ牛を盗み、売った金で親の追善を勤めた、のシテの弁明が通る訳もなく、ならば、とシテは仏弟子にも同じ事例がある、の方便（仏教で真実の教法に誘い入れるための仮に設けた教え）を熱弁、正当性を述べ立てるが、判決までは獄へ、の処で膝を進める子方、望む褒美は物品に非ず親の命、褒美は何なりとも、の約束違えるなら親子共に成敗を、と涙ながらの懇願。己れを恥じ、伴の真意を知って神か仏かと泣くシテに、貰い泣くアドは、「さて〳〵不憫な事よなう」と太郎冠者に同意を求め、「物の憐れを知らざるは、たゞ木石に等し」とシテを釈放する。大岡裁きを逆手に取った様な展開は、孝行の徳を寿ぐ地謡（万之介ら）の留メ。万作家・三代による人情劇は、役の心理よく弁えた子方・裕基君の健気な活躍を軸に、見事な人間模様をみせて爽やかだった。（37分・1月21日・第9回　万作を観る会）

**「加茂」**　播州室の明神の神職ワキ元、従者ワキツレ正樹・宰を伴い祭神が同じ加茂明神に詣でるところ、折から水を汲みに出た里女シテ愛・ツレ京子が渚の壇に立つ白羽の矢を崇める様子に疑問を抱き、わけを質すと、加茂明神の縁起を語るシテ。面・増女の気位も滲む口跡の美しいシテ語は上々、ただ傍に立つツレが水桶を持たないのは何か手持ち無沙汰に思え、絵にならない憾み。汲む水に触発されるように、ツレを代弁する地（輝和・孝ら）とシテの掛合はロンギ、古歌の一部を引用しつつ水尽しに興がる趣の対話が快調。

後シテは別雷神、小柄な女性には損な役柄。赤頭・唐冠・厚板着付・赤地雲立湧文半切・紺地霊雲火焔太鼓文袷狩衣（衣紋付）・幣を持ち威容をみせるも、線の細さは如何ともし難く、技の切れは見せても、それが軽快では逆効果、別雷神らしい重み、舞働の荒々しい力強さは感じられなかった。選曲に一考あってよいと思うのだが……。前だけを買う。（1時間26分）

**「素袍落」**　主・弘之の急な参宮の誘いに乗れない伯父・友彦、使いの太郎冠者シテ融に門出とて酒を勧めれば、固より上戸の太郎冠者、一度は断るも「さやうならばたった一つ」とにんまり。「ほ、これは大盞が出ました」と相好崩さんばかりは三杯目を要求するに及んでは「この結構な酒に酔うなどということは御座らぬ」と次第に酔が進みくどくなるところ、酔態堂に入る。餞に頂戴の素袍を、謡機嫌のうちに落して狼狽えるところも可。（29分）

**「葵上・梓之出」**　病臥の葵上に憑く物怪の正体を暴くようにと廷臣ワキツレ宰、照日ノ巫女ツレ荘太郎に梓の呪術を行わせる。アヅサの囃子（鉱一・冨司忠）にのせ〽天清浄地清浄、と祈祷のうち、〽寄り人は今ぞ寄りくる、と御息所ノ生霊シテ満次郎、半幕に下半身を現わすと、一旦幕は下り、再び上がれば、シヲッて暫し佇立のシテ、面泥眼・襟白浅黄・白地金鱗箔着付・黒地丸紋尽縫箔腰巻・萌黄地立湧牡丹向蝶文唐織壷折の姿。誘われるように一ノ松へ出るシテ。世間の人は仏法に縋り火宅を出もしようが、破局の恋〽遣る方なきこそ悲しけれ、とシヲリ運ビ出す。言い訳がましいことを述べる次第・サシ・下歌・上歌を省き、直ぐ〽梓の弓の音はいづく、となるところ、性急な気持ちには葵上に対する鬱勃たる敵愾心が。分けても枕之段、〽思ひ知れ、と扇で葵上をキッと指ス滾る怒りが〽恨めしの心や、とシヲリ悔し泣きになるところ、また、露のように消えるなら〽それさへことに恨めしや、と踏む数拍子の激しさ、満次郎、気力溢れる充実ぶりを発揮する。後シテは、兜巾・白大口・縞水衣の横川小聖ワキ雅介を逆襲、左手シテ柱に廻して身を捩り、打杖振り翳して威嚇するところの迫力、印象的。地は輝和・正宜ら、間・靖浩、笛・希世、太鼓・義命、主後見・雅。（53分・1月28日・宝生会定式能）

名古屋観世会定式能
㊤「翁」　片山九郎右衛門、㊦「三番叟」　井上靖浩
（杉浦賢次氏撮影）

**「二人大名」**　大名甲・千五郎、乙・千三郎、路通ノ者・あきら、今や脂の乗りきったトリオ。大名甲と乙、甲だけが恰好つけて太刀を持って出た按配、どうにかして誰かに太刀を持たせたいのは、身軽になりたいだけでなく、乙に己れの威力を見せたい、の気もあろう。しかし、大名たる者、いきなり嚇しつけて持たせる訳にもゆかず、路通ノ者を見かけると、頼み事は後に、先づ慇懃に一礼ののち一転、強面になり太刀に物を言わせることに。迂闊にも危ない太刀が相手に渡り、敏いのは路通ノ者、大名二人の身ぐるみ剥いだ上、鶏の蹴合い・犬の咬み合い・起き上り小法師の真似をさせ、徹底的に玩弄する。沽券に関わる屈辱も、やっている中に二人は興に乗り、喜々として戯れる稚気。でんぐり返らなければならない起き上り小法師、少々きつかったのでは、と思われるが元気一杯、結構だった。（40分）

**「縄綯」**　博奕のかたに太郎冠者シテ千之丞を某・七五三の方へ遣る主・正邦。それも納得づくで遣るのではなく、文に托して、というのも後ろめたさか。先方でそうと知ったシテは情け無い主の仕打ちと、某の人使いの荒さに反発、言い付けられた用を悉く拒む。埒があかないとみて某、金銭の清算を要求しに主を訪ねれば、主は一計を案じ、再度の勝負に私が勝ったことにして一旦シテを取り戻し、縄綯が上手なことを知って貰った上での相談、ということになる。戻った某、シテを呼びつければ、「ははあ、呼ぶさうな」と感情を押し殺した冷やかな呟き。主の許に戻れるとあっては帰心矢の如く、某と別れるや嬉しさに「いつがいつまであの悪に使はるることかと存じた」と安堵の悪口も活き〳〵とシテ。縄綯の件での某方の悪口雑言は嫌味など毛程も無く、あっけらかんとして痛快、千之丞、語芸の極をみせた。（38分）

名古屋観世会定式能
㊤「張蛸」　㊧佐藤融、㊨井上菊次郎
㊦「熊野」　㊧観世清和、㊨福王茂十郎
（杉浦賢次氏撮影）

名古屋観世会定式能
「養老」　片山清司　（杉浦賢次氏撮影）

**「無布施経」**　布施を出し忘れた檀家に千之丞、何とか気付かせて如何しても布施にありつきたい出家・千作。「もうちと此方へ来てやう聞いて下され」と呟払いもぢれったげな出家に、素知らぬ顔と紙一重の生真面目な表情の檀家は「心得ました」とは言い条、何も心得て居らず、只々拝聴するばかり。阿吽の呼吸も見事に、人間の心理の深層を鮮やかに衝いて至妙。案内リーフレットに言う「兄弟で八十年かけて作りました空気」存分に呼吸させて貰った。（35分・2月8日・第二回千作・千之丞の会・京都観世会館）

**「翁」**　千歳・嘉宏、小気味よい袖捌キに跳ねるような躍動感。翁シテ九郎右衛門、荘重厳粛に瑞気漲る、格調の高さ。三番叟・靖浩、揉ノ段の活気。（1時間）

**「養老」**　御当地能は孝子譚。シテ清司、清澄な山の井の水、薬と思うだけで、老いの姿も若返る嬉しさ、精気をみせる。（1時間21分）

**「張蛸」**　「末広かり」と同工。果報者シテ菊次郎の説明不足で干蛸の代りに張太鼓を求める破目になった太郎冠者・融の宮仕えの辛さ。囃子物で機嫌を取れば浮かれるシテ、和楽の景。（32分）翁と脇能のシテは代ったが今回は式能に則った本格の導入部、久しぶりに堪能。

**「熊野・読次ノ伝・村雨留」**　病母を案じながら花見車に乗る熊野シテ清和、憂愁の思いを胸に都大路を往く。楚々とした気品に陰る寂しみ。（1時間25分・2月12日・観世会定例公演能）

◇……◇

# 能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
ＦＡＸ（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

## ＮＨＫ放送予定（平成19年5月～6月）

◆ＮＨＫ－ＦＭラジオ能楽鑑賞（毎週日曜日7時15分～8時）
5月26日　「杜若」（再）（宝生流）　佐野　萌ほか
6月3日　番囃子「卒都婆小町」①（観世流）　関根祥六ほか
6月10日　番囃子「卒都婆小町」②（観世流）　関根祥六ほか
6月17日　素謡「井筒」（宝生流）　三川　泉ほか
6月24日　素謡「湯谷」（喜多流）　香川　靖嗣ほか

◆ＮＨＫ教育テレビ
5月26日㈯・29日㈫　能・狂言入門第4回
狂言の奥行き「花子」に探る恋の真意
講師　梅若六郎・山本東次郎

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

（能・狂言演能関係）
（TEL 052－231－0088）

［5月］
20日㈰　第50回狂言やるまい会記念公演
26日㈯　梅猶会定期能名古屋公演　（有料）
27日㈰　名古屋観衛会（無料）（番組①面）

［6月］
1日㈮　名古屋能楽堂定例公演　（有料）（番組①面）
3日㈰　幸謡会能　（有料）（番組①面）
9日㈯　能楽後継者育成研修発表会（無料）（番組①面）
若鯱能　（有料）（番組②面）
10日㈰　名古屋観世会定例公演　（有料）（番組②面）
17日㈰　名古屋宝生会定式能　（有料）（番組②面）
23日㈯　青陽会定式能　（有料）（番組②面）

## 若鯱能　初の公演

### 6月9日名古屋能楽堂

### 能楽協会名古屋支部

能楽後継者の育成と能楽協会の若手の研究会として、今年発足した「若鯱能」は、きたる六月九日（土）名古屋能楽堂で、午前十時から「能楽後継者育成研修発表会（第十五回）」、午後一時から「若鯱能」として、喜多流能「八島」金剛流能「源氏供養」宝生流能「鵜飼」の能三番、狂言「鎌腹」の上演で催される。入場料千円。入場券取扱いは、出演者、名古屋能楽堂（番組①・②面掲載）

## ◆春の叙勲　旭日双光章　鈴木理之氏

選定保存技術「能楽小鼓（胴・革）製作修理保持者・鈴木理之（まさゆき）氏（七〇）は、四月二十九日発表の春の叙勲で「旭日双光章」受賞の栄に輝いた。

鈴木氏は、能楽小鼓の選定保存技術者として、平成七年国から選定されている。同氏の父・礒吉（いそきち）氏も小鼓製作、修理で顕彰され、父子2代にわたり技術を伝承、文化財保護功労として受章された。名古屋市千種区振甫町在住。

## 名古屋能楽堂開館10周年記念　和泉流　狂言づくし　8月18日・2部制で上演

名古屋ゆかりの和泉流が名古屋能楽堂開館十周年を記念して、今夏八月十八日「狂言づくし」を開催する。

公演は昼の部、夜の部の二回、太郎冠者狂言の名曲「寝音曲」・「千鳥」、鬼狂言の代表曲「首引」、平成十一年に初演された新作狂言「山車争」など多彩な番組。

演目は次のとおり。

■八月十八日（日）
▽昼の部　午後一時三十分始
◇おはなし　名古屋女子大学教授　林　和利氏
素囃子「神舞」
狂言「戎毘沙門」（野村又三郎）
狂言「千鳥」（野村萬斎）
狂言「山車争」（井上菊次郎）
（原作・北島徹也、企画・藤田六郎兵衛、設計・井上菊次郎）
▽夜の部　午後六時三十分始
素囃子「八段之舞」
狂言「鍋八撥」（野村万斎）
狂言「寝音曲」（野村又三郎）
狂言「首引」（佐藤友彦）
料金（各部とも）
S席五〇〇〇円、A席四〇〇〇円、B席三〇〇〇円（全席指定）
［チケット取扱］名古屋市文化振興事業団／052・249・9387▽名古屋能楽堂／052・231・0088▽ナディアパーク8階プレイガイド／052・265・2015▽チケットぴあ／0570・02・9999
主催＝名古屋市文化振興事業団（文化事業部・名古屋能楽堂）名古屋市

## 京都　京都薪能

### 6月1、2日、平安神宮

伝統ある京都薪能はことし第五十八回をむかえ、六月一日（金）・二日（土）の二日間、平安神宮で催される。午後四時半開場、午後五時半開演。

第一日目（六月一日）　観世流能「嵐山」（前シテ河村博重、後シテ杉浦豊彦）、金剛流能「雪」（シテ金剛永謹）、大蔵流狂言「吹取」（シテ茂山千五郎）、観世流能「鵜飼」（前シテ橋本礒道、後シテ大江又三郎）

第二日目（六月二日）　観世流能「氷室」（前シテ味方玄、後シテ河村晴道）、観世流能「松風」（シテ梅田邦久）、大蔵流狂言「木六駄」（シテ茂山七五三）、金剛流半能「石橋・獅子之式」（シテ豊嶋三千春）

主催＝京都市・京都能楽会
協賛＝平安神宮
前売二五〇〇円（当日券三三〇〇円）、前売券発売＝平安神宮、市内各ホテル、高島屋、大丸、桧書店など、事務局＝〇七五・七五二・九〇二二番

## 名古屋観衛会大会

### 五月二十七日（日）午前十時三十分始　名古屋能楽堂

番外仕舞　経　正（キリ）　山本　博通
舞囃子　老松　稲葉　正信　笛　福井四郎兵衛　鼓　加藤　鉱一　鹿取　希世　洋輝
羽衣　可児島敬子　笛　福井四郎兵衛　鼓　中田　鉱一　鹿取　希世　弘美
舟弁慶（和合）　杉野　伸江　笛　福井四郎兵衛　鼓　加藤　鉱一　鹿取　希世　洋輝
仕舞　蟬丸　柿坂　正子
東北　真野　健
舞囃子　高砂　竹内美紀子　後藤孝一郎　河村眞之介　竹市　学　加藤　洋輝
桜川　榊原　和美　後藤孝一郎　河村眞之介　大野　誠
吉野天人（五段）　秦野　淳代　後藤孝一郎　笛　鉱一　中田　竹市　弘美　学
弱法師　足立奈々子　後藤孝一郎　河村総一郎　大野　誠
雲林院　中川　芳子　後藤孝一郎　河村総一郎　加藤　大野　洋輝　誠
独吟　俊寛　神野勝之助
素謡　桧垣　川久保彰礼　波多野　晋
能　山姥　前田　和子　伊藤健一郎　中村　宜成　福王　知登　是川　正彦　野村小三郎　河村総一郎　柳原冨司忠　中田　弘美　藤田六郎兵衛
番外仕舞　巴　山本　章弘
班女　山本　順之
舞囃子　融　唐船　湯浅　知子　後藤嘉津幸　河村眞之介　竹市　加藤　洋輝
玄象（バンシキ）　山中　節子　河村総一郎　柳原冨司忠　加藤　竹市　洋輝　学
クツロギ　脇田喜美子　後藤嘉津幸　河村眞之介　中田　藤田六郎兵衛　弘美
番外仕舞　鶴亀　山本　勝一
天鼓　山本　博通
能　海士　子方　中田　一葉　山下　麻乃　中村　宜成　福王　知登　是川　正彦　野村小三郎　河村眞之介　後藤嘉津幸　中田　弘美　藤田六郎兵衛
間　（終了予定六時前）
附祝言
［御来場歓迎］
主催　名古屋観衛会　名古屋正花会
指導　山本勝一　山本博通

## 名古屋能楽堂定例公演

### ～尾張の殿様が観た能　初代・徳川義直～

六月一日（金）午後六時半開演　名古屋能楽堂

狂言（和泉流）　引敷聟　野村小三郎
能（宝生流）　邯鄲　子方　田口　将成　辰巳満次郎　飯冨　雅介　高安　勝久　笛　寛　鉱一　杉江　元　後藤嘉津幸　加藤　洋輝　椙元　正樹　藤田六郎兵衛　野口　隆行
間　松田　高義　眞下　智行　野村又三郎　後見　伴野　俊彦

## 幸謡会能

### 六月三日（日）午後二時開演　名古屋能楽堂

番組
舞囃子　富士太鼓　大槻　文蔵　河村眞之介　後藤嘉津幸　藤田六郎兵衛
仕舞　鵜之段　泉　嘉夫
地謡　八神　孝充　武富　康之　赤松　禎友　松山　幸親　黒田　博　祖父江　修一　斉藤　信隆　須部　甫
能　求塚　加藤　春枝　今沢　美和　近藤　幸江　飯冨　雅介　橋本　宰　野村小三郎　河村眞之介　後藤嘉津幸　加藤　洋輝　藤田六郎兵衛
間　後見　赤松　禎友　泉　嘉夫　地謡　黒田　博　八神　孝充　須部　甫　松山　幸親　祖父江　修一　斉藤　信隆　大槻　文蔵　武富　康之
附祝言
主催　幸近藤幸江会
会員券　五千円（全館自由席）
TEL（〇五六四）二一－二五二九　岡崎市鴨田本町十一－三
後見　竹内　玉井　博祐　竹内　良伯　稲川　寿一　竹内　淳一　水上　輝和　久野　幸三　衣斐　正宜　和久荘太郎　佐藤　耕司　衣斐　澄子　愛
地謡
（午後八時四十五分頃終了予定）
主催　名古屋市文化振興事業団（名古屋能楽堂）　能楽協会名古屋支部
入場料＝一般四〇〇〇円（前売三五〇〇円）　学生二五〇〇円（前売二〇〇〇円）
取扱い＝名古屋能楽堂（☎052・231・0088）　プレイガイド（栄プレチケ92、松坂屋ほか）

## 能楽後継者育成研修発表会（第十五回）

### 六月九日（土）午前十時始　名古屋能楽堂

番組
舞囃子（観世）　吉野夫人　久田勘吉郎　河村裕一郎　柳原冨司忠　加藤　藤田六郎兵衛　洋輝
舞囃子（金剛）　清経　大川　磨美　後藤嘉津幸　笛　鉱一　竹市　学
舞囃子（金剛）　百万　鈴村　昌美　河村眞之介　柳原冨司忠　加藤　竹市　洋輝　学
舞囃子（金春）　巴　鬼頭　尚久　船戸　昭弘　笛　鉱一　大野　誠
能（観世）　経正　吉沢　旭　飯冨　雅介　河村眞之介　福井　聡介　鹿取　希世　久田勘吉郎　須部　甫　八神　孝充　黒田　博
後見　久田　勘鵬　泉　嘉夫　地謡
附祝言
（十一時四十五分頃終了予定）
［御来場歓迎］
主催　能楽協会名古屋支部
「愛知県文化振興基金事業」

## 豊田市能楽堂　七夕能

**7月7日「班女」「釣針」**

豊田市能楽堂では、「七夕能」として七月七日、能（金剛流）「班女」と狂言（大蔵流）「釣針」を公演する。主催・豊田市能楽堂、豊田市、豊田市文化振興財団。

能「班女」笹之伝（シテ今井清隆、ワキ植田隆之亮）

狂言「釣針」（シテ大蔵弥太郎、アド大蔵千太郎）

入場料　全席指定（税込）正面席六〇〇〇円、脇・中正面席四〇〇〇円、学生半額、チケット取扱い＝豊田市能楽堂（電話0565・35・8200）チケットぴあ（電話0570・02・9999、Pコード373・506）

## 第9回 ナディア狂言

**6月22日アートピアホールで**

名古屋の若手狂言師たちによる公演「ナディア狂言」は、今回第9回をむかえ、六月二十二日（金）、名古屋市中区のアートピアホール（ナディアパーク11階）で開催される。開場午後6時　開演午後7時。主催／ナディア狂言運営委員会、中日新聞社。後援／名古屋市・愛知県。協力／狂言共同社

解説　名古屋女子大学文学部教授・林和利氏

狂言「昆布売」（昆布売・鹿島俊裕、大名・今枝靖雄）

狂言「茶壷」（すっぱ・今枝郁雄、中国の者・井上靖浩、目代・佐藤融）

入場料（全自由席）前売一般二五〇〇円、学生一五〇〇円、親子ペア三五〇〇円（当日は五〇〇円増）

チケット取扱い＝ナディア⑧プレイガイド（ナディアパーク8F）TEL052・265・2015

ナディア狂言運営委員会＝TEL090・7031・8722

## 若鮎能

六月九日（土）午後一時始
名古屋能楽堂

**番組**

能（喜多）**八島**　松井俊介　長田高安勝久　河村眞之介　柳原富司忠　大野誠　間　那須与一語　佐藤融

後見　加藤誠子　平塚昭子　地謡　伊藤英毅　加藤領一　栗谷浩之　福田勝　森健　高橋呻二　長田暁　和谷衡市

狂言　**鎌腹**　井上靖浩　鹿島俊裕　井上菊次郎　後見　佐藤友彦

能（金剛）**源氏供養**　佃陽子　杉江元　椙元正樹　河村眞之介　後藤嘉津幸　鹿取希世　後見　百々康治　宇高通成　竹市幸司　地謡　吉岡美紀　大川磨美　鈴村昌美　田中春奈　熊谷眞知子　加藤かおる　伊藤雅子　波多野良子

能（宝生）**鵜飼**　衣斐愛　飯冨雅介　椙元正樹　今枝郁雄　間　後見　衣斐正宜　竹内澄子　地謡　笈鉱一　船戸昭弘　加藤洋輝　竹市学　田口将成　中村成利　中島暉夫　内藤飛能　和久荘太郎　平田正文　（午後五時頃終了予定）

附祝言

主催　能楽協会名古屋支部

［入場料］千円（当日も同じ）
［取扱い］出演者・名古屋能楽堂にて販売

## 戦後名古屋能楽史 ㊼

**〔第十八章〕**

**昭和三十九年（一九六四）**

竹尾　邦太郎

―承前―

八月二十三日、第五回大衆能、会場は例年通り冷房完備の愛知文化講堂特設舞台。午後からの二部制で一時始は能「経政」辰巳孝、狂言「雷」井上礼之助、能「猩々」柴田初太郎。三時半始は能「小督」大塚一二、仕舞二番「羽衣」福井道子「弱法師」柴田初太郎、狂言「蚊相撲」井上松次郎、舞囃子「忠度」観世喜之、能「巻絹」佐藤太俊、仕舞二番「藤戸」今井幾三郎「殺生石」辰巳孝、舞囃子「絃上」桜間龍馬、能「船弁慶」内藤泰二、喜多流の不参加が寂しい。

月が替り杉村竹翠の主宰する竹韻会は大槻十三　三年祭・武田宗治郎　二十三年祭　慰霊能。社中会のあと舞囃子「翁」杉村竹翠・大槻文蔵（千歳）、連吟二番「善知鳥」佐藤太俊、「朝長」稲生芳雄、能「清経・恋之音取」大槻秀夫・野口浩和（笛）、狂言「地蔵舞」野村又三郎、仕舞四番「鐘之段」岡田朗詠、「笠之段」田村勇、「玉之段」武田小兵衛、「船弁慶」南條秀雄、能「江口」梅若猶義、素謡「藤戸」観世元昭、仕舞五番「雨月」柴田初太郎、「弱法師」観世静夫、「花筐」観世元昭、「通小町」梅若盛義、「鵜飼」大槻文蔵、能「山姥・白頭」武田太加志、の大能。大鼓に山本孝の来演。

九月二十日、第四回　観世会定式能は素謡会。連吟「難波」後藤契雪、仕舞四番「籠太鼓」有賀滋子「大江山」福井道子「野宮」加糖良久「歌占」梅田邦久、連吟「三輪」芥川秀子、素謡三番「女郎花」林矩玄「花筐」大西信久「玄象」片山博太郎、舞囃子「砧」柴田初太郎、仕舞四番「雨月」大西信久「実盛」林矩玄「井筒」片山博太郎「岩船」片山慶次郎。

九月二十三日、佐藤太俊の主宰する松謡会の社中会の番外に「龍田」佐藤太俊、仕舞二番「嵐山」井戸良造「船弁慶キリ」梅若盛義。

十月、東京オリンピックの月。一日、能楽界にも東西の往き来が便利になる東海道新幹線が営業を開始する。

十月四日、中部金剛会定式能。番組挨拶が次の様にある。

菊花薫る好季愈々御清祥之儀御喜び申上ます　毎々中部金剛会定式能には格別の御厚情を蒙り有がたく御礼申上ます　就ては今回は聊か番組の趣きを替へ金剛宗家に当流の重習舞囃子「乱」広蓋之式をば演じていただきます　此曲は先年朝日五流能にて大阪府民奨励賞受けられし逸品であります　蟬丸は当流の元老にして無形文化財保持者豊嶋弥左ェ門師の熱演　黒塚は一昨年東都芸術祭にて奨励賞を受けられし今井幾三郎師の会心の曲であります　其他家元直門の面々並に在名楽師諸彦の御協力により催させていただきます　就中舞囃子「乱」は当地にては初演にて後見をば金剛永謹師が勤めらるる事とて多大の御期待をいただくべき曲と存じます　何卒御知友御誘合せ御鑑賞の栄を得たく存ずる次第であります　敬白

挨拶の通り番組は能「蟬丸」豊嶋弥左衛門・大塚一二、独吟「八嶋」伊藤鉄之進、仕舞二番「紅葉狩」片野東四郎「笠之段」片岡道子、舞囃子「乱・広蓋之式」金剛

（③面へつづく）

## 名古屋観世会定例公演

六月十日（日）十二時半開演
名古屋能楽堂

能**藤戸**　観世喜之　宝生欣哉　大日方寛　野口能弘　井上菊次郎　河村総一郎　後藤孝一郎　鹿取希世　間　後見　梅田嘉宏　武田邦弘　地謡　須部八神甫孝充　加賀久田勘鳴　高橋観世喜正　瞭一古橋正邦　祖父江修一

狂言**空腕**　太郎冠者　佐藤友彦　主人　佐藤融　後見　鹿島俊裕

仕舞**女郎花**　賀茂高橋瞭一　観世喜正　地謡　松山幸親　清沢一政　小島一英　武田大志

能**国栖**　子方　分林道隆　祖父江修一　梅若猶義　梅若吉之丞　白頭　杉本元　高安勝久　椙元正樹　河村大　柳原富司忠　加藤洋輝　大野誠　間　井上靖浩　今枝郁雄　後見　久田勘鳴　小島英一　地謡　本田勲　松山幸親　武田邦弘　梅田清沢一政　嘉宏大志　古橋武田邦久　梅田正邦　（終演四時頃）

附祝言

主催　名古屋観世会

［要会員券］
当日券八〇〇〇円（自由席）（枚数制限あり）

## 名古屋宝生会定式能

六月十七日（日）午後一時始
名古屋能楽堂

能**通小町**　佐野和久荘太郎　萌　高安勝久　河村總一郎　柳原富司忠　藤田六郎兵衛　後見　倉本雅　玉井博祐　衣斐愛　地謡　石森智幸　加賀山憲治　久野幸三　稲川壽一郎　辰巳満次郎　水上輝和　辰巳大二郎　内藤飛能

狂言**腰祈**　祖父　山伏佐藤友彦　太郎冠者　大野弘之　今枝郁雄　後見　鹿島俊裕

能**雲雀山**　子方　竹内澄子　佐藤健太朗　飯冨雅介　椙元正樹　笈船戸鉱一　昭弘　鹿取希世　間　井上菊次郎　佐藤融　今枝靖雄　後見　佐藤耕司　内藤飛能　地謡　鈴木久仁七　柴田勲　織田哲也　柴田賢治　稲川壽一　馬縅富四夫　水上輝和　辰巳大二郎

仕舞**歌占キリ**　衣斐愛　**鵜之段**　辰巳満次郎　和久荘太郎　石黒孝　馬縅富四夫　佐藤耕司　辰巳大二郎

## 青陽会定式能

六月二十三日（土）午前十一時開演
名古屋能楽堂

能**来殿**　衣斐正宜　飯冨雅介　椙元正樹　杉江元　井上靖浩　河村眞之介　後藤孝一郎　加藤洋輝　大野誠　間　後見　玉井博祐　衣斐愛　地謡　名倉信二　平田正文　竹内良伯　竹内淳一　和久荘太郎　辰巳満次郎　石黒孝　内藤飛能　（終了予定五時半頃）

当日券　五千円、学生券　二千円
お問合わせ＝出演能楽師又は事務局

仕舞**鐘之段**　近藤幸江　地謡　星野路子　久田三津子　今沢美和　三村徑布

能**頼政**　梅田邦久　杉江元　椙元正樹　河村眞之介　後藤孝一郎　鹿取希世　間　井上靖浩　後見　三村徑布　久田勘鳴　地謡　黒田将成　武田大志　高橋瞭一　古橋加賀　武田敏彦　清沢正邦　一政　黒田博　祖父江修一　古橋正邦　須部甫

仕舞**賀茂**　八神孝充　高橋瞭一　久田勘鳴　清沢一政　地謡　**水無月抜**　**籠太鼓**　**女郎花**

能**楊貴妃**　今沢美和　飯冨雅介　笈鉱一　後藤嘉津幸　大野誠　間　今枝靖雄　後見　前野郁子　梅田邦久　地謡　近藤幸江　八神孝充　武田大志　松山幸親　高橋瞭一　清沢一政　祖父江修一　梅田嘉宏

狂言**縄綯**　佐藤融　佐藤友彦　今枝郁雄　後見　大野弘之

能**海士**　子方　寺澤拓海　久田三津子　竇之伝　高安勝久　橋本宰　河村総一郎　船戸昭弘　加藤洋輝　竹市学　間　井上菊次郎　後見　近藤幸江　武田邦弘　地謡　前野郁子　八神孝充　須部甫　松山幸親　加賀敏彦　古橋正邦　久田勘鳴　梅田嘉宏

附祝言

主催　青陽会

［有料］前売券二、五〇〇円
当日券三、〇〇〇円
問合わせ＝名古屋市名東区一社三―一六二
久田勘鳴方
電話（〇五二）七〇五―一五八五

（②面よりつづき）

巌、狂言「蜘盗人」井上松次郎、一調「花形見」青木恒治・山田仁三郎（謡）、仕舞四番「清経」松野繁男、「井筒」広田泰三、「鐘之段」種田次郎、「鵜」豊嶋三千春、「黒塚・白頭」今井幾三郎。

なお『金剛』誌　第十九巻第三号（昭和三十九年九月発行）に編集子を聞き手の「宗家談話」の中に次の問答がある。

――この秋は追善能（金剛禎之助百年祭）のほか、他にもいろいろ催しがあって、お忙しいでしょうね。

**宗家**　秋は期間が短いところへもって、色んな催しが一斉に行われるので、どうしても忙しくなります。

――やはり芸術の秋なんでしょうね。今年はオリンピックもありますし……

**宗家**　オリンピック目標では、東京で能楽協会主催の展示能があり、これに広田が出演します。京都でもこの種の催しが計画されています。

――名古屋ではまた「乱」の広蓋之式があるとか……

**宗家**　これは舞囃子ですから時間も短く、いくらか楽です。ただ長袴で乱れ足をつかうということが大へんでね。いつも苦心します。

――この春の京都薪能でもありましたが、金剛流独自のもので、見ていてスマートな感じをうけますね。

**宗家**　そうでしょうか。御前掛りの形式のもので、上つ方から唐織を拝領し、それを即座に壷折って舞うというのがねらいです。長袴の上だけを脱いで、その上に壷折るのですから、格好に苦心します。

㊤昭和39年11月3日「釣狐」

十月五日から九日までを前期として水道橋能楽堂で、十二日から十六日までを後期として大曲・観世会館で、オリンピックに来日する外国人の観覧を意図する芸術展示の一環としてオリンピック能楽祭が前後十日間に亘って催され、名古屋からも高安滋郎・藤田六郎兵衛・田鍋惣太郎・野村又三郎が出勤する。因に番組は前・後期とも一日に狂言と能が各一番、二会場とも初日のみ「翁」付で最終日と合わせ三公演を特別とする。全番組は日付順に、「翁」宝生九郎、「二人袴」山本則寿、「石橋・大獅子」観世喜之・元昭、「棒縛」野村万蔵、「邯鄲」桜間龍馬・藤田六郎兵衛（笛）、「止動方角」善竹圭五郎、「葵上・梓之出」広田陛一、「蝸牛」野村万之丞、「綾鼓」近藤乾三・野村又三郎（間）、「鎌腹」茂山千五郎、「船弁慶・真之出」粟谷新太郎、「翁」観世銕之丞、「二人大名」野村万作・又三郎（アド）、「石橋・連獅子」宝生英雄・前田忠茂、「棒縛」高井則安、「邯鄲・傘之出」後藤得三、「悪太郎」野村万蔵、「葵上・梓之出」観世元正・田鍋惣太郎（小鼓）、「蝸牛」善竹弥五郎、「松風・見留」梅若六郎・高安滋郎（脇）、「鎌腹」三宅藤九郎、「道成寺」金春信高。狂言・能ともに外国人に理解され易い選曲で、日を追って盛況になったという（『能楽タイムズ』紙十一月号、『観世』誌十一月号「展望」欄、に記事有）。

十月十日、オリンピックが開幕、当地では名古屋梅猶会夜能がある。狂言「柿山伏」佐藤秀雄、連吟「班女アト」真柄米次、仕舞五番「班女クセ」河村鉦二、「清経キリ」佐藤太俊、「井筒」加藤丈太郎、「女郎花」殿島修二、「天鼓」杉村竹翠、素謡「鉄輪」梅若修一、能「三井寺」梅若猶義、仕舞四番「放下僧」井戸良造、「邯鄲」岡田朗詠、「山姥」柴田初太郎、「鵜」梅若猶義、能「熊坂・替之型」梅若盛義。

翌十一日は中部金春会、番組冒頭に会長・米本平一による次の挨拶がある。

秋の芸術祭に参加と共に、左の如き能組にて桜間龍馬、本田秀男、桜間道雄の三師を始め、奈良より先々宗家金春栄治郎、奈良金春会を主導する現宗家実弟欣三の両師の特別御参加を頂き、特に今回はオリンピック開催中の事ですので本会の定式能を協賛として、我が国粋芸術である能楽を外人各位には御招待とし参観を願い聊か本県市の為意義あらしめ度く企画致しました何卒多数御観賞を頂きます様歓迎申上ます。

舞囃子「高砂」桜間道雄、能「景清」前田昌広、仕舞「玉之段」前田茂穂、能「井筒」桜間龍馬、仕舞二番「花筐」金春栄治郎「邯鄲」金春欣三、狂言「引括」佐藤卯三郎、能「鵜飼」本田秀男、ほかに金春晃實・桜間金記、大鼓の下村英一が来演する。

十月十八日、第八期第二回・青陽会。舞囃子「清経」柴田初太郎、仕舞三番「高砂」福田幸一「敦盛」高橋瞭一「松虫」加賀敏彦、能「菊慈童」河村鉦二、仕舞三番「賀茂」佐藤太俊「雨月」石谷初蔵「鉄輪」久田秀雄、能「松風」柴田収武・祖父江修一、仕舞四番「龍田」竹内六郎「通小町」塚本秀雄「阿漕」加藤丈太郎「春日龍神」山中義滋、狂言「無布施経」井上松次郎、能「須磨源氏」観世元昭。

十月二十五日、第四十七回　名匠鑑賞能。能「巴」梅若六郎、狂言「酢薑」和泉保之、仕舞「阿漕」本田秀男、「恋重荷」観世喜之、仕舞「井筒」観世武雄、能「葵上」桜間龍馬、ほかに大江又三郎、福王茂十郎、幸義太郎、谷口勝三が来演。

十一月三日、第四回　名古屋和泉会は初代井上菊次郎（一八四六―一九二〇）、二代菊次郎（一八八四―一九四〇）、井上新三郎（一八八七―一九五五）、歌村彦四郎（一八九二―一九六三）の追善狂言会。舞囃子「経政」内藤泰二、狂言「伊文字」和泉保之、連吟「藤戸」前田昌広・前田茂穂、仕舞「天鼓」山田仁三郎、脇仕舞「蟻通」高安滋郎、狂言「不見不聞」井上松次郎・歌村鴻助・井上祐一、小舞二番「御田」茂山千五郎「楽阿弥」善竹弥五郎、狂言「釣狐」井上礼之助・野村又三郎、舞囃子「融」柴田初太郎、狂言「鬮罪人」三宅藤九郎・野村万蔵・和泉保之ら。初代菊次郎とその息、二代菊次郎・新三郎・彦四郎の追善に井上家一統の手向けの舞台は大蔵流の耆宿、善竹弥五郎（81歳）、十一世茂山千五郎（68歳）を小舞だけに招聘する贅沢、また、井上新三郎の嫡子・礼之助が「釣狐」を披ク。礼之助は平成七年十二月二十二日刊の自著・私家版『祖父・父を憶ふ』（写真）の中、「万蔵、藤九郎両先生のこと（いずれも先代）」の題で次のように述べている。

愚生が「釣狐」を披いたのは昭和三十九年十一月、四十九歳になってのことである。それでも自分なりに一所懸命で稽古し、演じた。狐師を努めて戴いた野村又三郎師に全面的に教えを乞うた。当日の出来はともかく、愚生の「狐」で自慢出来るのは、舞台の表後見として野村万蔵・三宅藤九郎両先生にお座り戴いたことである。両先生揃ってのことは前代未聞とのこと、自分達の息子が演ずる時には、親の立場の者は内後見に回らねばならぬからと拝聴し恐縮した次第である。

十一月十四日、第二回　中日名人狂言会は昨年同様二部制で会場は愛知文化講堂特設舞台。一時始の第一部は素囃子「早舞・寵」覧三男・田鍋惣一郎・河村総一郎・前川善雄のあと狂言五番「末広かり」野村万蔵・万作・三宅藤九郎、杉本苑子作・完全栄夫演出「はりこ丸」野村万之丞・茂山七五三・茂山千之丞ほか、「蝸牛」大蔵弥太郎・山本則寿・茂山倖一、「釣狐」茂山千五郎・善竹弥五郎、「弓矢太郎」三宅藤九郎・野村万蔵・野村又三郎・和泉保之ほか。五時半始の第二部は素囃子「獅子」藤田六郎兵衛・福井啓次郎・筧鐵一・前川善雄のあと狂言四番「船渡聟」和泉保之・三宅藤九郎・野村万之丞、「茶壷」大蔵弥太郎・善竹圭五郎・弥五郎、「朝比奈」野村万蔵・万作、「唐相撲」茂山千五郎・千之丞・七五三・茂山倖一ほか。

昨年の「裸大名」に次ぐ新作狂言「はりこ丸」も異流共演。表紙とも二十八頁に及ぶ立派なパンフレットに掲載の西田三好（本公演の企画・プロデューサー）による演目解説と、作者・杉本苑子の制作の意図を順に紹介する。

意気地なしで、甲斐性なしの木樵の虎丸は、村の人から軽べつされ、「虎は虎でも、はりこの虎じゃ、はりこ丸じゃ」と、嘲弄される、そのうえ暮しが苦しいので夫婦けんかの絶え間がない。はりこ丸はつくづく世の中が味気なくなり、川へ身をなげようか、首をくくろうかと思案しながら、きょうも森へ分け入り、木を切っていると、切られたブナの木の精が現われ、はりこ丸に同情して、望みをいえば、なになりと一つだけかなえてやろうという。

はりこ丸はよろこんで、いろいろ考えたあげく、右手の人さし指に神通力を与えてもらい、自分が憎いと思う相手に気合いをかけると、その者の鼻さきが真赤になる術が欲しいといった。ブナの精は即座にそれを与えた。

はりこ丸はよい気になって相手かまわず、この術をかけたので、国中は残らず赤鼻となって、自分一人だけが白鼻となり、逆に皆んなから嘲笑をうけ、神通力も意味のないものになってしまった。

はりこ丸は再び強大な社会の中に自らの非力を痛感したのであった。

官僚組織、マス・コミュニケーション、巨大な企業のメカニズム…そういうものに立ち向ったとき私たちは自身がいかにみじめな、非力なものであるかを痛感する。

そのくせ、彼らが私たちに加えてくる暴慢な圧力に対しては、はげしく怒り、批判もしているのだ。しかし私たちの怒りは、おおむね彼らに向って激発することなく、私たち自身の中で内攻し、陰気なあきらめ、あるいは実現できない復讐への、哀れな夢想へと変ってゆく。

新作狂言「はりこ丸」は、かなわぬものを相手に挑戦しようとし、結局、敗退をよぎなくされる私たち現代人の悲哀と痴愚を、笑いの中に追求しようとこころみた作品である。

最後にシテが洩らす弱々しい泣き笑いは、この曲のテーマを凝結したものであり、一曲が失敗に終るか、一種のペーソスをただよわせながらしみじみ終演するかは、最後のこの泣き笑いの成否いかんにかかっているともいえる。あえてこういうむずかしい止めを持ち出したのも、作者である私が、主演者野村万之丞氏の演技力に、無二の信頼を寄せているからにほかならない。（作家）

東西の名人上手を招聘、その名に恥じない「中日名人狂言会」も、これだけ大掛りな企画となると、円滑にことを運ぶのは困難とあって此の年限り、文字通り絶後となる。なお「はりこ丸」の再演を絶えて聞かない。

――以下次号――

## ◆仲春の舞台から◆

## 「青陽会」と「名古屋能楽堂定例公演」「名古屋宝生会定式能」

竹尾邦太郎

**「忠度」**　俊成没後、曾ては身内の、今は旅僧ワキ雅介、西国行脚の途次、曰くあり気な老翁シテ修一と遭遇、宿を乞えば、桜の木の下を勧めるシテ、「行き暮れて木の下蔭を宿とせば花や今宵の主ならまし」と詠んだ人は亡き忠度、と悟って回向するワキに喜ぶシテは、夢の告げを待たれよ、都へ言伝て申そうと消える――前場。

佗しい己が境涯は何某亡き跡の一本の桜も同じ、仮初の縁と〽手向を為して、立ち、ワキに呼び掛けられるシテ。山賤か、との問い掛けに、海士、とさらり応答するシテに訝るワキ、問答・掛合は都に汐を汲む「融」に似て確りしたシテの理詰めの応答が面白く、己が厳しい境遇を重ねるかに若木の桜の佇まいに触れる処は、〽嶺の嵐や山颪の、とスミで右上左下薄く眺め、左へ廻り常座へ、〽山の桜も散るものを、と胸杖に右ウケル風情の哀憐、沁み〴〵感じられる。

里人アヒ融、ワキの求めに、忠度の歌の一件・合戦の様子は六弥太との組討ち・若木の桜のこと、居語に語気爽やか、格調高く語り佳。

後場――勅勘の忠度の身を憚り、撰者・俊成が読人知らず、として千載集を編んだことに対する無念の思いは、俊成亡きあと定家の善処を願い、夢物語に申す、とワキへぐいと詰メルところ、シテの切実な気持ちの現われ。都落ちの多忙な折、引き返して俊成に歌を託して撰を願い、容れられて合戦に戻れば、〽今はかうよと、一ノ松へ。〽我も船に乗らんとて、とスル〳〵ワキ前に戻る。六弥太との組討ちは〽左の御手にて、投げ飛ばす型、最期を悟り安座〽御首を打ち落す、で頭ヲ指シ面伏せる型、が目につく。痛わし、と六弥太、矢に付けた短冊を読む処（写真）、〽行き暮れて、と二ツ拍子、〽木の下蔭を宿とせば、と前へ出て項垂れ、二ツ拍子から立廻は、とんでもない事をした、の一種途方に暮れた心の反映を思わせ、気持ちを鎮め下の句を詠むと、疑いもなく薩摩守であったか、と下居し短冊に合掌（打合に非ず、と思う）哀惜をみせ、キリは〽今は疑ひよもあらじ、と七ツ拍子にワキを引き留めた訳を強調する。（1時間23分）

**「葛城」**　雪中、葛城山に難渋する山伏ワキ勝久・正樹に呼掛け、宿を貸す里女シテ一政、面深井・

（④面へつづく）

「忠度」祖父江修一

「葛城」清沢一政　（杉浦賢次氏撮影）

青陽会定式能
㊤「清水」（左より）鹿島俊裕、佐藤友彦
㊦「善界・白頭」久田勘鷗（杉浦賢次氏撮影）

（③面よりつづき）

襟浅黄・撫子文白摺箔着付・納戸地苫舟ニ水草文縫箔腰巻・浅黄水衣・雪笠。正中に下居、楚樹をめぐる問答が古い大和舞の歌に及び、〽折から雪も、と目付柱上方を見るシテの、面やゝ右に傾げた風情が佳い。舞グセの切、〽御身を休め給へや、と就寝を勧める心は翳シ扇に廻るシテ、ワキが後夜の勤行と知ると、序でに加持を、と役ノ行者の呪詛を負う苦しみを明かし、救済を願う。呪詛の因は岩橋、ここのシテ・ワキ掛合、一気に訴えたいシテには切迫感が。〽霜に責められ起臥の立居も重き岩戸の内、の連吟にはいたわりと哀訴が共鳴する。中入は〽神に五衰の苦しみ、とワキへ指込開キに加持を強く願い、地（正邦・嘉宏ら）に橋懸へ、送り笛で入る。

ワキの訊ねに薪取りの里人アヒ菊次郎、鬼神をも慴伏させる役ノ行者のこと・葛城から大峯への架橋のこと・それを果せず呪縛された葛城ノ神のこと、居語に神妙に語るとワキ・ワキツレ待謡から後シテ葛城ノ神が出る。面増・天冠・黒垂・襟白二・小葵文白摺箔着付・緋大口・唐草文紫地舞衣壷折。〽見苦しき顔ばせの神姿は恥かしや、とは言い条、容顔美麗、クモル面に僅かに含羞をみせる。序ノ舞三段は極く慎重に、という感じ、舞上げるとキリは脇正で〽月白く雪白く、と右に月を見上げ、雪を下に眺める具象的な型、〽明けぬ前に、は翳シて廻り、〽岩戸の内に、は内に袖返ス、時間と空間を表わす抽象的な型、をきちんと極め、全体に整った好舞台。（1時間32分）

**「清水」** 主アド友彦の茶会のため野中の清水を汲みに遣らされる太郎冠者シテ俊裕、大の男のする仕事ではない、の思いで頭にきている上、水の汲み様まで指図され、「それ位のことは知って居ります」と憤然色をなし、出掛けはするが、主の鼻を明かすには水を汲まないこと。鬼の出現に驚き、桶を放り投げて逃げた、と戻れば、太郎冠者を案ずる気配もみせず秘蔵だと桶に執着する主。桶を探しに行かれては、と先廻りの太郎冠者、鬼に扮し〽取って噛まう、と大音声に主を脅し、欲張って太郎冠者の待遇改善まで要求するに至って萌す主の疑心。結局、脅しの声調が命取りとなって正体暴露、シテ俊裕、近年めきめき力を付けてきた。（26分）

**「善界・白頭」** 観世流の小書「白頭」、『能楽全書』第四巻・三宅襄「能の特殊演出」には「黒頭」の項に「白頭もあるやに聞いたが」とあるように上演がなかったらしく、久田勘鷗師の教示によれば、復曲したばかりで当地初演かと言う。

大唐の天狗の首領・善界坊シテ勘鷗、日本は愛宕の太郎坊ツレ嘉宏を嗾（けしか）けて佛法の本山・比叡山を陥れんとして飯室ノ僧正ワキ雅介に退けられる。

先づ前シテは面鷹・黒頭・兜巾・襟紺・格子厚板着付・濃紺大口・灰色縞水衣・篠懸（房、紫）山伏扇・刺高数珠、ツレは面霊神・黒頭・兜巾・襟浅黄・格子厚板着付・白大口・黒縷水衣・篠懸（房、白）刺高数珠。常の直面に非ず魁偉な風貌の両者が大口の股立取ってどっかと安座、向き合い密議を凝らすところ、異様な雰囲気。問答から掛合へ、シテの力の籠った説得に、引け気味ながら精一杯応対するツレ、彼我の立場がよく出る、クセは上ゲ端まえ、〽未来永々を（経るとても）、と互いに面だけでアシラヒ、〽火生三昧の焔を免れ果つべき、とシテに膝を進めるツレには面貌に似ぬ弱気の表情も窺えるか。〽世の中は夢か現か現とも、のシテの上ゲ端に元へ戻るツレ、〽降魔の利剣を待つこそ儚かりけれ、と再びアシラヒ合うところは、もはや観念の心。徒らに移る時に奮起一番、〽いざ諸共に、と立つツレに、遅れて〽法のため（憎っくき仏法のために）、とやおら居立チ、〽今ぞ、と立つシテ、二者がこの場に至る心理状態あざやかに現われる。〽雲の懸橋うち渡り、と幕へ見込み、己れを鼓舞するかに拍子一ツ強く踏み、〽横川の杉の、と南に連なる山々を指廻スと、〽雲や霞も、と二ノ松へ疾駆、〽嵐と共に、と走り込む勢い、強く鮮やか。ツレは来序（学・冨司忠・総一郎・洋輝）で静かに運ビ、大小前からはすら〳〵と入る。

能力アヒ靖浩、能力頭巾・襟紺・無地熨斗目着付・括袴・黒縷水衣・文付萩枝を持つ。陰謀を企てるシテを調伏のため下山せよの勅書をワキに届ける旨を立シャベリに告げて退くと後場。

勅を受け下山途次、従僧ワキツレ宰・正樹を従え車中のワキ、俄の荒天に面使フも〽こはそも何の故やらん、の返シ句に平然と床几に掛かり器量の大をみせる。後シテは本性現わした大天狗、面は白癩見・白頭・金襴大兜巾・厚板着付・白地金雲立湧文半切・白地袷狩衣（衣紋）・白縷水衣・篠懸・剣を佩き、羽団扇と数珠を持つ。一ノ松で名乗りワキを挑発、舞台へ入り、〽不思議や雲の、といわゆる雲間ノ拍子、音立てずに二ツ踏み、〽これを不動、の前〽天然動きなき、と左袖巻上げ、拍子一ツ強く踏むのが印象的。立廻に二ノ松へ、羽団扇左手に替えて勾欄に寄ると、翳シてワキを見込む殺気（写真）も凄まじく、羽団扇右に替えて戻ると車に接近、轅（長柄）を掴みワキへ迫るところも恐ろしい。キリは辺りを神々に囲まれ、山風神風に吹き払われる態に両袖巻上げ、羽搏く様に飛び上がって落下のところ、立って地（邦久・邦弘ら）のうちに三ノ松、〽また飛び来り、で招キ扇に一ノ松に戻ると、〽今より後は来るまじ、と勾欄に左足掛けてワキに数珠を投げつけるところ、など鮮烈。地を残して幕へ入り、ワキが床几を立ち左ウケ留メ。「白頭」を勤めるに当たり、シテ勘鷗は面・装束の全てを宗家より借用したという。役にかける意気込み、ひし〳〵と感じられる立派な舞台だった。三役の好演、地謡の好調も忘れられない。（1時間16分・2月24日・青陽会）

名古屋能楽堂定例公演
㊤「花折」左より松田高義（立頭・ほか）、野村又三郎
㊦「海士・懐中之舞」左より片山清司、高安勝久、分林道隆（子方）椙元正樹　（杉浦賢次氏撮影）

**「花折」** 花見に酒宴は当今とて同じ。住持アド菊次郎、狼藉を案じて花見禁制を新発意シテ又三郎に言い残すが、わざ〳〵下京辺やって来た花見の面々（立衆、高義・小三郎ら）も強か、塀越しに花見、酒宴に及べば固より上戸のシテ、居た堪らず、「花にも御酒を」と相伴に与ろうの魂胆。「大勢はならぬ」と、一人に酒を持たせて中へ入れるつもりが、一人が「それがし迄で御座る」と入れば、どっと後ろに続く面々に対処しきれず、酒盛りとなって舞えや謡えの肴（余興）の応酬。遂にはシテも勧められる儘〽七つに成る子が幼気な事云うた、と立つと、以下を立衆の連吟で調子良く舞い出す（写真）が、〽吉野初瀬の花、あたりから怪しくなり、〽いちやが、とキリへきて腰からくにゃっと崩れる様に横臥する。もはや住持の言い付けもあらばこそ、一行が帰る際には土産にと一人に桜枝を手折れば、後はてんでに折らせる始末。酔眼には戻った住持の見分けもつかず、「アア、最早たべますまい、たべますまい」と、あろうことか桜枝を手折って渡すていたらく。キリは「御許されませ」を連呼、酔歩逃げるシテを追うアド、又三郎・菊次郎の配役の妙が見えた。（35分）

**「海士・懐中之舞」** シテ清司、前は海女、面は曲見だった。眼目はワキ勝久の懲懲で当時の有様をシミュレーションに見せる珠之段、小書で鎌で舞う。〽そのとき人々、と居立ってワキへ袖アシラヒするのが、では演りますよ、の意思表示とも見え、〽一つの利剣を、と鎌を見遣ってすっと立ち、〽かの海底に、と正先へ出て拍子二ツ、水音高く飛び込む心は一転、漫々の海中を大きく掻き分け一ノ松先、底知れぬ海底に、〽そも神変は、と更に二ノ松へ、指込開キの型はあたりを探る心とも思え、また、珠を〽（取り得ん事は）不定なり、のシヨリの型は、真実弱音の涙なのか、それとも闇中の手探りを象徴するのではなかろうか、とも思える。〽かくて龍宮に、と戻る舞台、珠の〽守護神は、と恐ろしい悪魚を面使ヒに眺め、〽さるにてもこの儘、とシヨルが、観音の加護を祈念して数拍子に己れを鼓舞、意を決し悪魚の渦中に飛び込み、珠を掬い、追われて振返り、乳の下掻き切り、珠を押し込め、鎌を捨て、と連続する型をきび〳〵と極め鮮やか。

後シテは龍女、面泥眼・黒頭。正中で誦経、〽有難の御経やな、と押し戴くと、巻き戻した経巻は懐中して扇を持って立ち常座へ、舞になる。途中、幕際まで往き暫しのクツロギ、三鼓の流シで戻り、舞上に子方へ経巻を渡すと、子方は経を開く（写真）。子方の分林道隆君、確りした謡も然り乍ら、如何にも房前大臣の品の良さが結構。シテ清司の姿の美しさは装束がよくついていること、型の歯切れのよさは強靱なバネのしなやかさ、爽やかな舞台だった。（1時間33分・3月9日・名古屋能楽堂定例公演）

**「右近」** 右近は右近衛府（うこんえふ）皇居警衛などに就く武官の部署の一で、そこに属する馬場の花見に出掛ける上洛中の鹿島の神職ワキ雅介、折から遭遇する車上の上臈シテ雅を見初め、この場景は業平の詠んだ歌のそれに似る、と〽見ずもあらず見もせぬ人の恋しくは「あやなく今日や眺め暮らさむ」と口ずさめば、それを聞いて惹かれたシテも同じ思いを吐露、その返歌にも触れて急速に親しくなってゆくところ、ワキとシテの掛合は情緒纏綿。〽思ひのみこそしるべなりしを、とワキへアシラフところ、シテには媚びも。初同（正宜・満次郎ら）〽見もせぬ人や花の友、で侍女ツレ愛・京子が切戸へ退くと、〽諸人のいつしか馴れて、で花見車を出るシテ。ツレ二人を残さないのもワキと二人きりになりたいからか、と勘繰らせもして正中へ、いざ花を〽眺めん、と向き合い、〽げにや花の下に、と床几に掛かると、〽いざ〳〵馴れて眺めん、とワキへアシラフのも艶めかしい。〽百千鳥、と床几立ち、北野辺りの神社を地との掛合に舞台を廻り、案内する心は、〽（右近の馬場わたり神幸ぞ尊）かりける、と再び床几に掛かる。シテの素姓を問うワキ、恥かしや、と含羞のシテ、中入は〽（月も曇らぬ）久方の、と床几立つと、〽月の夜神楽を待ち給へ、と常座でくる〳〵小廻りして橋懸へ消える。

後シテは北野の末社・桜葉ノ神、増女・天冠・緋大口・紫長絹。御代を讃え、桜花の春を寿ぐ中ノ舞・破ノ舞、手綺麗な舞は流石を思わせるが、気掛かりは腰、元々は床几に掛からず下に居るのでは。（1時間13分）

宝生会定式能
「貰聟」左より井上靖浩、佐藤融、井上菊次郎
（杉浦賢次氏撮影）

**「貰聟」** 酒乱気味の聟シテ靖浩、この度は本気とみえて着ている駿斗目の上に小刀まで与えて妻アド融を放り出し、清々したとばかりに「またどれへぞ行て飲うで来う」と〽ざざんざ、と酔吟の如何にも憎体。親里に戻らざるを得ない妻は、父・小アド菊次郎の情理具わった言葉で諭されるが、この様なことは「七度や十度では御座らぬ」と頑強に帰ることを拒む。娘がそのつもりならば、と父も覚悟を決めた処へ、幼子を盾に詫びを容れてくる聟に、その声を聞くや居ても立っても居られぬ妻。「夫婦喧嘩は犬も食わぬ」を地で行く展開は、当世、殺人事件に至るもあるという。恐ろしや。舅（父）菊次郎の心情には何とも言えない滋味、角頭巾に大髭が珍しいと思った。（29分）

**「熊坂」** 旅僧ワキ勝久、名宣笛（学）の出で直ぐ名宣になる。ワキの道行の後、僧形のシテ荘太郎が呼掛で現われ、橋懸を運ビながら然る者の命日で回向を、とワキに請うシテ。戸惑うワキに頓着なく、シテは己れの庵室へワキを誘う。シテ・ワキ問答は、持仏堂らしからぬ武具庫の様相に不審するワキに、物騒な土地柄のこと淡々とした口調で話すところが却って無気味。クセは〽似合はぬ僧の腕立、を仏も武具を持つ、と一種の自己弁護、語るも切りが無い、とワキに就寝を勧め、シテは〽我も（睡まん）、と立ち、〽形も失せて、と一ノ松へ足早に、後は〽夜を明したる、の返シ句を残し静かに中入する。この辺りの呼吸が中々。

後シテは熊坂長範、大盗らしい重みは感じられなかったが、長刀捌きも鮮やかに獅子奮迅の勢いは若さの強味、立派だった。（1時間8分・3月18日・名古屋宝生会定式能）

# 能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
FAX（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

## NHK放送予定（平成19年6月～7月）

◆NHK－FMラジオ能楽鑑賞（毎週日曜日7時15分～8時）

| | | |
|---|---|---|
| 6月24日 | 素謡「湯谷」（喜多流） | 香川靖嗣ほか |
| 7月1日 | 素謡「三井寺」（観世流） | 浅見真州ほか |
| 7月8日 | 素謡「松風」（金春流） | 本田光洋ほか |
| 7月15日 | 素謡「融」（観世流） | 片山九郎右衛門ほか |
| 7月22日 | 素謡「敦盛」（宝生流） | 塚田光太郎ほか |
| 7月29日 | 狂言「伊文字」（大蔵流） | 大蔵彌太郎ほか |

◆NHK教育テレビ（15：00～16：55）

| | | |
|---|---|---|
| 7月14日 | 能「当麻」（宝生流） | シテ近藤乾之助 |

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

（能・狂言演能関係）
（TEL 052－231－0088）

［6月］

| | | |
|---|---|---|
| 23日(土) | 青陽会定式能 | （有料） |

［7月］

| | | |
|---|---|---|
| 4日(水) | 中学生芸術鑑賞会 | （関係者のみ） |
| 5日(木) | 中学生芸術鑑賞会 | （関係者のみ） |
| 7日(土) | 邦謡会発表会 | （無料） |
| 8日(日) | 御洒落名匠狂言会 | （有料）（番組①面） |
| 14日(土) | 名古屋能楽堂定例公演（市民能楽セミナー） | （有料）（番組①面） |
| 15日(日) | 名古屋観世会定例公演普及能 | （有料）（番組②面） |
| 16日(月) | 狂言也留舞会発表会 | （無料）（番組②面） |
| 22日(日) | 20周年記念恵謳会 | （無料）（番組②面） |
| 27日(金) | 名古屋能楽同好会 | （無料） |
| 28日(土) | 第8回伝統芸能上演会 | （無料）（番組②面） |

## 名古屋能楽堂開館10周年記念
# 市民能楽大会
## 愛好者の参加募集

〝名古屋に市立の能楽堂を〟と市民、愛好者の熱い要望が実り、平成9年に名古屋能楽堂が完成、能・狂言はじめ芸術文化の殿堂であり、名古屋の情報発信の一翼をになって親しまれているが、能楽協会名古屋支部（梅田邦久支部長）は名古屋能楽堂開館十周年の記念事業として、今春4月に能楽協会の能楽師により各流による「記念能」が2日間にわたって開催されたが、一般の能楽愛好者を対象に、きたる12月14日(金)、15日(土)の2日間にわたり、「名古屋能楽堂開館10周年記念・市民能楽大会」を開催する。

これにともない、参加者募集要項がこのほど発表された。社中会、同好会、グループなど多数の出演が期待されている。

募集要項は今号①面下欄参照、申し込み締切りは9月10日(月)である。

詳細問い合わせは＝能楽協会名古屋支部副支部長・柳原冨司忠氏方、電話052・832・1031

## 観世栄夫氏逝く

観世流能楽師、観世栄夫氏は、6月8日午前8時35分　大腸がんのため東京都内の病院で逝去した。享年79歳。

故人は、昭和二年、観世銕之丞雅雪の次男として生まれる。父および観世華雪に師事、昭和二十四年喜多流に移籍、その後演出家、俳優として活躍、昭和五十四年に観世流に復帰、兄の寿夫、弟静夫（八世銕之丞）とともに観世三兄弟と呼ばれた。平成13年秋の叙勲で「文化財保護功労」として勲四等瑞宝章を受章、芸術選奨文部大臣賞（平成10年）、第11回坪内逍遙大賞（平成17年）受賞。

## 井上菊次郎　芸術特賞受賞記念
## 第8回　御洒落名匠狂言会
## 7月8日　名古屋能楽堂

狂言共同社では、毎年「御洒落名匠狂言会」として、東西の名人、名手を招き　至芸を披露して好評を博しているが、ことし第八回の上演は、社の代表・井上菊次郎氏が、平成十八年度名古屋市芸術特賞を受賞した記念の会として、きたる七月八日(日)名古屋能楽堂で開催する。午後一時三十分開演。

「御洒落（おしゃらく）」は、狂言共同社創立の中心となった初代井上菊次郎、伊勢門水らが当時流行の「倶楽部」（くらぶ）をもじり参加した「愛知洒落部」、通称「御洒落会（おしゃらくかい）」によっている。「自ら狂言を楽しみ、狂言に遊び、軽妙、洒脱と評された先人の心を偲びつつ、現在の名匠、名人の芸、達人の技を鑑賞して頂きたい」とよびかけている。

今回の記念大会は〝春夏秋冬狂言を楽しむ〟とのテーマをかかげ、番組は、新春を寿ぐ祝言の代表曲「末広かり」を狂言共同社の佐藤友彦、人間国宝・野村萬師による当地の夏祭・津島祭を背景とした「千鳥」、大蔵流名手・茂山忠三郎師による仲秋の名月を舞台とする「月見座頭」、そして井上菊次郎師が雪の山道を炭六駄、薪六駄を負った12頭の牛を追う名曲「木六駄」を上演。屈指の名曲、人気曲をそろえた豪華な企画となっている。（番組①面）

## 西村同門会
## 第2回研究能
### 7月1日　豊田市能楽堂

ワキ方高安流の西村同門会（代表飯冨雅介氏）は、きたる七月一日(日)豊田市能楽堂で、「第二回研究会」を開催する。

能組は、ワキ方の秘曲「調伏曽我」（喜多流）と「紅葉狩」、はじめに子供たちによる囃子演奏が催される。午後一時開演、入場無料。

## 山本能楽堂
## たちまち能
### 大阪

山本能楽会主催の山本能楽堂定期能「たにまち能」の七月能会は素謡会として、7月1日(日)午後一時開演、入場料一般券五五〇〇円。

素謡「高砂」（シテ森本哲郎）
素謡「班女」（シテ山本麻乃）
仕舞「経正」（林本大）、「井筒」（松浦信一郎）、「鐘之段」（山本勝一）、「龍虎」（今村宮子、前田和子）
素謡「俊寛」（シテ山本順之）、「望月」（シテ山本章弘）

## 名古屋能楽堂開館十周年記念
# 「市民能楽大会」
## ◆参加者募集のお知らせ◆

本年は平成九年四月に開館した名古屋能楽堂が十周年の記念の年を迎えることとなりました。これを記念して「市民能楽大会」を左記の日程で開催いたします。

つきましては、一般能楽愛好家を含んだ多くの方々の参加により、記念事業を祝したいと思います。多数の方々に、ご参加をいただくようご案内申し上げます。

社団法人　能楽協会名古屋支部

### ［募集要項］

一、日時　平成十九年十二月十四日(金)、十五日(土)の二日間
　　両日とも午前九時半から午後八時まで
二、参加グループ名または会名（　　）
　　指導先生名または代表者氏名（　　）
三、演目種類と曲目・出演者氏名
　　（例　仕舞　熊野　名古屋太郎）
四、参加単位（一単位　二十分　参加費　一単位　五千円です）
　　一グループ三単位までとさせていただきます。
五、参加グループまたは会の責任者　住所・氏名・電話番号
六、参加希望　日時・時間（日　時から　時まで）
　　以上すべてを明記のうえ、封書にて
　　〒466－0033　名古屋市昭和区台町2－16－5　梅田邦久方
　　「名古屋能楽堂開館十周年記念能楽大会」係り
　　宛へお送り下さい。

締切りは　平成十九年九月十日(月)まで必着とします。

また能楽協会名古屋支部の先生を通じて提出していただいても結構です。

なお番組は、十月中旬頃作成し、各出演グループへお知らせする予定です。多くの方々のご出演をお待ちしています。

なお、参加費以外の経費については、ご出演者の負担とさせていただきますので、ご了承下さい。

詳細お問い合わせは、副支部長柳原まで
（TEL　052－832－1031）にお願いします。
（携帯　090－3307－4474）

## 井上菊次郎　平成18年度
## 名古屋市芸術特賞受賞記念
## 第8回　御洒落（おしゃらく）名匠狂言会

七月八日（日）午後一時三十分始
名古屋能楽堂

素囃子　神舞
大鼓　河村総一郎　太鼓　鬼頭義命
小鼓　福井四郎兵衛　笛　大野誠

和泉流　末廣かり
果報者　佐藤友彦　太郎冠者　佐藤融
徒ら者　今枝郁雄（後見　今枝靖雄）

（休憩　十五分）

和泉流　千鳥
太郎冠者　野村萬　酒屋　野村万蔵
主人　野村扇丞（後見　吉住講）

大蔵流　月見座頭
座頭　茂山忠三郎　上京の男　茂山良暢
（後見　山口耕道）

（休憩　二十分）

和泉流　木六駄
太郎冠者　井上菊次郎　主人　井上靖浩
茶屋　佐藤友彦　伯父　大野弘之
（後見　鹿島俊裕）

（終演予定　午後四時四十分頃）

主催　狂言共同社　名古屋市
後援　愛知県・名古屋市文化振興事業団、中日新聞社、愛知芸術文化協会

前売券（全席指定）
S席　八千円、A席　六千円
C席　四千円（当日券は全席千円増）
チケット取扱い
チケットぴあ（0570・02・9999　Pコード・377・066）
名古屋能楽堂（052・231・0088）
狂言共同社（052・834・8607、052・911・8784）

## 名古屋能楽堂定例公演
### ～尾張の殿様が観た能　二代・徳川光友～

七月十四日（土）午後二時開演
名古屋能楽堂

解説「狂言の話」　井上菊次郎

狂言　萩大名
大名　佐藤友彦　太郎冠者　佐藤融
茶屋　今枝郁雄　後見　鹿島俊裕

能　三井寺
子方　冨田尚史　泉　嘉夫
高安勝久　杉江元　椙元正樹
河村総一郎　福井四郎兵衛　大野誠
井上菊次郎　井上靖浩
問　黒田博　八神孝充　武田邦弘　梅田大志　梅田邦久　古橋正邦　祖父江修一
後見　加藤春枝　久田勘鷗
地謡　武田邦弘　梅田邦久　古橋正邦
（午後4時45分頃　終了予定）

主催　名古屋市文化振興事業団（名古屋能楽堂）
能楽協会名古屋支部

［入場料］
一般　前売二五〇〇円（当日三〇〇〇円）
学生　前売一五〇〇円（当日二〇〇〇円）
前売券取扱所
名古屋能楽堂（TEL052・231・0088）
プレイガイド（栄プレチケ92・松坂屋ほか）
ナディアパーク8階PG（052・265・2015）
チケットぴあ（0570・02・9999）

## 名古屋観世会定例公演
### 普及能

七月十五日（日）十二時半始
名古屋能楽堂

能 **田村**
古橋 正邦
飯富 雅介　河村眞之介　後藤嘉津幸　大野 誠
替装束
間 鹿島 俊裕
後見 梅田 嘉宏　小島 一英　地謡 八神 孝充　本田 勲　高橋 暸一　松山 幸親　祖父江修一　加賀 敏彦　久田 勘鬼　清沢 一政

狂言 **蟹山伏**
山伏 井上菊次郎　能力 井上 靖浩　蟹ノ精 今枝 郁雄
後見 佐藤 友彦

仕舞 **半蔀**
**鵜飼**（クセ／キリ）
河村 万葉　武田 邦弘　松山 幸親　清沢 一政　地謡 須部 敏彦　加賀 浦　久田 勘鬼　高橋 暸一

能 **百萬**
高安 勝久　笠 鉱一　柳原冨司忠　加藤 洋輝　鹿取 希世
法楽之舞
間 佐藤 融
後見 松山 幸親　小島 一英　地謡 八神 孝充　本田 勲　古橋 正邦　須部 浦　梅田 邦久　梅田 嘉宏　祖父江修一（終演 四時過頃）

附祝言
［入場料］五千円
主催 名古屋観世会

## 狂言 也留舞会発表会

七月十六日（海の日）
第一部 午前11時開演
第二部 午後2時開演
名古屋能楽堂

［第一部］
**萩大名**
大名 伴野 俊彦　太郎冠者 野口 隆行　庭の亭主 野村小三郎
**雷**
雷 吉本 有李（小学校六年生）　薬師 三浦 思季（中学二年生）
**膏薬煉**
都方 白石 敦子　鎌倉方 柴田 聖子
狂言小舞 金剛 平山みよ子
**伯母ヶ酒**
甥 加藤志津子　伯母 野村又三郎
**通円**
通円の霊 庄司 武　旅僧 吉村由紀子　所の者 藤波 徹
（終演予定 一時頃）

［第二部］
**石神**
夫 伊藤 悦子
**清水**
太郎冠者 田端 奏衛（中学一年生）　妻 伊藤 泰　何某 松田 高義
**薩摩守**
旅僧 水原 みわ　船頭 野村小三郎　茶屋 真下 智行　主 安保 育子
**盆山**
男 小林 義昌　何某 野村又三郎
**磁石**
スッパ 磯村 美和　見附の者 吉村由紀子　宿の亭主 奥津健太郎

## 戦後名古屋能楽史 ㊽
〔第十八章〕
### 昭和三十九年（一九六四）

竹尾 邦太郎

―承前―

十一月十五日、観世会定式能・第五回。素謡「二人静」鬼頭五朗、仕舞四番「兼平」丹下三義「富士太鼓」加藤丈太郎「菊慈童」塚本秀雄「山姥」山中義滋、能「小督・恐之舞」武田太加志、能「班女・笹之伝」梅若六郎、狂言「粟田口」野村又三郎、能「善界」観世元昭・柴田収武。藤井徳三、山本敬一郎（大鼓）の来演。

十一月二十二日、柴田初太郎が主宰する掬水会の社中会。番外に連吟「難波」六車真三・鬼頭五朗、仕舞六番「安宅」河村鉦二「雲林院」佐藤太俊「玉鬘」加藤丈太郎「融」塚本秀雄「春日龍神」柴田収武「岩船」柴田初太郎がある。

十一月二十三日は名古屋淡交会の橋岡久太郎追善の社中会。番組挨拶に次のようにある。

光蔭矢の如くと申しますが吾等の師芸術院会員故橋岡久太郎先生の一周忌も過ぎ、帝都・関西・長野其の他の地方に於て追善能を盛大に催されました　当名古屋に於ても故先生の御指導を頂きました社中を以て橋岡久共師を始め一門の先輩諸師並に東・西淡交会幹事大口、笛、前田諸氏の特別参加の元に東京より観世静夫師・太鼓観世元信師・大鼓渡部晴義師当地の諸先生方の御支援を得

左記の如き番組を以て追善能を催させて頂きます　何かと御多忙では御座りましょうが御繰合わせ御鑑賞下されます様御願申上ます

番組は番外に「神歌・法会之式」鬼頭五朗・飯山嘉俊、連吟「海士」増田十草・六車真三・尾関健太郎・飯田賢、ほか仕舞八、舞囃子八、能二、独吟二、素謡一、一調一、狂言一がある。地謡・後見に高橋静夫・奥善助・下田雄三・松田憲二・谷本正鉦らが来演。

十一月二十八日、小鼓方・幸流十六世宗家・幸祥光（72）が日本芸術院会員欠員補充選挙により新会員に推挙され、高橋誠一郎院長は文部大臣に上申、翌一月十五日付で任命されることになる。

幸祥光の出自、宗家に至る履歴は自著『小鼓とともに』昭和四十三年十一月十一日わんや書店刊に詳しいが、明治二十五年（一八九二）十一月十六日生、十一歳で三須平司（嘉永五年一八五二―昭和七年一九三二）の養嗣子となり、養父・平司と養祖父・錦吾（天保四年一八三三―明治四十三年一九一〇）に師事する。『小鼓とともに』の中、「私の稽古」と題する項には次のようにある。

十二、三歳の頃は通学の途中などで友達に会ったりすると「ヤーポンポンが来た」などといわれましたが、これが実にいやでした。

毎日学校から帰ると、近所で友達と楽しく遊んでいるのですが、女中が呼びに来て「坊ちゃんお稽古です」というのが度々のこと

（③面へつづく）

（課題曲）
**口真似**
太郎冠者 藤波 徹　主客 真下 智行　伴野 俊彦
（終演予定 四時過ぎ）
［御来場歓迎］
（入場無料）
主催 和泉流 **也留舞会**
観世流 **信謡会**

## 二十周年記念
### 恵謡会

七月二十二日（日）午前九時半始
名古屋能楽堂

素謡 **半蔀**
番組
**善界**
平野 和由　都築 良平　黒柳 信次
**山姥**
河西 暁子　森 順子　松木 千俊
舞囃子 **天鼓**
板倉 峰尾　河村眞之介　後藤嘉津幸　竹市 学
**融**
鳥山 迪永　笠 鉱一　柳原冨司忠　観世 元伯　鹿取 希世
**巻絹**
都築 弘子　河村眞之介　後藤嘉津幸　加藤 洋輝　鹿取 希世

能 **清経**
武田 宗典　横田多津子
仕舞 **屋島**
飯富 雅介　笠 鉱一　後藤嘉津幸　竹市 学
**笠之段**
黒柳 信次　石田 啓介
素謡 **隅田川**
冨田 尚史　板津 峰尾　武田 宗和　佐川 勝貴
三村 徑布　杉山悠紀子　武田 志房
**砧**
沢田 房枝
能 **杜若**
恋之舞
福王 和幸　河村眞之介　柳原冨司忠　観世 元伯　鹿取 希世
舞囃子 **須磨源氏**
岩崎喜久子　河村総一郎　福井四郎兵衛　加藤 洋輝　竹市 学
**野守**
田口 芳子　河村総一郎　柳原冨司忠　加藤 洋輝　藤田六郎兵衛
素謡 **定家**
村瀬慶衣子　武田 友志
**安宅**
勧進帳
子方 冨田 哲史
同山 佐川 勝貴
同山 武田 宗典
同山 坂井 音雅
同山 関根 祥人
鳥山 迪永　武田 志房
能 **船弁慶**
冨田 尚史
椰野 晴美
喜多 雅人
福王 和幸
中村 宜成
河村総一郎　福井四郎兵衛　観世 元伯　藤田六郎兵衛
間 井上菊次郎

素謡 **弱法師**
久納 智子　武田 文志
番外仕舞 **高砂**
三村 徑布　武田 友志
**敦盛**（キリ）
武田 志房
**花筐**（狂）
武田 文志
国栖
（終了予定 六時半）
［御来場歓迎］
［入場無料］
（素謡一部省略箇所アリ）
主催 恵村謡会
補佐 三徑布会
武田志房

## 第八回（最終回）
### 伝統芸能上演会
―伝統芸能を次世代につなげるために

七月二十八日（土）
開場12時半、舞台体験1時～2時
上演会 二時半始
名古屋能楽堂

**舞台体験（一時から二時まで）**
・能面をつけて橋がかり・舞台を歩いていただきます（白足袋必要）
・和楽器に触れていただく（笛・小鼓・大鼓・太鼓・尺八・胡弓・箏・三絃）

**おけいこ発表**　伝統文化こども能楽教室
仕舞 老松
仕舞 草紙洗小町　津教室
仕舞 紘上　豊橋教室
はるがすみ
はなさかば
あずまあそび　中村教室

番組（二時半始）

狂言 **痺り**
シテ主人 佐藤 友彦　アド太郎冠者 佐藤 融
能 **羽衣**
シテ天人 長田 驍
飯富 雅介　笠 鉱一　船戸 昭弘　鬼頭 義命　大野 誠
相元 正樹
後見 加藤 誠子　長田 領一郎　平塚 昭子　地謡 伊藤 英毅
平曲 **那須与一**
尺八 **九州鈴慕**
今井 勉　岩田 津園
地唄舞 **ゆき**
立方 西川眞乃女　唄・三絃 久米 雅子
胡弓 **鶴の巣籠**
澤田 孝子　唄・三絃地 今井 勉
三曲 **六段の調**
箏 中根雅楽抄都　三絃 久米 雅子　尺八 岩田 津園
（終了 五時頃）
［入場無料］
主催 **東海能楽研究会**
後援 **名古屋市教育委員会**
**愛知県教育委員会**

故 芸術院会員　幸祥光師
『小鼓とともに』より転載

（②面よりつづき）

で、大体夕方から父に稽古して貰いました。

父のやり方は、打つとかなぐるというのではなく納得の行くまで、何遍も繰り返すのでした。ですから、特に嫌な思いをしたこともありません。

子供の頃には慾がないのですから、あまり稽古が好きではなく、遊びたい気持が強かったものです。

父の都合が悪い時には、祖父が稽古をして呉れるといった日常でした。

十五、六歳頃から謡の方は野口（兼資）さんのお宅に稽古に行きはじめて、平物を稽古して貰い、習物になって先代の宝生九郎先生にお願した訳で三老女も稽古して頂きました。其の頃は、電車、バスの便がなかったので、深川迄はみな徒歩で通ったものです。――中略――私は二長町に居りましたから、美倉橋を過ぎ、大橋を渡り、高橋を渉って深川まで通ったもので、週に一度、ときには週に二度も徒歩で行きました。そのお蔭ですか、今でも足が丈夫なのです。その頃から自分でもソロソロ欲も出て来て、毎日鼓の復習もし、また父も暇があったものですから稽古の度数も多くなりました。

太鼓の稽古は増見仙太郎さん（現金春惣右衛門君の祖父）に行きました。その頃は本所の緑町あたりの住居でしたのでやはりそこ迄徒歩で稽古に行きました。その時に増見さんが「私の知っている事は何でもお教えします」といわれたときは誠にうれしかったことです。

又、川崎九淵さんにも大鼓を稽古して貰ったことがあり、九段の靖国神社うらの河本病院の傍に住んで居られた時代に一年余通ったこともあります。とにかく今思うと若い時分には勉強第一でした。

私の年配の人では、吉見嘉樹君が池内信嘉翁のはじめられた養成会の第一回の出身ですが、私は養成会には入らず、前述の様な方法で稽古に励みました。

また、祖父については「祖父の死」の項で次のように云う。

祖父の錦吾が、明治四十三年七十九歳で逝くなりました。私の十九歳のときです。その年の四月に梅若実さんの追善能が厩橋舞台に二日間あり、隅田川・松風の二番を祖父がつとめましたのをうしろにてよく聞いておりましたのが最後となりました。その会の後で風邪にかかり肺炎となって六月三十日についに歿しました。葬儀は青山斎場で、無論行列、放鳥の籠などあり、私は位牌を持って人力車、父は棺の側で徒歩、弟子達も同じく徒歩、会葬の方々は馬車の方もありました。其の頃のお弟子さん方は、山高帽に紋付羽織袴、それに靴という姿でした。

風俗史上から申すと、過渡期だったのでしょうが、珍妙此上ない和洋折衷なのです。此頃の婦人の服装も、随分変ったもので、二百三高地まげといった形も出現していました。

式が終ると、斎場より品川に出て大崎、五反田を通り、その間を通りぬけて大崎墓地に至り埋葬しましたが、今思い浮べると夢のような気がいたします。

この葬儀の時に、久米民之助さん（今の五島昇さんの祖父君）が自家用車に乗って来て下さり、帰りにその自動車に、私が乗せて戴きましたのを忘れません。私の自動車の初乗りです。そんなことで、祖父の葬儀も盛大にすることが出来ました。

三須錦吾・平司・幸祥光の三代に亘る当地名古屋との縁は先づ明治三十三年（一九〇〇）現在も桜の名所である春爛漫の四月一日から三日間催された那古野神社の舞台披キ式能に三須錦吾（69）、平司（48）親子の来演。錦吾は能四番「二人静」梅若万三郎・六郎、「弱法師」観世銕之丞、「船弁慶・白波之伝・船中之語・船唄」寺田左門治、「羽衣・彩色」梅若実。平司は能六番「翁」「高砂」寺田左門治、「融・思立之出・酌之舞」観世銕之丞、「石橋」梅若万三郎、「道成寺」寺田左門治、「小鍛冶・黒頭」梅若六郎、ほかにシテは観世織雄、当地在では柴田穀彦・林増次郎・青山鉞次郎など。三役は西村大蔵・杉山義潤、藤田米次郎・飯田具命・藤田清次郎、田鍋惣太郎・土屋重実、吉田方條・永田虎之助、鬼頭為太郎・野崎光之丞、山脇元清・野村又三郎・伊勢門水・河村鍵三郎・井上菊次郎・三橋正太郎・外堀新太郎などの名が見え、京都から杉次郎助、東京から大倉繁次郎、増見仙太郎の名も。盛会ぶりが窺える。ただ錦吾の来名はこの一度限り、高齢に加えて明治三十年代当時の交通事情もあったであろう。田鍋惣太郎は自著『小鼓芸話』の「名人の想出」の中、三須錦吾につき次の様に語る。

この方は幸祥光氏の養父三須平司さんの実父に当る方で、幸清次郎先生と並んで当時の鼓の第一人者でありました。名古屋へは明治卅三年四月、那古野神社舞台披の際、一門を連れて来名され（中略）勤めておられます。

この時には幸祥光さんは未だ来ておられません。私はこの時三日目に「翁」の頭取と二日目に「巻絹」を勤めました。三須氏の鼓はあくまで品がよく、当時氏と並んでは東京に山崎一道（三井家御出入）、京都に狩野宗明（幸流で関西の第一人者）、の三氏が鼓の名手として知られておりましたが、山崎氏の鼓は調子と構えが最初から最後まで崩れず、狩野氏の鼓は特長のある面白い鼓でした。（中略）

明治卅六年四月十二日先代宝生九郎先生が東京宝生会別会で「関寺小町」を演じられた際の小鼓は三須氏でしたが、私はこれを忘れる事は出来ません。錦吾氏の座談は聞きにくい調子でしたが、舞台へ出ると大したものです。これは稽古で声が枯れるのではないかと思います。錦吾氏の息平司氏も同じ様に枯れた声でした。

さて幸祥光の名古屋初来演は幸悟朗時代、大正四年（一九一五）五月二十九・三十両日。田鍋惣太郎主宰の小鼓社中「霞会」が百回を記念して催した田鍋惣太郎「道成寺」小鼓披露能で養父三須平司（63）も同道。このとき惣太郎は三十一歳、悟朗は二十三歳。二日間を通して平司は「正尊・起請文」片山九郎右衛門、「乱・和合」松本長・野口政吉、悟朗は「望月」野口政吉、「蝉丸」近藤乾三・藤野涛平、「殺生石・白頭」金剛謹之輔、を勤める。主催する田鍋惣太郎の披キの「道成寺」はシテ観世元滋（20）、ワキ宝生新（45）、笛・一噌又六郎（44）、大鼓・川崎利吉（41）、太鼓・観世元規（71）、間・河村鍵三郎（54）、河村保之助（34）。来名のシテ方は他に谷村直次郎・武田宗治郎・大西亮太郎・杉浦義朗・大槻十三、桐谷正治、金剛謹之輔・金剛巌、三役は尾上始太郎・野口貢五郎・栗崎清之、谷口喜三郎ら、能楽界に於ける田鍋惣太郎の力量の大を今更のように知らしめられる思いがする。

三須平司はこれが当地最後の舞台で昭和七年に八十五歳で没するが、幸悟朗はその後、大正十二年四月、能楽協会催能に「湯谷」喜多六平太と「石橋・大獅子」観世喜之・橋岡久太郎を、十三年十月十一日、歓興会で再び「石橋・大獅子」大槻十三・大槻舜一を、昭和十六年四月十三日、観世九皐会追善能で「山姥・雪月花之舞」梅若万三郎を勤めている。

戦後、昭和二十二年九月、悟朗を祥光に改名するが、その経緯を自著『小鼓とともに』の中、社中の福田良之助（大正十年―昭和五十二年）の問いに次にように答えている。

**福田**　先生が五郎から悟朗にかえられたのはどんな理由だったのです。

**祥光**　あまり病気をするもんだから、字を変えた。字劃に依って姓名判断をするアレです。昔、斎藤香村君が「あなたの本名の下に次郎をつけて五郎次郎としたらどうかといわれたことがありますよ。五郎次郎は幸の家では由緒のある名前です。戦後に、近藤（全宏）君のすすめで、祥光と変えました。

註　斎藤香村（明治十五―昭和二十九）能楽評論家。謡曲大講座刊行会より『宝生九郎口伝集』『細川幽齋と能楽』などの著述のほか新作能『龍口』などがある。

近藤全宏（明治三十九――平成三年）小鼓方幸流。

幸祥光（55）と改名の後、戦後は昭和二十四年十月二十五日、岐阜市公会堂仮設舞台での岐阜観世会が初めて。「井筒・物着」観世華雪、「石橋・大獅子」橋岡久太郎・久馬、の二番に出演。名古屋は二十九年七月八日、松坂屋ホール舞台に於けるヴェニス国際演劇祭参加能楽団の、渡欧に先立つ彼地上演曲の短縮形式による試演会（本稿第八章に既述）。三十年五月五日、田鍋惣太郎舞台六十年記念の三日目に「熊野・三段舞」桜間弓川、三十二年八月十五日はフランス文化祭参加東京能楽団の一員として再度の渡欧からの帰朝公演に「隅田川」喜多実、「船弁慶」山本博之。三十四年三月二十八日、「清経・恋之音取」観世元正、一調「花筐」林愿蔵で中日五流能に初出勤。以後は四十二・四十四・四十六年と春の名物公演となった中日五流能（二部制）に能と一調、各一番で来演、各年曲目は「楊貴妃・台留」観世銕之丞・一調「玉之段」梅若猶義、「砧・梓之出」梅若六郎・一調「放下僧」林喜右衛門、「景清・松門之会釈」近藤乾三・一調「善知鳥」林喜右衛門。

不世出の名人を謳われた幸祥光、初来名以来、勤めた舞台は此処に記したもので全て。数える程の少なさだが素晴らしい演奏が当地能楽界に残してきた影響は大きい。そして、名古屋最後の舞台は昭和五十年（一九七五）七月二日、各地を巡るという幸流全国囃子大会の第六回。全国に散らばる社中が一堂に会し、独調二九・連調二四・居囃子九・一調十の計七一番の盛会で、その殆んどは女性、脂粉の香りの充満する能楽堂の華やぎに圧倒されたことを覚えている。番外に居囃子で「猩々」を藤田六郎兵衛・幸祥光・河村総一郎・鬼頭喜太郎、地謡は観世武雄・武田志房・梅田邦久で勤めた。

十二月四日、観世流の武田四郎（故宗治郎四男）が四十四歳の若さで病没。初来名は昭和二十四年十一月三日、鳳鳴会の亡父武田宗治郎追善での「砧」シテ武田太加志のツレ、二十九歳。最後の舞台は三十八年五月二十六日、武田太加志の主宰する鳳鳴会の社中会で舞囃子「高砂」武田太加志の地謡。昭和三十五・三十七年を除く三十年代、毎年一度、鳳鳴会の社中会に来演して地謡などを勤めたが名古屋との縁は薄かった。

十二月六日、能楽協会名古屋支部主催の楽師会乱能。「翁」藤田六郎兵衛・筧三男（三番叟）「鶴亀」田鍋惣太郎「土蜘蛛・千筋之伝」田鍋惣一郎、と能三番は田鍋一門、舞囃子四番は「田村」佐藤秀雄「羽衣」鬼頭季信「吉野天人」後藤孝一郎「安宅」西尾孫太郎、狂言二番「梟山伏」西村欽也「二九十八」増田一雄、囃子方に和泉保之、辰巳孝、倉本雅らが来演。

十二月十三日、名古屋宝生会定式能の今年度納会。素謡「藤戸」内藤泰二、仕舞三番「鶴亀」鈴木義久「巻絹」戸田秀雄「鉄輪」辰巳孝、能「班女」倉本雅、狂言「素袍落」佐藤秀雄、能「絃上」野口禄久。

## ◆春酣の舞台から◆

## 「第二十九回・邦謡会」「観世会定式能」「椿大神社神事能・鈿女」「名古屋能楽堂開館十周年記念能・初日」

竹尾邦太郎

**「草子洗小町・替装束」**　「小町の一生」と題する番組の一で、中に舞囃子「通小町」片山九郎右衛門を挟みトメに「卒都婆小町・一度之次第」、催主・梅田邦久が喜寿を自祝し独演二番を勤める。梅田邦久には昭和五十九年、能楽で観る「曽我物語」の企画があり、「小袖曽我」・「夜討曽我・十番斬」を勤めたことがあり、ほかのシテ方にも雪月花独演能三番などと称する催会も見受けられたが、今や独演二番能も珍しい。喜寿翁の意気や壮であるが、寿命が延びたせいか、翁の呼称をとんと聞かないのも時代か。

「替装束」の小書でシテ小町は緋長袴、壷折の白地唐織に映え、品がよい。歌合の席で黒主ワキ雅介に自作を古歌と言い立てられるシテ、満座の蔑視を浴びれば我が身でなくとも傍の官女（美和・郁子）怯えるように座を移すと、シテ独りぽつんと置き去りにされる心細さは、精神的には歌道の大祖柿本人麿にも見放されたかの無念。〽小町をば捨て果て給ふか、の声調に心持がよく出ており、左手のシヲリが切ない。クドキに「あまりに恥かしうさむらへば、と思い余ったようにじりじりと少しずつ貫之ツレ一政にアシラヒ、入筆の墨を洗い流したい、の哀願。王（子方・富田尚史君、はきくしていて結構）を差し置いては決断し得ないツレにも、思う結果が得られなければ、と諌められ、〽とにかくに思ひ廻せども遣る方もなき悲しさに、と右手でシヲリ立ち上がる処、長袴を踏みつけ立てず後見が助けるが、立ち上がれない程の叶わぬ心の痛手とも…。小書は〽秋の七日の衣なり、のあとイロエを抜く。

草子洗の場は唐織を脱ぎ裳着胴姿、脇正に膝をつき框外から三度水を掛ける。シテの疑い晴れゝば、屈辱に自害せんと橋懸へ行きかける黒主ワキ雅介へ「なうくく」と呼び掛け立って追うシテ。膝に不安が見えたが、物着に金色風折烏帽子・白地下り藤文様の長絹を着けて舞になれば、優しい心

（④面へつづく）

（上）「草子洗小町」梅田邦久
（下）「卒都婆小町・一度之次第」シテ梅田邦久
邦謡会能
（杉浦賢次氏撮影）

（③面よりつづき）

が溢れる様な美しい中之舞、流石を思わせた。（1時間29分）

**「舟ふな」** 主アド小三郎に同道して渡しへやって来た太郎冠者シテ菊次郎、渡し舟に「ホウイ、ふなやーい」と呼び掛ければ、主は「ふねと言うて呼べ」と窘める。互いに我を張り押し問答になれば、古歌にも「ふな」とシテ。負けじと主も「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れ行く舟（ふね）をしぞ思ふ」と歌聖・柿本人麿の歌を詠めば、次々古歌を引き合いに出すシテ。後にも先にも此の一首しか知らぬ主は、詠唱の調子を変えるだけで誤魔化そうの苦肉の策。遂には堪り兼ね、「由無い歌穿鑿は要らぬものぢゃ」と謡を持ち出すが此れが却って藪蛇、出だしは好かったがハタと詰ってしまう。物知り立てをして主を困らせるシテ、調子に乗り過ぎたと悟り神妙、叱り留メ。

苛立ちを押えに押えていた風の小三郎、揶揄でなく向きになる真剣味の菊次郎、小気味よい舞台だったが、何よりも先の「草子洗小町」の歌合に人麿の御影の前で詠み上げられた人麿その人の歌が、「舟ふな」の歌問答に効かされる面白さ、粋な番組に感服。（14分）

**「卒都婆小町・一度之次第」** 小書で先づシテ邦久が次第の囃子（六郎兵衛・四郎兵衛・総一郎）で幕を離れ、直ぐ三ノ松で胸杖に暫しクツロギ、杖の先端を支点に舟を漕ぐ様な前傾姿勢で運び、舞台へ入る。〽月の桂の川瀬舟、と右ウケて眺め、〽漕ぎ行く人は、と笠に左手を遣り、〽誰やらん、と詰メて返シ句に一足退り、胸杖に一息入れると、いっとき興を誘った彼方の景は一転、視線を戻せば目には左前方に認める朽木。シテ登場前、卒都婆を擬した葛桶を出さない演出は、余りの疲れに腰を下ろそうと〽思ひ候、で笠を脱ぐと五・六歩出て杖に縋り下居になる。

外連（けれん）が云々される向きもあろうが、一曲全体が写実に徹した演出に思えたので、ここは視覚的にも葛桶を出し、ピタリ座って欲しかった。

ワキ僧（和幸・順三）との卒都婆問答は、左、右と二人にアシラフのが折角の休息中に小煩いことを、の趣で軽くいなす印象。〽眞に悟れる非人なりとて、と畏れ入って平伏するワキに、面だけアシラフのが如何にも。素姓明かしては、〽影恥かしき、と笠を面に翳ス（写真）しおらしさ。ロンギで杖に縋って立つと、頭陀袋の中を問うワキ。応えるうち狂気を生じ、〽また狂乱の心つきて、と杖を捨てるや、〽なう物賜べなう、と両手に捧げる笠をつき付ける様にワキへ迫るところ、地（九郎右衛門・清司ら）との掛合による場景描写の緊迫感が素晴らしい。更に、深草少将の怨霊が憑くに及び蘇らされる過去の所作。物着に小立烏帽子・利休色長絹を着けると、〽浄衣の袴かいとって、とイロエから百夜通いの様を見せる。〽あら苦しや目眩や、は息も絶えぐ、〽胸苦しや、と扇を胸に当て、〽（一夜を待たで）死したりし、とよろ〳〵退り安座のところなどは写実の極に思えたが、〽斯様に物には狂はするぞや、と面だけワキへアシラフとキリ。此処へ来て体力を消耗し尽したか、〽これに就けても、と正へ直って気分が変り、〽願ふぞ眞なりける、でスッと立って欲しかったが後見の介添、疲労の色濃く、〽悟りの道に、果して入れたかどうか、痛々しい感じがあった。（1時間23分・4月8日・第29回邦謡会能）

**「二人静・一度之次第」** 小書で菜摘女・伸吾は静ノ亡霊の里女・慶次郎ともぐいわゆる両ジテ扱いで親子共演。本曲はこの四半紀すでに三度（今回を挟み前に万三郎・紀長、後に芳伸・芳宏改め山階弥右衛門）上演されたが統計的に親子・兄弟の共演が多いのも、形影相伴う、とか形影一如などと称される舞の姿が以心伝心・阿吽の呼吸に適うからのことであろうか。

菜摘の帰りが遅れ、勝手宮の神主ワキ勝久に咎められる菜摘女、まことは思えない見知らぬ女の頼み事で、と弁明するうち、真とは思えないその疑いの心に忽ち先の怪しい女が取り憑き、乗り移られる菜摘女。「なに真しからずとや」とワキにアシラヒ、詰問口調の腹にこたえる低い声が無気味なら、「うたてやな」と直り、「さしも頼みし甲斐も無く」には凄味も。この変化ぶりが鮮やか。

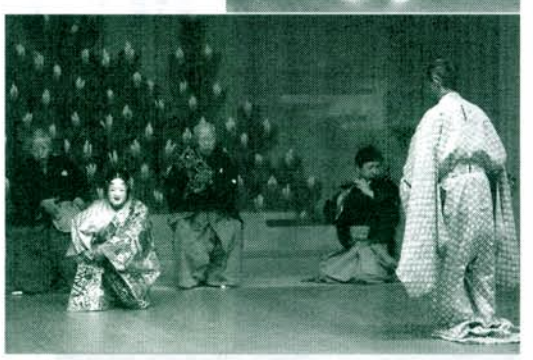
クセ舞は二段グセの後の上ゲ端のまえ、〽さるにても三吉野の、辺りまで幻の静御前は一ノ松で床几に掛かって居り、静御前が乗り移った菜摘女が独り舞い、以後、相舞になる。序之舞よく揃い優美に舞上げ、連吟には豊かな情感があり、〽思ひ返せば古も、と向き合うと、地（邦久・邦弘ら）の返シ句に幻の静御前は菜摘女の右肩にそっと手を置くが、幻だけが三ツ拍子を踏むのは〽今も恨みの、心の反映か。〽（名をば）決めぬ、と両人向き合い、沈むと直ぐ立ち、切地のうちに幻は一ノ松、菜摘女は常座、共に翳シて廻り〽静が跡を弔ひ給へ、と両人ワキへ合掌、返シ句に袖返シ右ウケて菜摘女だけが留拍子を踏む。ワキには見られない幻には踏む要も無いということだろう。（1時間18分）

**「昆布売」** 北野の御手洗祭の人出に大身でもないのに体裁が気になる何某アド小三郎、太刀を持たせる者を物色するうち昆布売シテ又三郎に出遇い、脅して持たせはしたが、考えるまでもなく凶器は相手の手中。逆に嚇され、様々な節付けの売り声で昆布を売らされる破目に。「さて〳〵器用な奴ぢゃ」と昆布売をして言わしめる何某の巧さ。実生活では父親のシテ又三郎、この科白少々くすぐったかろうが起用は本物、子息の小三郎の芸に勢い。（24分）

**「鞍馬天狗・白頭」** シテ六郎。前は直面・兜中・茶大口・黒水衣の山伏。後は面癒見悪尉・白頭・大兜巾・緑地卍繋唐花文半切・白地輪宝文袷狩衣（衣紋）・掛絡・羽団扇・桜枝付鹿背杖の大天狗。前後とも申し分のない堂々の貫禄をみせる。

前は花見の一同が退いた後、独り残る牛若（子方・浦田親良君、毅然とした態度・明快な口跡で好演）との問答に通ういたわりの心、夜更けて暗い鞍馬の山道〽花ぞしるべなる、と牛若に向きざま立って近付き、牛若の肩抱きかかえて花明りの方へ案内するところは庇護者そのものの愛情、慕う牛若との図式は衆道の影も宜なるかなを思わせる人物描写の冴え。〽大天狗は我なり、と牛若へ詰メ、素姓名乗るところは人品骨柄いかにも大きい。唯この後の中入地の乱れたのは残念。

後は正体現わす牛若の兵法の師匠シテ大天狗。師匠大事に弟子は師の言葉を遵守、濫りに稽古の程をひけらかす事の無きに感じ入り〽あら愛おしの人や、とシテ、床几に掛かると張良が黄石公に兵法の奥儀を授けられた故事を語る。抑揚を利させ、噛んで含めるように諄々と語るところ、説得力も充分。〽落ちたる沓をおっ取って、と床几を下り、〽兵法の奥儀を、と再び床几に掛かると、〽伝へける、と牛若へ颯と指スところ胸が透く。床几立ってからは〽そもそも武略の誉の道、と六ツ拍子強く踏み、舞働は抜けて直ぐ〽そもそも、と地の返シ句、〽取り分き彼の家の、と指廻、〽天皇の後胤、でシテと牛若、相寄るとシテは牛若の長刀を取り、〽驕れる平家を、以下豪快に舞い、〽会稽を雪がん、と長刀を戻すと地のうちにシテは橋懸へ、それを追い一ノ松でシテの左袖に取りつく牛若。再び舞台へ戻ったシテは、脇座前から〽（弓矢の）力を添へ、と牛若を指シて助力を約束、〽頼めや頼めと、左、右と両袖力一杯巻き上げ一気に三ノ松へ、左ウケ留めた。圧倒的な重みをみせるシテに、慕い纏はりつく趣の牛若、面白かった。（1時間2分・4月8日・観世会定式能）



名古屋能楽堂10周年記念能
㊤第一部「田村」衣斐正宜
㊦「班女」シテ長田驍、ワキツレ椙元正樹
（杉浦賢次氏撮影）

**「鈿女」** 伊勢国の一の宮、椿大神社は主神に猿田彦大神、別宮に妻神・天之宇受女命を祀る。椿大神社ゆかりの古能「鈿女（うづめ）」は昭和四十八年（一九七三）金剛流によって復曲され、以来、毎年四月十一日の春季例大祭に金剛宗家を招き、神楽殿で上演される神事能である。

前場、椿が満開の春の例大祭の庭、神主ワキ大が神楽の役々を集め祭事を執り行なう処へ出現する由ありげな里女シテ永謹、ワキが何処から、と問えば此の辺りの者と。ワキは更にシテが神代のことに詳しいを不審、素姓を質すと、「さのみな不審し給ひそ」と押し止め、〽御神楽を暫し待たせ給はば、再度姿を現わそうと作物へ消える。アヒ所ノ者・薫、段熨斗目着付・長袴・小刀の出立。立シャベリに天の岩戸の事や猿田彦の事などの故事を滔々と語って退くと後場。

ワキの待謡から出端（光廣・尚靖・清一・光範）でシテは作物の中から謡い出す。作物を出ては、伸びやかに大きなクセの舞が官能的とも思える艶やかな美しさ。扇を榊枝に替え神楽になると、この度はその麗姿が神々しくも見えてくる。緋大口に白の舞衣、その文様は楽器尽シで曲趣に相応しく、如何に神遊びの気品、素晴らしかった。（1時間5分・4月11日、椿大神社神事能）

椿大神社神事能
「鈿女」　金剛永謹　（筆者撮影）

**「付加」** 平成十三年（二〇〇一）の番組の冒頭には「能舞台完成へ邁進」とあり、山本行隆宮司の挨拶の中に次の言葉がある。「ことしは当神社御鎮座二千年奉祝記念事業の第二期工事・椿文化参集殿造営に着工する事と相成り、ここに能舞台を設けることとなっておりますが、いずれ完成の暁には本日の神事能も、ここにて奉納され御祭神猿田彦大神、天之鈿女命の御神慮をお慰め申すことに相成ることと存じます」と。しかし、その後この計画は種々事情があったことだろうが能舞台は立消えになったと仄聞する。

芸能の祖神を祀り、多くの芸能人の崇敬を集める椿大神社、この絶好の所を得て閉館した熱田神宮能楽殿の舞台が移築されたなら、さぞかし有意義であったことだろうと思わずには居られない。

**「田村」** シテ正宜。前は童子。春爛漫の清水寺境内・地主権現の桜を大いに自賛する一セイ・サシ・下歌・上歌を省き直ぐワキとの問答になるのが物足りない。清水寺の縁起を云うシテ語から名所教のあと、春宵一刻は千金にも替え難いとばかり、〽今この時かや、とワキへ走り寄り、肩に手を掛けるや直ぐ正先へ誘うところは写実の妙。クセ切に大小前、〽天も花に酔へりや、と頭を取り眺めるところは気分も駘蕩。

後は鈴鹿山に鬼神を退治る坂上田村麿、〽振り放け見れば伊勢の海、の地（輝和・満次郎ら）の返シに颯と袖返スところ、袖越しに振り仰ぎ遠くをみる一瞬、シテは生地（伊勢湾に面した鈴鹿市）に思いを馳せるのでは、と不図思った。

**「班女」** 一夜の契りに美濃国野上宿の遊女・花子シテ驍は客・吉田少将ワキ勝久に、客に遊女に惚れて互いに忘れかね、形見にそれぞれの扇を交換、紆余曲折の末に再会を果すという。

頑として座敷に出ないシテに激怒、遂には放逐してしまう女主アヒ靖浩の憎気が堂に入れば、あくまでしおらしい振舞ながら芯の強さは我関せずの冷やかさに見えるシテ、火と水の対照が面白く、アヒが目付柱下に居てシテは正中辺りという位置関係も珍しい。扇を取り上げ、忌々しげに音をさせて置くと立って行くアヒの気配を背中に聞き、静かにその扇を拾い上げるシテ、愛しげに胸に抱きしめる風情が中々。後はクセ中、〽いつまで草のと地（呻二・郷ら）のうちに橋懸へ。〽欄干に立ち尽して、と一ノ松勾欄に寄り、〽其方の空よと、遙かワキ柱の方へ眺めるところ、一入の寂寥感。舞が済んでからはシテの扇を見咎めたワキが、扇を見たい由ワキツレに命じるところ、〽人に見する事あらじ、と両手に握って梃でも渡さんの心をみせるシテ（写真）、印象的だった。（1時間24分）

名古屋能楽堂10周年記念能
㊤「酢薑」左より井上菊次郎、佐藤友彦
㊦「鞍馬天狗・白頭」左より久田勘鷗、勘吉郎
（杉浦賢次氏撮影）

**「酢薑」** 酢売シテ菊次郎、薑売アド友彦、「酸い」と「辛い」を詠みこんだ秀句合戦に終始して埒があかず、相商いにして目出度く笑ヒ留メ。酢薑（すはじかみ）とは酢には薑、薑には酢が要のこと。薑は生姜の古称。新生姜を梅酢に漬けた紅生姜は酒肴の味な一品で爽やかさが身上、シテとアドの相性もよく、問答の歯切れのよさは正に爽やか。文字通り洒落た一番。（18分）

**「鞍馬天狗」** 番組に記載は無かったが「白頭」の小書付。演出に若干の相異はあるが、一週間のうちに同じ曲が二度出ることになる。シテ勘鷗、前は鉄色大口・縞水衣、剣を佩くところに位をみせる。牛若は勘吉郎、度々の共演で息の合った親子、安心して見られること定評のあるところ。間（アヒ）は替で木葉天狗が出る。後の装束付は六郎の場合と大方は同じ、ただ狩衣に白縷水衣を重ね、鹿背杖には桜枝を付けなかった。張良・黄石公の故事を語るところ、〽兵法の奥儀を伝へける、と牛若へ力強く指ス（写真）のは当然汝へも、の心。神妙な面持ちで聞く牛若の態度が立派なら、シテの豪放磊落な態度は如何にも偉丈夫のスケールの大きさ。舞働はやはり抜いた。（1時間18分・4月13日・名古屋能楽堂10周年記念能　初日）

# 能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
ＦＡＸ（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

## ＮＨＫ放送予定（平成19年7月～8月）

◆ＮＨＫ－ＦＭラジオ能楽鑑賞（毎週日曜日7時15分～8時）

7月29日　狂言「伊文字」（大蔵流）　大蔵彌太郎ほか
8月5日　能の音楽① 囃子のリズム
8月12日　能の音楽② 登場の囃子
8月19日　能の音楽③ 謡と囃子
8月26日　能の音楽④ 舞と囃子
（解説はいずれも高桑いづみ）

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

（能・狂言演能関係）
（TEL 052－231－0088）

［7月］
22日(日)　20周年記念 恵謳会　（無料）
27日(金)　名古屋能楽同好会　（無料）
28日(土)　第8回伝統芸能上演会　（無料）

［8月］
4日(土)　青陽会定式能　（有料）（番組②面）
10日(金)　青雲会　（無料）
18日(土)　名古屋能楽堂開館10周年記念
名古屋ゆかりの和泉流狂言づくし
（有料）（番組②面）
19日(日)　七彩会
21日(火)　名古屋学生能楽連盟8月例会　（無料）
26日(日)　衣斐正宜後援会能　（有料）（番組②面）

［9月］
2日(日)　名古屋能楽堂定例公演　（有料）（番組②面）
9日(日)　名古屋幽花会　（無料）（番組③面）
17日(祝)　名古屋観世会定例公演　（有料）
24日（月・休）　橋岡久馬三回忌追善名古屋橋岡会
（有料）

## 第6回名駅薪能
### 7月29日　観世宗家来演

「第6回名古屋名駅薪能」は7月29日(日)観世流観世清和宗家が来演して、ＪＲ名古屋駅・タワーズガーデン特設会場で開催される。午後5時開場予定、六時開演、入場無料但し要整理券（600席）自由席・立見含め（600名）雨天の場合は名古屋能楽堂（整理券必要）

演能は次のとおり。

観世流能「嵐山」（シテ久田勘鷗、前ツレ藤谷音彌、後シテ久田勘吉郎、上田顕崇、ワキ高安勝久）

和泉流狂言「太刀奪」（シテ井上菊次郎）

観世流舞囃子「熊野」（シテ久田三津子）

観世流能「安達原」白頭・急進之出（シテ観世清和、ワキ高安勝久、間狂言井上靖浩）

主催財団法人観世文庫、名古屋名駅薪能実行委員会。

## 各地で薪能

### ころも芝能
**8月16日　豊田スタジアム**

夏の恒例・ころも薪能は、ことしは豊田スタジアムの芝生を舞台に「ころも芝能」として8月16日(木)開催される。午後6時開演。

宝生流能「羽衣」（シテ宝生和英、ワキ高安勝久）

和泉流狂言「蚊相撲」（シテ井上菊次郎、アド佐藤友彦、アド井上靖浩）

観世流能「紅葉狩」鬼揃（シテ観世喜正、ツレ野村昌司、武田友志、武田文志、坂井音雅、武田宗典、ワキ飯冨雅介、杉江元、椙元正樹、橋本宰）

入場料＝全自由席二〇〇〇円、チケット取扱い＝豊田市能楽堂（0565・35・8200）豊田スタジアム（0565・87・5200）

### いわむら城址薪能
**8月18日　能2番上演**

恵那市岩村町では、8月18日(土)「第23回いわむら城址薪能」が開催される。

主催：いわむら町まちづくり運営実行委員会、会場＝岩村城藩主邸趾、午後5時30分開演。

能組は、宝生流能「羽衣」（シテ玉井博祐）

狂言「魚説法」（茂山千作）

宝生流能「天鼓」（シテ辰巳満次郎）

前売券四千円（当日券五千円）、問合わせ＝まち並みふれあいの館（電話・FAX0573・43・4622）

### 第24回　天王薪能
**9月26日　津島市文化会館**

「天王薪能」はことし第24回をむかえ、9月26日(水)津島市文化会館大ホールで開催される。

能組は　金春流仕舞三番。

狂言「蝸牛」（野村萬斎）、金春流能「八島」（シテ本田光洋、ツレ鬼頭尚久、ワキ飯冨雅介）、鑑賞券・全自由席＝前売四〇〇〇円（当日五〇〇〇円）、問い合わせ＝津島市文化会館（0567・24・1122）

### 大阪　山本能楽堂たちまち能

山本能楽会主催の定期能「たちまち能」9月公演は、9月1日(土)山本能楽堂（大阪市中央区徳井町1－3－6）で開催される。午後1時開演。

能「松風」（シテ山本章弘）、狂言「蟹山伏」（シテ小笠原匡）、能「天鼓」弄鼓之舞（シテ山本順之、ワキ植田隆之亮）

入場券一般券五五〇〇円、一学生券三〇〇〇円。

## 名古屋能楽堂開館十周年記念
## 「市民能楽大会」

### ◆参加者募集のお知らせ◆

本年は平成九年四月に開館した名古屋能楽堂が十周年の記念の年を迎えることとなりました。これを記念して「市民能楽大会」を左記の日程で開催いたします。

つきましては、一般能楽愛好家を含んだ多くの方々の参加により、記念事業を祝したいと思います。多数の方々に、ご参加をいただくようご案内申し上げます。

社団法人　能楽協会名古屋支部

**［募集要項］**

一、**日時**　平成十九年十二月十四日(金)、十五日(土)の二日間
両日とも午前九時半から午後八時まで

二、**参加グループ名または会名**（　　）
指導先生名または代表者氏名（　　）

三、**演目種類と曲目・出演者氏名**
（例　仕舞　熊野　名古屋太郎）

四、**参加単位**
（一単位　二十分　参加費　一単位　五千円です）
一グループ三単位までとさせていただきます。

五、**参加グループまたは会の責任者**　住所・氏名・電話番号

六、**参加希望**　日時・時間（　日　時から　時まで）

以上すべてを明記のうえ、封書にて

〒466－0033　名古屋市昭和区台町2－16－5
梅田邦久方
「名古屋能楽堂開館十周年記念能楽大会」係り宛へお送り下さい。

**締切りは平成十九年九月十日(月)まで必着とします。**

また能楽協会名古屋支部の先生を通じて提出していただいても結構です。

なお番組は、十月中旬頃作成し、各出演グループへお知らせする予定です。多くの方々のご出演をお待ちしています。

なお、参加費以外の経費については、ご出演者の負担とさせていただきますので、ご了承下さい。

詳細お問い合わせは、副支部長柳原まで
（TEL　052－832－1031）に
（携帯　090－3307－4474）
お願いします。

## 暑中御伺

名古屋　観世会

## 暑中御見舞申し上げます

観世清和

幽謳会　片山九郎右衛門　清司

大槻清韻会　大槻文蔵
〒540－0005　大阪市中央区上町A番七号
電話（〇六）六七六四－〇八九八番

鳳鳴会　武田志房　武田友志
稽古場　名古屋市千種区今池四丁目15－3　浅井ビル
電話〇五二（七三二）三七三六

幽花会　片山慶次郎　伸吾
〒603－8123　京都市北区小山下花ノ木町二一
TEL　四九二－五三〇二番
FAX　四九二－五三〇九番

鋣仙会　観世鋣之丞

大西智久

梅猶会　猶諷会

梅若吉之丞　猶義

名古屋観鴦会　山本勝一　山本博通

名古屋観世九皐会　観世喜之　観世喜正　高橋瞭一　外山圭一

井上嘉介　井上裕久
〒603－8175　京都市北区紫野下鳥田町六

壺泉会　泉嘉夫
名古屋市昭和区山手通3・8・2・306
電話（〇五二）八三二－三一八五
西宮市甲陽園目神山町二三－二五
電話（〇七九八）㉓二四五八

## 青陽会定式能（第51期第3回）

八月四日（土）十一時開演
名古屋能楽堂

能 **養老**
須部八神 浦 孝充　梶本 高安 正樹　杉江 勝久　今枝 郁雄 元　河村眞之介 船戸 昭弘　加藤 竹市 洋輝 学
仕舞 富士太鼓 阿 星野 路子　槽 前野 郁子
間 清 梅田 嘉宏　経キリ 輪 黒田 博　三 通小町 祖父江修一

能 **井筒**
松山 幸親　杉江 元　河村総一郎 柳原冨司忠　大野 誠
間 佐藤 友彦

狂言 **文蔵**
井上 靖浩　井上菊次郎 後見 佐藤 友彦

能 **殺生石**
武田 大志　橋本 宰　河村眞之介 後藤嘉津幸　鬼頭 義命 大野 誠
間 佐藤 融

附祝言

主催 青陽会
お問合せ 名古屋市名東区一社三の一六二 久田勘鵬
電話〇五二―七〇五―一五八五

前売二五〇〇円（当日三〇〇〇円）

狂言 **寝音曲**
太郎冠者 野村又三郎　主人 野村小三郎 後見 伴野 俊彦

狂言 **首引**
親鬼 佐藤 友彦　為朝 井上 靖浩　姫鬼 佐藤 融　鬼 鷲見 政行　鬼 村野 守　鬼 井上 弾喜　今枝 郁雄 鬼　井上菊次郎 鬼　鬼 鹿島 俊裕　後見 大野 弘之

入場料（各部とも）
S席五〇〇〇円
A席四〇〇〇円
B席三〇〇〇円（全指定席）
チケット取扱い
名古屋市文化振興事業団（〇五二・二四九・九三八七）
名古屋能楽堂（〇五二・二三一・〇〇八八）

主催 名古屋市文化振興事業団 名古屋市

## 名古屋能楽堂開館10周年記念 名古屋ゆかりの和泉流 狂言づくし

八月十八日（土）
名古屋能楽堂

昼の部 午後一時三十分開演
おはなし 名古屋女子大学教授 林 和利
素囃子 神舞 大鼓 河村眞之介 小鼓 柳原冨司忠　笛 藤田六郎兵衛
狂言 戎毘沙門 戎三郎 野村小三郎　毘沙門天 有徳人 松田 高義　野村又三郎
狂言 千鳥 太郎冠者 野村 萬斎　主人 酒屋 高野 和憲　石田 幸雄
狂言 山車争 伊勢門水 井上菊次郎　参詣人 山車・雷 山車・恵比寿 山車・大黒 山車・巫女 山車・唐子 大野 弘之 鹿島 俊裕 佐藤 融 井上 靖浩 今枝 郁雄 米倉 愛 稚児 米倉 宏貴 稚児 米倉 光希 稚児 尾崎 令忠 稚児 尾崎 玄忠 稚児 長田 奏世 稚児 長田 朔人 稚児 寺田 勝哉

原作 北島 徹也　企画 藤田六郎兵衛　改訂 井上菊次郎

夜の部 午後六時三十分開演
おはなし 名古屋女子大学教授 林 和利
素囃子 八段之舞 大鼓 河村眞之介 小鼓 柳原冨司忠　笛 藤田六郎兵衛
狂言 鍋八撥 鍋売 野村 萬斎　目代 羯鼓売 石田 幸雄　笛 藤田六郎兵衛 深田 博治

## 第23回衣斐正宜後援会能

八月二十六日（日）午後一時始
名古屋能楽堂

講演「ワキの存在・ワキの魅力」
文芸評論家 清水 信

仕舞 桜川 東川 尚史　天鼓 和久荘太郎　野守 内藤 飛能　水上 優
一調 笠ノ段 水上 輝和　福井四郎兵衛
仕舞 野宮 寺井 良雄　船弁慶キリ 室生 和英

能 **花筐**
ツレ 衣斐子方 愛　シテ 衣斐 坂口 正宜 侑　ワキ 飯冨 橋本 雅介 宰　杉江 元　杉本 正樹　後見 寺井 良雄　室生 和英　東川 尚史　地謡 平田 正文　内藤 飛能　和久荘太郎　水上 優　東川 光夫　水上 輝和　金森 秀祥　佐野 登　河村総一郎　後藤嘉津幸　藤田六郎兵衛

附祝言（午後四時四十分頃）

主催 衣斐正宜後援会
事務所 名古屋市昭和区御器所3―23―19―802
TEL・〇五二・八八二・五六〇〇
FAX・〇五二・八八二・五六〇〇

[会員制]
一般入場料五〇〇〇円（限定）
学生二〇〇〇円（限定）

## 名古屋能楽堂定例公演［初秋能］

～尾張の殿様が観た能　三代・徳川綱誠～

九月二日（日）第一部 午前十時始　第二部 午後二時始

[第一部]
能 **頼政**（喜多流）
長田 驍　杉江 元　河村眞之介 後藤嘉津幸　鹿取 希世
狂言 **千切木**（和泉流）
シテ 佐藤 融

③面へつづく

## 暑中御見舞申し上げます

怡楽会　山階彌右衛門
観芳会　観世芳伸
藤井徳三
邦謡会　梅田邦久
清沢一政　須部甫　本田勲　今沢美和　梅田嘉宏
〒466―0033 名古屋市昭和区台町二丁目十六―五 電話〈〇五二〉八四一―四六三三番
大垣浦声会
稽古場 大垣市伝馬町大垣別院
電話〈〇五八四〉七三―三三六一
浦田保利　浦田保浩　浦田保親
〒606―0814 京都市左京区下鴨芝本町五八 電話〈〇七五〉七八一―七〇三〇
名古屋修諷会　梅若修一
久田観正会
大倉流小鼓松月会 久田勘鵬　郁諷会 久田舜一郎　前野郁子　松諷会 松山幸親　星野路子
〒465―0093 名古屋市名東区一社3―162 電話〈〇五二〉七〇五―一五八五
松音会
泉泰孝
〒168―0081 東京都杉並区宮前四―一九―四 電話〈〇三〉三三三一―八二八〇番
泉雅一郎
〒201―0002 東京都狛江市東野川四―六―八 電話〈〇三〉三四八八―二四八五番
下田雄三
豊中市曽根東町四―一―一二
雄諷会中部地区連合会
名古屋和諷会　一宮竹石会　岐阜花諷会
春鶯会
梅若善高
〒560―0084 豊中市新千里南町三丁目18―12 電話〈〇六〉六八三一―七八五四
〒166―0003 東京都杉並区高円寺南4・27・7・908 電話〈〇三〉三三一二―〇五七〇
上田観正会能楽堂
社団法人 観正会 TEL〇七八―六九一―五四四九
上田観正会
上田貴弘　拓司　公威　大介
名古屋淡交会
橋岡慈観
三交会
久田三津子
〒465―0083 名古屋市名東区一社3―162 電話〈〇五二〉七〇五―一五八五
武田謡楽会
武田欣司　武田邦弘　武田大志
財団法人 鎌倉能舞台
中森晶三　中森貫太
初陽会
武田宗和
稽古場 名古屋市千種区今池四丁目15―3 浅井ビル 電話〇五二（七三二）三七三六
橋岡会舞謡会
橋岡久太郎
＊＊＊＊
坪内芘路之　荒木亮　島田友三郎　山岸要吉　宮下功　小出年彦　塚田章　吉田重雄　松原章　半澤健　宮内美　山岸登樹

能　紅葉狩（観世流）　加藤春枝　今沢美和　前野郁子　本田勲　須部甫　清沢一政　高安勝久　橋本宰　相元正樹　河村総一郎　船戸昭弘　加藤洋輝　大野誠

附祝言　（午後一時十五分終了予定）

②面よりつづき

〔第二部〕

能　楊貴妃（室生流）　竹内澄子　飯冨雅介　河村眞之介　福井四郎兵衛　竹市学

狂言　飛越（和泉流）　野村又三郎　松田高義　後見　伴野俊彦

能　土蜘蛛（観世流）　橋本宰　杉江元　相元正樹　寛鉱一　福井良治　鬼頭義命　大野誠

附祝言　（午後五時終了予定）

主催　名古屋文化振興事業団（名古屋能楽堂）　能楽協会名古屋支部

〔入場料〕一般　前売三五〇〇円（当日四〇〇〇円）　学生　前売二〇〇〇円（当日二五〇〇円）（番組詳細次号）

## 名古屋幽花会秋季大会

九月九日（日）午前十時開演　名古屋能楽堂

番外仕舞　老松　片山慶次郎

素謡　田村　倉澤寛　長岬敏明　花月　徳岡孝二　石川輝夫　猩々　長瀬弘子　伊藤やす子

仕舞　敦盛　藤原美哉子　六浦　野村満子　浮舟　水野たづ子　邯鄲　小田和季

舞囃子　百萬　松久祐子　河村眞之介　曾和正博　杉市和　富士太鼓　懸瑛子　河村眞之介　曾和正博　杉市和

素謡　西行桜　松枝寅太郎　岡本耕蔵　松久祐子　高木寛敬　宮崎晃吉　武田邦弘

独吟　砧　ロンギ　東山清和

独吟　融　梅田嘉宏　村木寛茂

能　熊野　村雨留　植田隆之亮　広谷和夫　河村総一郎　曾和正博　杉市和

連吟　紅葉狩　日高尚子　黒川文子　松井律子　橘憂香

素謡　三井寺　子　片山紫乃　石原雅子　地大公代　岩瀬多美子

舞囃子　羽衣　和合之舞　石黒直子　河村眞之介　曾和正博　前川杉　三輪　村木玲子　河村眞之介　曾和正博　前川杉　光範市和

砧　後　比江嶋孝子　河村総一郎　曾和正博　前川杉　光範市和

連吟　女郎花　浅井剛　野瀬兼治郎　西野宏　増田育三

仕舞　玉鬘　中島佳子　杜若　冨田フク　采女　小泉いく子　松虫　木村厚　片山伸吾

番外仕舞　菊慈童　片山慶次郎

附祝言　（五時半頃終了予定）

［御来場歓迎］　主催　名古屋幽花会　片山慶次郎　片山伸吾

## 戦後名古屋能楽史 ㊾

〔第十九章〕　竹尾邦太郎

### 昭和四十年（一九六五）

戦後二十年である。名古屋の基幹紙「中部日本新聞」が正月一日を期して「中日新聞」と改称する。

一月十日、片岡道子が主宰する金剛流春星会の新春能、素謡「神歌」大塚一二・伊藤鉄之進、能「八嶋」金剛巌、仕舞四番「小鍛冶キリ」片野東四郎、「橋弁慶」豊嶋三千春、「花形見クルイ」広田泰三、「山姥キリ」今井幾三郎、一調「唐船」野崎太郎・山田仁三郎（謡）能「羽衣・盤渉」片岡道子、狂言「松楪」井上祐一・佐藤友彦、能「殺生石・女体」豊嶋弥左衛門。ワキ豊嶋十郎、大鼓谷口喜代三、太鼓前川善雄が来演。

一月十五日、名古屋清韻会大会は社中会。番外に仕舞二番「屋島」大槻文蔵「老松」大槻秀史、他に大槻秀夫・田村勇・泉嘉夫・水田博・宇治正夫らが来名。

一月十七日、名古屋梅猶会。能「田村」梅若修一、仕舞四番「難波」佐藤太俊「巻絹」加藤丈太郎「玉鬘」殿島修二「嵐山」河村鉦二、素謡「熊野」観世静夫・岡田朗詠、狂言「二人大名」野村又三郎、能「景清」梅若猶義、仕舞六番「猩々」梅若文孝「竹生島」梅若猶彦「笹之段」大槻文蔵「巴」柴田初太郎「歌占クセ」観世静夫「春日龍神」梅若猶義、舞囃子「天鼓」梅若雅俊、能「道成寺・赤頭」梅若盛義(28)、高安滋郎(48)、野村又三郎(44)、井上礼之助(50)、囃子方貞光義次(64)、福井啓次郎(35)、寛鉱一(34)、鬼頭喜太郎(40)、地頭観世静夫(34)、後見梅若雅俊(55)、鐘後見梅若猶義(54)括弧内は年齢。

一月二十四日、名古屋宝生会第九期第一回定式能、素謡「小袖曽我」内藤泰二・馬縅富四夫、仕舞三番「春日龍神」衣斐正宜「桜川」倉本雅「羽衣」村瀬澄子、能「八島」辰巳孝、狂言「岡太夫」佐藤卯三郎、能「葛城・大和舞」

（④面へつづく）

## 暑中御見舞申し上げます

笙月会　中川雅章　〒526-0096　長浜市地福寺町八ノ二九　電話〈〇七四九〉㊷〇六三〇番

梅春会　井戸和男　良祐

〒545-0004　大阪市阿倍野区文の里3-16-17　電話〇六-六六二一-二二一九

賀水会　桑名賀水会　名鉄百貨店友の会　加賀敏彦

〒463-0035　名古屋市守山区森孝二丁目七〇九　電話〈〇五二〉七七一-八九四五番

松盛会　小松勝憲

松舞台　〒511-0851　三重県桑名市西別所一〇六一の五　TEL・FAX〈〇五九四〉二三-四五八二

洗心会　奥村富久子

〒606-8433　京都市左京区永観堂西町二〇

観修会　祖父江修一

〒507-0848　多治見市日ノ出町2の2　電話〈〇五七二〉二二-三六五六

猶恵会　熊沢恵美子

〒465-0097　名古屋市名東区平和ヶ丘3-76　日車マンション四〇四

幸謡会　近藤幸江

〒444-2122　岡崎市鴨田本町十一番地ノ三　電話（〇五六四）㉑二五二九

千早会　八神孝充

〒464-0822　名古屋市千種区穂波町3-60-1-201　電話（〇五二）七六二-二一〇一

恵謡会　三村徑布

〒445-0851　西尾市住吉町三-一二　電話〇五六三（五七）二五九四番

桜月会　加藤春枝

〒509-0236　可児市皐ケ丘3-113　電話（〇五七四）六四-二三〇六

宝生英照

近藤乾之助

〒170-0002　東京都豊島区東鴨五-二三-八　電話〇三（三九一五）一三七六番

佐野由於

〒150-0011　東京都渋谷区東2-14-21　〒921-8034　金沢市泉野町4-15-18-301

倉本雅

〒658-0081　神戸市東灘区田中町1-13-22-809　電話（〇七八）四四一-五四六五番

惠美寿会　衣斐正宜　衣斐正宜後援会

〒466-0051　名古屋市昭和区御器所3-23-19　御器所パークマンション802号　電話（〇五二）八八二-五六〇〇番

宝生流　嘉宝会　鬼頭嘉男

〒466-0855　名古屋市昭和区川名本町二ノ五一

司宝会　佐藤耕司

〒468-0056　名古屋市天白区島田二丁目三〇一　島田橋住宅二-三〇　電話六〇三七三二

金剛永謹

廣田鑑賞会　廣田陛一　廣田幸稔

菊之会　菊扇会　廣田泰三　廣田泰能

豊嶋能の会　豊春会　豊嶋三千春

松野恭憲能の会　松野恭憲

〒616-8241　京都市右京区鳴滝泉殿町一八-三　TEL〇七五（四六二）二一四八番　FAX〇七五（四六一）六〇九八番

宇髙通成　竜成　徳成

〒606-8313　京都市左京区吉田中大路町19-1　〒791-8013　松山市山越4丁目11-38　松山景雲会

金剛流　名古屋周星会　岐阜周星会　吉川周子

〒464-0825　名古屋市千種区西崎町三-六　電話〈〇五二〉七六一-二二五七

（③面よりつづき）

宝生九郎。

二月二十一日、名古屋観世会定式能・四十年度初回。舞囃子「竹生嶋」柴田初太郎、能「小袖曽我」片山博太郎・慶次郎、仕舞二番「花筐」山本博之「野守」大槻秀夫、能「楊貴妃」観世元正、舞囃子「邯鄲」武田太加志、狂言「松囃」井上松次郎、「船弁慶・重キ前後之替」観世喜之、他に観世武雄・野村四郎・藤井徳三ら。

月が替り三月七日、名古屋観世九皐会の春季大会、番外に仕舞二番「弱法師」観世喜之「龍虎」永島誠二・観世武雄。

三月十四日、青陽会第八期第三回、能「嵐山」竹内六郎、仕舞「砧」柴田初太郎、狂言「歌争」佐藤友彦・大野弘之、能「巴」加藤丈太郎、仕舞四番「屋島」加賀敏彦「花筐」佐藤太俊「山姥」久田秀雄「鵜飼」河村鉦二、舞囃子「遊行柳・青柳之舞」塚本秀雄、能「卷絹」柴田収武。

三月二十四日、昭和三十九年度芸術選奨文部大臣賞の受賞者が決定したが能楽界からは該当が出ず、古典芸術の分野からは都派一中節の都一つや(72)が受賞する。

三月二十六日、重要無形文化財「能」の技術保持者が百三十四名に増員される（観世寿夫のみ指定を辞退）。『金剛』誌第六四号（昭和四十年五月刊）に次の記事がある。

さきに「能」が重要無形文化財として指定されたのは、昭和三十二年で、指定の対象となった当時の「日本能楽会」は会員四十名であったが（その後物故者六名を出し、現在では三十四名）、その数も極めて少く、且つ当時中央偏重、地方軽視等の声もあって、かねてよりその増員を文化財保護委員会に訴え、折衝が重ねられていた。今回「日本能楽会」を社団法人として編成変えをし、会員を百三十五名に増員して再発足した結果、三月二十六日の創立総会当日を以て文化財保護委員会の承認が決定し、改めて「日本能楽会」を中心として、「能」が重要無形文化財として総合指定されること、となった。

社団法人「日本能楽会」は、「会員の演技の練磨向上」「伝承者の養成」「能楽の保存と振興」を主たる目的及び事業とし、また会員の資格は、「舞台歴三十年以上」「過去十年間に、能のシテまたは地謡を年二回以上」、三役では一役を年十五回以上演じていること」などの条件審査が、審議会によって行われ、文化財保護委員会の承認を得ることゝとなっている。

現在、全国楽師を以て組織されている「能楽協会」の会員は千数百名で、今回技術保持者に認定されたのは、その約一割である。

―以下略―

因に当地からは脇方高安流・高安滋郎(48)、笛方藤田流・藤田六郎兵衛(57)、小鼓方幸清流・田鍋惣太郎(81)の三名である。

三月二十一日、第四十八回を数える名匠鑑賞能は春恒例の宝生大会。能「箙」辰巳孝（前）野口禄久（後）、狂言「墨塗」野村又三郎、能「西行桜」宝生九郎、能「殺生石・白頭」宝生英雄。こゝに今回も「西行桜」のワキに西村弘敬の名があるが、西村弘敬は昭和三十八年六月五日、熱田神宮大祭奉納能の終演後、高齢のため舞台引退を表明につき永年の労を謝して記念品贈呈式が行われているが、以後も番組に度々その名が載せられる。後世の史家は如何となすべきか…。

―以下次号―

## ◆皐月の舞台から◆

# 「豊田市能楽堂五月能」「第四五回・鳳の会」「第五〇記念・やるまい会（和泉流大狂言会）」「名古屋梅猶会」

竹尾邦太郎

**「因幡堂」** 大酒を喰らい、家事は構わず、夫シテ十郎を手玉に取る猛妻アド吉次郎。夫は妻の里帰りをこれ幸いに離縁状を送りつけて事足れりとする浅慮。即刻妻乞いを因幡薬師に祈念すれば、それと知った妻の企みは薬師の託宣に事寄せて不法侵入するハッカー行為。それにまんまと乗せられ操られる夫、初対面と思わせられる女性に見せる男の生態は、初心（うぶ）と見えて内実は見え〳〵の下心。十郎、男の弱味をさりげなく見せれば、吉次郎はウーマン・パワー存分に発揮、息の合った大蔵宗家筋のかっちりした硬派の舞台。（22分）

**「巴」** 粟津ヶ原に憩う木曽の旅僧ワキ閑、松蔭の祠で涙する里女シテ泉（面増・唐織着流）を不審すれば、却って不審は愚か、と窘め、逆に素姓問うシテには独り静かに居たいのを妨げられた苛立ちも。昂ぶる気持ちは、行教和尚の歌の下の句、「忝けなさに涙零れる」がすっと出なかったのを思わせる。此処が義仲終焉の地と教えられ、同郷の誼に〽拝み給へや、と勧められるワキ。〽神前に向ひ手を合はせ、とシテ・ワキ共に合掌すると、シテを代弁する初同（泰男・章ら）。ワキに終夜の誦経を乞い、ワキとの出合いを感謝、続いて蒼然と暮れてゆく湖畔の情景描写から〽我も亡者、とワキへ左袖アシラヒ消えるシテの中入、厚みのある地謡が素晴らしい。里人アヒ富太郎、粟津ヶ原の合戦のこと語って退くと後場。

豊田市能楽堂５月公演「巴」三川泉、ワキ宝生閑

クセに長刀掻い込み正中へ、〽信濃を出て、と床几に掛かり（写真）同郷の縁、〽順縁に弔はせ給へや、とワキにアシラヒ回向を願うと合戦譚はロンギ。〽雪は斑消えに残るを、と左から長刀大きく指廻、面使ヒ〽薄氷の、と下を見、泥田に踏み込み二進も三進も行かない態を抜き足と一ツ踏む足に、〽手綱に縋って、では腰を浮かして前のめりの心に、握り締めた左拳を突き出す型に義仲の死闘ぶり鮮烈にみせ、立場替って殉死を許されず涙に暮れる巴は、長刀執って立ち、石突とんと軽く突くと掻い込み、後ろを見せて一旦敵を欺くや勇躍敵の群の中、長刀捌きも美しく三ノ松近くまで追い立てる姿も勇ましい。〽今は是迄なり、と地の返シに舞台へ入る前、長刀を後見に渡し、正先に出された白水衣・小太刀を見込んで傍へ寄ると、それを〽巴泣く泣く、と双手に戴き、義仲の骸に別れを告げる心に左下を眺めるところ、寂寥の風情がとてもよく涙を誘うか。

物着は後見座。物着のアシラヒある訳でなく、物語は進行中、流儀の極めだろうが後見座では視覚的にシテは見所に後ろ向き状態、白装束に着替えるシテの心情は窺うべくも無く、隅でこっそり着替えている印象しないでも無かった。ともあれシテとワキに人間国宝、好調地謡陣、囃子方（学・孝一郎・純）の活躍で素晴らしい舞台だった。（1時間11分・5月12日・豊田市能楽堂五月能）

**「二人大名」** 二本差しは侍の呼称だが大身なら（狂言ではそうでもないが）太刀持を伴う。大名・甲（俊裕）偶々家来不在も言い訳に過ぎないが、太刀持を連れ歩きたいのは畢竟世間体、大名・乙（郁雄）を遊山に誘うが、遊山に太刀は無用の乙、一腰を手挟むだけ。甲と乙の心理的な違い明確にみせたろうか。

通行人シテ友彦に太刀を持つよう強請する甲、「あれは酔狂人ぢゃ、早う持ちませい」と乙、事が荒立つことから逃げたい郁雄が味

（⑤面へつづく）


## 暑中御伺

栄能楽舞台
名古屋市中区栄五―六―四
電話（二六二）一一八三番

彰飆閣
名古屋市天白区植田西二―八〇二―二
電話（〇五二）八〇五―二三〇一
連絡先　安城市三河安城東町1―7―3
グレイシャスビラ安城710号室
電話（〇五六六）七七―八三四一

楽・飆庵舞台
ご連絡は　名古屋市昭和区川名山町一〇五
電話（八三二）三四九一番

## 暑中御伺

金春信高
金春安明
〒167―0052 東京都杉並区南荻窪三丁目17―16
電話〇三（三三三一）二五七一番

本田光洋
〒164―0002 東京都中野区上高田二ノ二五ノ二
電話〇三（三三八六）二六四一番

春敲会
名古屋春栄会
金春穂高
廣瀬瑞弘
廣瀬雅弘

伊勢金春会
宇仁田吉邦
〒516―0076 伊勢市八日市場町5―16
電話〇五九六（25）五二九八

長田驍後援会
〒514―2221 津市高野尾町三三五一―四六
電話（〇五九二）（30）〇六九七番

喜多流
和楽会
和谷衡市
〒516―0067 伊勢市中島二丁目26―12
電話（〇五六〇）（25）〇一五九番

喜多流
二井会
二井英世
〒515―0073 松阪市殿町一四一二―三
電話（〇五六〇）（26）三五〇二番

福王茂十郎
和幸
知登

高安勝久

西村同門会
飯冨雅介
杉江元
椙元正樹
橋本宰

宝生閑
欣哉

植田和光会
植田隆之亮
〒673―0862 明石市松ケ丘4の3　A6―301
電話・FAX〇七八―九一一―二三七四

清水利宣
〒569―0817 高槻市桜ヶ丘北町11―25
電話〇七二六（九四）五〇一七

（④面よりつづき）

をみせる。太刀を持たせはしたが立場の逆転場面は「昆布売」に同じ。たゞ甲乙とも一腰を差し出すのに鞘でなく柄の方を先にしたところに戦意喪失を悟ったシテは、恣に二人を翻弄に掛かる。先づ闘鶏、烏帽子がとさかに似る、と烏帽子の上から赤い袋を被せることもあるが今回はその侭。甲が乙を二ノ松まで追い立て、戻ると勝関を上げるのが珍しい。闘鶏は三月三日、宮中では平安時代から行われてきたと云い、近代の代表的な俳人・飯田蛇笏に「春暑く素袍に汗や鶏合せ」がる。次いで素袍袴を脱がされ、白練・下袴にされると、「これもそなたが要らぬ事を」と未だ甲に愚痴る乙、犬の噛み合いから起上り小法師の真似（写真）までさせられ、運動能力も試されるかの二人だが、段々面白くなって喜々としてする物真似の無邪気、間に入って二人を旨く捌くシテ、アンサンブルも上々。（31分）

**「祐善」**　俗に在るとき傘を張っていた男遁世得度、会下僧（ワキ靖浩）になる。会下（えげ）は法会の下の意、師僧の門下に集い修行をする場、因に法会などで僧に差しかける傘を会下傘と。

ワキは上洛して俄雨に遇い、辺りの庵を借りるところ、曰く有りげな男（シテ菊次郎）に呼掛けられるので素姓問えば、祐善の幽霊と名乗り、「御身も傘に好き給はば、我も昔は傘を張りし謂れを申すべし」と左手をワキへ指シ約束の心、「構へて〳〵御弔ひあれと」言い残し、中入地（地頭・融）へ藪の中へと入りにける、と幕へ。ワキはそれを見送る様に正中へ、所ノ者（アヒ靖雄）を呼び出し、問答に祐善の身上を質せば、アヒは立シャベリに彼の私事を語って切戸へ退く。委細承知したワキは、「さては祐善の幽霊仮に現はれ、我に言葉を交はしけるかな」と、複式夢幻能の常套を踏襲、へいざや御跡弔はんと、膝をつき合掌、へ南無祐善成等正覚、と数珠を揉み、正先から脇座に戻る。

そこに狂言一声（誠・四郎兵衛・鉱一）で後シテが傘を担げ、「御弔の有難さに重ねて現はれ参りたり」と姿を現わし、ワキの求めに古の傘に纏わる妄執を語る。へ御前にさしかゝり、と五ツ拍子踏むカケリの狂乱は、一ノ松から戻ると地謡の詞章に合わせ、へ日本一の下手なりと、踏む二ツ拍子に悔しさを、或いは、傘求める人も無く、勧めても応じて呉れず、と傘を眺め首を左右に振るイヤ〳〵に憂慮を、へ骨折れや腹立や、と膝を打って虚しさを、心情的確に、狂い死に地獄の底に沈んでいたのが今は御法を受け、片帆を上げた弘誓の舟に乗り得た喜び。開いた傘にその喜びを象徴させて舞う（写真）と、キリは へ南無あみかさの、と傘を畳み、へ仄かに見えてぞ失せにける、と膝ついて留メ、立つと現れた時と同様に傘を担げて幕へ、ワキも立って後に続く。シテ菊次郎の端正な舞ぶり、一門の若手も手堅く演じ、引きしまった格調高い舞狂言になった。（35分）

**「引括」**　連れ添って十年、狎れ合う内に妻アド菊次郎から侮られもして顔を見るさえ疎ましくなってきた夫シテ友彦、「誑して往なさうと存じ」て己れの不甲斐無さ口実に、したて下手に出て里帰り休みを勧めるが、魂胆察して簡単には承諾しない妻。焦れた夫は「五年なりとも十年なりとも」言い放ち遂に破局にはなったのだが……。手切れの証を強く要求した妻が持ち出したのは古びた袋、「さて〳〵さもしい物が出ました」と笑う夫には妻の深慮判るべくもない。「何なりとも容れてゆけとおしゃるか」「必らず〳〵御悔やるなや」と妻、袋を夫の頭に被せれば、笑って逃げ出すのを力尽くで押っ被せ、近所の女子衆（靖浩・靖雄・郁雄・融）も加勢、「何れも目出度う囃して下され」の妻の檄に応え、「えーいさら、えーいさら」と気勢を揚げる。シテ柱に獅噛みつく夫は為す術もなく後ろ向きに曳かれて行く（写真）。常の演出は夫婦間だけの問題とするが、数を力に理不尽を正そうとする替の演出が如何にも今日性。（20分・5月13日・第45回鳳の会）

**「歌仙」**　和歌の神・玉津島明神に六歌仙の絵馬を掛け（脇柱と目付柱に）歌の上達を祈念する参詣人・菊次郎、後見座に下がると飄逸な感じの狂言下り端の囃子（六郎兵衛・四郎兵衛・眞之介・洋輝）でシテ人丸（萬）遍照（又三郎）業平（万蔵）小町（小三郎）猿丸（祐丞）元輔（扇丞）の順に六歌仙（狂言独自の人選）が橋懸へ並ぶ。シテが へ豊かなる、と謡い出し、へ今この御代の歌合せ月雪花をとり〳〵に、と見聞するもの全て歌の種、へ詠じて君を仰がん、と全員が同吟、シテを先頭にぐるりと橋懸を一巡、再びシテが へ磯の波、と謡い出し、以下同吟して へ今宵の月に遊ばん、と舞台へ入って座着くと、てんでに月を眺める様子（写真）が可笑しい。俗に「絵から抜け出た様な」と言うが、文字通りこれら六歌仙は絵馬の中から抜け出した異次元の存在、それ〴〵の個性・人格を表わす装束が見事である。

雑談から皆に歌題が与えられるが何れも難題、酒にして飲まぬ者から詠まそう、とシテ。酌は女性が、で小町が酌に立つと、盃の行方が注目され、先づ遍照に渡れば怨嗟の声、その盃は誰も受けまいと小町に戻され、小町が仕舞にしようとすれば、また不満が充満、結局、小町に盃のお鉢が回るが飲めない小町への苛め。庇う遍照は小町がシテの提案通り一首をものにし、この場を切り抜けると、その一首を賞讃すること頻りだが、面白くないのはシテ、異論を唱えれば反論する遍照、果ては小町と遍照との仲を中傷するシテに、遍照は数を恃むシテと争いになるが、多勢に無勢で敵わず、遍照と小町は一旦中入する。本来、雅な世界に居る歌人達が、小町を繞りどろどろした人間模様を展開してゆく面白さは、俗に墜ちて憚らないところ。就中、萬と又三郎が小町を介して争いに至る両者の心理、活き〳〵と役を楽しみ、役に遊ぶ趣の問答が秀逸。

後場は互いに得物を持って謡掛りにカケリも入る闘争。へ僧正馬より降り立ち、と棒を捨て一ノ松から舞台へ又三郎、迎える萬、組み討ちに若々しく元気なところをみせる。キリは、へ夜明鳥の声に驚き、夢は破れて元の絵馬の中に戻る心、ピタッと全員その場に凍り付いた様に動きを止めて留メ（写真）。今風に言えば、映画・テレビで動いている演技者が急に静止、その侭の状態が続くストップ・モーションの手法、絶妙の留メだった。また、本曲の底流には、本曲に先立つ素囃子「邯鄲・夢中酔舞」が揺曳していよう。（49分）

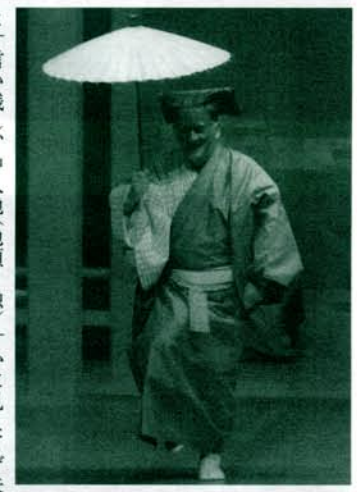
**「素袍落」**　伯父・友彦を伊勢詣に誘う使いに太郎冠者シテ菊次郎を遣る主・靖浩、「俄の事で御座るが今日発たうといふ事で御座る」の口上を伝えるシテは、自身も連れて行って貰えることになっているので嬉しさに表情崩れんばかり。急のことで同行出来ない伯父に鹿島立ちの酒を振舞われ、盃を重ねて酔が進むところ、代参を頼まれ小袖頂戴して恐縮のところ、など温顔にみせる芸劫。（30分）

**「見物左衛門・花見」**　独り狂言、和泉流三宅派のみの現行曲。四年前のやるまい会で「深草祭」を演じた万作が今回は「花見」。「深草祭」は加茂の競馬や奉納相撲見物、これに先立つ時間潰しの九条に在る古御所の佇まいや調度の見学、とざわめく祭見物が本命だが、「花見」は腰に瓢箪を下げ、花の名所巡り、酒興至れば小歌を吟じ、よその宴に触発されては小舞も舞おう、の花見の風流である。

独り酌む酒に舌鼓を打ち、気分は「ざっと酒盛に」へ地主の桜は散るか散らぬか、と花に嵐を案じ、西山・太秦太子の社・嵐山を巡り、また瓢箪の酒を。へあはれ一枝を、と吟じつゝ舞う小舞、手折って朧月と共に眺めれば、此の春の思いは残ろうが、命短かい花を惜しむ哀感は、何処からか飛んで来た礫に破られる感傷。大堰川に童の釣り姿、雲上人の舟遊びの管絃に気が移り、「身共も楽（が

（⑥面へつづく）

鳳の会「二人大名」
左より今枝郁雄、佐藤友彦、鹿島俊裕



鳳の会「祐善」井上菊次郎師
（撮影・杉浦賢次氏）

鳳の会「引括」シテ佐藤友彦（最後尾）
（撮影・杉浦賢次氏）

# 暑中御伺

谷田宗二朗
原大
小林努
〒603-8372 京都市北区衣笠街道町31-7
電話〇七五（四六三）四八七五番

藤田舞台
藤田六郎兵衛
〒451-0041 名古屋市西区幅下2-10-9
TEL&FAX 〇五二-五七一-六三四一（ロクサンヨイ）

幸友会
涛華能
福井四郎兵衛
福井良治

桂会
後藤孝一郎
嘉津幸

冨耀会
柳原冨司忠
船戸昭弘
〒466-0826 名古屋市昭和区滝川町47-147 サザンヒル八事2-703
電話（八三二）一〇三一番
小鼓教室　名古屋市中区栄　朝日神社内（丸善前）

飯嶋六之佐
〒920-0961 金沢市香林坊2-8-17
電話（〇七六）二六一-四三四〇

㈱大阪能楽会館
〒530-0015 大阪市北区中崎西2-3-17

大倉源次郎

叶石会
河村総一郎
河村眞之介
〒466-0821 名古屋市昭和区前山町一丁目二三
電話（〇五二）七六一-四八八二

河村大
〒603-8313 京都市北区紫野下柏野町五九-一
電話（〇七五）四六二-四一一五

亀井俊一
忠雄
保雄
実

呉竹会
筧鉱一

谷口正喜
〒602-0915 京都市上京区中立売通室町西入室町スカイハイツ610号

谷口有辞
〒520-0221 大津市緑町二四-二〇

前川光長
〒616-8095 京都市右京区御室芝橋町一の六
名古屋稽古場　名古屋市東区葵二-13-3 ツインクルガーデン801前野舞台
電話九三二-八八〇六番

葵心庵舞台
尾張旭市東大道町原田二四九三ノ二
若杉ビル（旭市役所南）
電話　〇五六一五③二三四六番
能舞台　電話〇五六一五④〇六九八

やるまい会公演「歌仙」
㊤㊦野村萬・野村又三郎・野村小三郎

（撮影・杉浦賢次氏）

（⑤面よりつづき）

く）を真似てみよ」もはや黄昏、〽名残の袖を振り切りて、と「花子」ならぬ「花」との別れは、〽あら名残り惜しやの、と帰路は橋懸へ。〽立つ方をかへり見たれば、と一ノ松から遙かに脇柱の方へ見込むところなど、哀愁一入。「明日お目に掛かりませう」と一礼すると「さらば〳〵」と幕へ。小歌、小舞の旨さに江戸前の洒脱な味わいもみせて万作の巧さ。（21分）

**「金津地蔵」** 地蔵堂が出来て安置する地蔵を求め上洛する金津在の田舎人・小三郎、獲物とばかり都のスッパ又三郎は己れの子供（実生活では孫）信朗を地蔵に仕立ててまんまと田舎人に売り渡す。信心深い在の人々（高義・隆行・健太郎）は怪しみもせずに受け容れるが、その純朴さに輪を掛けたような純粋無垢な稚い地蔵。お供えは花より饅頭や古酒がいい、と言い出せば、唯々諾々と望みを叶える在の人々。自ずからなる心の交流が生み出す奇端は在の人々を巻き込み、囃子に掛かって踊り念仏へとエスカレート（写真）、喜々として踊る姿は正に地蔵が施す功徳。こましゃくれること無く無邪気に役を楽しんでいる信朗、大人共を翻弄するように舞台を浚ってしまう。キリは様子を窺っていたスッパが地蔵を連れ出して逃げるのを在の人々が取り戻そうと追う。又三郎・小三郎・信朗、三代で勤める目出度さである。（30分・5月20日・第50回記念やるまい会）

**「巴」** シテ勝憲、前は面増・襟白赤・木瓜文金地摺箔着付・紅入唐織の里女。旅僧ワキ元と出合い義仲の跡に回向を勧めるところ、中入前、ワキの値遇を感謝、静かにワキへアシラヒ面伏せるところ、など如何にも神妙。入相の鐘の音が蒼然と暮れてゆく辺りの景色に融け込んでゆくのを聴く心持ちに趣も。〽我も亡者、とワキに左袖アシラヒ、〽その名を、と直ルや〽知らずは、とすぐ亦アシラヒ、〽この里人に（問はせ給へ）、の詰足には有無を言わせぬ意を感じさせる。前シテが中入すると、義仲の跡を祀る祠の「御神事にて候程に参らばやと存じ候」と里人アヒ高義。ワキと出合い、問答から粟津ヶ原の合戦譚、肩衣の刀の鍔尽し文様が丁々発止を暗示するかに滔々と語る印象。

後シテは面を十寸髪に替え、梨子打烏帽子・白地露芝文摺箔着付・緋大口・七宝繋文唐織壷折・長刀。すら〳〵常座へ出て長刀一閃、不審するワキに女武者を名乗る。「女とて御最期に」召し連れられなかった憾み、捨てられた怨み、の繰り言、シヨルとクセは長刀を扇に替え床几に。上ゲ端までは義仲の武勲赫々の欣快、後は露と消えた跡を弔はせ給えの沈痛、地（善高・晃一ら）がシテの心情しっくり謡い上げる。ロンギは義仲最期の場、深田に馬が踏み入れ足掻くのを二ツ拍子の踏み様に旨くみせる。〽かくて御前を立ち上がり、と扇を再び長刀に替え、〽巴少しも騒がず、と踏む七ツ拍子に己れを鼓舞するところも力強く、長刀捌きもきび〳〵と爽快。キリの遺骸に暇を告げる場は、長刀を捨て正先へ。〽傷はしや、と膝つき面使ヒに遺品を眺める心は、扇を開き遺品を載せる心に捧げ持って立つと、〽君の名残を、と左下に遺骸を眺め、スミを廻り発って往く。宝生流の様に型通りの物着は無く、〽御小袖を引き被き、は両手を拡げるところに左右の袖を通して遺品の小袖を羽織る心をみせる。シテ勝憲、師伝を素直に破綻無く演じたと言おうか、すっきり整った舞台だった。（1時間14分）

**「薩摩守」** シテ僧・小三郎、天王寺へ詣る途次、渇きを覚えて勧められるまゝ茶屋・智行で一服すれば、有料と言われ当惑、更に此の先の渡しでは船賃が要ると言われゝば、あれへ参っても、此処からでも、拝むは同じと言い捨て、恬淡として居るのを茶屋の気に入られたか、茶屋は茶代のみならず船賃を只にする知恵まで授ける。平家の公達は薩摩守、その心は忠度（只乗り）の秀句、「神崎の渡守が秀句に好くと云ふ事は東の果まで隠れがない」と煽てられて相好を崩す船頭・又三郎に、シテは調子に乗りすぎた饒舌が仇、薩摩守の心を失念、所詮付け焼刃で心は「青海苔の引乾し」、船が渡り切るまで船頭を焦らしに焦らせて怒らせてしまった僧、「あの益体も無い、とっとゝとお行きゃれ」と抛り出されてみれば渡河の目的は達したれたのでは。活きがよい舞台だった。（26分）

**「小鍛冶・黒頭」** 御剣を鍛えるよう三条宗近ワキ雅介の許に使わされた勅使ワキツレ正樹、恐懼するワキは相応しい相槌を得る奇蹟を待つのみ。そこへ呼掛るシテは小書で半俗の喝食・吉之丞、面喝食・喝食鬢・襟白赤・丸文尽し白地縫箔着付・柿色水衣、稲穂を手に凛乎とした態度に自ずからなる威厳。御剣を鍛えること〽などかは叶はざるべき、と左手ワキに指スところ、ワキを励まし自信を与える神力を確信させる。和漢の名剣の偉力を説くクリ・サシ・クセ、就中、本邦の草薙の剣の威徳を言うクセは三ツの上ゲ端をもつ長大、三ノ上ゲ端までは居グセ、端座のシテには侵すべからざる品位が。凶変の前の静けさ、〽遠山にかゝる薄雪を眺めさせ給ひしに、とゆっくり目付柱上方へ右に視線を遣る余裕は、〽尊は剣を抜いて、と三ノ上ゲ端に立つと、稲穂を剣に擬して型所の連続を颯爽と鮮やかに極め、数万騎の夷ども〽失せてげり、と一ツ強く踏む拍子が鎧袖一触といった趣。

中入は「よし誰とてもたゞ頼め」とワキにアシラヒ、〽その時我を待ち給はば、と居立って〽通力の身を変じ、と立つと地の返シ句橋懸へ。ワキを力づける気合いは更に〽必らずその時節に参り会ひて、と一ノ松からワキを見込めばワキは辱なさに平伏、シテはそれへ二三歩出、〽御力をつけ申すべし待ち給へ、とワキへ左手指スと助力を約し、身を翻えす様に地を残して狐足というか速度を付けた小刻みな運ビで入る。ワキを力づける気合充分、精気溢れる吉之丞の前シテである。ワキは後見座にクツロギ、宗近の下人アヒ小三郎が常座で名宣から此処に至る経緯を立シャベリ、幕に向かって壇の用意申し付けて切戸へ退くと、準備が整い後場。身拵えして恃む相槌を待ち受けるワキ、壇上、ノットに幣帛を捧げ祈念する恭敬の姿が舞台を引き締める。後シテ稲荷明神は猶義、面狐蛇・黒頭・厚板着付・半切の裳着胴姿。〽いかにや宗近、で一旦幕へ退き、早笛で獅子の様に両袖を張って一ノ松へ走り出るシテ、〽いかにや宗近、と返シ句にワキを見込むとワキは平伏、シテは舞台に入り神威を示す舞働をきび〳〵と見せ、舞のトメに飛上りざま壇上に安座、〽童男壇の上に、上がりワキの相槌を打ち重ね、壇から後ろへ飛び下りるのも鮮やか。〽天地に響きて夥し、と獅子の様に黒頭を左右に振り立てるのも珍しく、再び壇上、〽（小狐と）裏に、と槌を一つ振り下ろす処、大鼓の冴えた一打が如何にも鮮やかに銘を刻む様で利く。キリの〽天下第一の二つの銘の御剣にて四海を治め給へば、と踏む数拍子には、文字通り手の舞い足の踏む所を知らず、の大願成就の喜びがあった。地謡は修一・和男ら、後見に善高・晃一、囃子は六郎兵衛・四郎兵衛・総一郎・洋輝。（51分・5月26日・名古屋梅猶会）

やるまい会㊧「見物左衛門」野村万作、㊨「素袍落」井上菊次郎
（撮影・杉浦賢次氏）

「金津地蔵」野村又三郎、野村小三郎、野村信朗、松田高義　（撮影・杉浦賢次氏）

# 暑中御伺


金春流太鼓
青耀会
上田悟
〒594-1153 和泉市青葉台2-17-25
電話〇七二五(56)八五二一
名古屋 名古屋市千種区今池4-15-3
稽古場 浅井能舞台
電話〇五二(七三二)三七三六

長生会
鬼頭義命
〒490-1323 愛知県稲沢市平和町城西137
電話(〇五六七)46一九六〇番

大蔵会
大蔵狂言会
大蔵彌太郎
千太郎
基誠
〒215-0027 神奈川県川崎市麻生区岡上438-1
TEL〇四四-九八七-一一八七

茂山千作
千五郎
七五三
千三郎

茂山忠三郎
茂山良暢
〒606-8255 京都市左京区北白川東小倉町28
電話〇七五(七〇一)二〇一一番
FAX〇七五(七〇一)二二三一

朝日カルチャーセンター
囃子教室
小鼓　後藤孝一郎
丸栄スカイル10階

狂言共同社
井上菊次郎
佐藤友彦
大野弘之
佐藤融
井上靖浩
今枝雄
今枝・郁俊
鹿島裕
鷲見政行
〒466-0826 名古屋市昭和区滝川町54
サンハウス滝川3D 井上方
電話 FAX 052・834・8607

狂言やるまい会
野村又三郎
野村小三郎
松田高義
野口隆行
奥津健太郎
〒460-0021 名古屋市中区平和一-二〇-四
野村事務所気付
電話 052(350)7971
FAX 052(350)7972

鳳の会
林和利
井上菊次郎
佐藤友彦

能楽の友社


〔おことわり〕 暑中広告の掲載にあたりましては、紙面の都合により順不同とさせて頂きましたので何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。

# 能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種２丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
ＦＡＸ（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　１年　1100円
郵送の場合　１年　1800円
一　部　100円

## ＮＨＫ放送予定（平成19年８月～９月）

◆ＮＨＫ－ＦＭラジオ能楽鑑賞（毎週日曜日７時15分～８時）
８月26日　能の音楽(4)「舞と囃子」　解説・高桑いづみ
９月２日　素謡「恋重荷」（観世流）　観世喜之ほか
９月９日　素謡「関寺小町」（宝生流）　今井泰男（独吟）
９月16日　素謡「烏帽子折」（金剛流）　宇高通成ほか
９月23日　素謡「湯谷」（喜多流）　香川靖嗣ほか
９月30日　狂言「連歌盗人」（和泉流）　三宅右近ほか
◆ＮＨＫ教育テレビ（15：00～16：55）
９月９日　午後２時～午後４時30分
能（喜多流）「伯母捨」　シテ友枝昭世

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

（能・狂言演能関係）
（TEL 052－231－0088）

［８月］
26日(日)　衣斐正宜後援会能　（有料）
［９月］
２日(日)　名古屋能楽堂定例公演　（有料）（番組①面）
～尾張の殿様が観た能～
９日(日)　名古屋幽花会秋季大会　（無料）（番組①面）
17日(月・祝)　名古屋観世会定例公演能　（有料）（番組②面）
23日(日・祝)　狂言ござる乃座　（有料）（番組②面）
24日(月・休)　名古屋橋岡会　（有料）（番組②面）
28日(金)　茂山狂言会名古屋公演　（有料）（番組②面）
29日(土)　和泉流狂言大会　（無料）
30日(日)　和泉流狂言大会　（無料）

## 観世流能　卒都婆小町　一度之次第
## ９月15日　豊田市能楽堂

豊田市能楽堂では、特別公演として９月15日(土)、能（観世流）「卒都婆小町」小書一度之次第（片山九郎右衛門）、狂言（大蔵流）「薩摩守」（茂山忠三郎）を上演する。

午後２時開演。全席指定正面席6000円、脇・中正面席5000円

主催　豊田市能楽堂、豊田市文化振興事業団、豊田市、豊田市教育委員会

番組は、解説・武蔵野大学教授羽田昶氏

狂言「薩摩守」（茂山忠三郎、アド茂山良暢、茂山七五三）

能「卒都婆小町　一度之次第」（シテ片山九郎右衛門、ワキ宝生閑、ワキツレ坂苗融、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・成田達志、大鼓・河村総一郎、後見・味方玄、武田欣司、地謡片山清司、梅田邦久、武田邦弘、祖父江修一、清沢一政、梅田嘉安、須部甫、本田勲）

## 継承会結成10周年
## 伊勢の伝統の能楽まつり
### ９月29日　伊勢神宮参集殿

「第10回伊勢の伝統の能楽まつり」は、きたる９月29日(土)伊勢神宮内宮参集殿で開催される。ことしは継承会結成10周年を迎える記念すべき年であり、能楽まつりの会場を伊勢神宮内宮参集殿として上演される。

主催＝伊勢の伝統の能楽を継承する会、県民文化祭運営委員会、三重県と財団法人三重県文化振興事業団。（番組④面掲載）

継承会（会長・土谷喜八郎氏）伊勢市一色町1677番地、TEL0596・22・1720

## 能「道成寺」
### 奈良金剛会創立45周年

奈良金剛会は創立45周年を迎えて記念能楽会として、きたる10月８日(月・祝)、奈良市の奈良県新公会堂で、能「道成寺」を上演する。シテ植田恭三師。

能組は、「道成寺」古式、狂言「素袍落」（茂山千之丞、茂山七五三）、仕舞・金剛流宗家・金剛永謹氏。

この公演は、とくに斑鳩町が後援、斑鳩町は大和猿楽四座の一つをなす坂戸座猿楽を源流とする能楽「金剛流」の発祥の地であり、同町では、春の桜の季節に「桜祭能」、秋の観月の季節には「観月祭」として、奈良金剛会（主宰＝植田恭三氏）による金剛流里帰り公演として能公演を実施してきている。

10月８日の記念能楽会は、午後一時開場、午後二時開演、観能協賛券はS席一万円、A席七千円、B席五千円。問い合わせは斑鳩町観光協会（電話0745・74・6800）奈良金剛会事務局（電話0743・65・0783）

なお、斑鳩町では、９月22日(土)に斑鳩町・上宮遺跡公園で「観月祭」が予定されている。

## 第６回名駅薪能
## 能「嵐山」「安達原」上演

財団法人観世文庫、名古屋名駅薪能実行委員会の主催で、ＪＲ名古屋駅タワーズガーデンで催される「名古屋名駅薪能」は、ことし第６回を迎え、７月29日盛大に挙行された。

演能は、能「嵐山」（シテ久田勘鵬）、狂言「太刀奪」（井上菊次郎）、舞囃子「熊野」（久田三津子）、能「安達原」（シテ観世清和）で立見を含め二千人を越える観客で猛暑が続く名古屋の話題をよんだ。

写真・能「嵐山」

## 名古屋能楽堂定例公演［初秋能］
### ～尾張の殿様が観た能　三代・徳川綱誠～

九月二日（日）第一部　午前十時始
第二部　午後二時始

［第一部］

仕舞　高砂（金春流）　前田登　地謡　前田茂穂、小島芳樹、佐久間祥夫、加藤英昭

能　頼政（喜多流）　長田驍　杉江元　河村眞之介、後藤嘉津幸　鹿取希世　間　井上菊次郎　後見　加藤誠子、平塚昭子　地謡　加藤領一、伊藤英毅、和谷衡市、高林呻二、松井俊介、松井彬郷、福田勝、長田

狂言　千切木（和泉流）　佐藤融　立衆　佐藤友彦、今枝郁雄、井上靖浩、井上菊次郎、大野弘之、鷲見政行、今枝靖雄、鹿島俊裕　後見　野村小三郎

能　紅葉狩（観世流）　鬼揃　加藤春枝、今沢美和、前野郁子、本田勲、須部甫　後ツレ　清沢一政　前ツレ　高安勝久、橋本宰、椙元正樹、今枝郁雄、鹿島俊裕　間　河村総一郎、船戸昭弘、加藤洋輝、大野誠　後見　武田邦弘、梅田邦久　地謡　黒田博、八神孝充、加賀敏彦、高橋瞭一、武田大志、祖父江修一、古橋正邦、梅田嘉宏

附祝言

［第二部］

舞囃子（金剛流）　田村　鈴村昌美　笛　鉱一　柳原冨志忠　鹿取希世　地謡　熊谷眞利子、西脇和子、加藤かおる、伊藤雅子、波多野良子

能　楊貴妃（室生流）　竹内澄子　玉簾　飯冨雅介　河村眞之介、福井四郎兵衛　竹市学　間　松田高義　後見　玉井博祐、衣斐愛　地謡　柴田賢治、加賀山憲治、久野幸三、和久荘太郎、稲川寿一、衣斐正宜、辰巳満次郎、佐藤耕司

狂言（和泉流）　飛越　野村又三郎　松田高義　後見　伴野俊彦

能（観世流）　土蜘蛛　入達之伝　橋本宰　杉江元　椙元正樹　福井良治　鬼頭義命　福井鉱一　大野誠　間　野村小三郎、真下智行

頼光　八神孝充　トモ　黒田博　胡蝶　星野路子　松山幸親

附祝言

［御来場歓迎］

主催　名古屋幽花会　片山慶次郎、片山伸吾

## 名古屋幽花会秋季大会

九月九日（日）午前十時開演
名古屋能楽堂

番外仕舞　老松　片山慶次郎
素謡　田村　倉澤寛　長艸敏明
花月　徳岡孝二　石川輝夫
猩々　長瀬弘子　伊藤やす子
仕舞　敦盛（クセ）　藤原美哉子
六浦（キリ）　野村満子
浮舟　水野たづ子
邯鄲（アト）　小田和季
舞囃子　百萬（法楽之舞）　松久祐子　河村眞之介、曽和正博　杉市和
富士太鼓　懸瑛子　河村眞之介、曽和正博　杉市和
素謡　西行桜　松枝寅太郎　岡本耕蔵、高木寛敬
松久祐子、宮崎晃吉　武田邦弘
砧（ロンギ）　東山清和
独吟　融　梅田嘉宏、村木寛茂
能　野（村雨留）　広谷和夫、山本順三　河村総一郎、曽和正博　杉市和
連吟　紅葉狩　日高尚子、黒川文子、松井律子、橘憂香
素謡　三井寺（子）　片山石原紫乃、雅子　地大公代、岩瀬多美子
舞囃子　羽衣　石黒直子　河村眞之介、曽和正博　前川光範、杉市和
三輪（和合之舞）　村木玲子　河村眞之介、曽和正博　前川光範、杉市和
砧（後）　比江嶋孝子　河村総一郎、曽和正博　前川光範、杉市和
連吟　女郎花　浅井剛、野瀬兼治郎、西野宏、増田育三
仕舞　玉鬘　中島佳子
杜若（キリ）　冨田フク
采女（キリ）　小泉いく子
松虫（キリ）　木村厚
番外仕舞　菊慈童　片山伸吾
附祝言
（五時半頃終了予定）
主催　名古屋幽花会　片山慶次郎、片山伸吾

後見　梅田嘉宏、泉嘉夫　地謡　本田勲、須部甫、加賀俊彦、高橋瞭一、武田大志、祖父江修一、久田勘鵬、清沢一政

（午後五時終了予定）
主催　名古屋文化振興事業団（名古屋能楽堂）
能楽協会名古屋支部

［入場料］
一般　前売三五〇〇円（当日四〇〇〇円）
学生　前売二〇〇〇円（当日二五〇〇円）

# 磯部峯雲「新作能面集」

## 275面、面打ちの精魂を上梓

中部能面研究社代表、中日文化センターはじめ各カルチャーセンター講師をつとめる能面作家・磯部峯雲氏（いそべほううん）は、能面に携わって三十年、二百種に近い面を制作した集成としてこのほど「新作能面集」を上梓した。

著者は本名磯部真一、昭和8年12月21日名古屋市熱田区に生れ、中央大学法学部卒業後、貿易商社に勤務、昭和52年日本能面美術協会（京都）の会員であった林龍雲師に手解きを受け、面美会より雅号「峯雲」の免許を得、中部能面研究社の代表として精進を重ねている。

「新作能面集」は総頁283頁、基本面として翁系、尉系、鬼神系、男系、女系、怨霊系、妖精など167面、基本面以外の面108面、写真撮影は坂口満雄氏。冒頭「発刊に寄せて」学友であり、観世流能楽師の外山圭一氏のことばが叙せられている。

発行所　中部能面研究社／名古屋市瑞穂区船原町4丁目16

取扱店＝岩野書店／名古屋市瑞穂区船原町4丁目20番地
TEL052・881・3960
FAX052・881・6608

# 戦後名古屋能楽史 ⑨⓪

## 〔第十九章〕昭和四十年（一九六五）

竹尾　邦太郎

―承前―

三月二十八日、春の名古屋自慢の大能で東西からも注目される中日五流能がはや記念すべき第十回を迎えるが、第四回（一九五九）以来、会場となってきた愛知文化講堂特設舞台は最終公演となる（次年度からは中日劇場）。二部制は変らず、午前十時開演の第一部は、能「絵馬」金剛巌・豊嶋弥左衛門・廣田泰三、新作狂言「悪女」茂山千之丞、能「千手・郢曲之舞」観世元正・元昭・宝生弥一、仕舞三番「玉之段」辰巳孝「松風」桜間龍馬「熊坂」武田太加志、能「邯鄲・傘之出」後藤得三。

午後三時三十分開演の第二部は能「忠度」金春信高、仕舞二番「半蔀」山田仁三郎「鵜之段」友枝喜久夫、能「杜若・沢辺之舞」近藤乾三、狂言「水汲」三宅藤九郎・和泉保之、仕舞「籠太鼓」柴田初太郎、能「安宅・勧進帳・延年之舞・貝立」梅若六郎・宝生弥一。既出の出演者以外にシテ方は藤波順三郎・片山博太郎・藤波重満・本田秀男・金春欣三・金春晃実・大坪十喜雄・渡辺容之助・近藤乾之助・今井幾三郎・種田道雄・廣田陛一・友枝昭世・和谷亀二郎ら、ワキ方は森茂好、囃子方に藤田大五郎・寺井政数、大倉長十郎・大倉長右衛門・鵜沢寿、谷口喜代三・吉見嘉樹・安福春雄・瀬尾乃武、金春惣右衛門、狂言方に茂山倖一・三宅右近の来演がある。

この記念すべき第十回の催能に時の日本芸術院長・高橋誠一郎はパンフレットに次の祝辞を寄せる。

中部日本新聞社の主催で、五流能が公演されると聞く。この伝来六百余年、世界に誇る大芸術の保存、普及、発展のために、まことによろこばしい企画である。

能楽隆盛の基礎を置いたものは、応安七年、京都今熊野で催された将軍足利義満台覧の猿楽能で、後の観世、宝生、金春、金剛の四座を代表して、結崎清次、後の観阿弥がその子、後の世阿弥を伴って舞ったにあるとされている。四座協力の賜物であったとも言えよう。明治維新とともに、その保護者を失って、衰滅の危機に直面した能楽が、社会秩序の回復につれて再び世間の注意を引くにいたったのは、三流または四流の大家の競演によるところが大であった。

徳川時代にも勧進能が盛んに行われるようになり、この武家の式楽も、すでにある程度、大衆の傾向を現わしていたが、明治復興後、庶民階級の抬頭につれて、こうした傾向はいっそう大となった。しかし、頻々として行われる演能は、多く一座、一流、もしくは一派に属するもので、四座一流の名人上手が相並んで妍を競うような催しは、きわめて稀れである。この室町以来の日本独特の芸術をよく保存し、その価値をいよいよ高からしめるためには、一流に偏することがなく、五流それぞれの特色を比較研究することが必

（③面へつづく）

## 名古屋能楽堂演能案内

### 名古屋観世会定例公演能

九月十七日（祝）十二時半開演
名古屋能楽堂

能　野宮
野村四郎
合掌留　飯冨雅介
松田高義
後見　野村昌司
久田勘鬼
地謡　河村総一郎
福井四郎兵衛
藤田六郎兵衛
八神孝充
本田勲
須部甫
梅田嘉宏
清沢一政
武田邦弘
梅田邦久
古橋正邦

狂言　不見不聞
野村小三郎
松田高義
野村又三郎
後見　伴野俊彦

### 狂言ござる乃座名古屋公演

九月二十三日（日・祝）午後二時始
名古屋能楽堂

狂言　咲嘩
太郎冠者　野村万作
主　咲嘩　高野和憲
野村万之丞

素囃子　黄鐘早舞
大鼓　河村総一郎
小鼓　後藤孝一郎
笛　大野誠

狂言　金岡
大納言　金岡野村万作
妻　石田幸雄
地謡　高野和憲
野村万作
深田博治
月崎晴夫

（終了予定午後三時半頃）

主催　万作の会
東京都練馬区高野台5－25－15
TEL03・3997・8778

［有料］
S席八千円、A席六千円
B席五千円、学生三千円

### 名古屋橋岡會

橋岡久馬三回忌追善

九月二十四日（月・振替休日）午後二時開演
名古屋能楽堂

一調　勧進帳　喜多六平太　河村総一郎

仕舞　道明寺　梅田邦久
定家　梅若修一
山姥　岡田晃一
地謡　荒木亮
梅若雅一
井戸和男
梅田嘉宏

附祝言

［要会員券］
当日券五千円（自由席）

主催　名古屋観世会
名古屋市昭和区台町2－16－5
TEL
FAX052・841・4632

仕舞　自然居士　加賀敏彦
鵺　野村昌司
地謡　武田大志
清沢一政
祖父江修一
梅田嘉宏

能　善界
久田勘鬼
関根祥人
高安勝久
杉江元
椙元正樹
間　野村小三郎
後見　小島一英
武田邦弘
地謡　河村眞之介
久田舜一郎
加藤洋輝
竹市学
松山幸親
加賀敏彦
高橋瞭一
武田大志
祖父江修一
梅田邦久
野村昌司
古橋正邦

（終演　五時頃）

### 2007年茂山狂言会名古屋公演

千作米寿・七五三還暦記念

九月二十八日（金）午後六時三十分開演
名古屋能楽堂

素囃子　猩々乱
笛　杉市和
小鼓　曽和博朗
大鼓　石井喜彦
太鼓　前川光長

狂言　庵梅
老尼　茂山千作
女　茂山正邦
茂山宗彦
茂山茂
茂山逸平
茂山童司

狂言　太刀奪
太郎冠者　茂山千五郎
主人　茂山千之丞
道通りの者　丸石やすし

狂言　三人かたは
賭博打甲　茂山七五三
賭博打乙　茂山あきら
賭博打丙　茂山千三郎
有徳人　網谷正美

主催　茂山狂言
お問合せ　茂山狂言会事務局
京都市上京区中筋通石薬師上ル
TEL075・221・8371

［有料］
チケット価格（全席指定）
S席六千円、A席五千円
B席三千円、学生二千円
取扱い＝茂山狂言会事務局
チケットぴあ　☎0570・02・9966
（Pコード対応）名古屋378・135

狂言　宗論
野村又三郎
野村小三郎
松田高義

能　舟辨慶
斉藤健粋
橋岡久太郎
福王和幸
間　野村小三郎
後見　武田大志
梅田邦久
梅田嘉宏
地謡　河村眞之介
古賀裕己
吉田重雄
宮下功
荒木亮
坪内比路之
徳田宗久
藤田六郎兵衛
井戸和男
梅若修一
岡田晃一

主催　名古屋橋岡会
問合わせ＝橋岡会☎043・462・7720
☎043・463・0840

会員券（全席指定）
S席一万円、A席五千円
学生席二千円
申込み＝
チケットぴあ（☎0570・02・9999）

（②面よりつづき）

要である。

この意味で、わたしは中日新聞社が多大の困難を拠して、各流各派の名流を一堂に集め、この幽玄典雅な芸術をわれらの前に展開するにいたった労を深く多としなければならない。

また、平岩弓枝の新作狂言「悪女」は初演。「悪女について」の題で作者に次の一言がある。

悪女、悪妻、という言葉があるのに、普通、日本語には悪男とも、悪夫とも使わないようなのを、私はかねがね不思議に思っていました。男性はよく「あいつは悪女だよ」とか、「あいつの女房は、とんだ悪妻でね…」などと、いとも簡単に悪女呼ばわりをなさいます。では、いったい女性のどういう点が悪女、悪妻なのか。一つ、悪女、悪妻なるものの資格を考えてみたいと思いました。

狂言という形式は借りますが、使用する言葉はなるべく現代会話を、それも、なまなましくない程度にどしどし使ってみようと試案しています。

演者が長年おなじみの茂山千之丞氏なのでなんとか笑いの中に、現代女性のペーソスのようなものをにじませてくれるものと、作者はのんきに期待しています。（作家）

なお、十回を数える此の年まで、二部制の番組の第一部では新作狂言「濯ぎ川」31、「彦市ばなし」35、「雪まろげ」36、「とりかえばや」37、「狐川」38（同年の秋、中日名人狂言会に「裸大名」）、「へんじゃく」39、「悪女」40（曲名下の算用数字は昭和年）などが取り上げられて話題ともなったが、以後、新作の上演は無い。昭和三十年代、澎湃として起こった俗に言う狂言ブームが終焉を迎えていたのと軌を一にする現象であったろう。それにしても、「濯ぎ川」「彦市ばなし」が現在に至っても度々上演される人気曲であるのに較べて、外の曲はその消息を聞くことも無い。原因は奈辺に……。

四月三日、一週間前に新作狂言「悪女」アドの男を勤めた大蔵流・茂山忠三郎家の当主・倖一（37）が京都観世会館に於て先々代良豊三十七回忌、先代良一の十七回忌追善に家の名・忠三郎を襲名する、四世。「釣狐」（アド善竹忠一郎）を手向ける。観世流太鼓方の名手・小寺金七（一八九九―一九七三）の私家版『金七芸談』中に「名人忠三郎のこと」があるが、次に一部を抜粋する。

オカシサとオモシロサとははっきりちがいます。おかしいから笑うのじゃなくて、面白いから笑うのでなくてはいけません。忠三郎がいい例です。「三人片輪」なんかやらせても、出るときはむつかしいこわい顔をしている。ところが、一こと「……でござる」で破顔一笑――おもわずつりこまれて笑ってしまいます。それだけ骨がしっかりしているのどすな。楽屋にいてもあいさつしにくいくらいこわいこわい顔しています。やっていることが芸なんです。当今のは芸じゃありません。わるくいえば幇間芸です。肉体についた面白さだけでは駄目です。しっかりした骨のある芸の面白さたのしさ、そこから本当のおかしみや笑いが出てくるのです。

この忠三郎は倖一の祖父・二世忠三郎良豊（一八四七―一九二八）、没年の昭和三年に奇しくも当代・四世の誕生、文字通りの生まれ変り、骨格の正しい芸は祖父譲りであろうか。

四月四日、太田重次郎の師範拾五週年を記念する太田淳諷会大会。番外に仕舞六番「合浦」波多野晋「籠」加藤総兵衛「吉野天人」奥田太二「小鍛冶クセ」松浦信一郎と「実盛」山本博之「岩船」山本勝一がある。

四月十一日は久田秀雄の主宰する名古屋久田観正会二十五周年記念、催主・久田秀雄が「道成寺」を披ク。番組は仕舞三番「嵐山」笠田稔、「小袖曽我」山田義高・下川宣長、「善界」藤谷政二、連吟「賀茂」真柄米次・高野瀬透、能「養老・水波之伝」上田照也・久田徹二、連吟「俊寛」六車真三・鬼頭五朗・尾関健太郎、仕舞三番「高砂」河村鉦二「杜若」竹内六郎「阿漕」塚本秀雄、舞囃子「鞍馬天狗」柴田初太郎、能「草子洗小町」観世元正・杉浦元三郎（貫之）上田拓司（王）、仕舞二番「松風」藤井輝明、「船弁慶」浦田保利、一調「蟬丸」田鍋惣太郎・山本勝一（謡）、狂言「昆布売」佐藤卯三郎・河村丘造、能「道成寺」久田秀雄（51）、西村欣也（41）、井上松次郎（51）、井上礼之助（50）囃子方・筧三男（44）大倉長十郎（40）、河村総一郎（32）、鬼頭喜太郎（40）、地頭・山本勝一（40）、後見・観世元正（35）、鐘後見・上田照也（39）ほかにワキ和泉太郎、囃子方に野口浩和、久田舜一郎、谷口喜代三、小寺俊三らが来名。

四月十八日、名古屋観世会定式能・第二回素謡「善知鳥」林甲子夫、仕舞三番「志賀」杉村竹翠「杜若」久田秀雄「鞍馬天狗」丹下三義、能二番「巴」大槻秀夫、「西行桜・杖之舞」観世銕之丞、仕舞三番「忠度」大槻文蔵「網之段」藤井久雄「鉄輪」柴田初太郎、狂言「吃り」佐藤卯三郎、能「安達原・黒頭・急進之出」梅若万三郎、大鼓・谷口喜代三が来演。この日、社団法人・名古屋能楽会の会長・岡谷惣助が死去、能楽協会名古屋支部長・田鍋惣太郎は同夜、一調「松虫」を手向ける。

四月十二・十三の両日、佐藤栄作首相の主催による芸能関係者懇談会。先の池田勇人首相に倣ったもので、その時は田鍋惣太郎が出席したが、この度は当地能楽師に招請は無かった模様。

五月二日、辰巳孝の主宰する名古屋巽会大会。社中の仕舞29、舞囃子10、能2、素謡2、連吟5、独吟1に狂言「因幡堂」佐藤卯三郎・佐藤秀雄と番外の仕舞三番「谷行」内藤泰二「笹之段」倉本雅「歌占クセ」辰巳孝がある。

五月三日は邦謡会創立十周年記念能楽大会。社中の仕舞22、舞囃子20、能4、素謡5、狂言二番「文山賊」井上松次郎・井上礼之助、「芥川」佐藤秀雄・大野弘之、番外仕舞五番「駒之段」青木祥二郎、「笹之段」片山慶次郎、「鵜之段」片山博太郎、「田村」柴田収、「老松」柴田初太郎、番外舞囃子「鶴亀」梅田邦久、囃子方に光田洋一、竹村英雄、中村喜彦、前川善雄が来演。

五月五日、六車真三の主宰する真交会三十周年記念能。社中会で仕舞12、舞囃子7、能1、素謡6、連吟12、独吟1、番外に一調「老松」鬼頭八郎・六車真三（謡）、連吟「鉢木」増田十草・飯田賢・鬼頭五朗・尾関健太郎、仕舞三番「養老」奥善助「唐船」高橋静夫「猩々」柴田初太郎。

五月八日、名古屋猶颯会大会。社中の仕舞6、舞囃子15、素謡10、独吟1、番外に素謡「隅田川」大嶽賢次郎・梅若盛義・梅若修一、舞囃子「高砂」梅若猶義、笛の貞光義次が来演。

五月十三日付中日新聞夕刊は「マルソー、名古屋へ」の見出しで次の記事を載せる。

パントマイム（無言劇）の第一人者として有名なマルセル・マルソーが、十年ぶりにふたたび日本を訪れ、目下、東京公演でかずかずの名演技を見せている。先回の来日は四日間の短期公演だったが、今回はストーリーのある新作をそろえ、東京のあと名古屋（二十七日午後六時半、愛知文化講堂）なども巡演する本格的な長期公演だ。

なんにもない空間に描き出すマルソーの透明な軌跡は、あいかわらず笑いと涙を結んでゆくが、とくに今回、印象的なのは、マルソー自身「私はよろこびを求めて世界を回っているが、現代のよろこびには苦痛がともなう」と語っているように、彼の十指がペーソスとともに人間の願いを、ユーモアとともに不正への抵抗を強く押し出していることだ。

「ビップとダイナマイト」ではおっかなびっくり爆弾を作りながら、作ってみると使いたくなり、その爆弾から逃げられそうにないありさまが描かれ、おもしろおかしいなかにも、同時に核実験への警告が放たれる。また「コントラスト」では平和な家庭とそれをぶちこわそうとする軍隊の行進から始まって、ダンス音楽と爆撃音が重なり、それらの輪舞のはてに戦争にゆきつくものを見とどける。

そして「タコあげ」「大道芸人」「路上の音楽家」など、どの演目に出てくるのも民衆だが、マルソーはここでも生き生きと民衆の喜怒哀楽を表現し、常に民衆とともにあるマルソーの姿をじゅうぶんにみせる二時間の独演である。

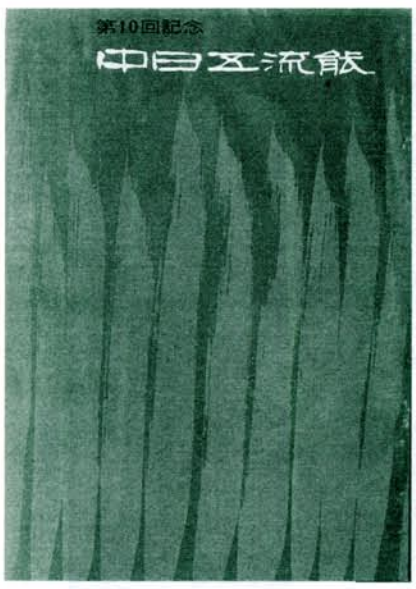
なお名古屋公演の演目は「タコあげ」「魔術師」「檻」「回想」「大道芸人」「コントラスト」「路上の音楽家」「アフリカの狩人」それに近作「お面作り」など。

マルセル・マルソー（一九二三生）と云えば、忘れてならないのはジャン＝ルイ・バロー（一九一〇生）である。一九四五年のフランス映画マルセル・カルネ監督の秀作「天井桟敷の人々」の名優、シャルル・デュラン（一八八五―一九四九）に師事し、コメディ・フランセーズで沙翁劇などに出演の後、独立してパリのシャンゼリゼにマリニ座を主宰（一九四六）するが、マルソーも亦S・デュランに師事、はじめバローのマリニ座にも参加し、のち一座を創設、二十世紀のピエロとも言うべきピップ（Bip）という人物を創造、昭和三十年初来日する。因にバローの初来日は昭和三十五年、本稿第十四章に詳述したが、この時、華の会から銕仙会舞台に招かれて観能、観世寿夫の知遇を得る。一方、昭和三十七年には寿夫がフランス政府招聘芸術留学生の第一回生に選ばれて四月から半年間滞在、バローの許に学び、「善知鳥」なども舞ったというが、交流は終生続き、互いに影響し合うことになる。（此の稿は『岩波西洋人名辞典』と『幽玄―観世寿夫の世界』の年譜を参照した）

――以下次号――

◇……◇

◇……◇

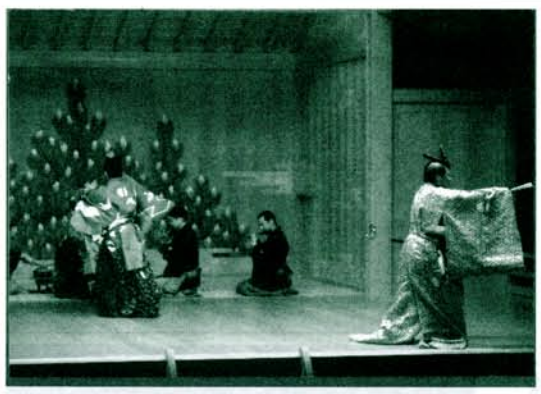



㊤中日五流能のパンフレット表紙
㊦当日のチケット

## ◆水無月の舞台から◆

## 「名古屋能楽堂定例公演」「大阪梅猶会」「幸謡会」

竹尾邦太郎



名古屋能楽堂定例公演
「引敷聟」野村小三郎、松田高義　（杉浦賢次氏撮影）

**「引敷聟」**　俗に改まった装いを羽織袴というが、上衣は折鶴文の目出度い素袍でも袴を穿かなければ様にはならず、聟シテ小三郎、何某・又三郎に借用を願うが生憎く手元に無い、と何某、素袍の袖に足を入れて袴に代用するよう入れ智恵する。しかし、何分にも後ろは尻の辺りが心細いとあって更に尻皮（引敷）を当てさせ、事足れりとするが、自他（何某・聟）共に少々粗っぽい成り行きになるのでは、と思っている節が窺え面白い。

聟入りの酒宴、シテは慎重を期しているかに見えはしても、酒興の舞に舅・高義から「左右に廻って長々と舞はせられませ」と請われれば、内心は舞ってやろうじゃないか、の客気もみえ、小三郎の持ち味が出る。それにしても「二人袴」の名曲があって同工の「引敷聟」、前半の筋立の荒っぽさは否めない。（28分）

**「邯鄲」**　求め羊飛山に赴く廬生シテ満次郎、途次、邯鄲の宿の女将アヒ隆行から夢の中で過去未来を見通す枕を勧められ、夕食の粟飯が炊ける間に富貴・功名の儚さを悟る。

アヒとの問答に邯鄲の枕に興を示すシテ、台上、右膝つき枕を見詰めると、これも天の配剤かと納得、一種の期待感に居立つと更に見詰めるところ、並々ならぬ好奇心をみた。

夢の中、シテ・ワキ問答は夢の場、禅譲の勅を伝える勅使ワキ勝久に、身を起こし安座のシテは、〽天にも上がる、心地に居立ち、身を乗り出さんばかり。この辺り、情態描写の旨さ。狭い台上に舞う「楽」は悠揚とした大きさ、いわゆる空下りは右手に柱を掴み、拍子五ツ程踏み、右足が床に着くや颯っと引き上げ、右へ面切ルようにしたが、手の舞足の踏む所を知らずの欣喜雀躍、調子に乗り過ぎて危うかったといった風に思えて面白かった。舞あとは〽四季折々は、と二ノ松へ、そこで〽春夏秋冬、と頭取って面使フ。飛込みは〽かくて時過ぎ、と舞台へ戻ると、拍子踏んだ勢いに飛び上がるや（写真）横臥、鮮やかな手際だった。キリは〽有難や、と枕を両手に戴くシテ、去り際、悟り得た感謝の心は、再び枕に視線を遣るところ、粛然とした雰囲気があった。地（輝和・正宜ら）囃子は六郎兵衛・嘉津幸・鐮一・洋輝。（1時間21分・6月1日・名古屋能楽堂定例公演）

**「通小町」**　ワキ幸治の許、木の実や薪を届け、ワキの関心を惹く曰くありげな里女（小町の幽霊）ツ

（④面へつづく）

名古屋能楽堂定例公演
「邯鄲」辰巳満次郎

（杉浦賢次氏撮影）

（③面よりつづき）

レ良祐、本意は戒を授かりたい思いあり〳〵、〽市原野辺に、と素姓尺めかしワキへアシラフと、小廻りは後ろ姿に科（しな）も、後見座にクツログ。

後場、里女の素姓を察して跡を尋ね、弔うワキ、終始物静かな印象で好ましい。読経を聴き常座に出るツレ、密かに一ノ松へ出た深草少将ノ怨霊シテ和男は被いた紺地熨斗目の下からツレの背を凝視する、鬼気。ワキの弔いを喜び、更に〽戒授け給へ御僧、と懇願するツレに、〽いや叶ふまじ、と声を飛ばし阻止するシテ。〽はや帰り給へや御僧達、と被衣の下から僅かに面を見せると、〽包めど我も、の返シ句で被衣を脱ぎ捨て全身を現わす。痩男・黒頭・襟白浅黄・白練（花菱亀甲地紋）着付・浅黄大口・黒縷水衣の姿。〽尾花招かば、と左手でツレを二度招き、〽さらば煩悩の犬となって、と舞台へ、〽袂を取って、と右手でツレの右袖に取りつき、左手を肩に掛ける怖さ。地（光之助・基徳ら）〽わが袂も、でツレから手を放すシテ、踏む四ツ拍子は身勝手なツレへの苛立ちである。懺悔に見せる百夜通いの再現は、〽涙の雨か、とスミで笠を翳し踏む拍子一ツが如何にも嘆息めき、闇夜に通う心の立廻から〽あら暗の夜や、と笠で面をおおい、足元みるかに面クモラスのも写実の妙。地との掛合は、ツレのつれなさに対する強がりを、後朝（きぬ〳〵）の別れなんぞ、の心に〽暁は〳〵、と踏む六ツ拍子に表わし、キリは〽（衣紋高く）引き繕ひ、と踏む二ツ拍子に勇む心をみせ、全般に足拍子が実によく利き面白かった。（55分）

**「太刀奪」**　道通りの者アド隆平の立派な太刀を欲しがりはしても、流石に奪ってまでは、と躊躇う主・良介、その意を酌んで太郎冠者シテ隆司があっさり請け合い、丸腰ではと主の太刀を借用に及べば、主も実現可能とみたか、罪悪感も消し飛び、「早う取って来い」と嗾ける始末。

御手洗祭の混雑に紛れ、アドの太刀に手を掛け咎められるシテ、逆に主の太刀を奪われ、戻って主に首尾を問われ、ば、のほほんと「こちの物をあちが取りました」の言い草。挙句、アドの帰りを狙って主と二人しての捕縛の算段も、意思統一を欠く逮捕術の粗雑、逃げられてしまう。この不条理劇が、深刻にならず寧ろ爽やかな印象なのはシテとアドの明るいのり、口跡の歯切れの良さに因ろう。（20分）

**「芭蕉」**　夜毎、山居の僧（ワキ隆之亮）の読経に耳を澄ます人の気配、見れば冴えた月光の中、既に木ノ葉を手向け終えて佇む里女（シテ吉之丞）、面深井・襟白二・小葵文白摺箔着付・秋草文無紅段唐織の姿。素姓を問う僧に女は「この辺りに住む者」とだけ応えると、古詩に托して庵の中、僧の教えに接して仏縁を得たい思いを伝える。女の熱心に庵へ招じた僧は、更に女から非情の草木が成仏できる理由を質されると、懐中から経を取り出し、法華経の中に〽現はれて、いるように〽諸法実相、万物はそのまゝが真実の姿、と説く。仏法を理解する女の反応のよさを怪しむ僧に、理解だけでは心の闇を晴らす仏縁は得られない、と女。女は僧に、私が人間界に生まれた身と思われるか、と謎を残し、存在し得ない雪中の芭蕉を引き合いに、諸行無常と響く鐘の音の中へ消え失せる。

寂然とした草庵に法華薬草喩品を諷誦するワキ、耳を澄まし聴聞するシテ、仏法をめぐる対話も淡々と、互いに緊張の様子で展開する。漸く空気が動くのは中入地（猶義・晃一ら）、シテは立つと〽道さやかにも、と目付柱右へ照る月を見、〽影はさながら、と視線を左へ、直ルと〽雪の中の芭蕉の、と右へ廻り常座へ、〽偽れる姿の真を、と直り、〽思へば鐘の音、と詰メ、〽諸行無常、と二足退り面伏せ鐘を聞く心、返シ句一杯に一ノ松へ出抜ける。（前場の所要48分）アヒ里人は忠一郎、段熨斗目着付・長袴・小刀。ワキの求めに、雪中の芭蕉とは偽りの姿の謂である事を居語にして退くと、後場は偽りの姿であった前シテ里女が真の姿で現われる。

後シテ芭蕉ノ精は女性の姿、面近江女・襟・着付同前・古代紫大口・白地霞ニ芒文長絹。素姓問うワキ、シテとの掛合に不審募らせるようなのは、諸法実相の理を逆に説かれる思いか。〽袖の綻びも恥かしや、と左袖拡げワキの前へ、破れ易い芭蕉の葉、と羞恥をもろに見せるのも実相。更にシテは、クリ・サシ・クセで仏法の理から自然観照、無常感に触れる。「芭蕉」の原話は芭蕉ノ精が女になって色情で男に近づく中国の怪異譚というが、その気が揺曳していようか、クセ中〽庭の荻原先づそよぎ、と左右する処は、先づ靡き、の心。クセ切〽立ち舞ふ袖しばし、と左右し〽いざや返さん、とワキへアシラフ処は、ためらいをいざ返上しようの心。左右の型にはコケットリー（嬌態）が見え、媚を含む官能的にもみえる妖しい雰囲気の近江女の面が実によく利く。序ノ舞は三段、クセ舞から一転、コケットリーを払拭したあくまでも静かに清雅な印象。舞上げ、地との掛合に〽葉袖を返し、とスミで左袖被クと切地、〽返す袂も、と袖下ろして左へ廻り込み大小前、〽（芭蕉の）扇の風茫々と、両袖一杯煽る様に大きく招いて出るところ、〽吹き払ひ吹き払ひ、と両袖を二度払う（撥ねる）ところ、描写の妙。トメの〽芭蕉は破れて、と左袖大きく返スところは、巾広の大きな芭蕉の葉がバサッと破れる趣だった。後見は修一・良祐、囃子は雅義・舜一郎・芳昭。なお後日、七月十二日、ワキの植田隆之亮が急逝。その存在が舞台を引き締め、重厚な風格を備えた立派なワキ方であったが享年七十歳、御冥福をお祈りする。

**「玄象」**　琵琶の名手・師長（善高・指貫・狩衣）道を究めんと渡唐の途次、名残りに名所で観月をと須磨浦は塩汲の老夫婦（シテ善久、ツレ香寿子）の塩屋に止宿。両人に演奏を乞われ、従者（ワキ和幸、段熨斗目・素袍袴・小刀、ワキツレ順三・正彦）にも勧められ弾ずると、板屋を打つ俄雨に搬を置く師長。不審したシテは、雨音が演奏に障ると知るや、板屋に苫を葺き調律、その手並みに代って演奏を求められたシテの見事な技に、渡唐の無益を知って己れの驕傲を恥じ、密かに逃げる師長。そこを見咎められ、留められた師長、老夫婦只者に非ずと二人の名を問えば、渡唐阻止に現われた琵琶の名器玄象の持主・村上天皇と梨壷の女御と名乗り消えるという前場。

汐を汲むところは舞台の上で田子を投げ出したが、軽い音がしたゞけで実に巧かった。苫を葺くところは、常座で右ウケ、面使ヒに心持ちだけ見せると正中へ、膝をつき〽耳を欹て、と面伏せ調律の首尾を確める辺りも細心、神経が行き届く。師長は、琵琶に擬した扇を抱え弾ずる態のシテを眺め、〽面白や、で視線外すと、〽師長思ふやう、と目を伏せ思案の心、ワキの目配せに〽宿人の、と立つが、落着かない心情的確にみせる。そこを見咎められ、留められて師長、老夫婦只者に非ず、と名を問えば、渡唐阻止に来た琵琶の三名器の一、玄象の持主・村上天皇と梨壷の女御と明かして消える。

後場は後シテ村上天皇（善久、面中将・初冠・襟白赤・赤地縫箔着付・緋指貫・白地立湧文単狩衣）、緋と白の配色の装束が神々しい。龍神（後ツレ堯之、直面）に名器・獅子丸持参を命じると、龍神は琵琶を捧げ持ち疾風迅雷の勢いで走り出て師長に手渡すや、踵を返し颯と戻る。きび〳〵した躍動感が小気味よい。師長の琵琶に興じ舞う心のシテの達拝掛早舞は三段だが短く感じた。袖は被かずに捲くだけだったが、颯爽の気を出すためだったろうか。善高・善久・堯之の三代で勤めた「玄象」、曲趣通り目出度い大団円である。（1時間30分・6月2日・大阪能楽会館・大阪梅猶会）

幸謡会「求塚」近藤幸江
（杉浦賢次氏撮影）

**「求塚」**　シテ幸江。前は菜摘女、旅僧ワキ雅介に求塚の謂れを「語って聞かせ参らせ候べし」が「語って申さうずるにて候」になった。女言葉と男言葉のニュアンスの違いといったような事を感じたが、シテ語そのものは女流ならこその繊細な心情描写が上々。二人の男の求愛に困惑する乙女、男達は鴛鴦を射て決着をつけることにしたが、乙女は犠牲になった鴛鴦を悼み入水、塚に突き籠められると男達もその塚を求め刺し違える、と。

後は塚の中、己れの存在ゆえに罪無き鴛鴦と二人の男を死に追いやったために責められる乙女ノ霊。襟白二・小葵文白摺箔着付・浅黄大口・白練壷折の寂しい姿。鉄鳥と変じた鴛鴦が、〽乗り憑り頭を突つき髄を食ふ、のを両手で頭上を庇い（写真）、〽こはそもわらはがなせる科かや、の悲痛な叫びは、〽あら恨めしや、とシヲリ、〽なう〳〵御僧、と縋る様に面だけワキにアシラフのが如何にも切羽詰まった印象。水火の責めに火宅の柱に握れば熱さに〽堪へ難や、と安座、前のめりに胸掻き抱く写実表現も鮮やかに、地獄の責め苦を受ける凄惨、哀切の女心を入念に演じて素晴らしかった。（1時間46分・6月3日・幸謡会）

## 継承会十周年記念
## 第10回　伊勢の伝統の能楽まつり

九月二十九日（土）九時半始
伊勢神宮内宮参集殿

**翁**

能（一色能）
翁　石原　進
面箱　喜多　敬
神楽　吉川　寛治
大鼓　石原　隆明
小鼓　吉川　広美
笛　佐藤　眞一

**洞猩々**（シテ）

半能（通能）
八田　英巳（ワキ）
南川　徹也
大鼓　猪瀬　孝
小鼓　阿部　毅
太鼓　大形いく子
笛　菊川　満子
後見　八田百合子　広　千恵子
地謡　八田　秋二　北林　康弘　八田　見並　英治　森本　八田　幸生　勇　小西　修一　倫

**伊呂波**

狂言（馬瀬狂言）
親　田村　郁斗
かな法師　中村　稜河
後見　中林　慶三

連吟（一色能）
南平　吉川　広美　濱口　富三　吉川　貞夫　松原　正明　和田　泰旺
菊川　新司　久谷　憲之　石原　慎一　土谷喜八郎　石原　隆明　進

**岩船**

**田村**

舞囃子（通能）
八田　秋二
猪瀬　孝　阿部　毅
菊川　満子

**烏帽子折**

連調（一色能）
吉川　広美　石原　慎一　吉川　貞夫

**入間川**

狂言（馬瀬狂言）
大名　河原　良治
入間の人　中北久寿生
太郎冠者　林　孝久
後見　中林　慶三　中北　幸利

**葛城**（シテ）

能（一色能）
稲葉　秀美（ワキ）
久谷　憲之
大鼓　石原　隆明
小鼓　後藤孝一郎
太鼓　大形いく子
笛　菊川　満子
後見　石原　藤波　徹進
地謡　和田　松原　正明　泰旺　濱口　富三　西川　勝哲　南平　吉川　貞夫　菊川　新司　土谷喜八郎　吉川　広美　石原　慎一

**小鍛冶**

舞囃子（通能）
見並　倫
猪瀬　孝　阿部　毅
大形いく子　菊川　満子

ほか仕舞三十八番

**附祝言**

（終了予定十五時二十五分）

後援
三重県教育委員会
伊勢市教育委員会
伊勢商工会議所
㈳伊勢市観光協会
㈶伊勢文化会議所
宇治山田港湾整備促進協議会

# 能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
ＦＡＸ（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

## ＮＨＫ放送予定（平成19年9月～10月）

◆ＮＨＫ－ＦＭラジオ能楽鑑賞（毎週日曜日7時15分～8時）

| | | |
|---|---|---|
| 9月23日 | 素謡「湯谷」（喜多流） | 香川靖嗣ほか |
| 9月30日 | 狂言「連歌盗人」（和泉流） | 三宅右近ほか |
| 10月7日 | 素謡「花筐」（観世流） | 武田志房ほか |
| 10月14日 | 素謡「巻絹」（宝生流） | 高橋章ほか |
| 10月21日 | 素謡「楊貴妃」（喜多流） | 粟谷能夫ほか |
| 10月28日 | 素謡「龍田」（再）（金春流） | 金春安明ほか |

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

（能・狂言演能関係）
（TEL 052－231－0088）

［9月］

| | | |
|---|---|---|
| 23日（日・祝） | 狂言ござる乃座 | （有料） |
| 24日（月・休） | 名古屋橋岡会 | （有料） |
| 28日㈮ | 茂山狂言会名古屋公演 | （有料） |
| 29日㈯ | 和泉流狂言大会 | （無料）（番組①面） |
| 30日㈰ | 和泉流狂言大会 | （無料） |

［10月］

| | | |
|---|---|---|
| 6日㈯ | 名古屋観世九皐会 | （有料）（番組①面） |
| 8日（月・祝） | 武田謡楽会秋季大会 | （無料）（番組②面） |
| 10日㈬ | 現代狂言Ⅱ | （有料）（番組②面） |
| 14日㈰ | 第46回狂言「鳳の会」 | （有料）（番組②面） |
| 20日㈯ | 青陽会定式能 | （有料）（番組②面） |
| 21日㈰ | 邦謡会祝賀会 | （無料）（番組②面） |
| 26日㈮ | 名古屋能楽堂定例公演 | （有料）（番組③面） |
| 27日㈯ | 第6回狂言三の会 | （有料）（番組③面） |
| 28日㈰ | 三交会大会 | （無料） |

## 坪内逍遙大賞受賞者
# 観世栄夫師追悼能
### 9月30日　美濃加茂市で開催

美濃加茂市で9月30日（日）、第11回坪内逍遙大賞受賞者・観世栄夫師を追悼して、能と狂言が上演される。午後2時開演。

演能は能楽座、主催は美濃加茂市、美濃加茂市教育委員会。

会場　美濃加茂市文化会館ホール（美濃加茂市島町2－5－27）

能「羽衣」彩色之伝（シテ山本順之、ワキ福王茂十郎、笛・松田弘之、小鼓・曽和博朗、大鼓・河村総一郎、太鼓・加藤洋輝）

狂言「惣八」（山本東次郎）

能「熊坂」（シテ観世鉄之丞、ワキ福王茂十郎、笛・松田弘之、小鼓・曽和尚靖、大鼓・河村総一郎、太鼓・加藤洋輝）

観能料／一般三千円、高校生以下五百円。全席自由席。

お問合わせは、みのかも文化の森（美濃加茂市蜂屋町上蜂屋3299－1、TEL0574・28・1110）

## 豊田市能楽堂　ろうそく能
### 10月14日
### 能「安達原」　狂言「連歌盗人」

豊田市能楽堂では、10月14日（日）「ろうそく能」を開催する。午後5時開演。

番組は次のとおり

▽解説　村瀬和子

狂言（大蔵流）「連歌盗人」
シテ山本東次郎、アド何某・山本則俊、アド亭主・山本則直

能（観世流）「安達原」白頭
シテ大江又三郎、ワキ福王和幸、ワキツレ永留浩史、アイ山本泰太郎、笛・大野誠、小鼓・柳原冨司忠、大鼓・河村総一郎、太鼓・鬼頭義命　後見・牧野和夫、杉浦元三郎

地謡上野朝義、上田貴弘、上野雄三、杉浦豊彦、大江信行、宮本繁樹、大江泰正、大江広祐

入場料／全席指定（税込）正面席五〇〇〇円、脇・中正面席四〇〇〇円、チケット販売＝豊田市能楽堂（電話0565・35・8200）、チケットぴあ（電話0570・02・9999、Pコード375・460）

## 廣田鑑賞会能「綾鼓」上演
### 10月7日　金剛能楽堂
### 京都

金剛流「第9回廣田鑑賞会能」は10月7日（日）京都・金剛能楽堂で開催される。午後1時30分始曲。

番組は、狂言「文荷」善竹隆司、善竹忠一郎、上吉隆平
ごあんない　金沢大学教授・西村聡氏

能「綾鼓」シテ廣田幸稔、ツレ宇高竜成、ワキ福王和幸、間・善竹忠一郎

入場料／一般8000円、会員7500円

チケット取扱い／金剛能楽堂（075・441・7222）桧書店、京都会館プレイガイド（075・771・6056）廣田鑑賞会（075・722・9123）

金剛能楽堂＝京都市上京区烏丸通一条下ル龍前町590－1

## 狂言装束・台本
### 名古屋市博物館で展示

名古屋市博物館では、開館30周年事業の一環として、9月26日から10月21日まで、同館常設展示室で「狂言共同社の装束・面・台本展」を開催している。入場料三百円、高大生二百円、小中生無料。

なお10月8日には狂言教室として、お話（井上菊次郎）狂言「盆山」を上演。（休館日1日・9日・15日）

## 和泉流狂言大会

（初日）九月二十九日（土）正午開演
名古屋能楽堂

狂言組

末広かり　果報者　太郎冠者　傘屋　太田憶子　石黒定子　高木美枝子
口真似　太郎冠者（小三）　主人（小四）　客（小五）　長田奏世　中島杏　長田朔人
謀生種　甥　伯父　木村由美子　佐藤融
重喜　重喜（小五）　住持　尾崎玄忠　井上菊次郎
佐渡狐　佐渡の百姓　越後の百姓　奏者　足立米子　岸田朋子　二村敏勝
鞍馬参　太郎冠者　主人　牧玉美　寺西慶子
柑子　太郎冠者　主人　春木秀夫　井上靖浩
不見不聞　太郎冠者　菊市　主人　片岡正雄　市川達　今枝郁雄
舎弟　弟　兄　教え手　（小一）　（高一）　米倉光希　米倉愛　鹿島俊裕
雷　雷　薬師　（小五）　（小六）　長田朔人　小川千明
井杭　井杭　算置　檀那　（小二）　（高一）　尾崎令忠　村野守　井上弾喜
止動方角　太郎冠者　主人　伯父　馬　古井秀彦　森綾　丹辺文彦　岸田朋子
（終演予定・十七時頃）

（入場無料・ご来場歓迎）

（二日目）九月三十日（日）十一時開演

雁大名　大名　太郎冠者　雁屋　佐藤融　市川光子　松井文子
伊呂波　金法師（小一）　親　寺田勝哉　井上靖浩
痩松　山賊　女　田澤義弘　各務文歌
魚説法　新発意（中二）　檀那　中島知亮　今枝郁雄
膏薬煉　都の膏薬煉　鎌倉の膏薬煉　水間則子　石塚恵子
貰聟　聟　舅　女　高橋芳子　増田正幸　金子路江
掛川　（中二）　中島知亮
小舞　大原木　貝谷世美歌
鵜飼　森綾

鬼瓦　大名　太郎冠者　藤澤敏子　井上菊次郎
歌争　何某　何某　大橋則夫　鷺見政行
盆山　盗人（小三）　何某　大内啓暉　井上靖浩
鎌腹　太郎　女　仲裁人　石黒生子　二村敏勝　能登香奈恵
昆布売　大名　昆布売　大沢秀夫　三輪島子
薩摩守　新発意（中一）　船頭　茶屋（高一）　米倉宏貴　井上靖浩　米倉愛
六地蔵　スッパ　田舎者　スッパ仲間　スッパ仲間　スッパ仲間　小野豊子　能登香奈恵　鷺見政行　市川達　大橋則夫
（終演予定・十六時四十分頃）

（入場無料・ご来場歓迎）

主催　狂言共同社

## 名古屋観世九皐会能
### 名古屋市民芸術祭受賞記念

十月六日（土）午後一時始
名古屋能楽堂

番組

解説　観世喜正・後藤嘉津幸　能とは…？『敦盛』の見所と囃子の響き　能面と能装束

能　敦盛　中森健之介　小島英明　観世喜正　飯冨雅介　佃良太郎　後藤嘉津幸　竹市学
間　鹿島俊裕
後見　長沼範夫　観世喜之
地謡　桑田貴志　坂真太郎　駒瀬直也　佐久間二郎　五木田三郎　奥川恒治　中森貫太　中所宜夫

狂言　蚊相撲　佐藤友彦　今枝郁雄　佐藤融　後見　井上靖浩
通小町　五木田三郎　観世喜之　駒瀬直也
仕舞　梅枝　坂真太郎　中森貫太　中所宜夫　小島英明
轍輪　地謡

能　恋重荷　中所宜夫　高橋瞭一　高安勝久　河村総一郎　後藤孝一郎　加藤洋輝　藤田六郎兵衛
間　井上菊次郎
後見　中森貫太　五木田三郎
地謡　桑田貴志　坂真太郎　小島英明　駒瀬直也　観世喜之　奥川恒治　佐久間二郎　観世喜正

（午後五時三十分頃終演予定）

附祝言

主催　名古屋観世九皐会

［入場料］
一般全席自由　五千円
学生　二千円
お問合わせ＝観世九皐会　0120・150・950（フリーダイヤル）
03・5261・2980（FAX）

## 武田謡楽会秋季大会

十月八日（月・祝）午前九時三十分始
名古屋能楽堂

番外舞囃子　猩々乱　武田大志　河村眞之介　柳原冨司忠　加藤洋輝　鹿取希世
素謡　班女　井出モト子　野宮　野中淳子　弱法師　坂富美子　藤戸　前山鎮男　富田さだ子　川合圭子　荒木俊彦　渥美す江子　片山芳昭
仕舞　箙　富士太鼓　奥田えつこ　鉄輪　前川桂子　川合圭子
舞囃子　養老　長谷川邦彦　柳原冨司忠　河村眞之介　加藤洋輝　鹿取希世
敦盛　五段　市川敦子　河村眞之介　柳原冨司忠　鹿取希世
三輪　下里紀子　河村眞之介　柳原冨司忠　加藤洋輝　鹿取希世
芦刈　小瀬古勝己　河村眞之介　柳原冨司忠　鹿取希世
番外仕舞　竜田　キリ　吉川順一　枕之段　片山慶次郎
素謡　鸚鵡小町　松岡満寿子　吉井基晴
能　定家　田中葛子　高安勝久　杉江元　河村総一郎　福井四郎兵衛　藤田六郎兵衛
素謡　恋重荷　本田知子　桑原壽子　橋本正康
舞囃子　高砂　八段之舞　渡辺一彦　河村眞之介　柳原冨司忠　加藤洋輝　藤田六郎兵衛
杜若　素囃子　小瀬古喜代子　河村総一郎　福井四郎兵衛　加藤洋輝　藤田六郎兵衛
融　十三段之舞　辻岡勝洋　河村総一郎　柳原冨司忠　加藤洋輝　藤田六郎兵衛
仕舞　賀茂　荒木俊彦　阿漕　松陰真澄
舞囃子　小督　五段替之型　加藤愛郎　河村眞之介　柳原冨司忠　鹿取希世

## 徳川美術館 秋季特別展

### 源氏物語絵巻など

徳川美術館では、新館開館20周年を記念して、秋季特別展として次の2大企画を実施する。

▽10月6日（土）から11月4日（日）まで「王朝美の精華・石山切―かなと半紙の競演」

▽11月10日（土）から12月9日（日）まで、「国宝・源氏物語絵巻」と「平成復元模写」

源氏物語絵巻12面（前期11月10日～11月25日に6面、後期11月27日から12月9日に6面）

源氏物語絵巻は、「蓬生」「柏木二」「宿木三」「関屋」「柏木三」「竹河二」など。

## 現代狂言Ⅱ

十月十日（水）午後六時半開演
名古屋能楽堂

番組　◇第一部　解説　南原清隆
古典狂言「二人大名」野村万蔵ほか萬狂言
現代狂言「一人サラリーマン」
◇第二部
新作現代狂言「TANE～種～」
主催　萬狂言

［有料］S席七千円、A席六千円、B席五千円
取扱い＝チケットぴあ　0570・02・9999（Pコード379・808）ほか

百万　法楽之舞　井田順子　河村総一郎　福井四郎兵衛　藤田六郎兵衛
熊坂　齋藤忠佳　河村眞之介　柳原冨司忠　加藤洋輝　鹿取希世
番外仕舞　柏崎　狂　武田欣司　岩船　武田邦弘
（終了予定六時頃）
主催　武田謡楽会　武田邦弘　武田大志
［御来場歓迎］

## 第46回公演 鳳の会

十月十四日（日）午後一時三十分開演
名古屋能楽堂

解説　名古屋女子大学教授　林和利
狂言　墨塗　大名　佐藤友彦　女　井上菊次郎　太郎冠者　今枝靖雄
能　班女　久田勘鬼　飯冨雅介　椙元正樹　河村眞之介　後藤嘉津幸　鹿取希世
間　鹿島俊裕　今枝靖雄
後見　星野路子　前野郁子　地謡　松山幸親　高橋瞭一　清沢一政　八神孝充　山田義高　上田拓司　上田大介　祖父江修一
狂言　花子　男　井上靖浩　妻　佐藤融　太郎冠者　今枝靖雄
主催　鳳の会

［入場料］（全席指定）A席五千円、B席三千五百円、学生二千円　会員A席四千円、会員B席二千五百円
［チケット取扱い］チケットぴあ／TEL052・320・9999　Pコード377・435　名古屋能楽堂／TEL052・231・0088　井上菊次郎宅／FAX052・834・8607

## 青陽会定式能（第51期第4回）

十月二十日（土）午前十一時始
名古屋能楽堂

能組
仕舞　葛城　キリ　今沢美和　地謡　三村徑市　前野郁子　近藤幸江　久田三津子
能　田村　星野路子　椙元正樹　河村眞之介　福井四郎兵衛　竹市学
間　井上菊次郎
後見　今沢美和　久田勘鬼　地謡　近藤八神孝充　武田大志　松山幸親　加賀敏彦　清沢一政　祖父江修一　梅田嘉宏
小鍛冶　キリ　武田大志
仕舞　定家　武田邦弘
柏崎　道行　須部甫　地謡　黒田久田勘鬼　梅田邦久　梅田嘉宏
車僧　古橋正邦
能　松風　三村徑市　前野郁子　杉江元　河村総一郎　後藤孝一郎　鹿取希世
間　今枝靖雄
後見　久田三津子　武田邦弘　地謡　今沢美和　八神孝充　高橋瞭一　須部甫　古橋正邦　久田勘鬼　松山幸親　清沢一政
狂言　茶壺　今枝郁雄　佐藤融　佐藤友彦　後見　井上靖浩
能　野守　加賀敏彦　高安勝久　後藤嘉津幸　加藤洋輝　大野誠　寛鉱一
間　井上靖浩
後見　星野路子　梅田邦久　地謡　黒田博　須部甫　武田大志　高橋瞭一　梅田嘉宏　古橋正邦　武田邦弘　祖父江修一
附祝言
主催　青陽会
お問合せ　名古屋市名東区一社3－162　久田勘鬼方　電話052・705・1585

## 梅田邦久師喜寿記念 邦謡会祝賀会

十月二十一日（日）午前九時二十分始
名古屋能楽堂

番外仕舞　枕慈童　梅田嘉宏
連吟　老松　長谷川雅彦　加藤有毅　三輪庄司
素謡　玄象　師　飯島三津代　ツレ　石黒由美子　瀬辺聡子　加藤井知子

［有料］前売券二五〇〇円、当日券三〇〇〇円　学生一〇〇〇円
取扱い＝チケットぴあ（TEL0570・02・9999　Pコード784・746）各出演者宅

連吟　駒之段　宮本明代　伊藤紀代子　若原恭子　山本道子　飯田美緒
弓之段　野田ゑつ　松井真理子　朝日和子　深谷ひろみ　三浦百合子　宇佐美怜子
枕之段　平松美代子　成田延子　西川嘉子　釜渕節子　森幹子　浅見かず子
独吟　藤戸　種村とし江　深川寿美子
鸚鵡小町　橋本恒夫
仕舞　鵜之段
舞囃子　高砂　五段　板倉元子　羽衣　和合之舞　平泉和子
猩々　浅野文子　岩田宏子　平松美代子
素謡　求塚　近藤とき子　竹内英雄
連吟　吉野天人　森月君枝　深谷由子　服部恵美子　平田麻紀子　松浦皿井麗子　後藤良子
杜若　梅村展子　桑子初枝　仙波晶子　藤井公子　久米明子　高崎照美　目黒美保子　原弘子
蝉丸　寺沢ふみ子　佐伯裕子　横江美貴子　岩田時代　味岡マキ子
独吟　薪之段　山口三好　横山国枝
鷺　長谷川嘉寛
仕舞　実盛　キリ　通小町　三口謙介
舞囃子　菊慈童　バンシキ　三浦百合子　井筒森幹子
砧　西川喜代子　峯光子　箕浦美智代
連吟　大原御幸　高橋禧子　田中美子　溝口乙子　野田ちづ子　沖見ナカ　武藤弘子
遊行柳　山下松江　上田牧子
仕舞　楊貴妃　三村律子
笹之段　近藤とき子
舞囃子　弱法師　百目之舞　佐藤澪子　定家　森崎紀子
養老　水波之伝　石原明子
素謡　姨捨　二木暉子　半田智子
能　班女　井上苑枝　笹之段　村山弘　椙元正樹　河村総一郎　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
間　井上靖浩
後見　梅田嘉宏　片山慶次郎　地謡　本田勲　須部甫　松山幸親　滝沢一政　武田邦弘　梅田邦久　古橋正邦　味方玄
子方　河村凛太郎　同山　山田昌明　木村万寿豊　林昭　兼松三欣　古崎胤久　武田大志　梅田嘉宏
素謡　安宅　尾藤英邦　佐藤英生
舞囃子　花筐　勧進帳　堀みどり　卒都婆小町　野田博子

③面へつづく

# 戦後名古屋能楽史 ㊶

## 〔第十九章〕昭和四十年（一九六五）

竹尾　邦太郎

―承前―

五月十五日、別会・名匠鑑賞能（四十九回）舞囃子「養老」大槻秀夫、一調「桜川」青木恒治・山田仁三郎（謡）、素囃子「早舞・窕」筧三男・田鍋明宏・筧鉱一・野崎太郎、能「鸚鵡小町」大西信久・高安滋郎、狂言「金岡」和泉保之・井上松次郎、一調「笠之段」田鍋惣一郎・柴田初太郎（謡）、舞囃子「阿漕」内藤泰二、一調「勧進帳」幸円次郎・辰巳孝（謡）、能「猩々乱・双之舞」大西信弘・大西信彦。本番組の冒頭に「当地であふむ小町の能は明治四十五年四月以来、五十余年出て居りません」とあり、その時はシテ金剛謹之輔、ワキ中村弥三郎、囃子方は藤田米次郎・福井初太郎・谷口喜三郎、主催は國諷能楽会、舞台は呉服町能楽倶楽部である。なお番組裏面にはこの度シテを勤める大西信久と主催者・田鍋惣太郎の鸚鵡小町こと、名古屋能楽倶楽部世話人会代表・植村真太郎の大西信久のことの記事が掲載されて居り、当地能楽界の一端も知れるので全文を紹介する。

**あふむ小町につき　大西信久**

家の書物に「玄用居士曰ク権現様。観世宗節ニ当謡仕舞ヲツケ能ニ可仕由上意有宗節言上ニ当謡ヲ能ニ仕候時ハ。関寺小町同前ノ能ニテ可有御座候然ル時ハ昔ヨリ三老女ト申上シニ此一番ヲ添申ス時ハ四老女ニ可罷成候哉ト言上セラレ相止シ故ニ観世家ニ此能ナシト申サレケル当謡ノ全体右ノ有増ニテ可工夫」とあります

昭和十一年頃林愿蔵氏鸚鵡小町の御披（柴田初太郎氏道成寺御披と同時）あり、ワキは武田宗治郎師地謡は御先代家元左近先生で藤波順三郎、武田太加志両君の地謡でしたが藤波君急病にて急に私に仰付けられまづは無事に相勤めました思い出が御座居ます

又先生が十二年の春に鸚鵡をこの秋に演能して見ようと仰せられ色々御抱負も伺いましたが生憎と支那事変勃発し何時にても出来る事だから一事見合わせようと大阪の別会も取止められましたが終に意を果さず残念ながら御他界されました。其後故万三郎先生により戦時中関西にて演能の話がありましたが、二度も故障があって終に実現せず、先生の十七回忌御追善に華雪先生に御相伝を受け観世流としての初の演能の栄誉を得まして未熟ながら御先代へ御手向をさせて頂きました。時は昭和三十年五月十五日でした。其後一昨年華甲の自祝に鸚鵡返しの積りで勤めましたが二回とも田鍋翁の御相手を御願いいたし未熟な芸を御助け頂き感謝いたして居る次第で御座います

この御縁により名古屋にて未だ演能が出来ないから是非勤めよと再三再四田鍋翁の御奨めを頂きこの度第三度目を勤める光栄に浴しました。本年は御先代二十七回忌に当り初演より満十年目の月も日も同じ五月十五日に巡り合わせましたは不思議な事と感激をいたして居ります。

初演の節は現御宗家の御厚志に甘へ面装束一式拝借致しましたが一昨年は全部新調にて相勤めましたので今回はこの装束を持参いたします。どうか皆様の御期待に副い得るよう懸命に大過なく相勤めたいと今より念じて居ります。何卒御支援の上何分の御叱声御批判を賜はらば幸いと存じます

**大西信久先生との因縁　植村真太郎**

私が大西信久先生に謡の御稽古を御願申上ぐる事になったのは遙かに遠い昔の事で昭和二年の夏の頃と覚えて居りますが、当時私は三井銀行の本部勤めで東京に在り観世の先代の家元左近先生に御稽古を願へる傍ら藤波順三郎先生独立最初の弟子の一人でありましたが、偶々大阪へ転勤になったので折柄大阪朝日会館で東京大阪の観世流連合素謡会があり其会場にて藤波先生の御紹介で大西信久先生に入門したものであります

其時に大西家の歴史を聞かされましたが約二百年程前より続ける古い謡曲の家柄で祖父に当る大西閑雪翁は関西に於ける一方の旗頭であった由で、大西家は元来岩井派と称する観世流の一派で殊に素謡には特別の鍛錬せられた芸格があったのですが、先代の家元観世左近先生の芸術に魅せられ其直流たるべきか、岩井派の伝統を保持すべきかにて昭和初頭に於て後援団体の大西松諷社に於て論議せられ衆議一決観世直門となられたと承って居りますが、斯かる連綿たる家柄に人となられた信久先生の伝統の血と熱心なる御研鑽とが結晶して今日関西に於ける観世流シテ方の重鎮となられた次第で、今回の秘芸鸚鵡小町御発表には其真骨頂に親しく接し得るものと衷心より御期待申上げて居るものです

**あふむ小町出演に就いて　田鍋惣太郎**

大西信久師と私は、同師の鸚鵡小町初演と二回目と共にお相手致しました御縁にて、当で久しく出て居りませぬからとて昨秋お話し申し、今回出演が決りました次第でございます

老女物でシテの出が一声、又イロエがかりの序之舞がございます。これは位がとてもむつかしく、私共ではなか〳〵打てぬ曲です。私は左記の如く勤めて居りまして今回五度目を数え、仕合せな事と悦んで居ります

昭21・12・8　京都断絃会
梅若実・西村弘敬、杉市太郎・田鍋惣太郎・谷口喜代三

昭25・5・21大槻師還暦祝能
観世華雪・江崎欽次郎、野口伝之輔・田鍋惣太郎・川崎九淵

昭30・5・15左近師十七回忌
大西信久・福王茂十郎、野口伝之輔・田鍋惣太郎・斉田喜兵衛

昭38・3・23信久師還暦祝賀
大西信久・江崎直質、杉市太郎・田鍋惣太郎・谷口喜代三

此度は大鼓谷口喜代三師（三度目のお相手）又笛藤田六郎兵衛、脇高安滋郎両師は此の曲初演でございます。御期待下さいませ。大曲でございますので又当分の間当地では出ないと思います

五月十六日、喜多流能楽公演が中京喜多会・長袖会の主催で行われる。長田驍主宰の長袖会の名付親・喜多流十五世宗家・實は次の挨拶を寄せる。

長田驍が名古屋で能を催したいと言って来ましたが、彼はほとんど徒手空拳で何の成算もなく、ただ不振の名古屋喜多流を何とか開拓しようとここに腰をおろしたのですが、移住してから未だ数年、僅かのお弟子が心を入れて応援して下さる以外、全く天涯の孤児に等しい微々たる存在です。彼は名古屋の出生で、父が喜多流とは由縁の深い三河の新城出身の関係から、幼少のころは名古屋で私の門に入り、次いで上京して内弟子として修業して参りました。つまり、名古屋は彼の故郷で、ここに骨を埋めるというのが彼の希望であり、意気であります。

地方の職分が芸を磨く上で、東京在住の者にくらべ、非常に不公平を感じて居ります。おそらく芸の勉強だけはおろそかにしたくないというのが、彼をして、この冒険に踏み切らせた第一の理由でありましょう。私は彼のこの心根を買って、快く承知しました。

ここ三・四年、私も中日能を辞退して、久しく皆様に舞台の上からお目にかかって居りません。たぶん少数の心からの同情者が見に来て頂くことと思いますが、その方々に対しましては、私ども師匠と弟子が、それぞれの境涯に於て、精神を籠めての能を演じる事によって、御礼申し上げたいと存じて居ります。

―以下次号―

## 中部能面研究社
## 新作能面展
### 名古屋博物館で開催

中部能面研究社（代表磯部峯雲氏）は、10月2日(火)より10月8日(月)までの7日間、名古屋市博物館3階ギャラリー第1室で「第5回新作能面展」を開催する。

愛知県および名古屋市教育委員会後援。

作品は初心者のものから10数年の作歴のものまで併せて40名程度の作品で、翁、黒色尉(三番叟)小面、若女、孫次郎、増女、万媚、姥、深井、曲見、泥眼、般若、老女、蟬丸、童子、猩々、十六中将、十六、中将、平太、弱法師、怪士、小牛尉（小尉）皺尉、小飛出、大飛出、大痩見、釣眼、不動、大獅子、眞蛇、大天神、顰（しかみ）、頼政、小悪尉など。

中部能面研究社＝名古屋市瑞穂区船原町4－16－10－102号
電話052・882・4310

## ◆水無月の舞台から（その二）◆
## 「第32回　能にしたしむ会」「名古屋観世会定式能」「名古屋宝生会定式能」

竹尾邦太郎

**「隅田川」**　シテ慶次郎、面は曲見か。〈下総の中に在る隅田川（にも着きにけり）、と歩を早めるのは舟を認め、乗り遅れては の心。渡守ワキ欣哉との問答から都鳥のくだりは〈我が思ふ人はありやなしやと、の後、鳥の姿に尋ねる吾子を重ね、追う様に歩を運ぶ。記載は無いが小書・彩色、舞台を巡るイロエの彷徨にシテの胸中も推し量られ、更にワキとの掛合から地（九郎右衛門・邦久ら）、東路に吾子の存否を〈問へども問へども、と先に立ち尽す寂しげな風情も切ない。〈それは難波江、と左手で指シて二ノ松へ、〈思へば限りなく遠くも、と笠に手を掛け一ノ松から遙か舞台を眺めやると、〈舟こぞりて、で笹を捨て正中へ、ワキに合掌して乗船を請うところ憐憫の情を催させる。船中は平静な語り口のワキ語に身じろぎもせず、肩で息をするシテ。既に幼い行路病者が吾子と予知しているのでは、と思える。子方・梅若丸は稚い柴乃さん（シテの孫娘の由）、出番前に被布に隠れて切戸から作物の塚に容れる例が多いが、予め中に居る我慢強さに感服、念仏の段には閉所から解放されて鬼ごっこの様にシテに戯れる趣が、子方が無邪気なだけに一入涙を誘う。キリは草茫々の塚に吾子の姿を見る思いに立ち尽すだけ、型少なの抑えた演出の中に人間性の深み、情味をみせてシヲリ留。（1時間26分）

**「右近左近」**　左近の牛に田を荒され訴えようと妻アド千三郎に相談する右近シテ七五三。畜生のした事で我慢するように促し、更に相手の口達者に適う筈がないと宥めるアド。だからこそ「それがしの名代に」とアドに諮るシテだが、「何と女が」と拒まれゝば「よいわ、おきをれ」と語気強め、あくまで訴訟に固執する。左近とは不倫関係にあるアドは、白洲へ出れば何が起こるか分らない不安に口下手なシテに模擬裁判を仕掛け、白洲の恐ろしさを分からせて訴訟を諦めさせる魂胆。私宅を地頭屋敷になぞらえ、門前から白洲への順路を克明に描写して通るうち、シテは現実の立場を忘れ、地頭に扮したアドから威丈高にまくしたてられると錯乱状態になり、目を回す。

（④面へつづく）

（②面よりつづき）

柏崎　高野千鶴子
思出之舞

番外舞囃子　三笑　梅田　邦久　片山九郎右衛門　片山慶次郎　河村眞之介　柳原冨司忠　上田　悟　藤田六郎兵衛

（終了七時半頃）

入場無料
御来場歓迎

主催　邦謡会　梅田邦久　梅田嘉宏

## 名古屋能楽堂定例公演
### ～尾張の殿様が観た能　四代・徳川吉通～

十月二十六日（金）午後六時半開演
名古屋能楽堂

狂言（和泉流）　千鳥
シテ　太郎冠者　井上　靖浩
アド　主人　佐藤　融
アド　酒屋　井上菊次郎　後見　佐藤　友彦

能（観世流）　松風
祖父江修一　梅田邦久
見留　間　飯富　雅介　河村総一郎　後藤孝一郎　竹市　学
鹿島　俊裕
後見　今沢　美和　泉　嘉夫
地謡　本田　勲　須部　甫　清沢　一政　久田　勘鶴　武田　大志　武田　邦弘　梅田　嘉宏　古橋　正邦
（午後八時五十分頃終了予定）

主催　名古屋文化振興事業団（名古屋能楽堂）
能楽協会名古屋支部

## 第6回　狂言三の会公演

十月二十七日（土）午後四時開演
名古屋能楽堂

番組

フラメンコ　よされ節　中尾　貴子　矢野　司空
火の鳥　牛丸　哲朗　斎藤　誠

狂言　蝸牛　野村小三郎　野村又三郎　野村　信朗

狂言　若和布　野村小三郎　松田　高義　奥津健太郎　野口　隆行

主催　狂言三の会事務局
春日井市如意申町六－三－一〇
TEL0568・35・3201
FAX0568・35・3371

［入場料］
一般　前売三五〇〇円（当日四〇〇〇円）
学生　前売二〇〇〇円（当日二五〇〇円）
［入場券取扱い］
名古屋能楽堂／TEL052・231・0088
ナディアパーク8階PG・チケットぴあ

チケット（全席指定）
一般入場料金五千円
会員特別料金二千円

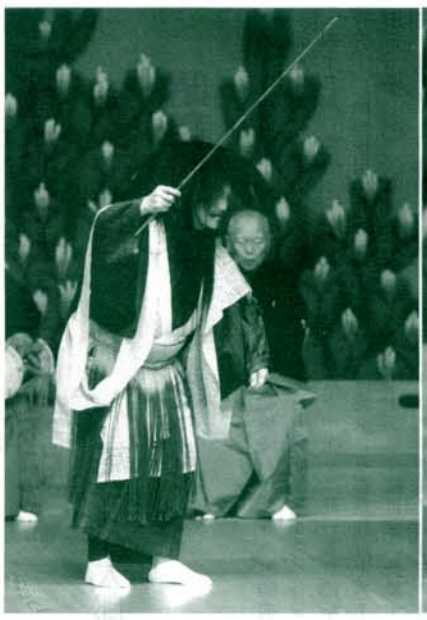
（③面よりつづき）

「これは気の毒なことをした」とアドは言うが、正気に戻ったシテはアドの仕打ちに憤慨、こうなったのも左近の存在ゆえとばかりに食って掛かれば、痛い所を衝かれたアドは更に語気荒らげ唖み合いに。此處の七五三と千五郎の攻防が出色で、逆の配役は一寸考えられない位。妻の恥は夫の恥などと抜け抜け言い退けられては口では敵わず、棒を取って立ち向かうが簡単に奪われて為す術もない。「腹立ちや〳〵」（はどっちが）とシテを置き去りにして去るアド、妻を寝取られたシテは敢えてそれを広言、「皆笑へ笑へ」と連呼するうちに顔は引きつれ泣き笑いに。二ノ松では「皆笑ふて下され」と哀願しながら入る。男の悲哀こゝに尽きるか。（30分）

シテ伸

**「天鼓・弄鼓之舞」**　吾、小書で前シテ王伯は唐帽子・白垂の姿、ワキ勅使・欣哉の呼出しで出る。老いた王伯を意識して声を作りすぎ、と思えたが型は端正。居グセに〽時の鼓の現とも、と左手で羯鼓台の鼓を指シ、その手で〽思はれぬ身こそ恨みなれ、とシヲルところ、眼前の鼓も持ち主の我が子が居なければ現実とは思えぬ我が身の恨めしさ、思い葬と伝わる。立つと地（清司・邦弘ら）との掛合は〽老の歩みも、と運ビの慎重に、〽心も危き、と不安げに撥を取ると、〽打てば、と鳴るか鳴らぬか、その成否恐れる様に直ぐ正中まで退り、右へ薄く面伏せ聞き入ると、〽げにも親子の證、と安堵の表情に沁々と鼓に見入り〽龍顔に御涙を、と恐懼退りながら撥とり落し、安座双シヲリの辺り、心理・情景描写も上々。アヒ勅使ノ従者は千之丞、シテを送り込むと常座に戻り、立シャベリにこれまでの経緯を情感豊かに語って流石に旨い。

後シテは天鼓、帝の管弦講の手向けを喜び楽（がく）は撥で舞う。途次、一ノ松先へ抜けて勾欄に寄り、袖被キ羯鼓台に愛惜措く能わざる鼓を見込むと、舞台へ入っては正中、脚高々と上げ音させず空を踏むと、水から上がり雫を振り払う様に所謂イヤ〳〵の型、鼓を打ち、羯鼓台の後ろ・正面框際を廻る景がいかにも愛惜の鼓に戯れる小書「弄鼓之舞」・キリは〽風冷やかに、で亦イヤ〳〵と頭を振るのが身震いする様に思えて面白く、以下の連続する型もきび〳〵と極め、飛返りざま袖被キ、立つと袖を戻してトメ、精気溢れる爽快な後シテだった。（1時間22分・6月9日・京都観世会館・第32回能にしたしむ会）



観世会定式能㊨「藤戸」前・観世喜之、㊧「藤戸」後・観世喜之　（杉浦賢次氏撮影）

**「藤戸」**　シテ喜之。浅瀬の情報を得たが軍機漏洩を恐れて若い漁夫を刺殺した佐々木盛綱ワキ欣哉、戦功で恩賞に与る晴れの入国の日、提訴の意思ある者は何人もそれを許す、の触れを出すと、理不尽に伴を殺された老母シテ喜之が出頭する。クセ切、〽亡き子と同じ道に、ですっくと立つや、〽人目を知らず、とワキに肉薄、そのまゝ突っ込まんばかりの勢いが一瞬立ち竦むと、恐懼退って〽我が子返させ給へや、の哀訴に至るところ（写真）シテの内面を見事に写し、盛綱ノ下人アヒ菊次郎の介添で悄然と去って行く辺りは脱力感も如実。

後場、ワキの弔いは有難いが尽きぬ恨み申さんため、と現われる後シテ漁夫ノ亡霊、面は河津の無気味が科も無く刺殺され捨てられたくだんの海での場景を鮮やかにみせる。杖を首枷に小廻りに退って〽千尋の底に、吸い込まれる心で安座、〽折節引く汐に、の地（喜正・勘鷗ら）の返シに立つと、波間に浮沈の様、〽岩の狭間に、流れかかるところは右膝ついてみせ、〽（悪龍の）水神となって、立つや正中、杖振り上げ（写真）ワキに迫る殺気、凄味をみせる。喜之の謡の感情表現の巧緻、素晴らしい。（1時間14分）

「空腕」佐藤友彦　（杉浦賢次氏撮影）

**「空腕」**　そらうでとは偽りの腕自慢、闇夜が恐い癖に虚勢を張る太郎冠者シテ友彦、主アド融の命で暮れ方使いに遣らされるが途中とっぷりと暮れ、幽霊の正体見たか枯尾花、の臆病風に吹かれ、護身用に主から借りた太刀を置きっ放しに逃げ帰り、主に事の顛末をしゃあ〳〵と捲し立てる。シテの性癖は先刻承知の主、静かに聞いていればシテは図に乗り騒々しいまでの武勇談（写真）、友彦の持ち味が旨く出る。（39分）

名古屋観世会定式能㊨「国栖」子方・分林道隆、ワキツレ・杉江元、椙元正樹、㊧「国栖」梅若吉之丞　（杉浦賢次氏撮影）

**「国栖・白頭」**　吉野を背景とするスペクタクル。奥に乗り舞台に壬申の乱を林道隆君、写真）の品のよさは如何にもやんごと無い皇子。侍臣（ワキ勝久、ワキツレ元・正樹）の道行の連吟がよい。漁から戻る吉野川の漁翁夫妻（シテ吉之丞、ツレ猶義）は私宅の上に紫雲棚引くのを不審、帰宅してシテはワキとの問答に事の次第を知り、食事を欠くと聞けば土地の根芹と鮎を幼君に供し、残されて下げ渡された片身の鮎を水に放てば、活き〳〵と甦る奇端。眼目の鮎之段は、足早やに出るとサッと雫す様に扇を返して魚を放つ型から、急流を上る魚影を追って左右に面切ルところ、爽快、胸が空く。迫る追手（靖浩・郁雄）を待ち受け、惚けた問答ではぐらかし、幼君を匿う舟を咎められ、ば態度を硬化、強面に出るシテ。硬軟自在のアヒとの問答は、狼藉者を「打ち留め候へ、打ち留め候へ」と双手大きく二度打合せる気魄、追手を蹴散らす勢いに溜飲が下がる。

後場は先触れに天女（ツレ祖父江修一）が麗わしく舞三段を舞上げ、蔵王権現（後シテ吉之丞）の来臨を幕へ仰ぐと、〽小女子が、と幕が上がり、駸斗目（前シテのもの）を被いて一ノ松に現われる。〽王を蔵すや吉野山、と謡い、〽即ち姿を、と被衣を脱ぎ返シ句で正中へ。〽天を指す手は、と上を指シ（写真）〽地を又、と扇でグッと下を指ス溢れる力強さは品位も充分、幼君長じて天武の聖代を寿ぐ壮大な舞台だった。（1時間13分・6月10日・名古屋観世会）

**「通小町」**　夏安居の僧ワキ勝久の許へ毎日木の実や薪を届ける里女（実は小町ノ幽霊ツレ荘太郎）、木の実尽しの地（萌・満次郎ら）との掛合は口跡爽やかに状景を描写して佳だが、何れ退くにしても手籠を持って出ない（流是か）ので手元や舞台面が少々淋しい。ワキに素姓を問われ、〽恥かしや己が名を、と言葉を濁し、市原野に住む姥とだけで〽跡弔ひ給へ、とワキにアシラヒ中入に後見座へ消える前場、姥とは言え襟赤の里女、後ろ姿には後場に小町と成り代わる色香も。

後場、深草少将シテ輝和が駸斗目を被キ一ノ松へ。〽（包めど我も）穂に出でて、で後ろへ大きく被衣を脱ぎ捨てるところは鬱積した憤りが爆発した趣。面痩男・黒頭・無紅厚板着付・浅黄大口・暗緑色水衣の姿が〽尾花招かば、とツレを招キ、語気鋭く〽止れかし、と呼び掛ける怖さは、〽煩悩の犬となって、と舞台へ入ると、〽袂を取って、と後ろからツレの肩に手を掛け六ツ拍子踏む執心の強さに怖さも極。百夜通いは、〽涙の雨か、と笠を両手に頭上を翳シ、暗夜を小町の許へ通うイロエ、切なくも遣る瀬ない思いがした。（50分）

祖父（シテ弘之）

**「腰祈」**　の曲った腰を直してあげようと孫の山伏（アド友彦）が善意でした加持祈祷が利きすぎ制御不能に。シテの腰は伸びたり縮んだりで、動きは人造人間のそれでギクシャクした人形振（当今の人造人間・ロボットは人間以上とか）。余計なお節介は有難迷惑、の教訓。弘之の巧まざる古拙な味わいが得難い。太郎冠者は郁雄。（22分）

讒言により雲雀山に捨てられ殺される運命の中将姫（子方・佐藤健太郎君）を殺すに忍びず、庵を結び乳母（シテ澄子）に里へ草花を売りに遣って姫の面倒をみさせる家臣ワキツレ雅介。前場、藁屋にぽつねんと居る姫に里へ商いに下りると伝えるシテ、姫の洩らす苦衷に同情もそこ〳〵〽草の樞を、と両手で静かに戸を立てるところ、愛憐の情は機微濃やか。

**「雲雀山」**

後場、横佩大臣（ワキ元）従者（ワキツレ正樹）、一頻り鷹匠・勢子・犬引（アヒ菊次郎・融・靖雄）らの鷹狩の様子に興じ、アヒ一行が退くと唐織脱ギ下ゲ・挿花担げた後シテが出る。糧を得ようと狂おしく舞うカケリからワキツレに花を勧めると、舞グセでは暗に姫の窮境を洩らし、中ノ舞に切ない胸の裡をみせるか。舞上げ、帰ろうとするシテに呼掛けるワキ、問答から遂に姫と対面が成るが、〽互に見忘れて、とシヲル横佩大臣の心情理解する暇あらばこそ、藁屋に文字通り幽閑軟禁の思いで居た姫は辛抱も限界だろう。〽お手を引き立て〻、とシテが介添をして立たせると一散に幕を目指すのも然もありなん、これはこれで父と再会の喜びの発露、微笑ましくも可笑しかった。シテ澄子堅実な芸。（1時間11分）

法性坊律師ワキ雅介、金襴角帽子・襟

**「来殿」**　浅黄・小格子着付・白大口・萌黄水衣、従僧ワキツレ元・正樹を伴い名宣笛で出る。堂々の貫禄。ワキは名宣から仁王会の執行を触れると秋の比叡の風光、法灯の恵みをワキツレとの掛合・連吟に紹介し舞台が整う。菅丞相ノ霊シテ正宜は黒頭・濃萌黄大口・朽葉色縷水衣、ワキ・ワキツレ連吟のうちに一ノ松、〽中門の扉を叩きけり、で内に居るワキと掛合になり、丞相と知ってワキは〽はや此方へと、床几を立ち、〽影めづらしや客人の、と初同（満次郎・孝ら）で運ビ出し、内へ入る心に舞台へ入りシテはワキと対座。掛合からクセへ、互に久闊を叙すうち、無実の罪を蒙ったのは偏に時平の讒奏、「怨は今によも尽きじ」と語気強めるシテに、まことに仰せは理だが、のワキの口吻が気に障ったか、〽いふより早く色変り、でシテは扇開きスッと立つや、拍子強く踏み、噛み砕いた石榴を吐きかける心にサッと撥ネ扇の鮮烈、面隠す様に左袖被キ走り込む。

能力アヒ靖浩、事の次第を立シャベリに長広舌振って退くと、後シテは殿上人姿の道真、面中将・初冠・赤地縫箔着付・紫指貫・白地単狩衣の姿、達拝掛早舞を爽やかに舞上げ、国土安全を寿ぐ。宝生流の後シテが雷神でないのは菅丞相が加賀藩主の遠祖ゆえ忌諱に触れるのを恐れての由。

なお「来殿」の「殿」は高貴な人の住む家または社寺などの建物、「来」は来る、「来日」が「日本に来る」なら「来殿」は「神社に来る」即ち「菅丞相が北野神社に祀られて来る」のではなかろうか。「らいでん」の音読に合わせた命名は此の辺りでは。（51分・6月17日・名古屋宝生会）

（訂正）
先月（八月号）第四八八号・四頁五段目、一行目「そこを……から六行目、る。」までは削除

◇……◇
◇……◇

# 能楽の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
ＦＡＸ（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

## ＮＨＫ放送予定（平成19年10月～11月）

◆ＮＨＫ－ＦＭラジオ能楽鑑賞（毎週日曜日７時15分～８時）

10月28日　素謡「龍田」（再）（金春流）　金春安明ほか
11月４日　素謡「俊寛」ほか（観世流）　若松健史ほか
11月11日　素謡「紅葉狩」ほか（宝生流）　田崎隆三ほか
11月18日　素謡「葛城」（観世流）　大江又三郎ほか
11月25日　素謡「班女」（再）（宝生流）　小林与志郎ほか

◆ＮＨＫ教育テレビ・能狂言番組

11月10日㈯　午後３時～５時
狂言「花子」（大蔵流）　山本東次郎ほか
能「小袖曽我」（観世流）　シテ関根祥人、ツレ浅見重好、上田公威、野村昌司、角幸二郎、アイ山本則直、地謡・関根祥六ほか

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

（能・狂言演能関係）
（TEL 052－231－0088）

［10月］
21日㈰　邦謡会祝賀会　（無料）
26日㈮　名古屋能楽堂定例公演　（有料）
27日㈯　第６回狂言三の会　（有料）
28日㈰　三交会大会　（無料）（番組①面）

［11月］
１日㈭　よみがえる御殿能　（有料）（番組②面）
４日㈰　名古屋金春流友会　（無料）
４日㈰　第28回名古屋金春会　（有料）（番組②面）
８日㈭　名匠狂言会　（有料）（番組②面）
10日㈯　郁諷会大会　（無料）（番組②面）
11日㈰　名古屋観世会定例公演　（有料）（番組②面）
18日㈰　名古屋宝生会定式能　（有料）（番組②面）
24日㈯　秋の清謡会　（無料）（番組②面）
25日㈰　久田観正会秋の大会　（無料）

## よみがえる御殿能

### 11月1日　藤田・龍吟の会

藤田・龍吟の会（藤田六郎兵衛氏主宰）は、尾張徳川家初代徳川義直が尾張を襲封して今年四〇〇年を記念して、徳川美術館に伝わる義直愛用の小鼓（苅田蒔絵鼓）を大倉源次郎、笛（蝉折）を藤田六郎兵衛両師により今にその音色をよみがえさせる。

演能は11月1日名古屋能楽堂で観世流宗家観世清和氏、人間国宝・芸術院会員である片山九郎右衛門、宝生閑両氏が来演、観世清和、藤田六郎兵衛、大倉源次郎の三宗家を交えて、絢爛の「よみがえる御殿能」として、今秋の豪華演能として注目される。（番組②面掲載）

## 和谷式翁神楽（しんがく）

### 芸養子和谷栄太朗氏が継承

伊勢在住の喜多流和谷家二十四世・和谷衡市氏は、六七〇年前から伝わる和谷家固有の和谷式翁の「神楽」（しんがく）を和谷栄太朗氏（二井栄太朗）に、芸養子として継承させることになり、さる9月23日、伊勢神宮秋季神楽祭にあたり、内宮神苑参集殿で和谷社中並に和楽会の奉納能で翁・神楽が披露された。当日の和楽会では、和谷衡市氏が能「羽衣」を奉納した。

二井栄太朗氏（二八）は、喜多流能楽師・能画家、華道青雅流の故二井栄逸氏を祖父にもち、父・栄世氏のもと能に密接にかかわり、現在松阪消防署勤務で能面も描く。和谷衡市氏夫人の甥に当り、和谷家二十五世を継承することになった。

和谷式翁は、どの流儀にも見ない「神楽」があり、装束は、厚板、単衣狩衣、白大口に烏甲（とりかぶと）を付ける。謡わず、囃さず、静寂の中で左手に鈴、右手に撥を持ち、四方を祈祷するかの型を今に残している。

## 第1回　豊田御洒落狂言会

### 11月17日　豊田市能楽堂

狂言共同社（井上菊次郎代表）は、平成12年から名古屋で「御洒落名匠狂言会」を開催、毎年多くの方々からの支援をうけ好評を博しているが、このたび豊田市を中心とした愛好者の方々にも観賞してもらおうと、きたる11月17日「第1回豊田御洒落狂言会」を豊田市能楽堂で開催する。午後1時30分開演。番組は次のとおり。

「鶏聟」（聟・井上靖浩、太郎冠者・今枝郁雄、舅・井上菊次郎、教え手・大野弘之）
「棒縛」（太郎冠者・小笠原匡、主人・中本義幸、次郎冠者・山本豪一）
「靱猿」（大名・佐藤融、猿曳・佐藤友彦、太郎冠者・鹿島俊裕、小猿・小西彦輝）

入場券＝A席5000円、B席3500円、学生2000円（当日券は上記金額より500円高）

チケット取扱い＝狂言共同社／電話・FAX052・834・8607。▽チケットぴあ／TEL0570・02・9999（Pコード：379－884）、ファミリーマート、サンクス、セブンイレブン。

## 「鉢木」「船弁慶」

### 梅猶会大阪公演

梅猶会は、平成十九年度第四回大阪能楽公演として、十二月二日（日）大槻能楽堂で、能「鉢木」（シテ梅若善高）、狂言「附子」（太郎冠者茂山忠三郎）、能「船弁慶」重キ前後ノ替（シテ井戸和男）を上演する。正午開演。

入場料＝当日券五〇〇〇円、学生三〇〇〇円、問い合わせ／定期能連絡所＝豊中市新千里南町3－18－12、梅若善高方、電話06・6831・7854

## 皇学館大学で初の能楽の夕べ

皇学館大学では、第46回倉陵祭で一色町能楽保存会（土谷喜八郎会長）と共催で、始めて「能楽の夕べ」を11月4日午後3時半から開催する。会場は皇学館大学記念講堂。能「猩々」「仕舞」など。

## 演能案内（浅井舞台）

### 武田太加志二十三回忌追善　鳳鳴会大会

十月二十八日（日）十二時始
名古屋市千種区今池4－15－3（浅井ビル7階）
電話〇五二（七三二）三七三六番
浅井舞台

素謡　経正　クセ抜き　木本仁之　武田宗典
頼政　クリ・サン・クリ抜き　奥田昌人　武田文志
仕舞　玉之段　矢野義章
班女　山崎佐東子
笠之段　木本仁之
素謡　野宮　初同アト・ロンギへ　兵藤善茂　武田友志
夕顔　クリアト・待謡へ　笹山忠　松木千俊
井筒　初同アト・ロンギへ　武田タカ子　村上郁子
独吟　野宮　キリ　大坪重遠　吉田明
仕舞　砧巻絹　横田多津子
江口　沢田房枝
枕之段　鳥山迪永
素謡　盛久　参りけり　アトロンギへ　松井弘　武田友志　佐川勝貴
卒都婆小町　上歌へ頭にハ抜き　山崎哲生　山崎佐東子　三村徑布
海士　雨露の恩にあらずやと　アトとての事にへ　冨田哲史　矢野義章　楳木映夫
番外仕舞　白楽天　武田志房
花筐　武田文志
山姥　武田友志
（終了予定　午後五時頃）

主催　武田志房　武田鳳鳴　友志会

◎入場無料
◎御来場歓迎
※浅井舞台の案内
地下鉄東山線「今池」下車、④番出口から東へ徒歩2分

連絡　瀬戸市山手町一一七－一　笹山忠方
電話0561・82・0874

## 演能案内（名古屋能楽堂）

### 三交会大会

十月二十八日（日）午前九時半始
名古屋能楽堂

番外仕舞　竹生島　久田三津子
素謡　頼政　坂井昭　早川功一
仕舞　大江山　岩崎光子
二人静　中村立子　渡辺幹子
巴　立松美貴子
素謡　卒都婆小町　村瀬登美子　久田勘鶴　藤谷音彌
仕舞　田村　クセ　馬渕洋子
笹之段　戸松花枝
江口　キリ　秋田恵美子
舞囃子　高砂　五段　小森祐子　河村眞之介　柳原冨司忠　鬼頭義命　鹿取希世
小袖曽我　五段　坂井田セツ子　上野義雄　柳原冨司忠　鹿取希世
草子洗小町　山田紗智子　河村眞之介　後藤孝一郎　鹿取希世
山姥　立廻入　山内満智子　上野義雄　後藤孝一郎　鬼頭義命　鹿取希世
能　清経　森田早紀　原田千恵子　杉江元　河村眞之介　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
仕舞　吉野天人　菊地翔子
羽衣　夏樹陽子
采女　キリ　後藤阿紀
藤戸　瀬戸勝治
能　三輪　光松見知子　間　飯富雅介　井上靖浩　上野義雄　福井四郎兵衛　鬼頭義命　藤田六郎兵衛
舞囃子　船弁慶　前　伊藤和美　河村眞之介　柳原冨司忠　加藤洋輝　鹿取希世
西王母　山村陽美　河村眞之介　柳原冨司忠　鬼頭義命　鹿取希世
桜川　藤井一美　上野義雄　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
半蔀　光安久美子　上野義雄　福井四郎兵衛　藤田六郎兵衛
融　五段　藤井圓隆　上野義雄　福井四郎兵衛　加藤洋輝　藤田六郎兵衛
能　羽衣　市川美保子　和合之舞　橋本宰　河村総一郎　後藤孝一郎　加藤洋輝　鹿取希世
舞囃子　忠度　早川功一　河村眞之介　福井四郎兵衛　藤田六郎兵衛
紅葉狩　急之舞　杉本昭夫　河村総一郎　福井四郎兵衛　藤田六郎兵衛
井筒　後藤弘次郎　河村総一郎　後藤孝一郎　鹿取希世
猩々　山内弘司　河村総一郎　後藤孝一郎　加藤洋輝　鹿取希世
（終了予定五時半頃）

［御来場歓迎］

主催　三交会
久田三津子
お問合せ＝名古屋市名東区一社三－一六二
TEL&FAX052・705・1585

尾張徳川家初代義直襲封四〇〇年
徳川美術館新館開館二〇周年記念
名古屋能楽堂開館一〇周年記念
藤田・龍吟の会一〇周年記念

## よみがえる御殿能

十一月一日（木）午後六時三十分始
名古屋能楽堂

一調一管　班女　謡　観世清和　小鼓　大倉源次郎　笛　藤田六郎兵衛
能　砧　梅田嘉宏　片山九郎右衛門　宝生閑　河村大　大倉源次郎　太鼓　観世元伯　笛　藤田六郎兵衛
梓之出　間　野村又三郎　後見　青木道喜　橘保向　地謡　武田大志　古橋正邦　分林道治　梅田邦久　味方玄　片山清司　河村博重　武田邦弘

主催　徳川美術館、藤田・龍吟の会
名古屋市文化振興事業団、名古屋市
入場料　SS席一五〇〇円　S席一三〇〇円　A席一一〇〇円
お問い合わせ　徳川美術館☎052・935・6262　藤田事務所☎052・571・6341　名古屋能楽堂☎052・231・0088

## 名古屋金春流友会

十一月四日（日）午前九時十五分開場
名古屋能楽堂

仕舞、独吟、連吟三十七番
故松本武師範代追善
舞囃子　阿漕（シテ）　小島芳樹　ワキ　飯冨河村眞之介　雅介　柳原冨司忠　加藤洋輝　大野誠
（一時十分頃終了）
◎入場無料・御来場歓迎
名古屋秀麗会・名古屋春鼓会
名古屋春栄会・トヨタ車体謡曲部
デンソー能楽部

## 第28回　名古屋金春会「能」

十一月四日（日）午後一時三十分開演
名古屋能楽堂

番組
仕舞　笹ノ段　高橋忍　殺生石　地謡　鬼頭尚久　本田光洋　井上貴覚　旅一史　金春憲和
能　西王母　金春嘉織　金春穂高　橋本宰　高安勝久　相元正樹　真下智行　河村眞之介　後藤孝一郎　竹市学　加藤洋輝　間　豊田均　後見　佐藤俊之　福井順章　地謡　伊藤雄二　吉場廣明　箕浦遵　井上貴覚　加藤剛　広瀬雅弘　本田芳樹
狂言　謀生ヶ種　甥　野村小三郎　伯父　野村又三郎　鬼頭尚久　杉江元　後見　寛鉱一　後藤嘉津幸　大野誠　間　松田高義
能　巴　後見　伴野俊彦

## 名匠狂言会

十一月八日（木）午後六時開演
名古屋能楽堂

附祝言
仕舞　田村キリ　杜若キリ　本田芳樹　井上貴覚
能　俊寛　康頼　本田布由樹　成経　前田登　本田光洋　飯冨雅介　柳原冨司忠　河村総一郎　鹿取希世　間　野村小三郎　後見　金春安明　鬼頭尚久　地謡　永田孝司　井上貴覚　武馬正和　林功　金春穂高　高橋汎　高橋忍　佐藤俊之　後見　本田芳樹　旅一史　地謡　本田布由樹　小島芳樹　加藤英昭　松岡賢二　高橋忍　金春安明　吉場廣明　金春憲和
（六時頃終了）
主催　名古屋秀麗会　名古屋春栄会
後援　㈳金春円満井会　中日新聞社

［入場料］
五〇〇〇円（正面指定席）
四〇〇〇円（中正面自由席・脇正面自由席）
三〇〇〇円（学生自由席）
お申込・お問合わせ
名古屋金春会事務局／名古屋市昭和区松風町2－15－2
TEL　052・842・7931（フシハラ）
FAX　052・842・7932（フシハラ）

大蔵流・京都　貫聟　聟　茂山七五三　女房　茂山茂　舅　茂山千作　後見　井口竜也
和泉流・東京　寝音曲　太郎冠者　野村万作　主　石田幸雄　後見　高野和憲
和泉流・名古屋　茸　山伏　佐藤友彦　何某　井上菊次郎　鬼茸　野村又三郎　後見　野村小三郎
（午後八時半終了予定）
入場料　S席八五〇〇円　A席七五〇〇円　B席六五〇〇円
取扱い　中日コンサートデスク（052・320・9191）
チケットぴあ（0570・02・9999）
ファミリーマート、サークルKなど
主催　中日新聞社

## 郁諷会大会

十一月十日（土）午前十時半開演
名古屋能楽堂

連吟　通盛　玉之段　名古屋大学観世会　名古屋大学観世会
素謡　半蔀　河崎喜代子　中野裕子　熊谷晃子　佐治光幸
舞囃子　松虫　片山明美　中野裕子　有滝文江　笠　鉱一　後藤孝一郎　鬼頭大野　義命誠
絵馬　笠　鉱一　後藤孝一郎　鬼頭大野　義命誠
葛城　河崎喜代子　笠　鉱一　後藤孝一郎　鬼頭大野　義命誠
花月　志津明子　笠　鉱一　後藤孝一郎　大野誠
素謡　梅　門脇千鶴　有滝文江　志津明子　久田勘鬼　片山明美
舞囃子　蝉丸　赤尾正　笠　鉱一　後藤孝一郎　大野誠
頼政

## 名古屋観世会定例公演

十一月十一日（日）十二時半開演
名古屋能楽堂

遊行柳　青柳之舞　渡辺郁子　笠　鉱一　後藤孝一郎　鬼頭大野　義命誠
仕舞　梅枝キリ　門脇千鶴
素謡　盛久　濱田國松　赤尾松山　正幸親　吉田富喜子　渡辺郁子
野宮
舞囃子　邯鄲　佐治光幸　笠　鉱一　後藤孝一郎　鬼頭大野　義命誠
山姥　立廻入　伊藤明美　笠　鉱一　後藤孝一郎　鬼頭大野　義命誠
番外仕舞　道明寺　上田貴弘　前野郁子
岩船
［御来場歓迎］
主催　郁諷会　前野郁子
（終了予定五時頃）

能　三井寺　子方　冨田観世尚史　芳伸　高安勝久　杉江元　相元正樹　笠　鉱一　後藤孝一郎　鹿取希世
間狂言　佐藤友彦　佐藤融
後見　梅田嘉宏　片山清司　地謡　松山八神　幸親孝充　加賀敏彦　高橋瞭一　山階彌右衛門祖父江修一　武田邦弘　山階彌右衛門　久田勘鬼
狂言　鎌腹　井上靖浩　井上菊次郎　鹿島俊裕　後見　今枝郁雄
仕舞　井筒　山階彌右衛門　武田大志　武田邦弘　梅田邦久　古橋正邦
鉄輪　片山清司　地謡
能　融　観世銕之丞　高安勝久　河村眞之介　後藤嘉津幸　鬼頭義命　藤田六郎兵衛
思立之出　舞返　間狂言　井上菊次郎
後見　小島一英　山階彌右衛門　地謡　本田勲　須部甫　清沢一政　武田邦久　梅田邦久　大志嘉宏　片山清司　古橋正邦　梅田
（終演五時頃）
附祝言
主催　名古屋観世会
名古屋市昭和区台町2－16－5
TEL　052・841・4632
FAX　052・841・4632
［有料］　要会員券
当日券八〇〇〇円

## 名古屋宝生会定式能

十一月十八日（日）午後一時始
名古屋能楽堂

能　生田敦盛　佐藤健太朗　佐藤耕司　飯冨雅介　後見　宝生和英　和久荘太郎　地謡　村上茂　大森尚人　玉井馬八郎　久野道夫　稲川寿一　石黒孝　富四夫　辰巳満次郎　高義　智行
狂言　成上り　野村又三郎　松田眞下

能　六浦　玉井博祐　杉江元　高安勝久　相元正樹　笠　鉱一　後藤孝一郎　鬼頭大野　義命誠　間　松田高義　後見　衣斐正宜　内藤飛能　地謡　松浦祥子　岩田幸子　長崎邦子　芳賀カズ子　田村　倉本雅　竹内澄　衣斐愛　石黒孝　衣斐正宜　辰巳満次郎　大二郎
附祝言
主催　名古屋宝生会
名古屋市天白区島田二－三〇一
島田橋住宅二－一三一〇
佐藤耕司方
電話　FAX〇五二－八〇三－七三七二
［有料］
当日券一万円（二枚綴）

## 秋の清謡会（第30回）

十一月二十四日（土）午前九時三十分始
名古屋能楽堂

仕舞　枕慈童　和久荘太郎　車僧　内藤飛能　殺生石　宝生和英　地謡　石黒孝　衣斐正宜　辰巳満次郎　巳大二郎
番外素謡　國栖　今沢美和　清沢一政　須部甫　（地）本田勲
素謡　小督　本多和子　近藤冨士雄　保谷毅　神谷鎌一
素謡　通小町　清水慶蔵　平松宗顕　伊佐治修治
仕舞　田村クセ　井筒半場フミエ　保谷紀代美　葛城キリ　玉鬘　本多和子　青木眞佐子
素謡　班女　久松直代　小栗知津子　三輪八重子
仕舞　鶴亀　宮地滋子　清経キリ　堀尾智子
班女クセ　冨田芳子　雨月中入前　近藤冨士雄
素謡　葛城　伊藤礼子　鬼頭みゆき
仕舞　屋島クセ　古沢ひさ子　葛城クセ　奥村小浪
采女キリ　小林知子　柏崎道行　矢根敬子
融　小島恵子
素謡　蝉丸　服部ふじ　高見かね子　樋口あけみ
連吟　三井寺　半場フミエ　青木眞佐子　矢根敬子　小島恵子　小林知子　古沢ひさ子
仕舞　実盛キリ　金原孝典　梅枝キリ　不破峰子　三輪　金井邦夫　須磨源氏　西野志保
連吟　大仏供養　中野ひろみ　猪子陽子　後藤圭助　宮地滋子　堀尾智子　冨田芳子　石川華子
素謡　景清　金原孝典　西野志保　不破峰子　小林美和子
舞囃子　巻絹　織田敏男　谷口有辞　福井四郎兵衛　谷口有辞　福井四郎兵衛　谷口有辞　福井四郎兵衛　谷口有辞　福井四郎兵衛　鬼頭義命　鹿取希世　鹿取希世　鹿取希世　鹿取希世
楊貴妃　小林美和子　鬼頭みゆき
富士太鼓
番外仕舞　巴　清沢一政

（③面へつづく）

# 戦後名古屋能楽史 ㊷

## 〔第十九章〕昭和四十年（一九六五）

竹尾　邦太郎

―承前―

五月十六日　喜多流能楽公演。番組は順に仕舞二番「枕慈童キリ」中尾栄一、「三輪」岡村保道、独吟「鐘之段」二井栄逸、仕舞「氷室」和谷亀二郎、能「景清」喜多実・西村弘敬、仕舞四番「嵐山」佐々木宗生、「桜川クセ」友枝昭世、「敦盛キリ」大島政允、「高野物狂」大島久見、舞囃子「賀茂物狂」和島富太郎、狂言「千鳥」野村又三郎、能「小鍛冶・白頭」長田驍・高安滋郎。

解説に「長田驍師は満六歳の時、初めて一曲のシテを勤めましたが、それが「小鍛冶」でした。爾来二十二年の研鑽練磨を積んだ同師が、今回の初の主催能を記念して、特にこの「小鍛冶」を選んで勤めることは、感無量なるものがあります。殊に今回は「白頭」の小書付き（異式演出）です。この小書は稲荷明神の扮装が白頭、白装束で狐戴が銀色になり、舞や動作の型がいろいろに変りますし、喜多流独得の狐足を遣うなど、至難な秘曲が展開されます。それだけに、このたびの上演は驍師にとって、誠に意義深いものがある訳であります」と。

なお本公演は主催中京喜多会・長袖会、協賛社中は岡村保道会・喜楽会・二井同門会・和調会・和楽会、長田驍は同番組に次の挨拶・謝辞を述べる。

私が喜多宗家から名古屋に派遣されましたのは昭和三十五年のことで、宗家の喜多実先生をはじめ、先輩、流友の御援助に依り、翌三十六年の三月には、私を主宰とする長袖会の初回の催しを行ないまして、現在に及んでおります。その間、随分苦しい思いも経験致しましたが、僅か五年後の今日、私の主催能が宗家のお許しを得て斯く行われますことは、偏に皆様の御協力のたまものと、ここに謹んで衷心より御礼を申し上げます。

長袖会の名付親は実先生で、その時にも師恩の有難さに感激を抑えることが出来ませんでしたが、今回の催能に当りましても、更に実先生から、中京喜多会という名称をいただき、何かと多大の御高配を賜りまして、ただただ恩師の御厚情に感泣しております。この中京喜多会という名称を、私は単に私個人のものだけではなく、今回の催能に協賛して下さいました各会共同のものと考えております。なぜならば、誠におこがましい言い分ですが、近隣の流友各会が手を結んでお互いに扶け合い、喜多流将来のために尽瘁しなければならないと念じているからであります。

私と致しましては、実先生の御高恩に報いるべく、石に囓り付いても名古屋で喜多流を発展させることあるのみです。しかし、微力とてなかなか意に任せません。勿論あらん限りの努力を傾ける決心でおります故、何卒この心情をお汲みとり下さいまして、名古屋の喜多流が今後隆昌の一途を辿りますよう、この上ともに皆様の変らぬ御支援を、ひたすらお願い申し上げます。

五月二十三日は名古屋金春会。番組は能「源太夫」本田秀男・西村欽也、舞囃子「熊野」桜間龍馬、狂言「鎌腹」佐藤卯三郎、仕舞三番「笠之段」高橋汎、「野宮」金春晃実、「藤戸」梅村平史朗、能「望月」金春信高・安明（子方）・高安滋郎。主催は本田秀男と名古屋金春会。本田秀男が勤めた脇能「源太夫」は熱田の神の能で、シテ方五流の中で金春流だけにある超稀曲（喜多流では参考曲として残ってをり、一調・仕舞・囃子・小謡に限り現行曲として扱われているが。『喜多流曲名総覧』昭和五十二年十月五日・喜多流刊行会）。中部圏では明治三十八年二月四日、伊勢・一色神社の祭典能で土地の有志（喜多流系）による演能記録を見るが、それから数えても六十年ぶりということであった。

著名な能楽評論家かうの・よし（河野由夫、一九二五―一九九〇）は次のように解説する。

この「源太夫」という能は、能楽五流のうちで金春流だけに現行曲として残されているものですが、どういうわけか半ば埋れたやうなかたちになって、近代これを演じた人も見た人もないという、まことにめづらしい能であります。けれども、はるかな昔、ほかならぬこの熱田の神の庭では、さだめしいくたびも、演ぜられたはづであります。

数年まへのこと、本田さんが一度これを演ってみたい、と洩らして以来、まだかまだかと多くのひとから待たれていたやうでした。

それが機縁ととのって、このたび、いよいよ熱田において上演されるはこびとなったわけです。東京や関西のファンにはくやしいことですが、この能の内容がそもそも熱田の神にささげられているのですから、現代におけるはじめての公演として、このくらいふさわしく、めでたいことはないわけで、これでは文句をいうよりも、いそぎ熱田の明神へとまかり出なくてはならぬでしょう。

曲柄は熱田の明神に係る脇能〈神能〉ですが、脇能としてもなかなか趣が変っています。現代では、かへってわかりにくいことですが、中世には、ヤマトタケルノミコトとスサノオノミコトとは実は同じ神さまであって、熱田明神と出雲大社は御一体であるという信仰がありました。――中略――脇能なので、後シテの場にとりたてて劇的なものはありませんが、賓客のために舞楽の曲を尽さうと源太夫神が、打ちよせる浪の響にしらべを合はせて太鼓を打ち興じ、重厚でエキゾチックな感じの舞、「楽」〈がく〉を舞い、また橘姫もともにその「楽」を相舞するなど、舞楽的な趣きをつよく漂わせていて大かたの脇能を見なれた目に、これは大いに興味をそそられるところでしょう。

五月三十日、大槻清韻会別会。連吟「賀茂」増田一雄・鬼頭五朗、仕舞五番「難波」岡田光紘「経正」加藤総兵衛「羽衣」太田重次郎「阿漕」加藤丈太郎「山姥」河村鉦二、能「通小町」田村勇・稲生芳雄、一調「松虫」山本敬一郎・殿島修二（謡）、素謡「千手」泉嘉夫・小林二郎・里井順次郎、能「遊行柳・青柳之舞」大槻秀夫・高安滋郎、仕舞三番「網之段」柴田初太郎「笹之段」山中義滋「鵜之段」宇治正夫、舞囃子「雲雀山」加藤良久、狂言「竹ノ子」井上礼之助、仕舞二番「富士太鼓」梅若盛義「野守」山本勝一、能「葵上・梓之出・空之祈」大槻文蔵・西村欽也。

―以下次号―

## ◆盛夏の舞台から◆

## 「青陽会」と「第二回西村同門会研究能」「第八回御洒落名匠狂言会」「名古屋能楽堂定例公演」

竹尾邦太郎

青陽会「頼政」梅田邦久

**「頼政」**　シテ邦久。前は宇治の里の古老、土地を知悉していながら旅僧ワキ元とのいわゆる名所教えの問答、当初の素っ気無い応対に雰囲気がある。昭和も二十年代頃までは見知らぬ人間が村へ入れば村人は好奇・警戒の目を向け、素姓が知れゝば積極的に好意をみせたものだった。

へなう〳〵旅人あれ御覧ぜよ、と脇柱の方を左手に指シ、月の出を見るよう促すところ、月光の下、へおぼろ〳〵として、の面使ヒには四辺の風景を愛でる自足の心境、更に進んで平等院へ案内すると、扇の芝の謂れをしっとり語る。

アヒは里人・靖浩、居語に頼政が自刃に至る経緯を哀惜の念を籠めて語り佳。

後は頼政ノ霊、宇治川の合戦は床几の型、クセ中、へ宇治橋の中の間引き離し下は川波、と雲ノ扇様から扇を前へ、橋板を剥がす心に上方へ上げると、下に激流を見下ろす処（写真）写実の妙。またシテ語を受ける地（邦弘・正邦）の、へざっ〳〵とうち入れて、と敵方が激流に乗り入れてくる描写、力強く見事だった。キリは笛前からスミへ、扇を投げ捨て、へ草葉の蔭に、と袖で面を隠して扇の前へ、トメは常座。後シテの渋い装束が良かったが、白垂を付けた方がより悲劇の老将に相応しかったのでは…。（1時間20分）

青陽会「楊貴妃」㊧より今沢美和、飯冨雅介（杉浦賢次氏撮影）

**「楊貴妃」**　玄宗皇帝の命により仙界に在る貴妃シテ美和を尋ねる方士ワキ雅介、対面の証に形見の簪を賜わるが、類似の品のある物よりは心、と帝と交わした言の葉を求めれば、懐旧に駈られたシテは思いを〈天に在らば願はくは云々、と地（修一・一政ら）に謡わせ、右へ遙か遠くを茫っと眺め、帝と誓った今の言葉を〈密かに伝へよや、とワキにアシラヒ、シヨル処（写真）ひたすら切ない。ワキ雅介が文字通り脇でがっちり支え、シテ美和のたお〳〵としたか細い風情が役に適い美しかった。（1時間34分）

**「縄綯」**　博奕の抵当とは知らせず大仰に文を付け何某・友彦方に太郎冠者シテ融を遣る主・郁雄。その余りに人権を無視した仕打ちに、大人しいシテも鬱憤の矛先は何某に。「壁下地の縄を綯へ」と命じられゝば、「この中、手の内に物が出来て縄は綯はれませぬ」などと事毎に反発して埒が明かず、結局、主の許へ戻されるが、それも主と何某との間に魂胆があってのこと。

人の好いシテは主を恨む処か喜々として何某方の悪口雑言を縄を綯いながら捲し立てる。そのうちに密かに主と入れ替わる何某（写真）、悪（わる）は匆々に退散した主なのだが……。脂が乗る融。

なお壁下地の縄、新建材とかでベタ〳〵と張ってゆくボードの当世なればこそ時代の背景しかと理解すべきである。（29分）

**「海士・窕之伝」**　前場は房前大臣（子方・寺澤拓海君、好演）に珠を潜き上げる所を見せよ、と従者ワキ勝久に促される海女（実は房前大臣の亡母ノ霊）シテ三津子、「御目に掛け候べし」と浅黄水衣を脱ぎ裳着胴姿も身軽に珠之段。へ海漫々と、大きく掻き分け一ノ松へ、海底隈無く探る心に勾欄に寄って双手を拡げへ直下、を見（写真）、更に二ノ松へ、舞台へ戻ると其処は龍宮。八龍悪魚の中、へ利剣を額に当て、飛び入る気合は連続する型どころをきび〳〵と極め、就中、持ちたる剣をへ取り直し、と乳の下を二度掻っ切る型の鮮烈。

後場は亡母ノ霊が法華経の功徳で後シテ龍女の姿で現われ、喜びの舞を舞う。面泥眼・黒垂・輪冠龍戴・襟浅黄・白地鱗箔・白地唐花文大口・赤地舞衣壷折・経巻を持つ。正中下居、へ微妙浄法身、と誦経、へあら有難の御経やな、

（④面へつづく）

## 新刊紹介

## なごやと能・狂言

林　和利著

能・狂言はじめ日本古典演劇研究の林和利氏がこのたび「なごやと能・狂言―洗練された芸の源を探る」を上梓、風媒社から刊行された。

著者・林和利氏は、現在名古屋女子大学文学部・大学院教授、文学博士。専攻は日本古典演劇。野村万作師に狂言実技を習う。狂言「鳳の会」などの代表世話人をつとめ、能・狂言演能の解説にあたり、「能・狂言の生成と展開に関する研究」（世界思想社刊）など多数の著作がある。

今回出版の「なごやと能・狂言」は、〝洗練された芸の源を探る〟との副題で、名古屋をはじめこの東海地方を中心にその魅力を紹介、〝教科書で教わった《附子》は名古屋ゆかりの狂言〟〝津島祭りが出てくる《千鳥》〟など、名古屋の能楽の魅力をわかりやすく、読みやすい著述。「尾張藩の能と狂言」「東海地方ゆかりの能楽」はじめ「名古屋で能・狂言を楽しむために」の項では、名古屋能楽堂、徳川美術館、椙山女学園大学、名古屋女子大学学術情報センター、出版、報道、各会の公演、薪能、稽古用舞台など幅広い視点で丁寧に紹介している。

四六判型・216頁、定価1470円。風媒社＝名古屋市中区上前津2―9―14・久野ビル、TEL052・331・0008


番外
舞囃子　老　松　梅田　邦久
谷口　有辞　福井四郎兵衛　鬼頭　義命　鹿取　希世
（午後五時半頃終了予定）
主催　清　謡　会
清　沢　一　政
電話　〇五六四・五二・六九〇九
補佐　梅　田　邦　久

（②面清謡会番組つづき）

# 久田観正会秋の大会

十一月二十五日（日）十時半始
名古屋能楽堂

能　海　士　岡田　信道
能　砧　志賀　禮子
ほか素謡・舞囃子・仕舞

主催　久田観正会
鷗華会
名古屋市名東区一社三―一六二
久田勘鷗
TEL052・705・1585

［入場無料］
［御来場歓迎］

（③面よりつづき）

と押し戴いた経を巻き戻して立つと、子方はそれを両手で戴き左手に持つと床几を下りて下居、経巻を開くと誦経の心、シテは達拝掛早舞を舞う。舞のうちに子方は経を巻き戻して懐中すると再び床几に掛かる。舞の途次、シテは二ノ松から小廻りに三ノ松へ、暫しクツログと三鼓の流シで舞台へ戻り爽やかに舞上げた。（1時間32分・6月23日・青陽会）

**「和谷式翁・神楽」** 伊勢猿楽の咒師の姿を今に留める「神楽」は「かぐら」に非ず「しんがく」、この度はこれだけを単独に演ずるが、翁舞に先立ち舞台の四方を拝して四方を堅める神事という。鳥兜・厚板着付・単狩衣・白大口の伶人の姿。和谷家二十四世当主衡市、厳粛に勤めて清々しい。（9分30秒）

**半能「調伏曽我」** 観世・金春両流に無い上、シテ方・ワキ方ともに多人数を要し上演稀なワキ方の重習。

箱根権現参詣のツレ頼朝一行の中に敵のシテ祐経が随うことを知り、気色ばむ子方箱王（五郎時致の幼名）を案じて連れ戻ろうとするワキ別当、そこを察し箱王に接近、甘言を弄して籠絡する老獪な祐経。口惜しさに祐経の後を追う箱王だが別当に諌められる、という前場が省略される。

後場、箱王の心中を憐れむ別当（雅介）は祭壇を整えて祐経の形代を据え、従僧（元・宰ほか）と共に後シテ不動明王（郷）を請じ、怨敵・祐経を降伏（ごうぶく）する。ワキ方の活躍は主として後場のいわゆる護摩ノ段（写真）、統制のとれた一糸乱れぬ行動の小気味よさに「研究能」と謳った稽古の努力のあとを存分に発揮。キリはヘ形代が首を切って剣の先に、の処、出番は僅かだが後シテ郷、不動明王の威厳を示し（写真）舞台を締めた。

いつか平成二年以来の、前後通しての完演を期待したい。（42分・7月1日・豊田市能楽堂・第2回西村同門会研究能）なお切能「紅葉狩」シテ驍・ワキ正樹、があったが不見。

**「末廣かり」** 果報者シテ友彦、太郎冠者アド融が求めてきた傘を、興味深げに笑みさえ浮かべ、「惣じて都は物が上手ぢゃが」と開くと（写真）、御意に適ったと思い、為てやったりとばかりに嬉嬉として説明にかゝる太郎冠者だが、雲行きが次第に怪しくなって理解のズレに苛立ってくるシテに、なお懸命に説き付けようとする太郎冠者にも漸く不安が。この辺りの描写が中々。スッパ郁雄の剽軽な味も捨て難い。（40分）

**「千鳥」** 酒代が滞っている上、祭を理由に太郎冠者シテ萬を酒屋・万蔵方へ使いに遣る主アド扇丞。「それはどの酒屋へ参りまする」と語気強める厭味も効き目は薄く、「何れ御神事に禁酒では済みますまい」と観念の太郎冠者。難敵の酒屋との駆け引きは飴と笞ならぬ御世辞に押し、津島祭の話柄に酒屋を惹き込んで注意をそらし、酒樽の掠奪に神経を集中する表情豊かな仕方話が絶妙。ただ千鳥を伏せる処（写真）、流鏑馬の他に三宅派には山鉾を引く処は無いのか、一寸寂しかった。（38分）

**「月見座頭」** 中秋名月の宵、野辺にすだく虫の音を聴き心を慰める風流な座頭シテ忠三郎（写真）、盲人は常人より耳が敏いというが様々な虫を聴き分けて楽しむ座頭の独り言には詩趣。そこへ月見に現われる腰に酒の瓢を下げた粋人アド良暢、歌に通じると座頭にみられ一首を物せば人口に膾炙した月の名歌。負けじと虫の古歌で応酬する座頭の洒落っ気、骨っぽい忠三郎ならばこその惚けた味。打ち解けて酒酌み交わし、肴に舞う座頭の小舞謡「弱法師」の洒脱も亦結構。キリは別れて帰るさ、わざ〳〵戻るアドは魔が差したか、酔余に兆す悪戯心に座頭を突きとばし悪態をつく。心に巣くう善と悪、明暗鮮やかに抉り出して進境をみせる良暢、トメは座頭の嚔留メ。（34分）

**「木六駄」** 雪の山道を木と炭各六駄、十二頭の牛を独りに任された上に主（靖浩）の伯父御（弘之）へ進上の樽酒まで持たされる太郎冠者シテ菊次郎、「物を心易さうに仰せられます」と文句は付けるが主命とあってあっさり引受けるところ、如何にも好人物の印象、菊次郎の資性である。気侭な十二頭の牛の世話をやき乍らの道中（写真）、脱げた一頭の沓を履き替えさせる（脇柱そばで、千五郎家）型は無いが、「荷が返る、荷が返る、荷が返るわいやい」と追竹・角樽を下に荷を押し上げる（大小前で、山脇派）型に事の難渋な様を魅せる。峠の茶屋（友彦）では「一杯飲んでアタタマラウ」と期待に胸膨らませ歌う様に声弾ませる太郎冠者だが、酒は切れて無いと知っての失望落胆は傍目にも気の毒。が、茶屋の示唆で進上物の酒に手をつけるや、俄然生気を取り戻し、二人だけの酒宴となってゆくところは、互いの機微相通じる長年のコンビの自然体の良さである。眼目の、肴に舞う小舞は茶屋の渋団扇で舞う「鶉舞」でなく、追竹で舞う「忍ぶ其夜」が珍しい。

元来、和泉流は「柳の下」であったのを昭和五年（一九三〇）野村万介（九世三宅藤九郎）が鷺流「鶉舞」の詞章に節・型をつけたものに差し替えた由だが「柳の下」でなく「忍ぶ其夜」、狂言共同社・四世菊次郎は今回の披キに和泉流山脇派に原初行なわれていたかも知れない「忍ぶ其夜」を敢て採ったのか…。詞章は太刀・薙刀・鎗・棒など長い得物尽し、追竹で舞うのは必然だが、渋団扇で舞う「鶉舞」よりは地味で面白味に欠ける憾み、再演には「鶉舞」を願いたい。

なお、酒を終うとき、「身共が樽ごと終おう」と樽の一対の柄を持ち樽から直接ラッパ飲みの処、また、下山にホクソ頭巾を脱がないのが目についた。（55分・7月8日・第8回御洒落名匠狂言会）

**「萩大名」** 太郎冠者（融）の案内で気散じに茶屋（郁雄）の庭見物をする大名シテ友彦、茶屋では歌を所望されると知らされても歌には一向に無縁な大名、頭っから難しいと敬遠はせず、先づ太郎冠者に教えを請う殊勝。だが、この素直さが却って習い、覚える努力を損じ、付焼刃の作歌指導を受けても全て太郎冠者任せ（写真）。

臆面もない場違いな庭の鑑賞批評に「誰も知ったことぢゃな」と反省して太郎冠者の同意を求めたり、作歌の時には「再々違ふて面目ない」と茶屋に詫びたり、と無邪気な愛（う）い大名なのだが、間違いも再三となると流石に太郎冠者も庇いきれずに茶屋の手前居たゝまれず、愛想を尽かし走って幕へ。慌てふためく大名、友彦、肌理細かくみせた。（30分）

**「三井寺」** 行方不明の吾子・千満丸（子方冨田尚久君）との再会を清水観音に祈念する母シテ嘉夫、霊夢を得、占い（アヒ菊次郎）の夢解きに従い三井寺へ赴く前場、シテに憂愁の色。

後場は観月会の三井寺、住僧（ワキ勝久）から幼童のために慰めの一曲を、と勧められて舞う能力（アヒ靖浩）の小舞「風車」が愛嬌、面白い。折柄、女物狂騒ぎは女を境内へ入れる入れないの従僧（ワキツレ元）と能力の口争い。女物狂（後シテ嘉夫）は〽子の行方をも白糸の、と舞台へ入りカケリの狂燥。三井寺に着き、折しも月明下に鳩の海、湖上の景観を述べる地（邦久・邦弘ら）上歌のキリ、〽舟人もこがれ出づらん、とシテは一ノ松へ。其処で狂ヒ笹を手放すのは、月見酒の酔いに後夜の鐘を忘れるところだった能力の撞く鐘の音に、心を奪われたゝめ、「面白の鐘の音やな」の詠嘆は故郷の駿河清見寺の鐘を懐しむ心、佇む風情には寂寥の思いも。〽影はさながら霜夜にて、と舞台へ戻ると、〽月にや鐘は冴えぬらん、と常座から鐘楼を見込む。鐘ノ段は地との掛合が好調、〽月も数添ひて、と紐を取り（写真）、〽五障の雲晴れて、で紐の下を廻って潜り抜けるのが迷いから脱却し得たのを思わせる。

クセは上ゲ端あと、〽霜天に満ち、と立ち、詞章そのまゝに詩情濃やかに舞うとクセ切、〽三井寺の鐘ぞさやけき、と沁々鐘を見上げるところ、吾子との再会を予感させた。嘉夫、静かに、美しく、叮嚀に舞った印象。（1時間32分・7月14日・名古屋能楽堂定例公演）

青陽会「縄綯」㊧より佐藤友彦、佐藤融

㊤西村同門会第2回研究能半能「調伏曽我」ワキ飯冨雅介・杉江元・橋本宰ほか、㊦長田郷　（杉浦賢次氏撮影）

青陽会「海士・窕之伝」
久田三津子、井上菊次郎
（杉浦賢次氏撮影）

第8回御洒落名匠狂言会
㊨「末広がり」佐藤友彦、㊧「月見座頭」茂山忠三郎
（杉浦賢次氏撮影）

㊤「千鳥」野村萬、㊦「木六駄」井上菊次郎
（杉浦賢次氏撮影）

名古屋能楽堂定例公演
㊤「三井寺」泉嘉夫、
㊦「萩大名」佐藤友彦・佐藤融
（杉浦賢次氏撮影）

**〔先号の訂正〕**

三頁四段七行目　当→当地

「隅田川」十五行目
先→正先
五段十行目
柴乃→紫乃
六段「右近左近」六行目　適う→敵う
四頁一段八行目
千五郎→千三郎
五段「国栖・白頭」十七行目　奇端→奇瑞

# 能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
ＦＡＸ（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

## ＮＨＫ放送予定（平成19年11月～12月）

◆ＮＨＫ－ＦＭラジオ能楽鑑賞（毎週日曜日7時15分～8時）

| | | |
|---|---|---|
| 11月25日 | 素謡「班女」（再）（宝生流） | 小林与志郎ほか |
| 12月2日 | 素謡「葵上」「天鼓」（観世流） | 遠藤六郎 |
| 12月9日 | 素謡「鉢木」（金春流） | 桜間金記 |
| 12月16日 | 素謡「定家」（喜多流） | 塩津哲生 |
| 12月23日 | 素謡「砧」（観世流） | 野村四郎 |
| 12月30日 | 狂言「箕被」「呼声」（大蔵流） | 大蔵吉次郎ほか |

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

（能・狂言演能関係）
（TEL 052－231－0088）

［11月］
24日(土)　秋の清謡会　（無料）
25日(日)　久田観正会秋の大会　（無料）（番組①面）

［12月］
2日(日)　名古屋能楽堂定例公演　（有料）（番組①面）
6日(木)　中学生芸能鑑賞会　（関係者）
7日(金)　中学生芸能鑑賞会　（関係者）
8日(土)　名大観世会定期自演能　（無料）
14日(日)　名古屋能楽堂開館10周年記念市民能楽大会　（無料）（番組①②面）
15日(土)　名古屋能楽堂開館10周年記念市民能楽大会　（無料）（番組②面）
24日(月)　名古屋能楽堂開館10周年記念乱能　（有料）（番組②面）

## 名古屋能楽堂開館10周年記念　2412月日　乱能公演

能楽協会名古屋支部（梅田邦久支部長）と名古屋市文化振興事業団（名古屋能楽堂）では、名古屋能楽堂開館10周年を記念して、本年は、能楽堂定例公演では、〝尾張の殿様が観た能〟シリーズの演能はじめ、能楽愛好者による「市民能楽大会」を十二月十四、十五の二日間にわたって開催、さらに邦楽関係でも多彩な企画を上演しているが、この掉尾を飾って、きたる十二月二十四日（月・振替休日）に、開館10周年記念の「乱能」を開催する。

支部主催の乱能は、昭和六十年に「熱田神宮能楽殿創立三十周年記念乱能」平成元年に「名古屋市制百年を記念する乱能」が催され、さらに平成五年に「熱田神宮能楽殿改修募金勧進能」と銘打っての乱能が行われ、今回の名古屋能楽堂開館十周年記念の乱能は十三年ぶりの催しである。

演能は、能「鶴亀」「海士」、半能「石橋」の三番はじめ、狂言「末広」「梟山伏」「附子」、舞囃子「胡蝶」「鞍馬天狗」居囃子「田村」一調「笠之段」でシテ方の能楽師がワキ、囃子、狂言の諸役をつとめ、ワキ方、囃子方、狂言方の能楽師がシテ方をつとめるなど、それぞれの役々を違えて出演、歳の瀬にふさわしい交流の舞台を示現する。

開演は午前十一時、入場料は前売一般三千五百円（当日四千円）、学生二千円（当日二千五百円）。取扱いは、出演能楽師、名古屋能楽堂、ナディアパーク8階プレイガイド。（番組②面掲載）

## 文化勲章　狂言方　茂山千作氏受章

政府は今秋十月、文化勲章受章五人と文化功労者十五人の受章を発表、狂言方大蔵流・茂山千作氏（八七）が受章し十一月三日に皇居で親授式が行われた。文化勲章は能楽界としてこれまで故・梅若万三郎氏、喜多六平太氏が受賞しているが、狂言界では始めての受章である。

茂山千作氏は、昭和五七年芸術選奨文部大臣賞受賞、平成元年重要無形文化財各個指定保持者（人間国宝）平成三年日本芸術院会員。

## 能「鉄輪」上演　12月23日　五色の会演能

### 岡崎

金剛流・花朋会敷舞台・朋の会では「五色の会・第九回能を観る」催しを、きたる十二月二十三日（日・祝）花朋会敷舞台（岡崎市大西町奥長入47－4）で開催する。

演能は次のとおり。午後二時始曲。

仕舞「藤戸」宇高通成
狂言「口真似」太郎冠者・野村小三郎、主・真下智行、客・松田高義、後見・伴野俊彦
能「鉄輪」シテ羽多野良子、ワキ高安勝久、ワキツレ椙元正樹
笛・鹿取希世、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村眞之介、太鼓・加藤洋樹、アイ・野村小三郎
後見・廣田幸稔、小鴨梨辺華、伊藤雅子、地謡・宇高通成、竹市幸司、宇高竜成、小野芳朗、宇高徳成、天野幸輔
補佐・宇高通成、後援岡崎市教育委員会

入場料・前売五千円（当日五千五百円）高校生以下三千円。お問合せ　朋の会事務局＝岡崎市中町5－2－15、電話・FAX0564・23・4364（羽多野方）。花朋会敷舞台は、名鉄本線男川駅より徒歩10分、名鉄バス／光ヶ丘（女子高校前）下車、徒歩3分。

## 大阪演能だより

☆梅猶会　12月2日大槻能楽堂で、大阪能楽公演として能「鉢木」（シテ梅若善高）、能「船弁慶」（シテ井戸和男）を上演。

☆山本能楽会　12月2日、定期能「たににまち能」として能「紅葉狩」（シテ山本博通）、能「紅葉狩」（シテ前田和子）を上演。

## 久田勘鷗祝還暦　久田観正会秋の大会

十一月二十五日（日）午前十時始
名古屋能楽堂

素謡　通小町　小田あさ乃　吉田勝巳　橋本清
仕舞　高砂　浜口矩光　紅葉狩　山田澄江　蝉丸　堤賢太物　融　山田和子
木賊　佐藤隆男　大久保由実　田中信子　笠田稔　寺澤拓海　岡田信道
能　海士　飯冨雅介　相元正樹　福井四郎兵衛　河村総一郎　加藤洋輝　鹿取希世
懐中之舞　赤頭三段之舞　間　井上靖浩
仕舞　敦盛クセ　池野章　井筒　小田あさ乃　羽衣キリ　加藤文子　鐘之段　町田耀子　網之段　上杉博子　遊行柳クセ　岡佳代子　融　森本敬子
舞囃子　采女　仲村スミ　河村総一郎　福井四郎兵衛　大野誠
三輪　大竹富三江　河村総一郎　福井四郎兵衛　加藤洋輝　鹿取希世
番外仕舞　老松　浦田保利　田村キリ　上田貴弘
前野郁子　志賀禮子
能　砧　飯冨雅介　河村眞之介　柳原冨司忠　加藤洋輝　大野誠　間　井上菊次郎
舞囃子　高砂　八段之舞　後藤玲子　河村眞之介　柳原冨司忠　加藤洋輝　大野誠
素謡　藤戸　金野たつ　高原千枝子
番外仕舞　嵐山　久田勘吉郎　菊慈童　久田三津子
番外舞囃子　養老　水波之伝　久田勘鷗　河村眞之介　柳原冨司忠　加藤洋輝　鹿取希世　（終了予定五時頃）

［御来場歓迎］
（入場無料）

主催　久田観正会
久田勘鷗

お問い合わせ＝名古屋市名東区一社三－一六二
電話052・705・1585

## 名古屋能楽堂定例公演

～尾張の殿様が観た能　七代・徳川宗春～

十二月二日（日）十時半開演
名古屋能楽堂

舞囃子（金剛流）　高砂　大川磨美　河村眞之介　船戸昭弘　鬼頭義命　竹市学　鈴村昌美
地謡　加藤かおる　伊藤雅子　波多野良子　加藤領一　和谷衛市　長田郷　伊藤英毅
仕舞（喜多流）　江口長田驍　地謡

能　八島（宝生流）　前シテ　後シテ　衣斐正宜　内藤飛能　間　後見　飯冨雅介　橋本佐藤宰　玉井博祐　衣斐愛　地謡　河村眞之介　後藤嘉津幸　竹市学　竹内良伯　竹内淳一　久野幸三　和久荘太郎　稲川寿一　水上輝和　東川光夫　佐藤耕司
三村徑布　久田三津子
能　熊野（観世流）　村雨留　高安勝久　椙元正樹　後見　前野郁子　近藤幸江　地謡　笠藤孝一郎　鉱一　藤田六郎兵衛　本田幸親　松山勲　武田清沢　梅田大志　嘉宏　久田邦弘　祖父江修一　勘鷗
狂言（和泉流）　入間川　大名　松田高義　太郎冠者　真下智行　入間の何某　野村小三郎　後見　伴野俊彦
能　猩々乱（観世流）　高橋　古橋　瞭一　正邦　双之舞　杉江元　後見　武田大志　梅田邦久　地謡　河村総一郎　福井四郎兵衛　加藤洋輝　大野誠　黒田博　八神孝充　梅田嘉宏　祖父江修一　須部浦　加賀敏彦　泉一政　清沢一政
（終了予定三時半頃）

主催　名古屋市文化振興事業団（名古屋能楽堂）
能楽協会名古屋支部

［入場料］
一般　前売三五〇〇円（当日四〇〇〇円）
学生　前売二〇〇〇円（当日二五〇〇円）
［入場券取扱い］
名古屋能楽堂／TEL052・231・0088
ナディアパーク8階PG、チケットぴあ
（0570・02・9999、Pコード予約380・705）

## 第11回　名大観世会定期自演能

十二月八日（土）午前十一時開演
名古屋能楽堂

能「船弁慶」（前シテ浅井茉裕、後シテ伊藤裕貴）
狂言「昆布売」、
舞囃子「西王母」、「放下僧」、「賀茂」、「屋島」、「猩々」
連吟、小鼓連調、仕舞など
［入場無料］

## 名古屋能楽堂　開館十周年記念　市民能楽大会

［一日目］　十二月十四日（金）午前十一時始
名古屋能楽堂

仕舞　大江山　横井敬子　松風　兼松美穂　船弁慶キリ　橋進　朝日カルチャーセンター　泉教室　羽衣キリ　御厨博子　坂野晃
仕舞　高砂　壺泉　女郎花　不破麻祐子　鵜之段　杉浦まり　石川晴子　猩々　采女　乾昌博　大坪由紀子

主催　能楽協会名古屋支部
名古屋市文化振興事業団（名古屋能楽堂）
名古屋市

②面へつづく

（①面よりつづき）

みどり野会
連吟　羽衣　尾関登貴子　平野イツエ　白羽幸子　荒木美代子　高木敏江　秋山幸子　伊藤栄子　井上八重子

橋北公民館
連吟（喜多流）　鉢木　橋北公民館

松謡会
仕舞　嵐山　若山直代　松風　白鳥茂代　蝉丸道行　土屋まり子　高砂　菊本寿雄　班女舞アト　中島康子　笹之段　近藤文枝　清笹之段キリ　巻羽衣キリ　放下僧小歌　花筐狂　小川博三　深沢清子　寺尾道子　武山実枝子　木村照子　山田慰子

喜多流和楽会（代表　和谷　衡市）
仕舞　道明寺　山下政代　半蔀　酒徳信　草紙洗小町　松田幸孝　融　森健　須磨源氏　加藤千代子　松風　加藤春江　通小町　杉山一子

連吟　田村前　斉藤昌雄　浅井勉　二井英也　野々山純　長谷川多美也　福田勝　阿漕　越川貴行　丸田衛

翠謡会（代表　生駒　里翠）
仕舞　邯鄲　日野大順　笹之段　澤田美智子　地謡　山田昭元　生駒里翠　渡辺錠一　班女舞アト　木村秀子　道明寺　山田昭元　地謡　日野大順　生駒里翠　渡辺錠一

楽謡会
連吟　老松　犬飼百合子　上田千代　黒宮琴恵（共地）

素謡　遊行柳　林伸　都築鍵二　地謡　水田純子　梅村平義　加野昭二郎

葵会
独吟　頼政語ヨリ　伊藤昭映　松風キリ　森勝巳

素謡　葵上　若杉春江　松尾智子　犬飼百合子　太田和子　地謡　伊藤昭映　森勝巳　梅村高野　高野一成

輝謡会
連吟　船弁慶　長谷川麟太郎　吉川敏彦

名古屋和謡会
連吟　班女　名古屋和謡会

岐阜花謡会
連吟　鵜飼　岐阜花謡会

拍悠会
舞囃子　善知鳥カケリ入　伊藤健一郎　猪瀬孝　桑原寿子　富士道周明

高砂　一瀬義弘　地謡　岡田照正　飯野豊　斉藤長男　朝倉秀雄　猪瀬孝　朝倉秀雄　桑原寿子　浅井正幸　岡田照正　富士道周明　斉藤長男　飯野豊

（午後五時終了予定）

［入場無料］

## ［三日目］　十二月十五日（土）午前九時半始　名古屋能楽堂

犬山城敬道能楽会
連調　居囃子　花月（金剛流）　笛　宮下佳代子　小鼓　横江美貴子　大鼓　千田利枝子　景山利代子　地謡　梅田鶴子　田韶代　渡辺智世　戸梶知佳　板津英基　岩田貞子　長谷川洋子　橋本松代　加藤かおる　森川康代

扶桑金剛会
連吟　小袖曽我（金剛流）　シテ十郎　大井琢磨　ツレ五郎　大井瑞樹　ツレ母　毛利和子　板倉元子　森美智子　和田悦子　奥村知子　田村千恵美　永井明子　大石美登里　田近茂一　松田得滋　織田和行　宮下香代子

連調　居囃子　玄象（観世流）　笛　板津英基　小鼓　岩田貞子　太鼓　梅田喜久雄　寺田鶴子　地謡　石原守永雄　武馬正和　長瀬賢次郎　川嵜恵子　森美智子　和田美　奥村知子　田村千恵美　永井明子　宮下佳代子　横江美貴子　阿部正重　板倉照之　鈴木英郎

犬山市立犬山中学校
居囃子　竹生島（金剛流）　大島將太　箕浦尚也　林未紗　舟橋萌花　佐守里穂　水野幼葉　鈴木増田　世古由理　莉奈　宮嶋はづき　小川真大　渡部丈　大島卜シ　清水優　加古美帆　長田亜樹　本多亜美　鬼頭孝雄　河合正太　笹尾知可　渡邉周　岡崎宏　長藤美　鈴木麻里　渡邉紀子　高井奈舞　保乃香　大江多鶴子　日比野香苗　玉野はなえ　大江田鶴子　太田中子　黒田恵美子　新井弘子　日比野香苗　乙村　近藤多磨子　玉田はなえ　太田中子　黒田恵美子　新井弘子　織田順光　ワキ乙村正　シテ梅田圭子　犬山上木会　連吟　屋島　武馬守永雄　足立俊彦　長谷川雅彦　三輪庄司　伊藤辰祀　織田順幌　不破喜久夫　鈴木照之　内田一義　小島志よう　梅田いく子　市川恭子　内田玲子　近藤多磨子　伊東鶴子　日比野巽　鈴木照之順　武馬末男　乙村正光　織田順　日比野香苗　鈴木照之順　武馬末男　菊滋童

誠謡会
連吟　松虫　小島峯子　大野すみ子　青井宮子　稲波禮子　小島文子　大江多鶴子　日比野香苗　玉田はなえ　太田中子　黒田恵美子　新井弘子　通盛

## 名古屋能楽堂開館十周年記念　乱らんのう能

十二月二十四日（月・振休）　午前十時三十分開場　午前十一時開演　名古屋能楽堂

仕舞　鶴亀　深津和子　玉鬘　板倉峰尾　大江山　田口芳子　班女　横田多津子　天鼓　沢田房枝　巴之段　枕之段　敦盛　融　岩崎喜久子　鳥山迪永　椰野晴美　都築弘子

幸謡会（近藤幸江）
仕舞　嵐山　高取良昌　三輪　鈴木寿太郎　天鼓　吉房徳二　鞍馬天狗　近藤幸子　籏野　宮　道明寺　高砂　村井邦子　百瀬永三子　宇野順子　三浦美由紀

仕舞　桜川月　伊藤英毅　雲雀山　伊藤雪江　俊成忠度　加藤領一　葵上　新海彰子　平塚昭子　女郎花　嵐山　高野物狂　古本和枝　山下稔子　加藤誠子　柳谷多美子

喜多流長袖会（長田驍）
仕舞　雲雀山　森明美　二人静クセ　寺澤ふみ子　采女キリ　岩田時代　百萬笹之段　井筒キリ　佐迫裕子　横江美貴子

中日文化センター　梅田教室　長谷川雅彦　三輪庄司
連吟　頼政

幸友会（福井四郎兵衛）
連調　櫻川　幸友会

独調　鉢木　梅田邦久　伊藤秀子

金春流　名古屋秀麗会
仕舞　笠之段　武馬正和　蝉丸　山田信義　半蔀　永吉蓉子　地謡　前田鬼頭尚久登　松風　松本久子　本田光洋　加藤芳樹英昭

独調　竹生島　鬼頭瑠美子

仕舞　花月キリ　石尾雅美　杜若　林由華　遊行柳クセ　後藤美代子　地謡　前田鬼頭尚久登　本田光洋　小島芳樹　加藤英昭

「伝統文化子ども能楽教室」（指導　筧　鉱一）
囃子　連吟　はるがすみ　あづまあそび　はなさかば　ひとくちうたい

〈出演者〉
米田篤史　松浦拓海　三苫華子　飯塚比呂人　筧太朗　古川凌　山田明歩　伊藤真希子　六鹿渚由　柳菜津子　筧敬史　長田朔人　大沢綾子　筧明香里　石井崇之　花菜　山本款之　大木淳　畑中隆太郎　稲積和寿　佩大　松浦暖生　長田友恵　飯塚　筧明　西野　山本　大木　石井紀大　六鹿　大木　荻野　斗樹　長田　金田　飯塚　鵜飼理沙　奏世　中津川恒夫　関谷薫　比江島孝子　青山武雄　中村成利　竹内淳一　平野成夫

独調　天鼓　仲村成利　坂野晃

呉竹会（筧　鉱一）
囃子　大鼓　連調　船弁慶　坂田晃　亀山裕一　平松卓　高橋喜久子　小汐保　安藤文夫　近平剛　中里三紀子　松浦祥子　中村成利　竹内淳一　平野成夫

羽衣　春かすみ　足立知子　中島暉男

仕舞　国栖　七彩　宮崎千智　葛城クセ　伊藤利香　猪瀬孝　織田哲也　戸田登紀子　朝日知勇　杉浦敏二　西村節子

玉兎会（玉井博祐）
素謡　加茂　岩井やよ　藤田光子　相宮はつゑ

仕舞　高砂　湯浅景介　忠度　澤田美枝子　船・岩　半蔀クセ　清水達郎　桜井昌子

聚楽会（稲川壽一）
連吟　鳥追　子方　丹羽郁子　シテ　勝島登志子　ワキ　鈴木鉄子　黒田美智子　ワキヅレ　山口治子　逸見由利子　福谷芙美子　伊藤和子　榎並典子　桜井茂子

菱宝トヨタ自動車㈱謡曲部合同会
仕舞　杜若キリ　黒塚　経政クセ　三山　廣瀬安司　中西孝文　篠原博　石森智幸　稲川壽一　石森智幸　岡野威　稲川壽一　原英樹

連吟　女郎花　シテ　原杉野　ワキ　吉澤勝司　眞弓　濠彰　英樹茂　篠原博　岡野威　石森智幸　中西孝文　廣瀬安司

聚楽会（稲川壽一）
舞囃子　高砂　福谷芙美子　河村眞之介　柳原冨司忠　加藤洋輝　鹿取希世　玉井博祐　竹内澄子　伊藤和子

（午後六時終了予定）

［入場無料］

番組

能　鶴亀　鶴　高安勝久　亀　飯冨雅介　玄宗皇帝　河村總一郎　従臣　佐藤融　大臣　井上菊次郎　従臣　船戸昭弘　官人　福井四郎兵衛　大鼓　長田曉　小鼓　武田大志　太鼓　竹内澄子　笛　加藤洋輝　後見　松田高義　佐藤友彦　地謡　椙元正樹　大野誠　鬼頭義命　後藤嘉津幸　後藤孝一郎　覚鑑一

狂言　末広　果報者　梅田邦久　太郎冠者　梅田嘉宏　すっぱ　今沢美和

居囃子　田村　大鼓　長田郷　小鼓　伊藤雅子　小鼓　羽多野良子　小鼓　熊谷眞知子　小鼓　鈴村昌美　笛　後見清沢一政　衣斐愛

舞囃子　胡蝶　胡蝶　覚鑑一　大鼓　竹市幸司　小鼓　近藤幸江　太鼓　後藤嘉津幸　笛　野村小三郎

（③面へつづく）

# 戦後名古屋能楽史 ㊸

## 〔第十九章〕昭和四十年（一九六五）

竹尾　邦太郎

―承前―

六月五日、熱田神宮大祭奉納・大衆能。第一部、能「羽衣」河村鉦二・高安滋郎、狂言「鬼瓦」佐藤卯三郎、仕舞「弱法師」前田昌広、能「小鍛冶」片岡道子（前）大塚一二（後）・高安滋郎。第二部、能「花月」戸田秀雄・西村弘敬、狂言「舎弟」井上義次、能「船弁慶」佐藤太俊（前）殿島修二（後）・西村欽也。

六月六日、第四回調友会。「調友会は、囃子方の催会でございます。ベテランから若年の者まで、一生懸命稽古し、真面目に演奏致します。限られた時間に、種々の囃子を取合せてお聴き願えますように、番組が作ってございます。

まず今回初めての試みと致しまして、一声（イッセイ）と出端（デハ）を解説し、実演します。御観能、御研究の御参考になりますればと存じます」とあるように実に懇切叮嚀な催し。一声・出端の囃子については語り手に観世武雄、聞き手は内藤泰二、実技は筧三男・後藤孝一郎・河村総一郎・助川龍夫である。番組は舞囃子「竹生島」片岡道子、一管「羯鼓」金森準三、舞囃子「龍田」柴田初太郎、一調「女郎花」田鍋惣太郎・野口禄久（謡）、舞囃子「邯鄲」長田驍、狂言「朝比奈」佐藤友彦、一調「杜若」野崎太郎・南条秀雄（謡）、舞囃子「松風」野口禄久、能「融・思立之出・今合返・窕」観世武雄・高安滋郎、舞囃子四番は神舞・神楽・楽・イロエ掛中之舞と破之舞、能は早舞、と多彩な囃子の種々相が聴ける贅沢である。

六月九日、関西に在って戦中戦後の能楽界を支え、敗戦後の復興の気運にも乗って「夕鶴」や「智恵子抄」、「彦市ばなし」などの新作の能や狂言の演出に関わり、堂本正樹をして「武智氏は力と行動の人であり、若き能楽人はそれをこそ求めていたのである」（『古典劇との対決』昭和三四年能楽書林刊）と言わしめた武智鉄二の活躍は、能・狂言の世界にとどまらず広く邦楽全般、更には前衛劇にまで至り、就中、歌舞伎は武智歌舞伎を興す程の肩入れ、多分野に渉る華やかな活動を展開して遂には映画の世界にまで参入する。

第三プロを立ち上げると昭和三九年六月、谷崎潤一郎の原作より脚色・監督した「白日夢」（主演・路加奈子、石浜朗）を、同年八月には谷崎潤一郎著『過酸化マンガン水の夢』『柳湯の事件』より脚色・監督の「紅閨夢」（主演・茂山千之丞、川口秀子）を世に出すが、昭和四十年六月九日の此の日、自身の脚本で監督した「黒い雪」（主演・紅千登世、花ノ本寿）が封切られると問題化、一週間後にフィルムは警視庁に押収される。因に同年十二月廿五日、刑法一七五条・猥褻出版頒布罪に該当の廉で起訴されるが、二年後、無罪判決を受ける。

この一事が古典芸能には馴染みの薄い世間一般を騒がせることになるが、彼の真価はもっと広く大きなところに在ること、並の尺度では量りきれない器の大きさを知って貰いたい、の思い切である。閑話休題、戦中戦後に彼武智鉄二が断絃会を造って能楽界に果たした功績を、坂東三津五郎（簑助）を相手に語った対談集『芸十夜』（昭和四七年・駸々堂出版刊）に拠って改めて偲びたい。

三　ここで断絃会の成立ちを聞かせて下さい。

鉄　会自体は昭和十九年からやってたんですよ。

三　で、その前に一ぺん「断絃余論」を読んでごらんなさいって、僕がいったのね。

鉄　あれは昭和十六年、プランメーカーの会ですよ。日本の三味線芸術というものの真髄を、原武太夫の著書でわかった気がしたんです。それで原武太夫に非常に傾倒してた時ですから、それで断絃余論からとって、断絃会としたんですよ。（**筆者注**　原武太夫は江戸時代の音楽家。一六九六―一七七六或いは一七九二、没年未詳。もと幕府御留守番与力で、遊芸を好み、当時江戸に行われていた三味線音楽の全ての種目を習得、享保年間一七一六―一七三六　最高峰の三味線の名手として知られた。元文元年一七三六、三弦一挺のみ弟子の高木序遊に譲り、その他は一切焼却して、『断絃余論』を著して、その後は無声を楽しみ、三絃の演奏を断ち、狂歌などに余生を送った。『日本古典文学大辞典』より抄出）

三　その根本精神は？

鉄　きっかけは昭和十九年に劇場等閉鎖令というのが出たことで、これで日本の伝統芸術は亡びる。実演をやらなきゃ伝統芸術を保存するといっても空念仏に終るから、どんどんやる会をやろうということだったんです。

断絃会というのは、全部無料公開です。それは入場料をとる場合は警察の許可がいったんです。ところが無料の会は許可がいらないというんで、法律の網をくぐるために無料にしたんで、別段初めから無料でやることが目的じゃなかったんです。しかし結果的に無料でやったことが、精神的な運動の感じが出てよかったんです。

三　その時に吉田幸三郎さんに呼ばれたんですか？

鉄　吉田さんは断絃会をやる前――戦争が始まった時、「武智君、今度の戦争は勝っても負けても、このために日本の伝統芸術が悪くなることだけは間違いない。だからわれわれ微力でも、たった二人で力を合わせて、食べる物は食べないと死んじゃうから、これは食べましょう。住居に金はかからないし、だから着る物をつくるのをやめて、その金を全部伝統芸術を保護するために使いましょう」という提案を、吉田さんがされたんです。

ですから私は戦争中はもちろん、戦争がすんで武智歌舞伎が終るまで、一切洋服というものをつくらなかったんです。だから国民服をつくったこともないんです。

それがいよいよ劇場等閉鎖令で、伝統芸術が瀬戸際にきたということで、断絃会をやりたいと吉田さんに相談したら、「結構です、おやりなさい。私もできるだけ影ながら応援しましょう」といわれたんです。「しかし武智さん、それをやるということは、武智さんが古典芸術家のパトロンになって、いい気持になるということならおやめなさい。われわれの仕事は芸術に奉仕するんで、芸術に奉仕するということは、芸術家に奉仕することを通して、芸術に奉仕するんだから、みなさんがこの戦争下の悪い条件の中で、気持よく芸がやれるような場にしなければいけません。それだけの心がけでやりなさい」ということを吉田さんからいわれました。

それでともかくそういう精神でやろうということでね。――だからいろんなことがありましたよ。たとえば「道成寺」を舞うのに、玉子を一日に十二個ずつ一週間たべて、牛肉百匁ずつ三日間たべないと道成寺というものはやれないという注文が出るわけですよ。で、とにかくそれだけのものを集めるの。（笑）

三　そんなの自分一人で食ったんじゃないでしょう。一人でそんなにたべられるもんじゃないよ、家中で食ったんでしょ。（笑）

鉄　だけどそれだけたべないとやれないといってましたよ。（笑）そういう物質的条件を、こっちが満たせられる限りのことは、やろうという精神でやりましたよ。だから会をやるといっても食料の準備をするようなものでしたね、あの頃は。だってふだん大豆とか、海草ぐらいしかたべてないわけでしょう。だからまず食い物の準備ですよ。

またたとえば、華雪さんが「姨捨」をやるという時、――華雪さんが「姨捨」をおやりになりたいということは、一生に一度あるか二度あるかわからない。今のはやりの言葉でいえば一期一会のことでしょう。そういうことだから華雪さんがおやりになれるように、万全の仕度をしなさいという吉田さんの言い付けがあって、その度に一生懸命やるんですが、宿も食料もない時ですからね。それで宿屋をみつけて食事を用意するだけで精いっぱいでしたよ。

三　汽車の切符買うだけでも大変でしたね。

鉄　これは親父が軍需工場をやってましたから、そのほうからなんとか……。それにしても片山（博通）さんの働きは大変なものでしたね。片山さんは人事課長をやってて、その職責を全うしながら、こっちもやってくれたんですからね。

三　断絃会の第一回は？

鉄　断絃会の第一回は、光太郎さん（金春流七八世宗家、後に八条、一八八六―一九六二）の「隅田川」で、地謡をうたう人がいないんで金太郎さん（後に弓川、一八八九―一九五七）を呼んだわけですが、金太郎さんは芭蕉の一調でした。

三　断絃会としては、義太夫はやりましたか？

鉄　やりました。二度か三度やってます。それから歌舞伎もやろうというんで、ともかく戦時下にふさわしくない歌舞伎にしようということで、河内屋をつかまえて「乳貰い」をやることにしたんです。その頃「乳貰い」なんて上演禁止なんですが、それをやろうといってね。でも劇場は使えないわけですから、北の演舞場を使うことにしたんですが、火事で焼けちゃってダメになって、とうとう歌舞伎はやれなかったんです。河内屋は、河原で気絶した女の裾をまくってみる昔の型をやるんだといって、衣裳も全部用意して、ずいぶん張り切ってたんですが。

三　あの戦争の空襲のさ中で、なんにもできない時に、そういう芝居でもやろうという執念は恐ろしいものですね。（笑）

鉄　そのうち月一回の断絃会では物足りなくなって、俺にもやらせろ、俺もやりたいということで、光太郎さんと道雄さん（弓川の従弟、一八九七―一九八三）との会が一つできて、片山さんの発表会が出来て、能だけでも月に三つやってましたからね。それからあとは松本謙三（脇方宝生流・宝生新の高弟、一八九九―一九八〇）が元気な頃でしたから、ワキの重いものを片っぱしからやろうというんで「張良」とか「谷行」とか……。

三　見られないものばかりやりましたね。戦争中上演禁止だった「大原御幸」をやったんでしょう。（括弧内　筆者）

――以下次号――

## ◆盛夏から秋の舞台◆

### 「名古屋観世会定式能」「第八回伝統芸能上演会（納会）」と「第三回名古屋青雲会」「名古屋能楽堂開館十周年記念・和泉流狂言づくし」「第廿三回衣斐正宜後援会能」及び「名古屋能楽堂定例公演・初秋能第一部」

竹尾邦太郎

名古屋観世会「田村」古橋正邦

「田村・替装束」シテ正邦、小書で前は喝食姿。清水寺・地主の桜の景趣を愛でる一種自己陶酔の心を謡う一セイから上歌までを省き直ぐ旅僧ワキ雅介との問答に。ために、ワキの問いに答える語気にはその気持ちが反映、力が入る。〽春宵一刻、のシテ・ワキ連吟から〽今この時かや、とシテの誘いに互いに歩み寄るところ、ワキはシテの気合に牽かれるかである。

後は文字通り小書の替装束、面は大天神・黒頭・唐冠・剣を背負う姿は自ずから偉丈夫のシテに具わる威風。クセは鈴鹿山の鬼神退治に赴く近江路の道行、〽勢多の長橋、と指廻、〽踏み鳴らし、と強々と踏む三ツ拍子、猛き心は〽あらかねの土も木も我が大君の、と踏む七ツ拍子、勇気凛々己を鼓

（④面へつづく）

名古屋観世会㊤「蟹山伏」
左より・井上菊次郎、今枝郁雄、井上靖浩
㊦「百萬・法楽之舞」左より・河村万葉、武田邦弘　（杉浦賢次氏撮影）

（②面「乱能」番組つづき）

能　**海士**
藤原房前　後藤孝一郎
前・海女　河村眞之介
後・龍女　柳原冨司忠
従者　松田　高義
従者　久田　勘鷗
従者　鹿島　俊裕
浦人　鬼頭　尚久
後見　大野　誠　井上菊次郎
地謡　加藤　洋輝　橋本　椙元
大鼓　武田　大志
小鼓　清沢　一政
太鼓　前野　郁子
笛　衣斐　愛　高安　勝久　福井四郎兵衛　河村総一郎

舞囃子　**鞍馬天狗**
天狗　佐藤　友彦
大鼓　今枝　郁雄
小鼓　久田三津子
太鼓　長田　驍
笛　井上　靖浩

狂言　**梟山伏**
山伏　稲川　壽一
何某　竹内　澄子
病人　黒田　博
後見　祖父江修一

一調　**笠之段**
謡　福井四郎兵衛
小鼓　泉　嘉夫

狂言　**附子**
太郎冠者　加賀　敏彦
次郎冠者　松山　幸親
主人　長田　驍
後見　三村　徑布

半能　**石橋**
赤獅子　大野　誠
赤獅子　加藤　洋輝
赤獅子　野村小三郎
白獅子　後藤嘉津幸
寂昭法師　井上　靖浩
後見　大野　弘之　後藤孝一郎
地謡　松田　高義　河村眞之介　飯冨　雅介　鬼頭　義命　河村總一郎　柳原冨司忠
大鼓　祖父江修一
小鼓　久田　勘鷗
太鼓　梅田　邦久
笛　長田　驍

（終了予定午後四時三十分頃）

［入場料］（全自由席）一般三五〇〇円、学生二〇〇〇円（当日券は各五〇〇円増）
［取扱い］出演能楽師、名古屋能楽堂、ナディアパーク八階プレイガイド☎052（265）2015
［主　催］㈳能楽協会名古屋支部（梅田方）☎052（841）4632
㈶名古屋市文化振興事業団（名古屋能楽堂）☎052（231）0088／名古屋市

（③面よりつづき）

舞する勢いの足拍子の豪快。〽山河を動かす鬼神の声、と頭取り（写真）、きっぱりと面を使うところの緊迫感がよかった。キリは〽光を放って、と四ツ拍子、〽一度放せば、と床几を立ち千手観音の奇瑞の有様きび〳〵と極め、〽有難し〳〵や、と下居、両手をつき礼拝をした。（1時間26分）

**「蟹山伏」** 山中、異形の者に出遇って気味悪がる山伏シテ菊次郎、自身は恐いので強力アド靖浩に正体を確かめに遣れば、蟹ノ精（郁雄）と判って俄然強がる強力だが鋏で耳をはさまれ、悲鳴を上げる。さればと行法の偉力を説き出す山伏に「その様に口ばかり言はずとも早う祈って下され」と強力、挙句は山伏もはさまれてしまう（写真）。遁走する蟹ノ精に「誰ぞ捕らえてくれい」と山伏、「御無用になされませ」と強力、お伽噺の面白さ。（16分）

**「百万・法楽之舞」** 生き別れた吾子（子方・河村万葉）を求め大念仏会で賑わう嵯峨清涼時の人込みの中、再会を果す狂女百万シテ邦弘。

〽我が子の行方祈るなり、の後、イロエに替え小書で法楽之舞。正中、弊付笹を笏の様に持ち拝から左右に祓うと再び笏の様に持って立ち、舞い出す。舞は人目を惹く当時の大道芸、舞グセになると橋懸を使い、清涼時へ至る道行に重ねる己れの心情は摩耶夫人と釈迦の間に及び、〽子を怨み身を嘲ち、と振り立てる笹を抱き締めるのも狂おしく、〽百万が舞を見給へ、は群衆に訴えるか。〽あら我が子恋しや、のシヲリから立廻に一ノ松へ、〽これ程多き人の中に、と面使ヒ、〽あら我が子恋しや、と再度のシヲリも切ない。舞台へ戻っては〽逢はせて賜び給へ、と下居合掌の姿に、〽傷はしや、と同情する上京辺ノ者ワキ勝久、子との再会がもっと早ければ恥を〽曝さじものを、と烏帽子を脱ぐシテ。〽とは思へども、と懐中の扇を取って招キ扇に子に寄る（写真）と一呼吸あってキリ。〽よく〳〵物を案ずるに、の返シ句に子を坐らせ、子は合掌、シテも子の左斜後ろに下居。〽母諸共に、で子を立たせシテも後に続き幕へ、トメは一ノ松。珍しい型もあって面白かった。（1時間15分・7月15日・名古屋観世会）

第8回伝統芸能上演会
「羽衣」長田驍（杉浦賢次氏撮影）

**「痺り」** 用を言いつければ痺りが切れて行かれぬ、と太郎冠者・融の横着。主・友彦が伯父御の供応に与り汝共にとのこと、と鎌を掛ければ、ぬけ〳〵と痺りは治ったと太郎冠者、いわゆる初心者用の、子供向き狂言を演ずるには余程老獪な味が出せる枯れた太郎冠者でないと少々厭味。（10分）

**「羽衣・霞留」** ワキ雅介、名宣ると辺りの春景には構わず松の衣に気付き持ち帰るところ、シテ驍（小面・天冠ニ白蓮・襟白赤）が幕内から咎めて呼掛、返せ返せぬの問答のうち一ノ松に。掛合で返さないワキの意志を知り、〽力及ばず、とシテはなす術も無く、ワキはワキで仕方無いと強気、〽詮方も、とシテとワキの同吟に彼我の心情。〽雁がねの帰り行く、と舞台へ入るシテの、春風までも懐かしいとシヲル愁嘆に感じ入るワキ、問答抜きで素直に衣を返すのが珍しい。物着は後見座、紫長絹を着け暫し物着アシラヒから直ぐに〽春霞、と舞グセ。クセ切に合掌、〽南無帰命月天子本地大勢至となって序之舞は三段で破之舞の位に、舞上げ直ぐ〽東遊の、になる。〽三五夜中の、と松に寄り月之扇、〽七宝充満、と招いて出ると、〽国土にこれを、と扇を左手に替え平らに前へ出して宝を施す心。〽さる程に、と両袖返シその侭地のうちに橋懸へ。二ノ松で〽浦風に、で袖を戻し、〽浮島が雲の、と左袖を返シ下を眺め徐々に舞上って往く心は更に小廻りしつつ三鼓の流シで三ノ松、〽天つ御空の、と左袖を被クといつまでも地上を俯瞰する心に後ろ向きのまま（写真）幕入、〽霞に紛れて、の後を謡わず囃子だけが残り、ワキが常座で扇を高々と上げて見送るのが如何にも名残惜し気なトメ。シテとワキ、心の通い合う沁々とした味わいだった。（42分・7月28日・第8回伝統芸能上演会納会）

能楽堂10周年記念・狂言づくし
「鍋八撥」野村萬斎

**「胡蝶」** 春に先駆け咲く梅には縁無き胡蝶、法華経の功徳で縁が叶い喜びの舞を舞う。シテ飛能、前は里女、面小面・襟白赤・卍繋地紋金地摺箔着付・紅白段菊牡丹文唐織。吉野から上洛（道行は省く）の僧ワキ雅介が古びた宮で梅花を眺めるところへ呼掛で現われ、問答のうちに一ノ松、舞台へ入ってワキに素姓問われ、人間ではなく胡蝶ノ精と明かしつつ正中に下居、〽梅花に縁無きこの身、を嘆くシヲリから、姿を変えお僧と言葉を交わすのも、法華経の力で極楽往生をと〽頼むなり、とワキにアシラフところ、願いの切実。

クセは上ゲ端あと、〽疎く見るらんと詠め来し、と居立って立つと、〽月も射し入る、で目付柱へ見、〽宿らせ給へわが姿、とワキへ袖アシラヒとして〽夕べの空に、と右へ廻り消えて行くところ、送り笛（学）と相俟ち中々。

後は胡蝶ノ精、面・襟・着付、同断・胡蝶ノ天冠・緋大口・枝垂桜文紫長絹。佛果を得て梅花に戯れる望みが叶ったと舞う中之舞、扇を内へ取り梅立木の左後ろで四ツ拍子踏み、扇ハネて右手に替え袖返スところなど、如何にも梅花に戯れる趣。舞上げ、更に回雪の舞いの袖、〽返す〳〵も面白や、と六ツ拍子踏み破之舞からキリへ、〽翅うち交はして、と扇カザシ小廻りに常座へ、トメ拍子踏むまで確り舞ったが、全体は未だ生硬な印象は腰にやや安定感を欠くところ、更なる精進を望みたい。清新な若さ、元気は十分に発揮された。当地宝生流の発展に多大の貢献があった祖父泰二の、泉下で喜ぶ姿が目に浮ぶ。（1時間9分・8月10日・第3回名古屋青雲会）

狂言づくし㊤「寝音曲」左より・野村小三郎、松田高義
㊦「首引」左より・井上靖浩、佐藤融、中央・佐藤友彦ほか
（杉浦賢次氏撮影）

**「鍋八撥」** 新しい市を仕切る目代・幸雄、羯鼓売アド博治と早鍋売シテ萬斎が一番乗りの特典を賭けての先着争いを裁くのに、双方の言い分を聞くが判別つけられず、勝負を命じる。当世のバトン・トワラー宜敷く棒を振るアド、シテも負けじと危なっかしく鍋を振り、次いでアドはお手の物の羯鼓を舞へば、シテも腹に鍋を括り付けて怖々舞う。更に相舞のうちにアドが水車の大回転で幕へ消えると、シテはその大技に驚きつつも腰を落とすと、強靱な腰に物を言わせコサック・ダンスに似るきり〳〵した急旋回を見せ、最後は力尽きて腹這いになる。割れた破片を拾い上げ「数が多うなって目出度い」と泣き笑いのトメ（写真）。技を誇示する、媚びのあるきらい無きにしも非ずだが、初めて見る珍しい水車だった。（42分）

**「寝音曲」** 主アド高義に偶々謡を聞かれた太郎冠者シテ小三郎、改めて謡を催促されるが、御酒を頂き、子持ちの膝で、と条件は付けても固辞することは無く、割にあっさりと引受ける印象。酒三杯を勧めてから膳を下げるのを一献という、と『広辞苑』にあるが、三杯目に大きな舌鼓を一ツ打つと、小舞謡「小原木」全曲を謡えば、「先づ起きて居て謡へ」「立って謡うてみよ」と次々注文をつけるアドに、その都度シテは苦しげに声を嗄らす横着（写真）。夙にそれと察して更に膝枕を貸して謡わせるアドに、漸く酔いの効いてきたシテは、〽面白の花の都や、と「放下僧」の一くさりを気持ちよく謡い出す。アドに頭を上げ下げされるうちに態様を取り違え、頭を上げた時に名調子、両者の駆引きの機微、旨かった。（21分）

**「首引」** 出遇ったのが天下無双の鎮西八郎為朝アド靖浩とは露知らず、姫鬼（融）に食い初めをさせようとする親鬼シテ友彦。黙って食われる訳にはゆかないと、様々な勝負を仕掛けさせるアドに、悉く負かされる姫鬼がシテに訴えるところなど、男親の愛娘に対する愛情・甘さが如実。一方、姫鬼が見せるアドへの仄かな羞恥も亦初々しく微笑ましい。とどの詰まりは首引（写真）。縄を外されて将棋倒しになった一同を後にするアドへ、「取って喰まう」と追うシテ、ぴょん〳〵飛び跳ねてシテに続く姫鬼には、遊んで貰って面白かったのアドへの思いも。アンサンブルも上々の大勢物。（27分・8月18日・名古屋能楽堂10周年記念狂言づくし）

名古屋能楽堂定例公演
㊤「頼政」長田驍
㊦「千切木」左より・井上靖浩、佐藤融
（杉浦賢次氏撮影）

**「花筐」** 書置きと花籠を残し、帝位に就くため急遽越前味真野を発った皇子（子方・侑）の跡を慕い、侍女（ツレ愛）に花籠を持たせ上京する寵姫照日ノ前（シテ正宜）、紅葉狩に行幸の帝に遭遇し、立ちはだかるツレが官人（ワキ雅介）に花籠（筐）を打ち落とされたと知り、「あら忌はしの事や候」と嘆くシテ。掛合にツレと交互に縷々花籠の勿体なさを述べるところ、気合が入り〽我よりもなほ物狂よ、と非難する抗議の口吻が利く。クルヒは〽水の月を望む、とスミで扇を翳して下を眺め、左へきりりと廻るところ、帝に近寄れぬ心は、手の届かぬもどかしさを見せ、〽叫び伏して泣き居たり、と退って安座には口惜しさが見えた。クセは、己れの想いを重ねるかの漢王と李夫人の反魂香の故事、〽夜更け人静まり、とつつつとスミへ出て面使フところ、朧な人影を認め逸る思いがよく出る。ワキから宣旨を伝えられて恐懼、花籠を差し出すシテ、〽余りの事に、と胸塞がる気持ち、〽げに有難や、と改めて召し使われる喜び、籠が形見と名付けられた理由をワキとの掛合で述べるところ、全てツレとの連吟だったが、本来シテの役謡をわざ〳〵声域の異なる男女の連吟にしたのは解せない。折角、持前の堅実な舞ぶりで来たのに、大袈裟に言えば九仞の功を一簣に欠くことになった。親子孫三代の共演の目出度さ、喜びがさせたのかも知れないが、舞台に私情は無用であろう。（1時間16分・8月26日・第23回衣斐正宜後援会能）

**「頼政」** シテ驍。前は旅僧ワキ元を平等院の庭に案内して問答に扇ノ芸のことを語るところ、〽痛はしや、とワキは感慨深げに下を眺め、〽行人征馬、と下居して合掌するのを、シテはその様子をじっと見ている処、印象的。後は床几の型の技の切れの見事、キリに〽跡弔ひ給へ、と片膝立ててワキへ左手指シ、右へ廻り合膝返シに扇を後ろ向き肩越しに投げ捨てたところも鮮やかだった。（1時間19分）

**「千切木」** 習わしや仕来りに詳しいが故に、何かにつけ口を挿みたがり、嫌われ仲間外れにされる太郎シテ融、口角泡を飛ばさんばかりに連歌の講中を貶すやんちゃ振りが板につく。相手にされずに踏ん付けられて放り出されゝば、急を知って駆けつける妻アド靖浩、夫唱婦随も好い気なもんで内には妻に弱味は見せたくない太郎、外には虚勢とも言えない遠吠え、体裁屋もいいとこ、当世の夫婦にも在りそうなサンプル。（33分）

**「紅葉狩・鬼揃」** シテ一政、前は襟白二・浅黄地金鱗箔着付・薄紫色大口・唐織壷折、面は近江女の妖艶、維茂（ワキ勝久）ならずとも悩殺されかねない。侍女ツレ五人も面連面・襟赤・白地鱗箔着付・緋大口・唐織壷折の同装。上臈の紅葉狩の酒宴とみて馬を下りたワキに、〽立ち寄りて、と床几を立つシテ、ワキに近寄り誘惑にかかるところ、〽袂に縋り、と右手を肩に、左手袂に触れるのが如何にも艶めき官能的。クセに〽よしや思へばこれとても、とツレ二人、謡いつゝ、舞って〽気色かな、で舞上げると代って地前のツレ二人が〽葛城の、と舞い継ぎ中之舞へ。床几でツレの舞を見ていたシテは、扇を開き立つと初段から後を独りで舞い、酔魔に襲われたワキを窺い、近寄って為て遣ったりの心で舞う急之舞に、鮮やか。後は黒頭、着付を赤地金鱗箔に替え半切の裳着胴姿、キリのワキとの組討ちのところ、ワキに前捌きの旨さがあった。（1時間19分・9月2日・名古屋能楽堂定例公演　初秋能の第1部）

## 愛面会 仮面展

12月11日～16日
市民ギャラリー栄

愛面会（宇野真夏夫会長）は、第32回愛面会「仮面展」を12月11日㈫～16日㈰まで名古屋市民ギャラリー栄展示室（中区役所・朝日生命共同ビル）で開催する。展示は能面・狂言面など新作50余点。

# 能楽の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
FAX（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

## 井上菊次郎師舞台生活60年記念公演
## 第47回 狂言 鳳の会
### 1月6日 名古屋能楽堂

狂言「鳳の会」は、林和利（名古屋女子大学教授）・和泉流狂言師井上菊次郎・佐藤友彦の3氏を同人として、平成4年に結成され、名古屋の狂言の活性化に大きな役割をになって活動しているが、新春1月6日（日）名古屋能楽堂での第47回公演は、井上菊次郎師の舞台生活60年を記念して、「庵梅」（いおりのうめ）を井上菊次郎師がつとめ、新春恒例の初笑い狂言を飾る。

番組は「鬼瓦」「節分」素囃子「青柳の舞」。「庵梅」は「枕物狂」「比丘貞」とともに、特に重く扱われる狂言〈三老曲〉の一つで、早春にふさわしい、風雅で華麗な世界が広がる。明治初年以降、名古屋において山脇派（狂言共同社）では未上演の曲である。（番組②面）

なお井上菊次郎師は、平成18年度名古屋市芸術特賞を受賞している。

公演が終わってから会場で、好評を博している「演者と語ろう〝Q&A〟」が企画され、井上松次郎、佐藤友彦師を囲み歓談、観客の狂言に関する疑問、質問に答える。

公演は午後1時30分開演、入場料A席5000円、B席3500円、学生2000円。後援・名古屋市文化振興事業団、愛知芸術文化協会、中日新聞社。

## 観世寿夫記念法政大学能楽賞
## 香川靖嗣氏　塩津哲生氏　大谷節子氏　受賞

法政大学（平林千牧総長）は、一九七九年（昭和五十四年）に「観世寿夫記念法政大学能楽賞」を設定し、すでに二十八回の贈呈を重ねているが、本年も各方面の識者の推薦による候補者について、選考委員（武田洋・法政大学常務理事、野村萬、みなもとごろう、松本雍、表章、西野春雄、山中玲子）が慎重に審議した結果、第二十九回の受賞者として、喜多流シテ方・香川靖嗣氏、同・塩津哲生氏、神戸女子大学文学部教授・大谷節子氏を決定した。なお催花賞は今年度は該当者なしと発表された。

三氏の受賞理由は次のとおり。

【受賞者】香川　靖嗣　氏

【贈呈理由】故喜多実より受け継いだ正確な技術と堅実さを持ち味とする氏の能は、近年さらに安定度と深みを増し、特に本年の〈卒都婆小町〉では充実した舞台成果を示して観る者に深い感銘を与えた。地頭として数多くの能を支えている実力も高く評価される。

【受賞者】塩津　哲生　氏

【贈呈理由】喜多流の芸統を堅持する氏は、深い作品理解と精緻な構想、重厚な演技力により、常に意欲的で達成度の高い舞台を作り上げている。昨年の〈石橋　三ツ臺〉、本年の〈実朝〉、〈落葉〉復曲、〈邯鄲　傘之出・置鼓〉等、どれも見事な舞台成果であった。

（②面へつづく）

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

（能・狂言演能関係）
（TEL 052－231－0088）

〔平成20年1月〕
24日（月・祝）　名古屋能楽堂開館10周年記念　乱能　（有料）

〔平成20年1月〕
3日㈭　名古屋能楽堂定例公演　〈正月特別公演〉　（番組①面）（有料）
5日㈯　第52回学生能・狂言の会　（無料）
6日㈰　第47回狂言「鳳の会」　（番組①面）（有料）　井上菊次郎舞台生活60年記念公演
14日（月・祝）　名古屋清韻会　（番組①面）（無料）
19日㈯　第10回万作を観る会　（番組②面）（有料）
27日㈰　名古屋宝生会定式能　（番組②面）（有料）

### NHK放送予定（平成19年12月～平成20年1月）

◆NHK－FMラジオ能楽鑑賞（毎週日曜日7時15分～8時）
12月23日　素謡「砧」（観世流）　野村四郎ほか
12月30日　狂言「箕被」ほか（大蔵流）　大蔵吉次郎ほか
1月6日　素謡「羽衣」（観世流）　観世清和ほか
1月13日　素謡「巴」（宝生流）　中村孝太郎ほか
1月20日　素謡「野守」（観世流）　杉浦元三郎ほか
1月27日　素謡「邯鄲」（再）（宝生流）　富山孝道ほか

### ◆ NHKテレビ放送

TV新春能狂言
◉1月1日（教育テレビ7：00～8：00）
翁　古態～観世流・宝生流～　観世銕之丞・田崎隆三・山本東次郎ほか
◉1月2日（教育テレビ7：00～8：00）
狂言「蝸牛」～大蔵流～　茂山千之丞ほか
狂言「花折」～和泉流～　野村万作ほか
◉1月3日（教育テレビ7：00～8：00）
能「泰山府君」～金剛流～　金剛永謹　福王茂十郎
◉1月26日（教育テレビ15：00～17：00）
能「芭蕉・蕉鹿之語」金春流

### ◆ NHKFM新春謡曲狂言

◉1月1日（FM　11：00～11：50）
素謡「高砂」～金春流　金春安明ほか
◉1月2日（FM　11：00～11：50）
狂言「清水」～和泉流～　野村　萬ほか
狂言「宝の槌」～大蔵流～　善竹十郎ほか
◉1月3日（FM　11：00～11：50）
番囃子「東北」～観世流～　片山九郎右衛門　片山清司、梅田邦久、橘　保向、味方　玄

## 名古屋能楽堂演能案内

### 名古屋能楽堂定例公演
～尾張の殿様が観た能　十代・徳川斉朝～
平成二十年一月三日（木）午後二時始
名古屋能楽堂

（観世流）能　翁　面箱　野口　隆行
片山慶次郎　三番叟　野村小三郎
千歳　武田　大志

（観世流）能　高砂　梅田　嘉宏
武田　邦弘
高安　勝久　杉江　元
相元　正樹
間　井上　靖浩
後見　八神　孝充　河村眞之介
泉　嘉夫　後藤嘉津幸
柳原冨司忠　加藤　洋輝
船戸　昭弘　竹市　学
地謡　本田　勲
須部　甫　清沢　一政
松山　幸親　久田　勘鶴
高橋　暸一　梅田　邦久
祖父江修一
狂言後見　藤波　徹
松田　高義

狂言　末広　野村小三郎　奥津健太朗
松田　高義
（午後五時十五分頃終了予定）

主催　名古屋市文化振興事業団（名古屋能楽堂）
能楽協会名古屋支部

入場料＝前売一般　四五〇〇円（当日五〇〇〇円）
学生前売　二〇〇〇円（当日二五〇〇円）
取り扱い所＝名古屋能楽堂（052・231・0088）
チケットぴあ　0570・02・9999
市内プレイガイド、ナディアパーク8階PG（052・265・2015）

### 第52回 学生能・狂言の会
一月五日（土）午前十一時始
名古屋能楽堂

能　橋弁慶
舞囃子　玉葛、草子洗小町ほか

主催　名古屋学生能楽連盟
電話090・7957・2160

〔無料〕

## 井上菊次郎舞台生活60周年記念公演
## 第47回 狂言 鳳の会
平成二十年一月六日（日）
午後一時三十分開演
名古屋能楽堂

解説　名古屋女子大学教授　林　和利

狂言　鬼瓦　大名　大野　弘之　太郎冠者　佐藤　融　後見　今枝　郁雄

狂言　節分　鬼　佐藤　友彦　女　井上　靖浩　笛　大野　誠　小鼓　福井四郎兵衛　大鼓　河村総一郎　後見　鷺見　政行

素囃子　青柳の舞　笛　大野　誠　小鼓　福井四郎兵衛　大鼓　河村総一郎　太鼓　加藤　洋輝

狂言　庵梅　老尼　井上菊次郎　住吉在所の女　井上　靖浩　〃　佐藤　融　〃　今枝　靖雄　〃　鹿島　俊裕　笛　大野　誠　小鼓　福井四郎兵衛　大鼓　河村総一郎　太鼓　加藤　洋輝　地謡　野村小三郎　松田　高義　野口　隆行　奥津健太郎

主催　鳳の会
後援　名古屋市文化振興事業団　愛知芸術文化協会　中日新聞社

入場料（全席指定）
A席五〇〇〇円、B席三五〇〇円　学生二〇〇〇円
取扱い＝チケットぴあ　TEL052・320・9999（Pコード　380・274）
名古屋能楽堂　052・231・0088
名古屋文化振興事業団PG　052・265・2015

### 名古屋清韻会
平成二十年一月十四日（祝）午前九時三十分始
名古屋能楽堂

素謡　蝉丸　木下　芙蓉　浅井　庸子　佐藤加代子　地謡　伊藤　朋子　冨田　郁子　岩田　正子　久保田和代　田中　文子　山口たき子　古井　佐手　筑瀬　伊藤るり子　和子　野村　和子

藤戸　中原　基夫　佐藤　尚雄　林本　政夫

（②面へつづく）

（①面よりつづき）

## 法政大学能楽賞受賞者の略歴

［受賞者］

### 大谷　節子 氏

［贈呈理由］氏の近著『世阿弥の中世』に収められた作品研究は、古代から中世に至る膨大な資料を広い視野で見渡し、そこに蓄積された知の集積を世阿弥が個々の作品に取り込んでいく様を的確に読み取りつつ、独自の鋭い感性で作品の魅力を描き出した、見事な業績である。

### 香川（かがわ）　靖嗣（せいじ） 氏

喜多流シテ方。日本能楽会会員（1986年認定）。1944（昭和19）年7月10日、旧満州に生まれる。祖父順吾に謡のてほどきを受け、

初舞台は51年〈隅田川〉の子方。山口県岩国小学校卒業後、能役者を志し、1957年3月に上京、十五世喜多実に入門。戦後の住み込み内弟子第一号となる。61年に〈猩々乱〉、66年に〈石橋・連獅子〉（ツレ）、69年に〈翁〉、70年に〈道成寺〉を披く。71年独立。〈隅田川・綾鼓・望月・安宅・景清・正尊〉等を披演。93年には復曲能〈雪鬼〉を初演。85年度芸術選奨文部大臣新人賞、87年度大阪文化祭賞を受賞。

流儀の定期能はもちろん、同期の友枝昭世・内田安信・塩津哲生と結成した「果水会」および、塩津哲生との「二人の会」を中心に活動。07年には〈卒都婆小町〉を披き、「香川靖嗣の會」を立ち上げるなど、充実した舞台成果を挙げると同時に、地頭としても諸役の信頼を得、活躍している。

オランダ・ベルギー・北米・ドイツ・香港・ベトナム・シンガポール等の海外公演に参加。能楽協会常務理事。十四世六平太記念財団理事。

### 塩津（しおつ）　哲生（あきお） 氏

喜多流シテ方。日本能楽会会員（1986年認定）。1945（昭和20）年1月22日、喜多流シテ方塩津清人の長男として熊本に生まれる。初舞台は50年〈桜川〉の子方。57年〈経政〉で初シテ。59年8月に上京し十五世喜多実に入門、内弟子修行を始める。65年に〈猩々乱〉、70年に〈翁〉、71年に〈道成寺〉を披き、この年に独立。翌年には〈石橋・連獅子〉（ツレ）を披く。流儀の定期能のほか、同期の友枝昭世・内田安信・香川靖嗣と結成した「果水会」や香川靖嗣との「二人の会」を中心に活躍。ドイツ・フランス・ノルウェー・米国等、海外での公演も多い。

03年には「塩津哲生の會・正和能（しょうかのう）」を立ち上げ、意欲的な舞台活動を続けている。06年の〈石橋・三つ臺〉、07年の〈落葉〉復曲等、大曲・稀曲の上演に積極的に取り組む一方で、若手後継者の稽古を一手に引き受け、喜多流の正統を伝えるべく、指導にも力を注いでいる。

90年より国立能楽堂養成課シテ方主任講師。07年度芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。十四世六平太記念財団理事。後継者は長男の圭介氏。

### 大谷（おおたに）　節子（せつこ） 氏

神戸女子大学文学部教授。1960年生まれ。82年京都大学文学部卒業、大阪市立大学大学院博士前期課程を経て、88年京都大学文学研究科博士後期課程研究指導認定退学。03年京都大学より博士（文学）の学位を取得。92年、神戸山手女子短期大学専任講師。95年、神戸女子大学文学部助教授。05年より現職。専門は中世国文学。受賞理由となった著書『世阿弥の中世』（岩波書店、07年）の他、主な論文に「「張良一巻書伝授譚」考―謡曲『鞍馬天狗』の背景―」（『室町藝文論攷』91年）、「合身する人丸―和歌秘説と王権―」（『王権と神祇』02年）等があり、浩瀚な文献資料に基づき、中世から近代に至る文学史、及び文化史との関わりにおいて、能を論じる。京観世五軒家の謡教授活動の解明をめざす能楽史研究も進めており、近年は能・狂言面の発生と定型の確定、派生の問題をテーマに国内外の能・狂言面調査を継続的に行っている。〈苅萱〉〈タダツノサエモン〉〈鵜羽〉〈敷地物狂〉〈長柄の橋〉等、大槻能楽堂主催の復曲活動にも参画。

## 平成20年度 名古屋宝生会定式能 公演

平成20年度（第52期）の名古屋宝生会定式能予定番組は次のとおり。3月16日には、先代宗家追善能が上演される。

（第1回一月二十七日（日）上演番組は②面掲載）開演は全て午後1時。

◇第一回　一月二十七日（日）
―番組は本紙②面に掲載―

◇第二回　三月十六日（日）
先代宗家追善能
一部指定席（正会員限定）
能　清経　ツレ　内藤　飛能　宝生　和英
能　半蔀　立花　倉本　雅
能　海人　懐中之舞　子方　坂口　侑　衣斐　正宜
他、狂言・仕舞

◇第三回　六月十五日（日）
能　梅枝　竹内　澄子
仕舞　笹ノ段　玉井　博祐
巻絹　キリ　和久荘太郎
頼政　倉本　雅
能　紘上　クツロギ　龍神　辰巳　和磨　姥　辰巳大二郎　師長　辰巳　孝弥
他、狂言　辰巳満次郎

◇第四回　十一月十六日（日）
能　歌占　子方　小林　陸　ツレ　内藤　飛能　玉井　博祐
仕舞　花月　キリ　衣斐　愛
葵上　佐藤　耕司
藤戸　辰巳満次郎
能　葛城　和久荘太郎
他、狂言

［入場券料］正会員　年4回5枚綴り（内同伴券1枚）19000円
▽当日券5000円、学生券2000円。問い合わせは、名古屋能楽堂、出演能楽師、または事務局。事務局／名古屋市天白区島田2―301、島田橋住宅2―1310、電話・FAX052・803・7372

## 加賀宝生の名品選Ⅱ

### 金沢能楽美術館特別展

金沢能楽美術館（館長・藤島秀隆氏、金沢市広坂1―2―25）は同館特別展として「加賀宝生の名品選Ⅱ」を12月12日（水）から明年1月14日（月・祝）まで開催している。

展示は、財団法人前田育徳会・金沢能楽美術館が所蔵する旧加賀藩前田家の能装束を含め「加賀宝生」に伝わる能面・能装束などを紹介する。

開館時間は午前10時～午後6時（入館は午後5時半まで）。観覧料／一般・大学生300円、65歳以上200円、高校生以下無料、団体（20人以上）250円。なお金沢能楽美術館では、開館1周年記念特別開館として、1月1日から3日まで入場無料とし、先着1000名に粗品を進呈する。また1月2日には午後2時から「加賀万歳年始特別公演」が催される。

## 新春能面展

面紹社、1月5日～2月3日、鶴舞中央図書館

平成20年（第16回）「新春能面展」が明春1月5日（土）から2月3日（日）まで名古屋市鶴舞中央図書館1階展示コーナー（昭和区鶴舞1―155、電話052・741・3131）で催される。

（①面よりつづき）

山姥　田中　文子　緒方　陽子　中村　玲子
地謡　佐藤　加代子　木下　芙蓉　田中　泰子　青山　信江　岩田　正子　伊藤　るり子　御牧　紀代　富田　貞子
仕舞　養老　河野カズエ
胡蝶　渡辺　紗里
花筐　クルイ　山本美代子
鐘之段　馬場　英子
雲林院　クセ　谷口　寛子
舞囃子　浮舟　山本　淳子　河村真之介　後藤嘉津幸　大野　誠
西行桜　川崎あきゑ　河村真之介　後藤嘉津幸　観世　元伯　大野　誠
俊成忠度　加藤美智子　河村真之介　後藤嘉津幸　大野　誠
素謡　姨捨　渡辺　節子　宝生　閑
舞囃子　百万　法楽之舞　御牧　紀代　河村総一郎　後藤孝一郎　鹿取　希世
富士太鼓　現之舞　古井　佐季　河村総一郎　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
融　酌之舞　桑原　信夫　河村真之介　後藤嘉津幸　観世　元伯　鹿取　希世
能　松風　多久島法子　鬼頭貴代子　宝生　欣哉　河村総一郎　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛　戯之舞　間　野村小三郎
仕舞　清経　キリ　江口　友章
花月　キリ　加藤新一郎
天鼓　杉浦　壽康
実盛　キリ　富士道周明
舞囃子　羽衣　和合之舞　佐久間美親　筧　鉱一　柳原冨司忠　観世　元伯　竹市　学
忠度　加藤　千一　筧　鉱一　柳原冨司忠　竹市　学
山姥　替之型　福間　克彦　筧　鉱一　柳原冨司忠　観世　元伯　竹市　学
仕舞　車僧　大槻　文藏
（終了予定午後五時四十分頃）
附祝言
主催　名古屋清韻会
［御来場歓迎］

## 第十回万作を観る会

平成二十年一月十九日（土）午後二時開演
名古屋能楽堂

三番叟　千歳　竹山　悠樹　大鼓　河村眞之介　三番叟　野村　万作　脇鼓　後藤孝一郎　小鼓頭取　後藤嘉津幸　笛　藤田六郎兵衛　脇鼓　柳原冨司忠
解説　林　和利
狂言　二人大名　大名　深田　博治　使いの者　大名　高野　和憲　野村万之介
狂言　業平餅　在原業平　野村　萬斎　餅屋　餅屋の娘　稚児　石田　幸雄　深田　博治　野村　裕基　太夫　侍　高野　和憲　竹山　悠樹　香持　傘持　月崎　晴夫　野村　万作
主催　なごや・万作の会
後援　名古屋稲門クラブ　愛知県稲門教育会　中日新聞社
［入場料］S席八〇〇〇円、A席七〇〇〇円、B席六〇〇〇円
取扱い＝チケットぴあ☎0570・02・9999　栄プレチケ92（旧三越プレイガイド）
お問い合わせ＝万作の会☎03・3997・8778

## 名古屋宝生会定式能（第152期）

平成二十年一月二十七日（日）午後一時始
名古屋能楽堂

番組

能　西王母　子方　佐藤　佐藤健太朗　耕司
間　飯冨　杉江　相元　雅介　筧　鉱一　鹿島　俊裕　船戸　昭弘　加藤　大野　洋輝　誠
後見　石黒　孝　和久荘太郎
地謡　鈴木久仁七　柴田　勲　竹内　淳一　久野　幸三　稲川　壽一　衣斐　正宜　辰巳満次郎　辰巳大二郎
狂言　鞍馬参　佐藤　融　佐藤　友彦
後見　井上菊次郎
仕舞　田村　キリ　内藤　飛能
江口　クセ　竹内　澄子　地謡　稲川　壽一　辰巳満次郎　石黒　孝　辰巳大二郎
鞍馬天狗　衣斐　正宜
能　蝉丸　和久荘太郎　衣斐　愛　飯冨　雅介　橋本　宰　橋本　叡　井上　靖浩　河村總一郎　柳原冨司忠　鹿取　希世
間　後見　衣斐　正宜　内藤　飛能
地謡　藤田　光子　松浦　祥子　阪口　泰子　芳賀カズ子　玉井　博祐　倉本　雅　竹内　澄子　鬼頭　京子
（終了予定　五時頃）
［入場券］正会員　年4回5枚綴（内同伴券一枚）一九〇〇〇円
当日券五〇〇〇円、学生券二〇〇〇円
お問い合わせは、出演能楽師または左記へ
名古屋宝生会　佐藤耕司方
名古屋市天白区島田2―301　島田橋住宅2―1310
電話・FAX共通052・803・7372

# 戦後名古屋能楽史 ㊹

## 〔第十九章〕昭和四十年（一九六五）

竹尾　邦太郎

―承前―

先号に引き続き苦難の戦中戦後、能・狂言の存続に危惧を抱き、物心両面に亘り援助を惜しまず断絃会に拠って多彩な活躍を展開した武智鐵二（大正二年―昭和六三年）と坂東三津五郎との芸を巡る対談を続ける。さりげなく語られる話の一つ一つに含蓄があり示唆に富むこと、当今の能楽界にとっても裨益すること大であろう。因みに坂東三津五郎（明治三六年―昭和五〇年）は本名・守田俊郎。大正二年に三世・八十助、昭和三年に六世・簑助、昭和三七年に八世・三津五郎を襲名、昭和四八年、人間国宝に認定される。

戦後、武智歌舞伎に協力したが昭和三六年より歌舞伎界に復帰、屋号は大和屋。芸の故実に精通し、俳句を能くし、俳号は喜好。テトロドトキシン（河豚毒）での中毒死は当時話題になった。

函表（武智鉄二近影）

**鉄**　それから「蝉丸」もやりました。これも禁止曲で、天皇の子がこじきめくらになるなんてとんでもないというので、それで曲名を古い「逆髪」に変更してやりました。観世だけじゃ人が集まらないから、金春と観世の合同で、光太郎さんの蝉丸が「姉宮か」というと、全部ふっとんじまったことを覚えています。「土蜘蛛」なんかも金剛（金剛巌・シテ）と金春（金春光太郎・頼光）と観世（片山九郎右衛門・胡蝶）の合同でやったんです。今だったら能楽協会から叱られますよね。

断絃会を無料でやれたというのは、案外お金がかからなかったからですね。よほど大きな会でも四、五千円、普通の会なら千円前後でやれたんですよ。

**三**　もっとも千円といっても、今の千円じゃないからね。今なら百万くらいでしょうね。

**鉄**　だから一回百万円くらいから五百万円くらいでやれたということでしょうね。

**三**　またみんなやれることに対する喜びで、出演費なんかも要求しないでしょうし……。

**鉄**　「関寺小町」や「賤機帯」なんかやったのは、あれは戦後でしたね。

**三**　ええ、親父が来てからですから、大阪の能楽堂でね。

**鉄**　昭和二十七年までやってるんですね。で、二十七年に親父の一周忌とおふくろの七回忌とで、先考先妣追善興行をやって、それでおしまいにしたんです。とにかく断絃会そのものとしては、そうよう。

**鉄**　いいえ、あれも第一回公演が九十万円の赤字でした。

**三**　あれで、文楽座で、一週間で？

**鉄**　あの時は若手の俳優だけれども、ひと月分の給料を払って、十五日間稽古して。一週間の芝居をやるんだから二十二日間買切りというわけですね。

**三**　だけどあの時分の給料だって高が知れてるから、松竹に相当儲けられたわけだな、やっぱり。

**鉄**　儲けられてはいるでしょうけどね。

**三**　僕ら千円ですよ、当時の給料が、休みの時はなしでしたよ。

**鉄**　そうですか。御舟（速水）の「緑庭」という絵を一本売って始末つけたんです。それが確か六十万円だかに売れたんで、ほとんどそれでけりがつけられたんですよ。

二回目はそんなに赤字は出なかったんですが、それでもやっぱり三十万円くらいの赤字だったんです。私がやったのはこの二回でしたけどね。稽古の時もお身上払うけども、そのかわりみっちりお稽古さしてもらうという考えでやりましたからね。

**三**　みっちりとね。（笑）

**鉄**　「鬼界ヶ島」をやったのは、二度目の時でしたね。

**三**　そうですね。

**鉄**　朝十時から稽古をはじめて、夜中の十二時頃までやるでしょう。するとこっちは休む暇がないんですよ、めしを食う暇もね。で、みんなどうしてるのかなと思ったら、一人が吊しあげられてる間に、結構めし食う時間があるんだって。（笑）

**三**　延若の「それは」で何時間くらいやったんですか？

**鉄**　「俊寛」の「それは、あまり了見なし―」というセリフね？「それは」一言が、二時間くらいかな……。

**三**　（口早やに）冗談じゃない、冗談じゃない。（笑）

**鉄**　こっちはカーッとなってるから、どれくらい時間が経ったかわからないけど……。

**三**　七時間か八時間かかったでしょう、「それは」だけで……。

―中略―

**三**　伝統芸を守って行く上で、現在ある文化財保護委員会というようなもののあり方と、断絃会とではどう違うかということですが……。

**鉄**　ともかくも芸に奉仕するっていう考え方ですからね。で、千五郎家というものの美点は、非常に律義なの。だから芸のことで、これだけお世話になってるのに、その上暮しのことまで持ち込めないという、非常に義理がたいところがあって、最近千之丞君に聞くと、いろんなものを売っちゃって、買戻すのに後で苦労しているという話なんです。わかってれば、芸術家にそういうことさせないのが建前だったんです。

ともかく小鼓の大倉流の家宝の鼓が、これがなければ大倉流が成り立たないと六蔵さんがいってみえたら、すぐそれを買戻して大倉家に納めるとか、ともかく芸のためなら予算なしに何でもやるということでしたね。

ところが国家の仕事ってのは、予算にしばられるし、官吏もそれでめし食ってかなきゃならないし、こっちは戦争中で芸のためにやってるんだから、衣類もつくらない、食料も配給のものだけですまますという、変な意固地がありましたからね。

それで僕は自分の親父が金持で、それをごまかして使えるということは、これは日本の芸を守るために、そういうふうに天の指図だという考え方でやるのと、国家が保護してやるというのとは、心構えが違うと思うんですよ。だから無形文化財に指定されても首を吊らなきゃいけないとか、そういう悲劇が生じてくるのは、やはり制度に欠陥はなくても、それを運営する精神に欠陥があるし、あるいは文化国家としてほんとうの正しい予算のとり方ができないというようなことがあるんじゃないですかね。

**三**　とにかく、家のつぶれるのもかまわずつかった。（笑）

**鉄**　断絃会で金をつかいすぎて武智家が没落したというのは、これは嘘でしてね。結局親父に金がなくなったのは、親父も病気でしたし、戦後のインフレの時の財産処理が悪かったからでしょうね。それに、つかったといったって知れてるもの……。月に一万円もつかってやしませんもの。

**三**　だけど今の金で一千万円はつかってますよね。

**鉄**　でも当時、我が家の財産が五千万でしょう。今の金にしたら―。

**三**　五百億―。

**鉄**　その金利にもならないもの。（笑）

**三**　それにわれわれの知ってる限りでは、武智さんを食いものにするって人はなかったですね。

**鉄**　一人もいませんでした。みんな純粋でしたからね。断絃会運動の周辺にいた人は。

**三**　うちの親父が京都に来た時に、「三津五郎を見る会」てのを武智さんがつくってくれて、これは武智さんに迷惑かけちゃいけないっていうんで、僕が会員をささえるのに、自分でかけずり回って会員をこしらえて、その時に会員の金を七十円スリに盗られて、これを埋めるのに女房と相談して、着物を売ったりしたものね。

だから武智さんに迷惑をかけることはしまい、しまいということをみんな心がけてましたね。

**鉄**　第一、無料で見せてる間は、金が出るだけだから、間でごまかしようがないんですよ、入って来るものがないから。

**三**　で、また見に来る人達も、ありがとうございました、どうもありがとうございましたという感謝をして帰る人ですからね。そうでなかったら武智さんが個人で金出してやってるというと、反感が出るはずですよ、芸の愛好者というのはね。普通なら誰が見に行くもんかっていう人達が、そんなこと決していわずに、ほんとうに「ありがとうございました」ってね。

**鉄**　それとやはり明日をも知れない命の下で、ああいうことをやってる時は、見るほうにも精神の緊張があったしね。

当時、能は比較的やりやすかったんですが、ワキがいないんですよ。ご存じでしょ、あの頃みんな―今村だって働きにいってるし、江崎金次郎は姫路にいたし、名古屋の高安も交通不便で来られない。で、どうせ頼むなら松本謙三がいいってわけで、岐阜の中津川の先の、一つ峠を越して向うに疎開しているんですよ。そこまで道雄さんが迎えに行って、装束をリュックにつめて、一日がかりで峠を越えて、そこで泊って、また一日かかって中津川から汽車に乗って京都まで連れて来るんですよ。そりゃ迎えに行くほうも大変だし、出て来る松本さんも大変ですが、しかしとにかくみんなで能を守りたいとか、日本の芸を守りたいの一心で。

だからお金を出しゃできるっていうんじゃなくて、みんなの精神が、芸を守るということに凝り固まってましたからね。

梅若万三郎さんも、はじめ「雨月」をやってくれて、それが気に入って二度目には「鸚鵡小町」を復活上演することになったんですよ。そうしたら三月の空襲で高輪の舞台が焼けて、それで来られなくなってダメになったんですね。断絃会で中止したのは、この一回だけですね。だから昭和二十年三月十二日の例会はなくなったわけです。―だって会の当日、大阪がボウボウ燃えてるんですものね。（笑）

**三**　まあ、あなた、悔いのない一生ですよ。

以上は　坂東三津五郎・武智鉄二の対談集『芸十夜』昭和四十七年十月二十五日・駸々堂刊から「芸十夜」。次号では当時、断絃会に関わりのあった諸師の手記などを紹介する。

---

## 福井県池田町能面美術館提携

# 新作能面展

### 12月23日まで名古屋能楽堂

名古屋能楽堂開館10周年記念特別企画として、ふくい県民総合文化祭池田町実行委員会・福井県池田町能面美術館提携による「新作能面展」が12月1日（土）から23日（日）まで、名古屋能楽堂展示室で催されている。

主催＝名古屋能楽堂（名古屋市、開館は午前9時～午後5時（最終日は午後3時まで）、入場料無料。

この特別企画展は、福井県池田町で行われた「第6回新作能面公募展」（10月20日～11月11日・池田町能面美術館）の応募作品624点のうち、優秀作品50点と過去の大賞4点合計54点を展示している。両館提携の一つとして、名古屋からは和泉流狂言師の佐藤友彦師が公募展の審査員に加わっている。

---


## 豊田市能楽堂演能案内

### 開館10周年記念 豊田市能楽堂新春能

平成二十年一月十二日（土）午後二時開演　豊田市能楽堂

（金剛流）
能　**翁**
金剛　永謹
三番叟　井上菊次郎
千歳　奥津健太郎
河村総一郎
柳原冨司忠
頭取　藤田六郎兵衛
福井四郎兵衛　昭弘
船戸　宇高　竜成　金剛　龍謹
今井　克紀　今井　清隆
廣田　泰能　松野　恭憲
豊嶋　晃嗣　宇高　通成
後見　廣田　幸稔
廣田　泰三
豊嶋　幸洋
地謡

新作風流（和泉流）
**挙母之風流**　シテ子守大明神　野村小三郎
四世野村小三郎作
子方　匂櫻之精　野村　信朗
子守天満宮　松田　高義
子守稲荷社　野口　隆行
御厨社　井上　靖浩
金刀比羅社　佐藤　融
秋葉社　鹿島　俊裕
津島社　今枝　郁雄
狂言後見　藤波　徹
佐藤　友彦

（金剛流）
半能　**嵐山**
豊嶋　幸洋
豊嶋　晃嗣
豊嶋三千春
杉江　元
高安　勝久
椙元　正樹
河村眞之介
柳原冨司忠
前川　光長
大野　誠
後見　廣田　幸稔
廣田　泰三
廣田　泰能
地謡　重本　昌也　種田　道一
百々　康治　今井　清隆
竹市　孝司　松野　恭憲
宇高　徳成　宇高　通成

【入場料】全席指定（税込）正面席七〇〇〇円
脇・中正面席五〇〇〇円
【取扱い】豊田市能楽堂（電話〇五六五・三五・八二〇〇）
チケットぴあPコード三七八・九四九
（電話〇五七〇・〇二・九九九九）

主催　豊田市能楽堂
豊田市文化振興財団・豊田市
豊田市教育委員会

# ◆秋の舞台から◆

## 「豊田市能楽堂特別公演」「名古屋観世会定式能」「第10回ござる乃座」「橋岡久馬三回忌追善・名古屋橋岡会」

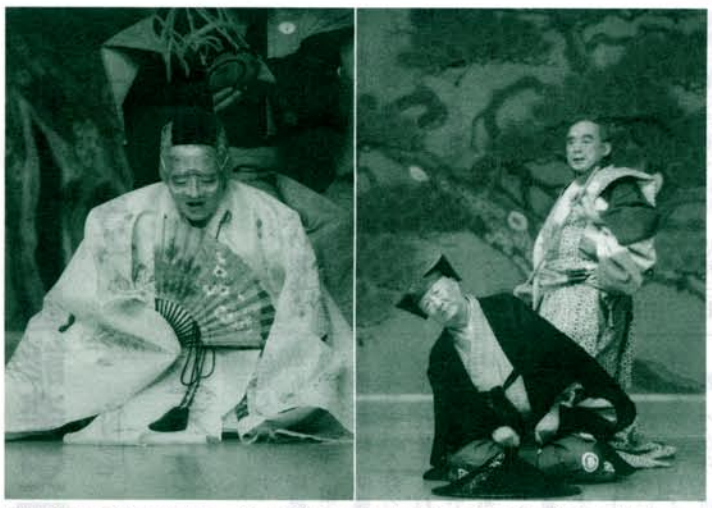
竹尾邦太郎

**「薩摩守」** 旅僧シテ忠三郎、天王寺詣での途次、茶屋（良暢）へ立ち寄り渇きを癒やし立ち去るところ、喜捨とばかり思っていたのに茶代の請求に吃驚、「数珠なりと笠なりと取らせられい」と開き直れば、恬淡な僧に心動かされた茶屋は、此の先の渡しでも、秀句好きな船頭（千之丞）に付け入ることで船賃を只にするような知恵を授ける。

朴直一途な僧、当初は、身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ、で窮地を脱したが、面白がって此の話に乗ったところには真剣味が不足、つまるところ、うろ覚えの秀句では恥を曝すことになる、の教訓。忠三郎の綿密な性格描写、煽てられながらも隙の無い千之丞の人物観照、船中の場は蓋し円熟の境の両者の問答が見事。（26分）

**「卒都婆小町・一度之次第」** シテ九郎右衛門。夕闇を待ち都へ物乞いに出る百歳の姥、三ノ松で胸杖にかなり長くクツログのが齢を思わせ、静かな老女ノ運ビで一ノ松、懐旧の思いは現在の境遇を喞ち、〽月の桂の川瀬舟、と舞台へ入ると、〽漕ぎ行く人は誰やらん、と右ウケに笠に左手をやって彼方を眺め詰足、返シ句に再び胸杖から直ルと「余りに苦しう候程に」とゆっくり右膝をつき下居、手にした笠を左膝の上に、杖は右肩に凭せ掛ける。情景と共に窶れた老女の起ち居が的確に、濃やかに描写される。

小書で高野僧ワキ閑・ワキツレ融はシテの後に出るため、卒都婆に掛けたシテは背後からワキに「なう〳〵これなる乞丐人」と咎められる構図。シテの、何を言い出すやら、の思いは、「これ程に文字も見えず」と右下へ卒都婆を見る心、今迄の草臥れて打ち萎れた気分は俄然闘志を掻き立てられ、ワキ・ワキツレとの卒都婆問答が佛法の本質に迫ると、売り言葉に買い言葉の激しさでなく、諄々と論破してゆくところ、しなやかな言葉の勁さが痛快。しかし、非礼に叩頭するワキに気を良くするも、素姓を問われ、〽傷はしやな、と憐れみをかけられては在りし日も思われ、それを引き金に徐々に狂乱、物乞いの現実から四位少将の霊に取り憑かれる幻覚へ。物着に烏帽子・長絹を着れば、百夜通いの執念はかって嬌慢を恋にした小町の懺悔の姿ともみえる。スミで、〽袖をうち被いて、面を扇で覆う「翁」にみる型、その姿の美しさは人目を忍ぶとは言い条、卑屈でなく四位少将の矜持すら。それゆえ一夜を残して〽あら苦し目眩や、とへたり込む心に胸を扇で押さえ下居の処には無念の思い（写真）。切地（清司・邦久ら）〽願ふぞ（真なりける）、で憑きが落ち、漸く立ち上がるまで、九郎右衛門は移ろう複雑な心象風景を鮮やかにみせた。（1時間20分・9月15日・豊田市能楽堂特別公演）



豊田市能楽堂特別公演　㊨「薩摩守」左より茂山忠三郎、茂山千之丞
㊧「卒都婆小町・一度之次第」片山九郎右衛門　（杉浦賢次氏撮影）

**「野宮・合掌留」** 紆余曲折のすえ別れた光源氏、嵯峨野に隠棲の六条御息所を尋ね、心のうちを榊の枝に托した長月七日、此の日を忘れず、今も旧跡の野宮に榊を供え祭る里女（実は御息所ノ霊シテ四郎）は、蕭条たる末枯れた薄暮の境内の佇まいに我が身を重ね、懐旧に耽るところ、旅僧（ワキ勝久）に誰何されて問答・掛合、初同（邦久・邦弘ら）〽草葉に荒るる、の返シ句で鳥居前に下居、木ノ葉（榊）を供えると、〽跡なつかしき、と沁々見詰める（写真）のが如何にも幽寂味。〽あら淋し宮所、の淋しみは装束にも。面増・襟白二・白地菊菱摺箔着付・白地斜メ格子地紋鉄線文唐織は清楚で上品、シテ四郎の識見は人物像の在り方に窺える。シテは「御息所の謂はれ懇に」と僧から求められ、大小前床几にかゝり、クセは上ゲ端あと、〽寄辺なき、と立つ。

名古屋観世会定例公演
「野宮・合掌留」野村四郎
（杉浦賢次氏撮影）

後シテは緋大口に秋草文紫長絹。車争の辺り、立往生に〽（身は小車の）遣る方もなし、と身を震わせる屈辱に左袖微かに顫動するところ、〽押しやられ、身の程〽思ひ知られたる、無念さにシヲルところ、など具象的な型の巧緻、キリの鳥居の型は左の柱を掴み左足を暫時、外へ出して退くのが生への執着の強さとも思えた。トメは一ノ松、拍子は踏まなかった。（1時間52分）

**「不見不聞」** 聾者の太郎冠者シテ小三郎を独り留守居させるは心許ないと主（融）は座頭の菊市（高義）を呼ぶ。互いが相補わねばならぬのに、無聊を紛らそうと耳敏い菊市が悪戯を仕掛ければ、「盗人が入った」と騒ぎ立てるシテ。その様を見て笑う菊市に謀られたと知るシテは意趣返しを試み、さりげなく舞を見せようと誘えば、目は見えずとも耳で慰み合図があれば褒めようと菊市。してやったりとシテは足裏で菊市の顔を撫でようとする（写真）など、互いに相手の弱点を虚仮にするえげつなさ。素材が当世向きではないが、互いに自我を主張する勁さに曲の本質があろうか、熱演。

「不見不聞」野村小三郎・松田高義（杉浦賢次氏撮影）

**「善界」** 大唐の大天狗・善界坊シテ祥人、山伏姿に身を窶し来日、比叡山を挫かんと愛宕山の太郎坊ツレ勘鳴と策を謀る前場、逸る気持ちをぐっと堪えてツレを説得せんとする問答の力強さだが、掛合では不動明王への畏れも滲ませ、クセ上ゲ端〽世の中は夢か現か現とも、と迷いに弱味もみせる辺り、人間（?）味も。

後場は勅を受けて車で参内の途次の比叡山飯室ノ僧正ワキ勝久、威風辺りを払えば、大天狗の正体現わしたシテ、立廻に一ノ松で左袖を被キ、ワキを見込み威圧すること暫時、袖振り払いワキへ肉迫すれば、「聴我説者得大智慧」とワキの祈りに後退りして組落シ、更にワキへ挑みかかる心に働キで正先へ膝行するところなど、追い縋り苦闘を繰り展げる趣、力が入った。（51分・9月17日・観世会）

**「咲嘩」** 相応しい連歌の宗匠が居らず、当屋の主・和憲は都へ伯父を呼びに太郎冠者シテ万作を遣るが、迂闊にも伯父も所も知らずに出たシテが、連れて来たのはスッパ万之介。それが予て知る「見た物は乞うても取る」見乞いの咲嘩の異名をとる悪戯者と分った主は、丁重に持て成して帰そうとするが、愚昧なシテが早速スッパに主の意向を逐一伝えるや、世間では強持てのスッパが屋敷へ通るのを尻込みする可笑しさ。あれこれあって中へ通ったスッパは、先刻、主の腹のうちが読めるため応対は相手任せ。一方、主は粗相があっては、と「汝が才覚をやめて、身共が云ふ様する様にせい」と厳命する。愚昧なシテは、主の言い付けその侭を復誦するばかりで用を足さず、普段主に苛められてでもいるのか、こゝぞとばかりに愚直ぶりを発揮して楽しんでいる風も。無知の向う見ずに呑み込まれ、為す術もなく振り回される主とスッパ、軽い曲にみせる万作・万之介兄弟の円熟味に、役所を得て振り回される和憲も可。（30分）

**「金岡・大納言」** 宮廷お抱え絵師・巨勢金岡（シテ萬斎）の妻（アド幸雄）、夫が帰宅せず、物に狂い洛外をさ迷うと聞いて当たりを付け清水寺へ出向くと、小書の「大納言」で替装束、翁烏帽子・黒垂・白練着付・緋指貫・段替縫箔（脱ギ下ゲ）姿の夫が殿上人その侭の姿で出る。瞬きをせず、いわゆる目が据った状態で正面を見廻すが、明らかに狂気の徴候、「狂出ノ伝」という由だが「大納言」と併用されるらしい。一ノ松に出ると、能「蟬丸」のシテ逆髪になぞらえるかに、〽如何にあれなる童どもは何を笑ふ、と勾欄に寄り、〽乱れ心や狂ふらん、と狂ヒ笹振り立てカケリになる。狂おしく幕際へ走り、再び一ノ松へ戻り、一寸立ち止まるが、禁中で見初めた女臈を思えば居ても立っても居られない焦燥、舞台へ入れば待ち構えていたような妻につかまる。物狂の理由を問う妻に、気持ちは上臈への思いに更に昂る金岡だが、漸く腹を括り、怒るなと牽制し、これまでの経緯いけしゃあしゃあと語り出す厚顔ぶりが小面憎い旨さで精彩を放つ。この状態で反発するのも愚かだが、女は化粧次第、と夫・金岡に彩管を揮わせる妻、〽いで〳〵さらば絵取らんと、とカケリの調子に乗る金岡、筆捌きの妙に反して妻の面相が怪しくなってくるところなど、男のエゴは兎も角、当世の美容整形・美顔術なども思われて女人の憐れ感じさせられた。（41分・9月23日・第10回ござる乃座）

名古屋観世会定例公演
「善界」関根祥人　（杉浦賢次氏撮影）

**「宗論」** 本山の見延詣でから戻る法華僧アド高義、興奮さめやらずの風情は、此の感激を誰かに伝えたい気分。そこへ来掛かる僧体に、良き道連れとばかり同道を申し入れゝば、相手も連れ欲しさ渡りに舟と快諾。が、互いに自己紹介をするに及んで豈図らんや、相手が善光寺帰りの商売敵・浄土僧シテ小三郎と分って何とか逃げ出したいアド。しかし一旦交わした約束を楯に執拗に付き纏うシテ、両人の確執が宗論へと及んでゆく辺り見応えがある。我が宗旨尊しとばかり、目に一丁字無い（文盲）と思われ、高僧であり得ない両僧の珍妙な説法は、法華宗の芋茎（ずいき）話に浄土宗の総菜（そうざい）話がさも有りそうに熱心に語られるところ、当時の生活環境や人々の生活観も窺われ面白かった。（30分）

名古屋橋岡会
「船弁慶」橋岡久太郎　（円氏撮影）

**「船弁慶」** 別の曲のことだが、「これは果して観世流の型だらうかと思ふやうな事を毎度見せる橋岡久太郎氏が、どんな事をするかと思ってゐたが」とか、「この人には橋岡式とでもいふべき、特有の点があって、それは非常に工夫を積んだものであるが」などと、明治・大正・昭和三代に亘る著名な能評家・坂元雪鳥（一八七九―一九三八）をして言わしめた名人・橋岡久太郎（一八八四―一九六三）、その息・久馬（一九二三―二〇〇四）もまた研究心旺盛な、技が切れる、独得の芸境に在ったが、父・久馬の三回忌追善に後嗣・九世久太郎が「船弁慶」のシテを手向ける。

前シテは静御前、生木を裂かれる思いの判官との別離の哀傷、後シテは知盛亡霊、怨敵判官を海上に襲う暗い情念、前後バランスよく描写されたが、就中、前シテに惹かれた。

舞クセの中、頼朝の勘気はいつか解けましょう、の心で子方・判官を愛しげに見詰めるが、中之舞では未だ心に懸かる微妙に重い運ビの印象。舞上げ、再び判官の前、やがて世の中へも出られましょう、と下居して言上するとみえて別れが現実に迫ると、立つや愁嘆場となるのを吹っ切るように注目の型。〽舟子どもはや纜を、と招キつつ一ノ松の方にまで出て月之扇（左へ扇を肩に受ける）するのが如何にも督促するようにみえ、初めて見る型で珍しく、そこに鬼才を謳われた久馬の面影が窺われて懐かしかった。（1時間25分・9月24日・橋岡久馬三回忌追善名古屋橋岡会）

### 先号の訂正

四頁一段二七行目
清涼時→清涼寺
三六行目　清涼時→清涼寺
七段八行目から一七行目までを削除。八行目を『ツレとの連吟だった。』で止める。削除の部分、観世流や金剛流はシテの役謡ですが、識者に拠れば宝生流はツレと同吟が常、不明を恥じると共に表現内容に不適切な処があり、お詫びして訂正させて頂きます。
七段二一行目　扇ノ芸→扇ノ芝
三九行目　夫→婦、婦→夫